

幻想郷怪奇談　～寺子
屋で話す怖い話～

ごぼう大臣

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

毎年の夏に寺子屋で開かれる怪談大会。教師である上白沢 慧音はいつも自分の話が不評な事に悩んでいた。

それを友人の藤原妹紅に相談すると、『じゃ、私が得意な連中を集めてやる』との事。かくして癖のある妖怪達が寺子屋に集結する。最初は和やかな雰囲気が始まるが

……？

目次

プロローグ	1	す	93
一周目・一話目―火焰猫燐	11	一周目・六話目―藤原妹紅	108
一周目・二話目―メデイスン・メランコ	26	二周目・藤原妹紅END―『須臾の夢』	120
リ		二周目	
一周目・三話目―魂魄妖夢	51	二周目・一話目―藤原妹紅	142
一周目・四話目―赤蛮奇	58	二周目・二話目―火焰猫燐	157
一周目・五話目―ニツ岩 マミゾウ	78	二周目・三話目―メデイスン・メランコ	168
一周目・五話目―小傘と関わりを増や	86	リ	
す		二週目・四話目―魂魄妖夢	179
一周目・五話目―正邪と関わりを増や	198	二周目・五話目―赤蛮奇	188
		二周目・六話目―ニツ岩マミゾウ	198

	二周目・二ツ岩マミゾウEND―『虚構の英雄』	211	四周目	四周目・一話目―赤蛮奇	319
	三周目			四周目・二話目―二ツ岩マミゾウ	
	三周目・一話目―二ツ岩マミゾウ	236	330	四周目・三話目―藤原妹紅	353
	三周目・二話目―藤原妹紅	247		四周目・四話目―火焰猫燐	365
	三周目・三話目―火焰猫燐	257		四周目・五話目―メディスン・メランコ	377
	三周目・四話目―メディスン・メランコ		リ		
	リ	269		四周目・六話目―魂魄妖夢	391
	三周目・五話目―魂魄妖夢	279		四周目・魂魄妖夢END―『嘘』	403
	三周目・六話目―赤蛮奇	290			
	三周目・赤蛮奇END―『思い出せな	303	五周目		
い	』		五周目・一話目―魂魄妖夢	415	

五周目・二話目―赤蛮奇 ―― 424

五周目・三話目―ニツ岩マミゾウ

441

五周目・四話目―藤原妹紅 ―― 451

五周目・五話目―火焰猫燐 ―― 462

五周目・六話目―メデイスン・メランコ

リ ―― 470

五周目・メデイスン・メランコリーEN

D―『操り糸』 ―― 478

六周目

六周目・一話目―メデイスン・メランコ

リ ―― 490

六周目・二話目―魂魄妖夢 ―― 497

六周目・三話目―赤蛮奇 ―― 515

六周目・四話目―ニツ岩マミゾウ

523

六周目・五話目―藤原妹紅 ―― 537

六周目・六話目―火焰猫燐 ―― 550

六周目・火焰猫燐END―『七不思議』

リ ―― 574

プロローグ

夏が来た。

子供達は夏休みに入り、宿題の事も忘れて学友達と毎日川に行つて泳ぎ、里の近くの林で虫を採り、あるいは疲れて屋台のかき氷なんかを追いかけている。

強い陽射しの照りつける中はしゃぐ童を眺めながら、私はといえば肌を日に焼く事はず、陰ながら仕事をこなさねばならぬ立場にいる。

私の名前は上白沢 慧音。幻想郷の人里で、子供達に学問を授ける寺子屋を運営している。毎年夏には放課にする訳だが、授業もないし自分も水羊羹をつついて昼寝……なんて訳にはいかない。前学期の生徒の成績を纏めつつ、それによつてこれからの授業のペースを変えたり、場合によつては夏休み中に補習にも付き合わなきやいけない。

休み中に呼び出された生徒などは嫌な顔をするが、先生側はそもそも休みが無いような有り様だ。

しかし、私とてつまらないばかりの夏を過ごす気はない。自分なりに涼しくなれるイベントを用意している。

夏休みに毎回行われる、怪談大会だ。夜に生徒と私で寺子屋に集まり、その日だけは

遅くまで思い思いに怖い話をしあうのである。

自分こそが一番怖いと奮起する者、最期に『俺の昨日見た夢の話』と落ちをつけるもの、怖がってばかりで私にしがみつく者、また途中で内容を忘れてしまう者なんかもある。

これがなかなか好評で、授業以外で生徒みんなが触れ合える貴重な場面として私も責任もって開催している。

ただ、問題が無いわけではない。それほど重大でもない、個人的な事だが。

私も開催責任者として、必ず毎回一話は話しているのだが、そうすると決まって『つまらない』『面白くない』とヤジが飛ぶのだ。元来私は楽しませる話し方が得意ではない。授業でも私の説明についていけず眠り込む生徒は多かった。自覚はあるのだが、普段の説教の復讐も兼ねてかやたらと話の腰を折ってくる。

『霊夢さんに任せれば良いじゃん』

『妖精のイタズラじゃね』

『紫おばさんが居眠りして落っこちてきたんだよ』

等々……

怖い話に野暮な突っ込みは禁止！　と言いたくなるのを堪えてなんとか話し終えると、白けたりはしないが、お手本とばかりに張り切る輩が現れてこれがまた皆の期待を

高める。それが繰り返されるのは少々悔しかった。

もうちよつと素直に聞いてくれないものか、やはり話芸を鍛えなければいけないのかと友人に愚痴、いや相談を持ちかけたのが今年の夏の事である。

私が一頻り喋ると聞き役だった友人、藤原妹紅は立ち上がり、こう言った。

『じゃ、私が怪談の得意な連中を集めてやるよ』

予想しなかった台詞だ。なんでも実際に聞いてみた方が勉強になるだろうというのだ。流石にそこまでしてもらつては……と遠慮しかけたが、彼女は事も無げに私のスケジュールを確認すると任せておけと言い去っていった。それほど悩んだ言い方もしてないのに、持つべきものは良い友人である。

かくして、今晚私の家に怪談を話してくれる六人が集まったのである。私は一同の介する広間に冷えた麦茶を並べ、頭を下げる。

「忙しい中お集まり頂き感謝する。そんな堅苦しい会合でもないので、羽を伸ばす位の気持ちでいて欲しい」

「……その口上が既に堅苦しいんだがな」

隣で呟くのは藤原妹紅。前述のメンバー集めの張本人だ。一見無愛想で気だるげだが、私には見慣れたものだ。

「妹紅もありがとうな。こんなに集めるの大変だったろ」

「べ、別に……」

素直に礼をいうと、妹紅は照れ臭そうに顔を背けた。全くこいつは……と微笑ましく眺めていると、ふと彼女は気まずい表情を浮かべ、私に耳打ちしてくる。

「なんだ？」

顔を傾けると、妹紅が「実はさ」と前置きしてからこう言った。

「私、もう一人誘ったんだけど……そいつが来るか来ないか、ハッキリとしねーんだわ」

「誰が？」

「それが、驚かせたいから名前は秘密だって……。勝手なもんだぜ」

はて、それは困った。が、目立ちたがりで気まぐれ、幻想郷にはよくいる輩だ。そう構えずに待つとしよう。

「気にするな」と肩を叩いた時。

「ちよつと、いきなり二人で話し込まないでくれる？ 私達も居るんだけど」

不機嫌そうな高い声が飛ぶ。上座の座蒲団にちよこんと座るメディスン・メランコリーだ。妙に小柄な彼女は捨てられて妖怪化した人形であり、かなり人見知りな所があ

る。今も親しい相手の居ないせいで居心地が悪いようだ。

「ごめんな、こつちの事だ。もう何でもない」

笑ってみせるとメデイスンはぷくつと頬を膨らませた。扱にくい所はあるが純粹で分かりやすい。続けてメデイスンの隣の者も宥めてくれた。

「そんな怒らないで。お嬢ちゃんが一番ホラーが得意そうだから、ビビっちゃってんだよ」

言ったのは火焰猫燐。旧地獄に住む火車の妖怪だ。死体を集めるのが趣味でお世辞にも人間寄りとは言えないが、生きた者に興味が無い為それほど危険視はされていない。気さくな性格も手伝ってか、友好的だと評判だ。

メデイスンがキョトンと目を丸くする。燐が微笑むと、つられて顔を綻ばせた。すると今度は、メデイスンから見て逆隣の人物が言った。

「まあ、誰が怖いかなんて、張り合う気もないけども」

ボソリとつまらなそうな口調。全員の視線がそいつに集まる。赤い襟つきのマントのお陰で表情が分かりにくい彼女。

赤蛮奇だ。彼女は人里で住んでいるがろくろ首という妖怪であり、赤いショートヘアの頭は複数取り換え可能の代物。

普段は正体を隠し、付き合いも浅いので乗り気じゃないのかと不安になったが、目だ

けで分かる仏頂面は私ではなく隣の人物に向けられる。

「うう………何で私が………」

ある意味一番乗り気でない人物がいた。魂魄妖夢。幽霊と人間のハーフである彼女は、白い肌や周りを浮かぶ白玉のような半身など、妙な所が多い。

しかし、特徴的な出自な外見ならこの場では珍しくもないので置いとくにしても、妖夢には致命的な弱点があった。

「なんで好き好んでお化けの話なんか。よく楽しそうにしていられますね……」

かなりの怖がりなのだ。幻想郷には妖怪が溢れ、彼女自身も知り合いは多い筈なのだが、どうも古典的な幽霊やお化け、そして怪談の類いは苦手らしい。今も貧血を疑うほど血の気の失せた顔で肩をすぼめ、ガタガタと震えている。

「………誰だ？　この子を呼んだのは」

赤蛮奇が呆れた目で一同を見渡す。すると私と赤蛮奇に挟まれた位置にいる人物が口の端を吊り上げ、呟いた。

「濃じゃよ」

茶色の縮れ毛に葉っぱを乗せた、丸眼鏡の女性。二ツ岩マミゾウだ。彼女は最近外界からやって来た狸の妖怪で、よく見ると頭にタヌキ耳が生えている。容姿だけでなく性格も狸のようで、気が強く老獺、時に悪ふざけもする食えない所がある。

今回は妖夢がその悪ふざけの被害者という訳だ。「任せるんじゃないよ……」と妹紅がぼやくと、マミゾウは目を伏せてクツクツと笑う。

「いやあ、冥界まで足を運ばば得意な奴がいるかと……」

あんまり妹紅一人に遠出させちゃ大変じゃろ？」

両手をヒラヒラさせながら白々しく話すマミゾウに、妖夢が目を潤ませながらビツと指を指して告発する。

「皆さん！ 鵜呑みにしないで下さい！ この人は初めから私を誘ったんですよ!!」

怖がりの自分をわざわざ引つ張りこんだ、と主張する妖夢。ベソをかいたせいで鼻水がちよろりと垂れる。指摘を受けたマミゾウは知らん顔で口笛を吹いていた。

「断れば良かったじゃん」

メデイスンがぶつきらぼうに言い放つ。彼女にしてみたら良い大人が何してるんだと言いたくなるのだろう。しかし妖夢はサツと鼻をかむと、そっぽを向き口を尖らせる。

「幽々子様が勧められたんですよ。従者の私が断れないじゃないですか」

幽々子というのは、妖夢が仕える冥界の管理人の事である。穏やかな性格をしてはいるがこれまた意地悪な所があり、よく妖夢の事をからかっている。

さしずめ今回も『(私が)楽しいだろうから行ってらっしゃい』てな風に喜色満面に言

われたりしたのだろう……。不憫なものだ。

「まあ、ここまで来たら付き合ってもらわねばな。誘った儂の立場も考えとくれよ」

煙管を取り出しながらマミゾウは妖夢に寄りかかる。払った拍子に妖夢の手が壁にぶち当たった。

「アイタツ！」

「おいおい、子供もいるんだから煙草は……って、ああそうだ」

子供で思い出した。念の為此の連中に言わなきやならん事がある。

「すまん、話してもらおう内容なんだがな」

「なんじゃい」

「うう、突き指した……」

「なにぶん本来の聞き手は子供だからな。あんまり怖くしすぎたり、冷めた目線で話したりしないでくれ」

集めたこの話し手達からして、やたらとドギツかったり妖怪目線の無慈悲な内容が展開されたりしかねない。肝心の生徒達にドン引きされてしまったては例年以上に惨めな大会になってしまう。

「ああ、アレンジなんかは期待できんか。先生の固い頭じゃ無理ないわなあ」

マミゾウは察したように肩を竦めた。その通りなので黙っていたが、代わりに妹紅が

顔をしかめる。私を挟んで、いや通過点として無言の怒りが空気を伝い、換気扇の如く涼しい顔のママ、ゾウに受け流されていく。

「分かってるって。本気出したらこの剣士さんが気絶しちゃうよ」

「や、やめて下さいっ!」

燐が正面の妖夢を見ながらケラケラと笑った。妖夢は畳を叩いてむくれたが、そこにメデイスンが追い討ちをかけるように身を乗り出した。意外にも楽しそうに白い歯を見せている。

「そういえばあ、ちよつと思っただけど……」

内緒話でもするかのように声をひそめる。皆の注目が集まるのを確認するかのように視線を巡らせてから、わざとらしく首を傾げた。

「これだけ色んなのが居たら、その内悪霊とか寄って来たりして……」

「い、いやあああっ!」

妖夢が子猫のように赤蛮奇にしがみついた。ぶつかられた彼女は鬱陶しそうに、首だけを切り離して飛んでいく。

「へ? わああっ!?! くび、首が無い!」

「だあーっ、もうやかましい!!」

うんざりした妹紅が声を張り上げる。妖夢がハツとなつて皆の視線に気づき、恥ずか

しそうに姿勢を正す。周りには笑う者やら苛立つ者やら、さながら授業が進まない教室の
ような様相を呈している。

こんなんで大丈夫だろうか……？

いや、頼んだ私が挫けてどうするんだ。とにかく会合を進めねば。
気を取り直し、咳払いを一つ。

「それでは、始めるとしよう」

来るかも分からない七人目を待たずして、妖怪達の怖い話が始まった。

一周目・一話目―火焰猫燐

「おっと、あたいが一話目なのかい？んじや僭越ながら出だしを務めさせて頂くよ。

火焰猫燐だ。旧地獄にいる事が多いけど、地上にもちよくちよく出掛けるから、また会う事があればよろしくね。

……それで、怖い話ね。

そうさな、先生は勉強教えているんだよね？ ああ、色んな子供がいる中で国語や算数なんかを、皆一人で？ うひやあ、ご苦労様。

あたいは学が無いからなあ。すごいよ、他人にモノを教えられるって。もう人里で何年も、よくやるもんだ。

じゃあその教えた経験の中で聞きたいんだけどさ、子供らが競い合う事って、やつぱりあるだろ？ ……仕事柄点数を付けざるを得ないから、張り合う奴等も出て来るってもんだ。

ああ、悪い事だなんて言わないよ。むしろ良い事だと思う。というのも、軽々しく言うのもなんだけど、寺子屋の勉強となれば、問題は理屈で全部理解出来て、採点基準もきっちり決まっているだろ？

そうなれば、点数で上回りたいとなりや不正解を減らせば良いだけ。いくら難しい間でも、百パーセント理解出来ない訳は無いんだ。少なくとも道筋はハッキリしている。

……けどね、張り合う物事によっては、性質が全然違っていたりするんだ。

例えば、芸術とかね。寺子屋じゃそんなに馴染みは無いだろ？ 絵を描いたり、演奏したり、科目としちゃ存在感は薄い。

ましてや丁寧な採点なんてしない筈だ。自由に伸び伸びと、最低限の作法や手順が出来ていれば細かい口出しはしない。

というのも、ぶつちやけて言えば『美しき、楽しきに点数はつけられない』からね。徹頭徹尾、公平誠実に評価を下せるとしたら、それこそ神様くらいのもんだろう。あいにく権威とかなんとか、少なくともあたいにはアリンコ程度の値打ちも感じないよ。

大袈裟に聞こえるかい？ でも、あたいは人生で肝に銘じておくべきだと思う。別に芸事をやろうってんじゃないけども。

きっかけならこれから話すさ。『正解の無い』もので張り合っちゃまった人の話をね

……

—

地底に、さとり様って方がいるのを知っているかい？ 地霊殿っていう屋敷に住んでいて、あたかもそこで働いているんだ。

地底は本来、弱肉強食の荒んだ世界だ。火事と喧嘩は地底の華。果ては盗みや殺しもご愛嬌、つてね。元々秩序を嫌う連中が住み着いた場所だから、皆とは倫理観の次元が違うと言って良い。

さとり様はその地底にあつて、広く影響力のある権力者なんだ。別に腕力や妖力が強い訳じゃない。寧ろ非力な方なんじゃないかな。体一つならあたいても勝てるかもしれない。

けど、挑戦なんて間違つてもやらないよ。あの人が地霊殿を支配出来るのは、ちやあんと理由があるんだ。

それが『心を読む程度の能力』。さとり妖怪の種族が持つ必殺の武器だ。

さとり様には第三の目、体に大きな目玉みたいのがくっついていてるだが、そいつに睨まれると普通は口で誤魔化せるような嘘や僻み、憎しみや弱みなんかあの人には全部筒抜けになる。心の中が開けっぴろげなのって、想像よりもキツイもんだよ。たとえ嘘をつかない人間でも、嘘を『つけない』状況に追い込まれたら、かなりのプレッシャーに苛まれるだろう。

加えて、恐ろしいのはそれだけじゃない。他人の心の中に潜む恐怖の対象、トラウマを呼び起こしたりもするんだ。高い場所、尖ったもの、皮膚に出来たブツブツ……一番苦手なものイメージを頭に再現したら、どんな腕自慢も形無しだよ。たまったもんじゃない。ちなみにあたいは饅頭が……いや失礼。

まあ、その力で恐れられて孤高の強者として君臨している訳だが、私生活となると殆ど知らない奴が多い。

何せ秘密が持てないからね。屋敷にいるのは嘘をつけない動物達に、数だけはい多い妖精、あとは肉親とあたいたいみたいな獣あがりが数名。

だけど皆との暮らしは意外に穏やかなもんさ。動物の世話と家事、仕事を分担したら、後はほったらかし。買い物に出ても良いし、昼寝しても良い。地上にも少しは顔を出せる。

趣味にじっくり打ち込む人もいる。それが他でもないさとり様だ。あの人は本を書くのが趣味でね。特に濃ゆい心理描写を良く研究してる。

あの人にとっちゃ、心理っていうのが一目で有り様を掴めてしまうものだから、文章でどうにか読み手の心、共感に訴えようとしてくる様が新鮮なんだとさ。

皆それぞれ打ち込むものは違うだろうけど、『もつところ……あるだろう！』って言いたい事が伝わらずにやきもきした経験はないかい？ 昔はその光景が社会のそこかし

こで繰り返されたんだと思うよ。誰もが持っている喜怒哀楽の感情を、『ああ、そんな感じね』と納得させる言い方が生まれるまで、そしてその表現が多岐に渡るまでにはエライ苦勞があつたらう。

後ろ髪を引かれる、泡を食うなんて慣用句が日本で通じるのも、その感覚が例えとして多数に通じたからさ。

「あたいも猫から知性を持った時には驚いたよ。皆色々な言葉で感情の機微を伝えようとす。今まで鼻にキスしたりお腹を見せたりで事足りていたのをこんなにも色彩豊かに共有しようとする。しかも海を越えたら独自の表現がいくつもあるんだ。皆は当たり前のように身につけているけど、そのまま人類の歴史の上に成り立っているんだな。」

おっと、話が長引いたね。とにかくさとり様も、そういう心を読めないからこそそのもどかしさや奥深さに飢えたんだろう。幻想郷に流れた本を片っ端から集めて、同じように発信もしたくて気が向けば書齋で黙々と筆を走らせていた。

で、その頑張りが長く長く、当然の光景になるまで続いたある日の事だった。

『お燐、ちよつと良い?』

仕事の最中にさとり様が呼び止めてきた。いつもは冷静で寡黙な人なんだけど、何故だかその日は恥ずかしそうに頬を染めていて、両手に紙の束を抱えていた。

珍しいなあ、って思いながら応じたら、それが読まれたのか一層モジモジと縮こまって、一拍して急に『コレ!』とか言つて持つていた紙の束を突きつけてきた。受け取つてみると、みっちり埋まった原稿用紙が積み重なっている。

『昨日書き終えた短編なんだけど……ちよつと読んでくれない?』

さとり様は子供みたいに腕を背中に回して、はにかみながら言つた。今まで書いていた内容なんて見た事なかったから最初は戸惑つたけど、確かに書いたら人に見せたくなるものだ。あたいは氣を取り直して、その話に目を通した。

それは女の子視点の恋愛小説だった。男の子に恋をして、紆余曲折を経て結ばれるつていう王道ストーリーだ。

文章も少し堅苦しいかな、って思う程度で、矛盾もないし、すいすい読める。

一人称つてのもあつて主人公の心の動きが氣になる所だが、なかなか陰でライバルに嫉妬したり、好きな子とケンカしたり陰影にも氣を使つていた。

実際、素人目にだけど結構な出来だつたと思うよ。流石数多の創作物に触れて……真似ただけの事はあつた。

というの、やつぱりさとり様が、能力のせいで人間関係が狭かつたからかな。こう、舞台を見た時に『いかにも舞台だな』って感じさせるような……上手く言えないけど、そういうわざとらしさがあつた。あたいは仕事柄色んな奴等と話すからか、ちよつと鼻に

ついた覚えがあるよ。

けど、それでも楽しめたのは変わりない。ちよつと引つ掛かったのをグツと呑み込んで、面白いじゃないっすかー、って朗らかに言った。そしてつい顔をあげる。

その時に見えたんだ。さとり様が気まずそうに唇を結びながら、第三の目をキョロキョロ動かしたのを。目の当たりにしてハツとなつたよ。さとり様は読んでいる間、あたいの心を読んでいたんだ。恐らくあたいが一応目下の者だもんで、遠慮なしの批評が欲しくてやったんだろう。

あたいがちよつぱり嫌だと思つたのも読まれていたか知らん。内心後悔しながら頭を掻いたりなんかして誤魔化していると、さとり様は私から原稿用紙を取り戻して、『ありがとうお燐。もつと精進するわ』

……つって、静かに微笑んで去つていった。なんだか悪い事をしたような気分だった。

それから何カ月かして、またさとり様が新作を見せてきた。ジャンルはまた恋愛。好きなのかなあ、と思ひながらページをめくる。

今度は更に描写が丁寧になって、周りの人々の様子も描かれていた。あの経験が本当に効いたんだと驚いたよ。

前回から見せないで書き捨てたモノがあつたかもしれないけど、数カ月の成長とし

ちや出来すぎな位だ。流石さとり様、ってあたいは本心から感激した。

ただ、その作品ね……主人公が、ちよつとナヨナヨした子でさ。読んでいる途中でついつい『もつと胸張りなよ』『そこは怒っていい！』てな感じにストレスを感じたんだ。勿論それは物語に入り込めている証拠だし、そういうストレスを楽しめる人もいるんだろう。けどあたいにとっては、いかんせんイライラが大きかった。

所詮好みだし、口には出さなかったけど、例によつてさとり様にはバレていたよ。そしてソイツが不満点のように映ったのか、また物足りなそうに礼を言つて去つていく。

……背中が小さくなつて居なくなつてから、あたいは少々、嫌な予感がしていた。

それから何回も、さとり様は日を置いてあたいに小説を書いて見せるようになっていった。あたいも興味を持つて見るんだけど、決まつて最後には細かい矛盾や意外さが目について、察したさとり様は満足出来ずに去つていく。その繰り返しだった。

気に病む事は無いかと、段々気の毒になつたよ。目についたといつても、趣味で書くとしたら実際仕方の無いようなレベルのものばかりだったし。あたいもわざわざ口に出さなくていいと思うんだけど、駄目なんだ。考えた時点で読まれちゃうんだもの。

面白さなんかにしても、読みやすくなつたと思う事はあつても、確実に良くなつたなんて言える自信は無かった。読み手の琴線に触れるかどうかなんて個人の背景や嗜好や、その日の気分で幾らでも変わる。

あるいは、他の奴に見せたらまた違う評価を聞けたらうけど、前も言った通り親しい奴が少ないからね。容赦無しの指摘が飛ぶのが怖くって、数少ない身内にしか見せなかつたんだろう。

今だから言えるけど、さとり様が完璧に良いものを書けたと思える日は、ずっと来なかつたと思う。けどそれならまだ良かったんだ。本人には悪いけど、さとり様の望みとあたいの評価に溝があるだけで済むのなら。

またしばらくして、小説を書く奴がもう一人現れた。霊鳥路空。通称お空っていう、あたいの友達で同僚さ。普段は単純な仕事を任されて、性格もまあ、繊細って感じじゃない。はつきり言つて物書きって柄じゃない奴なんだけど。

そいつがどうもさとり様に見せられた小説に触発されたらしくて、自分でも挑戦してみたつていうんだ。

あたいも仲が良かったから、嬉々として見せられた。普段読んでいるジャンルの違いからか、内容は剣と魔法のファンタジー。

で、応じたは良いけども……やっぱりその、書き慣れていなかつたんだな。さとり様と比べて。

不死身で世界一強くて神様の生まれ変わりで伝説の剣を持つて……つてのつけからスケールが無駄にでかいし、

『ズバツ！』とか『ドカーン！』って擬音が文章にそのまま入るし、

全体を通して起承転結が雑で急にクライマックス突入するし、

最後には登場したキャラクター同士で座談会みたいのが始まって読み手が置いてきぼりになるし……

正直、出来が良いとは思えなかった。どんなに気を使った言い方をしても、まず人を選ぶ。

けど、顔を上げたらお空がワクワクしながら見つめてくるんだ。その顔は無邪気そのもの。とてもじゃないが、思った事をそのまま言う気にはなれなかった。

『良いじゃん。書いてる熱が伝わってきたよ』

もしかしたら棒読みだったかもしれない。それでもお空はぱあつと顔を輝かせて、あたいの両手を掴んでピヨコピヨコ跳ねた。

『本当に!? ありがとー！ さとり様も誉めてくれたんだ〜』

あたいは、さとり様も苦勞してんだなあと思しながら、愛想笑いで相づちを打っていた。

不思議な事に、小説でも何でも『熱意による成果物』じゃなくて『本人の熱意そのもの』に注目したら、途端に見る目が変わるんだ。あの自分でやり遂げたのを誇ってはしゃぐ様子は、そりゃ可愛いものさ。

知らぬが仏、とも言えるけど。

対照的に、さとり様の様子は暗いまま、晴れる兆しはなかった。むしろ苦惱と言って良いレベルにまで深まっていったよ。

文章の正確さを突き詰めようとしたのか、やたらと固くなったり、一味違う趣向を凝らそうと、グロテスクな描写が入ったり、濡れ場があつたり。

迷走してる、そう思ったのも読まれているのに気づいてあたいがハツとなつたら、さとり様は自嘲したような笑みを浮かべて言った。

『スケベなシーンを入れたら、少しでも反応が良かったんですよ』

反応が良かった、口ではそう言つても表情はちつとも嬉しそうじゃなかった。多分そんなもんでウケたくはなかったんだろう。

それならそれで悔しがつたりしてくれば愚痴を聞いたりも出来ただけど、あの人は黙つたまま。あたいの事も見ないで、ただ拗ねたように口もとを歪めるだけだった。

何度も付き合つた末にそうされると、あたいもウンザリしてきてね。つい言いそうになつた。

『……面倒臭いな、じゃあエロだけ書けば？ 声に出して読んでやるからさあ!』

実際にはギリギリ口には出さなかつたけど、それでもお察しの通り、さとり様には伝わった。それも頭に浮かんだ勢いそのままにね。

あ、と声を漏らした時には既に遅し。さとり様は肩を竦めて涙目になったかと思うと、踵を返してどこかに行っちゃった。

後悔すると同時に、やりきれない気持ちでいっぱいになった。感情の混じった批判は真に受けるな、なんてよくいうけど、あの人にはそれが出来ないんだよ。本音を探ろうとしたら勝手に余計な感情も全部読み取っちゃうだもん。

件の事が堪えたのか、さとり様はしばらく小説を見せなくなつた。あたいは気楽といえば気楽だが、あの人は気が抜けたようになって、相変わらず心配だつたよ。

でも、明るく振る舞う奴もいた。お空だ。そいつが小説書くのにハマつたらしくて、いくつも続けて楽しそうに書いていたんだ。クオリティはともかくアイツ物凄く速筆でさ。しかも長編に取り組むとか言い出して。

結果として、例の真に迫らない賛辞が連日お空に浴びせられるんだ。お空は当然仲間たちに誉められて喜色満面。

無責任、と言う人もいるかもしれないけど、金が絡む訳でもなし。とやかく言う資格は誰にもない。

そう思つてあたいも生暖かい目で見守つていた。遠巻きにお空が原稿用紙を見返して、幸せに浸るのをね。

そうしたら、隣にふうつと、冷たい気配がした。振り向くと、いつの間にかさとり様

が
いる。

さとり様は黙ったまま、身じろぎもせず、無表情でずっと立っていた。

『は、は、こんにちは。さとり様……』

ぎよつとしながらも挨拶してみたけど、さとり様は応えない。振り向きもせず、じつとある方向を見つめている。

視線を追うと、遠くにいるお空とぶつかつた。次の展開の事でも考えているのか、天井を見ながらそわそわと、顎に手を当てて唸っている。

羨ましいのかな、つて一瞬和みかけた時、さとり様が不意に口を開いた。

『……お空が、私をバカにしてる』

耳を疑つたよ。あたいにはそんな陰険な事を考えている風には見えなかつたし、大体お空は素直で優しい子だよ。あたいはよく知ってる。

だのにさとり様は冗談を言う口調じゃない。いや、冗談にしても酷い。一言文句でも言つてやろうと、さとり様に向き直つた。

その時、見たんだ。

さとり様の第三の目。そいつが緑色に光っている。

今までそんな色になつた事はなかつた。顔の表情も相変わらず何とも思つて無いよ
うなものなのに、第三の目だけがまるで、あの橋姫さんが怒つた時みたいにドロドロと

濁った緑色に染まっているんだ。

その時、いつだかに借りたさとり様の本の台詞を思い出した。外の世界では有名な、偉人とまでいわれる作家の本さ。

曰く、

『お気をつけなさい、將軍、嫉妬というやつに。

こいつは緑色の目をした怪物で、人の心を餌食とし、

それをもてあそぶのです』

……つてね。

—

……さとり様は、心を読めない不便を自分も気づかないうちに、酷い形で体现する事になった。嫉妬に染まったあの目は、最早他人の心を読めていない。……多分知らず知らずお空に向けていた、そして自分に跳ね返ってきた見下しの言葉が響くだけだ。

毎日毎日、あたいに報告してくれるんだよ。お空に聞こえないように。文章が読めたものじゃない、人物に魅力がない……他にも色々。

最近、お空も書くのに飽きてきたみたいだけど、さとり様は何ていうのかなあ。『そん

な簡単に止められる程度なのね』とか言うのかしら。さとり様もパツタリ書かなくなつていたけど。

……皆、最初に趣味があるかつて聞いたよね。余計なお世話かもしれないけど、くれぐれも自信と謙虚さを失わないでおくれよ。

どうしたつて、一番真剣なのは自分自身だ。そして他人がどう思うかは当人次第。端から見れば興味ないかもね。

自分の百点が、世間の十点かもしれない。逆もしかりだ。

それを事実として認められなかったら……ともすれば、壊れたりしてね。

あたいの話はここまでだ。お次はどなただい？

一周目・二話目—メデイスン・メランコリー

「私が二番目？ 意外に早く順番が来たわね。私はメデイスン。メデイスン・メランコリー。普段は無名の丘の鈴蘭畑に一人で住んでいるわ。だーれも来ないけどね。

いえ、一人でいるのは案外良いものよ。私の事気に入ってくれる人なんて少ないし、私も好きな人なんていない。もう何年も誰とも関わらないで過ごしてきたから、もう慣れちゃったし。

で、その無名の丘なんだけど、昔はある意味名所だったらしいのよ。何のって？

……………子捨てよ。親が望まずに生まれた子や、養えなくなった子を捨てていくの。勝手なものよ。子供には何の罪も無いのに、勝手に生んでおいて捨てるなんて。

子供も恨んだりしていいと思うんだけど、大抵そうはならないんだって。自分がどうなったか理解出来ないまま死ぬか、さもなくば両親を求めて泣くよ。子供は一人じゃ生きられないから、そうするしかないの。どんなに酷い仕打ちを受けても、小さいうちには親が神様のようなものなのね。

でも、当然捨てた親が戻ってくる筈もない。物みたいに放り出すような人間だから当然ね。だからどのみち、大体の子は死んじゃうのよ。一月もしないうちに。

だけど希に、生き延びる場合もあるの。それが妖怪や魔法使いに拾われた時よ。大きくなったら食べるか、魔法使いが実験に使うか、勝手に弟子扱いされるか。

……その中だと、どれがマシかしらね。いえ、勿論優しい家族に育てられるのが一番良いんだけど、それが出来なくなったらの話よ。

やっぱり、魔法使いの弟子を選ぶでしょ？　もしかしたら優しい人かもしれないし、変な術を教えられたりするかもしれないけど、殺されはしないでしようし。私もそう思うのよ。

けど当人の話を聞いたら、ちよつと疑問に思つちやつてね。いえ、本当の話よ？　滅多に人の来ない無名の丘に来たからよく覚えてる。本人が言ったのよ。魔法使いに師事したって。

……信じてない？　じゃあ詳しく話すわ。その時の事。私も最初は夢かと疑つたくらい、不思議な事なんだから。

……以前、一人の人間が無名の丘に来たの。黒いローブで体を覆って、顔の脇から垂れる黒髪のお陰で辛うじて女の子と分かる。その子が突然、フラツと私の前に姿を現し

た。

最初はびっくりしたわ。滅多に人なんて来ないからね。目があつて、何かしてくるか
と身構えたけど、その人は足を止めただけ。そして近づきも戻りもせず、じつとしてい
る。

見た目も行動も怪しいんだけど、幻想郷じゃ何をされても不思議じゃないじゃない？
だから無視した方が良くかと思つて。丘の鈴蘭畑で花を採つたりしてただけど、そ
の子が今度はやたらと私を見てくるのよ。何をするでもないけど、突つ立つたまま、
ジーツと。

最初は無視してただけど、ずっとそうされると流石に苛立つてきてね。『なんか用
なの？』つて聞いたのよ。

そしたらその子、なんて言つたと思う？

『いえ、幸せそうだなあつて』

妙な事言うでしょ？しかも言うに事欠いて、幸せつて。

ちよつとムツときてき。私は昔、丘に捨てられてずっと一人だったのよ。それをいき
なり知らない奴に幸せ者扱いだなんて、失礼だし、意味わからないじゃない？

『何か用かつて聞いているの！』

今度は怒鳴つて、手に持つていた鈴蘭を投げつけた。その子はひらりとかわしたんだ

けど、拍子に着ていたローブがめくれた。

その時ね、ローブの奥が見えたんだけど、目を疑ったわ。そこに腕が無かったの。長袖だったんだけど、肘から先がちゃん切られたみたい袖がしぼんで垂れ下がっていた。

出し抜けに見えたものだからしばらく呆気にとられていた。女の子はそれが面白かったのか、クスクス笑った。

『ごめんなさい、こっ、思い出のある場所だから懐かしくて』

思い出、ときた。むかーし子供を捨てていただけの場所に何の思い出があるのやら。正直ちよつと嫌な予感がしたんだけど、からかわれているんじゃないかって気持ちの方が強くてね。つい言っちゃったのよ。

『へえ、面白そうね。良かったらその片腕の理由も合わせて聞かしてよ』

今思うと不躰な事を言ったと思う。女の子は少し困ったような顔をして呟いた。

『そうね、話したら、行けるかも……』

行くって何処だか分からないけど、女の子は一人で納得したように一つ頷き、私の傍に来て腰を下ろした。

『聞いてくれる？』

……昔、まだ無名の丘に子捨ての風習が残っていた頃の事らしいわ。女の子がまだ小さい頃、事故で片腕を無くしたんだって。

まだ里では誰もが働かなきゃいけなかった時代。非力な女の子でも薪割りや水汲みなんかの力仕事をして、大怪我をするのは珍しくなかったらしいの。

そして悪い事に、その子には弟がいた。跡継ぎは男がなるといふ不文律もあって、その子は途端に役立たず扱いされた。とうに物心ついていた女の子をあろう事か無名の丘に捨てたんですって。ご丁寧に絶対についてくるなと言ひ含めて。

最初は当然泣き叫んだわ。でも言いつけを破れなくて、去っていく両親の背中はどうんどん小さくなっていく。

そしてついに豆粒程になって、完全に見えなくなった頃、涙も枯れて、その場にポツンと取り残された。

と、私はここで待ったをかけたわ。だって、子捨てがあつた時代って私の生まれるずっと前よ？ 目の前の女の子はどう見ても十代。計算がいくらなんでも無茶苦茶だわ。

そんな、趣味の悪い冗談やめてちょうだいって言ったら、女の子はまた薄く笑って、自

分のローブを掴んで見せた。

『これ見て、ピンと来ない?』

『はあ。』

私には西洋の死神にしか見えなかったけど、よくよく考えたら思い当たるものがあった。

何千年も生きる事もある、魔法使い。

彼女、魔法使いに拾われたんだって。夜になって、茫然自失でうずくまっていた所を、たまたま通りがかった男が、魔法の森にある家まで連れて帰った。

その男は、女の子を招き入ると簡単なシチューとパンでもてなした。女の子が空腹からむしゃぶりつく様子を、男は何も言わずニヤニヤしながら眺めていた。

食べ終わって一息つくくと、男が言った。

『君、捨て子だろ? 今日からここで暮らすと良いよ。僕が衣食住、全部世話してあげる』

そう言われて、ハツと体が強張った。確かに元の家には帰れないけど、だからといって魔法使いに面倒を見ると言い切られてにわかには信用出来ない。変な実験に使われるか、食べられてしまうか……。

そんな不安もあったけれど、もつと抽象的な……上手く言葉に出来ないような気持ち

の悪さを、目の前の男は醸し出していた。

なるべく目を合わせないようにして、作り笑いで女の子は答えた。

『いえ、ご迷惑ですし……』

『良いんだ！ 全然構わない。僕は凄い魔法使いなんだ。一人くらいどうとでもなるよ』

男は身を乗り出して早口に言った。その時にぎよつとして目を見ちやつたんだけど、ハツキリと不気味さの原因が分かつたんですって。

男の目は、妙に生き生きとして、何かの魔法のお陰か、容姿も若い、というか、幼く見えた。ちようど体だけ大人になった人が、玩具を欲しがる様子にそっくりだと言つてたわ。

女の子は、頷くしかなかった。生きていく為には、結局それしかなかったから。

『よし、じゃあ今日は休もうか。お客さんの寝室があるからね』

男は落ち着かない様子で立ち上がり、猫なで声で言った。女の子の肩を支え、別の部屋に案内する。その間、男の手つきが馴れ馴れしくて気持ち悪かった。

普段は誰も入らないのか、少し埃っぽい小部屋の大きなベッドに女の子は寝かされた。

『おやすみ』

そう言つて男は出ていった。挨拶は優しい筈だつたんだけど。

彼女は何故かちつとも嬉しくなかった。それどころか男もいる一つ屋根の下にいるという事実が、妙に寒々しく、ねばつく嫌悪感が拭えない。

耐えきれずに、女の子はぎゅつと目を閉じた。

………気がつくと朝になっていた。女の子は顔に降りかかる日の光に気がつくと、慌てて飛び起きる。

童話ならここで豹変した魔法使いがさつさと起きろ、働け、と鞭を振るう場面だ。寝過ごしては怒りを買いかねない。せめて早めに挨拶だけでもしておこう。

そう思つて、大急ぎでベッドの上の布団を畳んでいた時だった。

不意に、部屋のドアが外からノックされる。

『入つていい？』

『は、はいっ！』

思つたより穏やかな声色。でも油断は出来ない。女の子は身を固くしてドアが開けられるのを待った。

がちやりと音がして男が姿を現す。手には小さな女の子用の洋服があった。女の子が戸惑っている、男は洋服を見せながらこう言った。

『着替え、無いでしょ？ これ使いなよ』

確かに捨てられて着のみ着のままだった彼女。大した事じゃなくて良かったとホツとして、その洋服を受け取ろうとした。

でも、男は何故かサツとその手から服を遠ざける。眉をひそめる女の子に、こう一言。『片腕じゃ着替えにくいだろう？ 僕がやるよ』

そういえば、と彼女は自分が隻腕だった事を思い出すんだけど、だからって昨日今日会った相手に脱がされたくなんかないじゃない。だから断ろうとしたんだけど、男は有無を言わず着ているボロに手をかける。

女の子は緊張で縮み上がった。最初は恥ずかしさからだったけど、それだけじゃないの。

理屈でなく、雰囲気で分かるものなのよ。男の瞳から、手つきから、挙動から。思いやりでなく何かどす黒い欲望が見え隠れしている。今にも舌を這わせてきそうな、そんな下衆な欲。

女の子が生唾を呑んで震えていると、男は着せ替えを終えてまじまじと彼女を見つめてきた。

『ふふ、似合ってる。可愛いよ』

『あ、ありがとうございます……』

女の子は震える声でお礼を言った。そうしないと、『可愛い』の範疇から外れて、男の笑顔が不機嫌に歪むと直感したから。

男はそれ以上何をするでもなく、家の中に女の子を置いて自由にさせていた。でも彼女は緊張で一杯だったって。朝の男の気味悪い表情が頭から離れなくて。

そしてその日のうちに、ますます確信は深まる事になる。

『お風呂、行ってきなよ』

夜になって男が言った。教えられた場所に行くと、こぢんまりとした脱衣場にカゴと着替えが入っている。当たり前だけど下着もね。

相変わらず嫌悪感を抱えながら、手早く服を脱いで風呂場に直行した。一人でもリラックスなんて出来なくて、とにかく早く済ましてしまおうと体を洗う。

すると、風呂場のドアが勝手に開く。

『きゃっ!?!』

驚いて振り返ると、男が立っていた。格好は女の子と同じく全裸。何も言えずに口をパクパクさせていると、男はこう言い出す。

『背中流すよ。片腕じゃやりにくいだろう』

女の子は今度は何も言えなかった。男は女の子の背中を気安く洗い出す。ここまでくると隻腕を口実に触れたがっているように見えてきた。

ふと顔を上げて、目の前の鏡を見る。そこにはお腹の出た男と、怯えて微動だに出来ない小さな自分。

男のそわそわしながら楽しそうに洗う仕草を見て、女の子は自分が人形になって、甲斐甲斐しく洗われているような気分だった。

体に不自由がある女の子を洗ってあげる優しい僕、なんて空想に浸っていたのかしら。本人は嫌がっていたみたいだけ。

………そして何日か経って、やはりというか男は魔法を教えるといいだした。魔力を貯める修行、火として具現化する修行、物を魔力で動かす修行………

逃げ出そうとした時もあったけど、男は自慢の魔法で結界を張って、その周りを近づけない妖怪がウロウロしている。結局男の家にしかな居場所はなかった。

特にキツイ修行ではなかったわ。幸い才能はそこそこあったみたいだし、男も別に厳しい訳じゃない。

むしろ喜んでいたわ。自分は魔法だけが得意なんだ。魔法なら教えてあげられる。………云々。

それはそれで押し付けがましくて、やたらと魔法の勉強ばかりやらせる。まるで男が

その道の先輩だから、得意気にしたいんじゃないかと疑いたくなる位に。

私はどの程度の恐怖だったのか知りようがないけど、事実女の子は部屋を汚く感じて、男の料理を不味く感じて、敢えて魔法に興味を示す振りをした。とりあえず尊敬するようなポーズを取れば、機嫌が良かったから。

そうしていると、何年も経つうちに女の子も大きくなっていった。すると、それを見た男は女の子にある魔法をかけた。

若返りの魔法。十代半ば程だった体が出会った頃の幼い姿に戻っていく。

『油断するとすぐ年をとるからね。体力を衰えさせてはいけないよ』

男は白々しく言ったけど、女の子は寧ろ成長期で体も丈夫だった。にも関わらず男は女の子が成長する度に体を元に戻していった。

それを繰り返して、何十年経ったでしょうね……女の子の魔法の実力は伸び続け、ついに一人前と呼べるレベルにまで到達した。女の子の努力と男の指導の賜物ね……一応は。

……でね、人間から一人前の魔法使いになったら、何が起こるか知ってる？

体の成長が止まるのよ。

つまり女の子は私が見た十代の姿のまま、永遠に変わらなくなっちゃったの。

その時の男の喜びようだったら凄かったそうよ。これで君も一人前だ。僕と二人で組

もうじゃないか、仲間が出来るなんて初めて。しかも女の子だなんて。

男のはしやぐ様子を見ながら、女の子は思わずお風呂に入った時の事を思い出した。あの時の男の視線も、雰囲気も、恐らく一人前の魔法使いである男の姿も。そして人形のように動けなかった自分の姿も、何もかも同じだった。

とうとう本物の人形にされた気分だった。ずっと育たない体のまま、自分はいつまでここに居なきやいけないんだろう。呪われた、そう叫びたくなる心を、女の子は押さえつけ続けた。

そうしないと耐えられそうになかったから。

でもそれから暫くして、ついに彼女に転機が訪れる。

男が出かけていたある日の事。もうすっかり女の子が逃げ出さないと安心していた男は、いつしか家の結界をチエックさせていた。そして女の子はいつものように、妖怪の気に障らないよう家の周りを見回っていたの。

その時、女の子の耳に聞きなれない音が聞こえた。

『助けてくれーっ!』

捨てられて以来、初めて聞く男以外の男性の声。見ると、若い青年が妖怪から逃げ回っている所だった。

女の子はすぐさま結界をこじ開けて妖怪を撃退した。どうにか青年は命拾いしたけ

ど、見つける前に手酷くやられて大怪我をしている。

放っておけば手遅れになる。しかし青年の方は既に自力で動くのが危険な状態にまでなっていた。

女の子は家に連れて行こうか迷ったわ。男のいない間に部外者を招き入れて大丈夫だろうか。でもみすみす死なせる訳にはいかない。

とうとう良心の方が勝って、女の子は青年を家の自分のベッドに寝かせた。幸い彼女には持ち前の魔法に家の中の薬草もあったから、青年はすぐ意識を回復した。

『あ……ありがとう。助けてくれて』

『気にしないでください。それより、まだ動かないで』

青年がぎこちなくお礼を言う。服装を見ると見たこともない布地とデザイン。一目で外人だと分かった。だから妖怪のうろつく場所なんかにはいたのね。

見た事ないものの連続で未だに戸惑ってはいたけど、とりあえず味方だと思ったのか、青年はニツコリと微笑む。女の子はその瞳をふと見て、不思議な感覚に囚われた。

力の宿った目。頭がピリピリし、体がかあつと熱くなる。単に久しぶりに見た他人だつてもあるかもしれないけど、確かに見ただけで分かる、男にはない魅力があった。

『そういえば……』

『は、はいっ!?!』

『……日本なんですか？ 見たこともないような場所ばかりで……』

遠慮がちに尋ねてくる青年。女の子は幻想郷の事と一緒に何故か自分の半生まで語って聞かせた。

青年は熱心に聞き入り、次第に同情の色を浮かべた。女の子は最初は努めて明るく話していたけど、段々と泣きそうな声に変わっていく。

『……酷い……』

青年がポツリともらす。その言葉で女の子はハッと我に返り、慌ててまた笑顔を貼り付ける。

『で、でも感謝もしてるんですよ？ 拾われてなければ今頃……』

『馬鹿いうなっ！』

青年が布団をはね除けて怒鳴る。女の子がびっくりしているのも構わずに、青年は真つ直ぐ目を見つめながら言った。

『いくら衣食住があっても、ずっと閉じ込められて良い訳あるか！』

おまけに子供のままにされるなんて……！』

怒りを孕んだ声。それでも女の子にはあの男には到底敵わない程の力強さと頼もしさを持って聞こえた。驚きで硬直していた体がにわかに震えて、両目から涙が溢れ出す。

この青年と一緒にいたい。そんな思いが脳を掠めた時、玄関のドアが開く音がした。
『ただいま〜』

『!? 隠れて!』

呑気な声。男が帰ってきた! 女の子は慌てて青年を起こそうとしたけど、怪我をした体はそう簡単に動かせない。そうこうしているうちに部屋に男が入ってくる。

『元気にしてた? おみやげ……』

上機嫌だった男が見慣れない青年に気づいた瞬間、みるみる怪訝な顔に変わる。そして女の子に向けてあからさまに不機嫌な表情で『誰?』と尋ねた。

『え、えとですね、妖怪に怪我させられて、放つとく訳にいかず、介抱を……』

涙を拭いながらしどろもどろに説明する女の子。だけどその横を、怪我をした青年がよろよろと通りすぎて前が出る。

『はじめまして。彼女には先程命を助けて頂きました』

真つ直ぐ対峙する青年と男。魔法使い相手でも全く引かない青年に、男がピクリと眉を歪ませる。

『何か言いたそうだね』

『はい、単刀直入に言います。彼女を解放してあげて下さい。』

女の子は驚いた。解放なんて長らく考えてなかったから。男はふんと鼻を鳴らして

言う。

『君は知らないのかい？ 彼女は僕以外に行く場所がないんだよ？』

『知ってますよ。彼女から聞きました』

青年は動じずに言い返し、女の子を一目見てから、男に向き直る。

『行く宛がないのは俺も同じです。だからよかつたら一緒に探そうかと』

その言葉に男はムツと口を結び、無然とした表情で言った。

『君には関係ないだろう！ さっさと帰ってくれないか!？』

『彼女は恩人だ!!』

激しく怒鳴り合う二人。その中で青年はこう噛みついた。

『その子は悲しんでる。自分でそう言ったんだ。お前はずっと分からなかったのか!？』

『か、悲しい……?』

男は言われて、う、と呻いた。わなわなと震えながら女の子を見ると、彼女が狼狽えて目を逸らす。男はキツと青年を睨み付けた。

そして、真っ直ぐ手のひらを向け、叫ぶ。

『黙れええーっ!!』

その瞬間、青年の全身を炎が包み込んだ。女の子が息を呑む間に、青年はみるみる黒焦げになっていく。

『僕の夢を壊すな！ この子は幸せなんだ!! しんじまえ、馬鹿！ 間抜け!!』

男はヒステリックにわめき散らしながらどんだん炎を強くしていった。炎に照らされた男の顔に光の筋が見える。泣いているようだった。そして一分もしないうちに青年の体は消し炭になって床に崩れ落ちる。

『は、はは……さまあ見やがれ……』

『あ、ああ……』

男は一頻りケタケタ笑うと、部屋の隅で震える女の子に向き直り、ツカツカと近づいてくる。

上から見下ろす男は、見た事も無いほど怒気の籠った、怖いというよりは醜い顔に見えた。そして、いきなり女の子の胸元をpushさえたかと思うと、全身に雷のような衝撃が走る。

『お前に呪いをかけた。もうずっと外には出さない』

低い声で男が宣告する。それに合わせて首筋に鎖の痕のようなアザが浮かび上がる。『いいか、二度と僕を怒らせるなよ!』

男はそう怒鳴ると、踵を返してドスドスと去っていった。その背中では随分貧相に見えたと言ってたわ。

『頭おかしいわ……』

女の子の話を聞きながら、思わず溢していた。彼女はローブの裾で口を隠しながら笑った。

『魔法使いなんて皆おかしいわよ』

女の子があっけらかんと言う。まるで過ぎた事みたいに。

『結局、その呪いはどうなったの？』

『ああ、解けたわよ。じゃなきやここにいる筈ないじゃない』

女の子が襟をめくると、綺麗な白い首筋が見えた。とりあえずホツとして、話を聞く体勢に戻る。呪いが解けて自由でいるなら、聞いてて気分の良い結末になると思ったから。

私が目で催促すると、女の子は胸を張り、人差し指を立てて言った。

『ここからがとうとう、クライマックスよ』

……その日を過ぎてから、女の子の心にハッキリと変化が表れた。

今まで男の言う事に逆らわず、されるがままになつて、時にご機嫌とりをしていけば、外には放り出されず、とりあえず健康でいられる。今までそれでいいと思ひ込もうとしていた。

でも、それは違うんじゃないか。自分の意思を示したり、自由に歩けたりするのが、いけない事でも何でもないんじゃないか。自分は今まで、実は酷い目にあつてゐるんじゃないか。

そんな疑念が、何十年かぶりに頭をもたげてきた。今まで男の家で平穩に暮らしてはきたけど、よく考えれば『感謝』の気持ちが無かった。それどころか仕打ちを思い返す程に憎しみが込み上げてくる。

青年への印象はまあ、理想化も入つていたかもしれないけど、男への不信を呼び起こすきっかけには十分だったのね。

その日から、復讐の準備が始まった。奪われた自分の自由と、安らぎと人間としての生、ありとあらゆるものに捧げる、ね。

けど、魔法の実力なら未だ男の方が上。真つ向勝負では勝てない。そこで男の目を盗んで、呪いの研究をしたの。見ていて一番清々するような、どぎつく惨たらしい呪いを。暫くして、女の子は小脇に抱えられる程度の大きさの箱を、一人で大事そうに弄る事

が多くなった。男は家を出られない術をかけていたから止めさせはしなかったけど、何か月も続けられると気に障ってくる。

やっぱり自分に害意があるかもと恐れていたんでしよう。信頼関係が成り立っていったら多少秘密を作ろうが気にならないでしょうに、小さい男よ。

そしてある日とうとう堪りかねて、箱を弄る女の子に詰め寄った。一体何を作ってるんだ、見せてみると。

すると女の子は咄嗟に箱を庇って叫んだ。

『これは私の大事なもののなの。今まで通り言うことを聞くから、どうか放っておいて』

男は彼女を見下ろす。必死で懇願する、さりとて意思の固さが覗く瞳。男はその目を見て苛立ちを覚えた。自分の思い通りに引き下がらない、微笑まない、目を逸らさない。

とうとう体が先に動き、箱を奪い取って蓋に手をかける。蓋は鍵もかかってなくて存外簡単に開いた。

その瞬間、女の子はニヤリと笑った。罨だったのか、最後の情けをかけたのかは、分からないけれど。

箱の中から、その大きさからはあり得ない程の数のカラスが飛び出した。瞬く間に黒い塊になって、耳障りな声を上げながら男の全身を包み込む。

『ぐわああああーッ！』

男はくぐもつた悲鳴を上げて床に倒れ伏した。その上から数えきれないカラスが、餌に群がる蟻のように蠢く。

始めに服が引き裂かれ、次に目玉と髪の毛と局部を抉りとられ、皮膚が裂けて血だるまになり、肉をついばまれ、最後に白い骨が覗く。

単なる魔法ではなく呪いだからか、男は何の抵抗も出来ずに綺麗な白骨になった。床に血が、辺りにその臭いが染み込んで慣れてしまふ頃、カラスはどこかに消えて、首筋に刻まれた呪いも主が死んで無くなっていた。

—

『そうしてやっと、私は外に出られたのよ』

長い回想を終えて、女の子が天を仰ぐ。空は既に茜色に染まって、女の子の顔を明るく照らしていた。

伸びをして立ち上がる背中を見ながら、暫く何も言い出せなかつた。話してくれた事を全部信じる訳じゃないけど、本当ならとうに変になつて……いえ、実際、なつていたんでしよう。やけに細かく達観した話しぶり、それが却つて説得力を生んでいた。

『……大変だったのね』

結局私の口から出たのは、そんな月並みな同情の言葉だけだった。それでも振り返った彼女は、ふっと柔らかい笑みを見せる。

『まあね。でも、あの外来人には感謝してもしきれないわ。あのまま気持ちを押し殺して生きるなんて、ゾツとする』

肩を竦めて投げやりな口調。表情はもう逆光で、暗く見えづらい。

『あと親にもね。生んでくれなきや、私自身がいなかったんだし』

正直な気持ちで生きられる、命がある。最初に幸せそうだと言われた意味が分かった気がした。

私は正直、不満を抱えて毎日生きていくけど、その時は何だか、胸の奥がすうーっと穏やかになる感覚がした。

『ふーん、まあそのうち辛くなるだろうけどね。困ったらまた来なよ。愚痴くらい聞かから』

あんなに長々と話したのが久しぶりだったからか、柄にもなくそんな言葉が飛び出した。

けれどもそれを聞いて、女の子はピクリと体を跳ねさせて、首を横に振った。『なんで？』って聞くと、女の子は悲しそうに言う。

『……ごめんね、あの呪い、死と引き換えだったのよ』

そう言った瞬間、女の子の体が、表面からサラサラと形を崩し始めた。目を疑っていると、彼女が声をか細くしながら喋る。

『聞いてくれてありがとう。やっと行けそうだわ』

思わず駆け寄って取りすがろうとした。けれども彼女は触れたそばから砂みたいに崩れて、終いには首から上が呑気そうに笑うだけになった。

私がパニックになって見上げていると、彼女は最後に、思い出したようにこんな事を言い出した。

『そういえば、最後の呪いね……』

ぼんやりと空を見て、思いを馳せるような視線。

『ありったけの憎悪を込めた筈だったんだけど、一つだけ変なのがあったの』

『……………』

『最後に箱の中に、白い鳩が一羽だけ……。閉めようとしたら、飛んで行っちゃったけど……………』

これだけ言って、女の子は完全に消えちゃった。後には、すっかり暗くなった鈴蘭畑に、いつも通り私が一人だけ……………。

……その子にはそれ以来会っていない。やっぱり行くべき場所に行っちゃったんでしよう。

最後に見た鳩は幻だったのかしらね。にしても、男がかけた鎖の呪いと、空を飛ぶ鳥って、なんだか対照的に見えるの、私だけかな？

……ねえ、件の男も、子供を捨てる親もそうだけど、なんで都合よく縛りつけたり、放り出したり、人形みたいに扱うんだろ。

あんなの結局子供の玩具じゃない。

私は、血の通った友達の方が欲しい。……欲しかったのに。

あ、ごめん、随分長くなっちゃった。私の話は終わり。次行っていよいよ」

一周目・三話目―魂魄妖夢

「私が三話目ですか？　ううん、ついに来たかあ……」

冥界の白玉楼の主、幽々子様に仕えております、魂魄妖夢です。よろしくお願いします。

さて皆さん、私はこんな刀なんて持っています、常日頃振り回しているわけではありません。

普段は屋敷の草木を整える庭師をしております。枝葉が伸びすぎる樹や植え込みを調整し、雑草なんかも小まめに取らなさいけません。

これがなかなか大変ですね。慣れないうちは草取りで腰を痛めたり、枝を切りすぎてハゲ坊主にしかけたり、まあ色々ありました。あはは。

それで、去る今年の初夏にも例によつて枝を切っていたんですけど、その時、背中に妙な感覚を覚えたんです。

こう、ゾワゾワと這い上ってくる、小さな何か。くすぐったさとも違う不快な存在感が肌に広がり、全身を強張らせます。

やがてそれは首筋まできました。髪の毛を弾きながら進路を変更し、私の頬にまで顔

を出しました。

私は凍りついたように動けませんでした。その何かは毛羽立った毛糸のような体をウネウネと蠢かせ、私の顔周辺、感覚の鋭敏な場所を舐めるかの如く這い回るので。

それが私の唇にぴりと口をつけた瞬間、やっと反射的に体が動き、私は手でその何かを払いのけていました。そいつは微かに弾力のある体を歪め、地面に転がります。

その姿を見て戦慄しました。

毛虫です。いつの間にか落ちてきたのでしょうか。

海老みたいに曲がった体もがいて伸ばし、一頻り体を震わせると、あろう事か私に向かつて来るじやありませんか。

『やー… やー…』

叫びながら地面を踏み鳴らしました。ところが奴め、目が見えないのか全く臆せず私ににじり寄ってきます。

ならばと私は横に避けました。なにも毛虫に恨みを買った覚えはありませんからね。道を譲れば自分の行くべき場所に帰ってくれるでしょう。攻撃して罪を背負うなど、それこそ慈悲を忘れた恐ろしい行為なのです。

きつと、私が間違つて地獄に落ちたら毛虫さんが糸を垂らして助けてくれるに違いな
い。えっへん。

とか考えながら毛虫が通りすぎるのを眺めていました。全身を巧みに使いながらの歩みはゆっくりりしたもので、何分もしてようやく直立不動で怯える私の靴の爪先に、お尻が差し掛かる所まできました。

ああ、やつと去つてくれる。そう思つて安堵のため息を洩らした間でした。

毛虫がピタリと止まったのです。私の吐息も一気に引つ込みました。再び釘付けになる私の眼下で、そいつは石ころのように足元にずっとポツンと佇んでいます。

どこにでも行ける。むしろ行つてくれと願つているのにどういうつもりでしょう。泣きそうになりながら、震える足先で微かに毛先を蹴つたりしていました。

それを何度続けた頃でしょうか。

毛虫がのそりと頭をもたげ、また私に向かって来たんです。私は思わず飛び上がつて、海老のように素早く後退さりました。

すると、毛虫はそれを追うように這つてきます。真つ直ぐではなく微妙に逸れながら向かつて来られると、最長の距離を保ちたくて私も横に逸れます。それを繰り返す内に私は庭をグルグルと小躍りするかの如く、毛虫から視線だけは外さずに跳ね回っていました。

だから頭は回らなかつたんでしょう。

程なく、背中に重い衝撃が走りました。私がさつきまで枝を切つていた樹です。

すぐに察したわけではありません。最初は毛虫から逃れる事で頭が一杯で、お相撲さん紛いの巨体の曲者かと疑った程です。

私が樹だと理解したのは、ぶつかつた後の惨事が原因でした。

ぶつかつて樹が揺れたのでしよう。枝葉に巣くつていたであろう無数の毛虫が、真上からぼとぼと音を立てて落ちてきました。頭に、耳に、背中に、そして目の前に、五感を通じて毛虫のオンパレード。

『きゃあああああ〜っ!!』

自分でも驚く程の悲鳴をあげて、私はくつついた毛虫もそのままに屋敷の方に駆け出しました。もう庭仕事も恥もどうでもいいから幽々子様の顔が見たかつたんです。

いえ、実際、その時の私は化け物に追われ、冥界の主に助けを求めると変わらない程に怯えていました。

今まで数えきれない位始末してきた虫が……いえ、だからこそかもしれません。現世にあり得ない何者かがとりついているんだと、その時ばかりは直感で信じていました。

部屋という部屋をでたらめに開け、ようやく見つけた幽々子様は、私の恐慌状態など知る由もなく座敷で呑気にお茶を飲んでいました。

『あら、どうしたの妖夢、それ』

幽々子様は私に気づくとお茶を吹き出しそうになりながら尋ねてきました。私はも

う怖いやら悲しいやら、更に目の前で笑いを我慢されて悔しいやらで、土足で地団駄を踏みながら、涙声で訴えました。

『虫です！ 虫のお化けです！ なんとかして下さい！』

……正直あの時は思考が支離滅裂もいい所だったんですが、大体こんな事を叫んでいたと思います。幽々子様は呆れながら駆け寄って、私を撫でてくれました。

髪の毛をふわふわと解されて、幾らか安心しながら私はしゃくり上げながら、また言いました。

『祟りです……。これは祟りですよ』

言葉だけだと何言ってるんだと思われるでしょうが、早い話、私は甘えたかったんですね。それで『私はこんな風に思う程怖かったんだよ』と頓珍漢に祟りだなんて口にしたんです。

幽々子様もそれが分かっていたんでしょう。毛虫を指で弾きながら黙って抱き寄せ、慰めてくれました。

そうして、私も平静を取り戻した頃です。一歩下がって顔を上げると、いつもの慈母のような幽々子様の笑顔。それにつられて笑いかけた時でした。

突如、幽々子様がかつと目を見開いたかと思うと、足元の畳に手つき、鬼のような形相で床を睨み付けました。穴の開くほど凝視する先には、私からこぼれ落ちた毛虫

が。

まさか余程の毒虫だったか、と私が息を呑んだとき、幽々子様の眩きが聞こえてきました。

『タタリ……タタリ……』

手をついた姿勢のまま微動だにせず、うわごとのように繰り返す幽々子様。その姿を見て、さつきまでの恐怖がぶり返してきました。まさか、出任せに言った祟りが本当に降りかかっていたのか。転がっている小さな虫がこれから災いをもたらすのか。

また毛虫を先程のように見つめながら、冷や汗をかいて幽々子様の言葉を待ちました。すると、幽々子様は突然畳をガバツと持ち上げ、低く唸るような声で天に向け、こう叫びました。

『これはまさしくっ！』

続けて一声。

『タタミじやくっつ!!』

—

……え？ どういう意味かって？

タタリとタタミをかけたギャグに決まっているじゃないですか。説明させないで下さいよ恥ずかしいなあ。

私じゃないですよ。幽々子様が言ってたんです。怖い話なんて思いつきませんから、こう、ほのぼの路線で……行けるかなって……」

ふて腐れていた妖夢の口調が段々と勢いを失っていく。それも無理はない。私含めてほぼ全員が白けた顔を気まずそうに見合わせている。唯一燐だけが背を向けて爆笑していた。

「……すいません、話すのもダメなんです」

しよんぼりと頭を下げる妖夢。どうやら本格的にホラー自体が苦手らしい。それきり口をつぐんでしまった。

皆は黙ったまま。部屋を沈黙が包んだ。

らちが開かんと気を取り直し、皆に呼びかける。

「……まあ、案外そういう路線で受けを狙えるかもな。

ほら、次の人頼むよ」

この寒々とした空気が、実は一番怖いかもしれない。

一周目・四話目—赤蛮奇

「ふむ、私が四話か。もう後半まできたね。

とりあえず自己紹介しとくよ。ろくろ首、もとい飛頭蛮の赤蛮奇だ。この通りホラ、首が外れる。

……なんだ、皆でぎよつとして……目の前でやつちや不味いかい？ 妖怪ならもう少し胆が据わっていると思っただがね。

まあ、私の勝手な想像なんで、押し付けるのも失礼だな。なんせ私は天邪鬼の異変まで、人間の振りをしていた。里では……いや、人前で滅多に首は外さない。今でも知り合いや巫女達を除けば、私の正体を知らない人がざらにいる。

……だから、最初に断っておく。私をれつきとした妖怪だと思ってくれないと、これからの話はちとキツイかもしれない。

嫌な予感でしたら順番を変えてくれ。別のネタをまとめるまでだ。

……構わないのかい？ じゃあ話すよ。今晚限りの、赤蛮奇のヤンチャ自慢だ。耳を塞がずに、最後まで聞いておくれ。そして他には漏らさないこと。良いね？

……今となつたら大分前だが、人里の中に男の知人が一人いてね。それだけならどうという訳でもないが、そいつは私にとって少し鬱陶しい存在だった。

きつかけは些細な事だった。夕飯時に一人の男が訪ねて来て、私に味噌を分けてくれと言つたんだ。

私は近所の事をよく知らなかつたんで戸惑つたが、無駄に波風を立たせたくもなく、壺に少しだけ分けてやった。それが始まり。それから男は何度も私の家の戸を叩くようになった。

その男は私と同じ里の外れの、近所に住んでいたんだが、そいつが酷くモノグサでね。商店街に買い物に行くのが面倒だからと、いちいち私の家に来ては味噌や醤油にお米を分けてもらいに來るんだ。

しかも貸すときに使つた器は、なかなか返してこない。一、二ヶ月でようやつと洗つて返しにきたと思えば細かい汚れが残つて、ご飯粒がこびりついている。お返しなんかをくれるのは稀で、大抵私が忘れた頃に、見るからに古くなつた乾物を寄越すんだ。カピカピでささくれだつて、『お前それ絶対自分で使うの忘れてただろ』つてのをね。

最初は私も近所付き合いだと思つて慣れない愛想を振り撒いていたけど、次第に嫌に

なつていった。

笑えるのが、奴が庭先に七輪を置いてサンマを焼いていた時の事だ。ろくに手入れしていないのか、焦げ臭さが酷い。文句を言いに行ったら、そいつどうしていたと思う？ サンマの骨を取りながら、外間もはばからず面倒臭い面倒臭いとぼやいていたんだ。子供か、と内心で呆れて何も言えなかった。その時なるべく関わらずにおこうと決心したよ。別の里人に聞くと、とつくに呆れて付き合いを絶つたとさ。

私も見習つて距離を置く事にした。足しげく通う妙に嬉しそうな顔にいい加減うんざりしていたし。

……けど、そう上手くはいかなかった。その翌日、よりによって酷いタイミングにまた出くわす事になったんだ。

私が首を取り替える為に、スピアの方の首を抱えて髪を解かしたりなんかしていた時だった。

誰かが戸を叩く音。私は自分の使っているのと持っているのを合わせて首が二つある状況だ。万が一正体を知らない人が見たら即座に妖怪だとバレてしまうだろう。

大慌てで首を隠して、上ずった声で応えながら戸口に走る。今思えば居留守を使えば良かったんだが、思い当たらない位に焦っていたんだな。

『今開けるよー！』

そう言つて扉に向けて手を伸ばした時だった。足が玄関の段差に躓いた。

前のめりになり、反射的に掴まろうとして伸ばした腕が扉に触れて、私は倒れる勢いで扉を開けながら土間に全身を打ち付けた。

視界がチカチカと明滅し、万華鏡みたいだった景色がゆっくり、ゆっくりと形を取り戻していく。

数秒後に取り戻した視界に映っていたのは、地面に転がった私を見下ろして目を丸くするあの男だった。

よつぽど酷く転んだのか、木偶みたいに固まって口をポカンと開けたまま動かない。それがあんまり続くものだから、いい加減私は起きようとしたんだ。

けど、妙に体が軽い。

体を持ち上げようとしたら、ひよいと視線が高くなる。全く重みがない。手について胴体を引き上げる当たり前の感覚がないんだ。

なんかおかしいなあ、と思つて視線だけをぐるぐると巡らせる。すると視界の隅に私がついさつき出た家が見える。

しかしどうにも家が遠い。扉を開けて転がったりもしないとあり得ない小ささ。嫌な予感がして、開けっ放しの玄関から家の中を凝視する。

すると首なしの胴体があるんだ。肩口からは真つ暗でよく分からない断面が覗いて

いる。ああ、勿論私の胴体、首から下だ。

まずい！ そう思つて男に振り返ると、彼は顔を真つ青にしながら、そろそろと後退りを始める。正体を知られてそのまま帰られちやたまつたもんじやない。すぐさま元の体にくつついて、とつて返す勢いでへたり込みそんな男の腕を横から掴んだ。

『こつちに来てくれ！』

返答も聞かずに家の中に引つ張りこんで戸を閉める。おろおろする男に向けて、私も動転しながら言い聞かせた。私がろくろ首で、普段は人間の振りをして暮らしている事、人里には万が一も敵意が無い事を、よくよくね。

男は聞き終えた後、しばらく呆然としていた。私はその顔を凝視しながら、正直不安で一杯だったよ。男が妖怪にどんな印象を抱いているか知らなかったし、秘密にされる義理堅い人間にはとても思えなかった。

ともすれば、交換条件で不埒な要求をしてくるかも……。そんな風に悪い方ばかり行く思考を悟られないよう、口をきつく結んでいた。やがて男が口を開く。

その瞬間、思わず肩が跳ねた。けど、男が言った言葉は予想外のものだった。

『羨ましい』

へ、と間拔けな声が口から出た。眉をしかめる私に向け、男は両手を広げてかつたるそうに言う。

『だってよー、手足を使わずに動けるんだろ。右に行きたきや右に浮かび、左に行きたきや左に浮かび、随分楽じゃないか』

言われた事を呑み込めずに首を傾げると、男はじれったそうに言った。

『毎日面倒だと思つてたんだよなあ。起きるにしても手で布団を除けて、体を起こして、足で歩いて、服を取つて着替えて……』

起きたいとか歩きたいとか、思うだけじゃ何も出来やしねえ』

『当たり前だろう、私だって普段は五体満足で生活しとるわ』

呆れて溜め息をついたら、男はムツと口を尖らせたかと思うと一瞬天を仰ぎ、またペラペラと愚痴を溢す。

『チクショー……。こうやつて喋るのにも口を動かさなきゃならんし、伝えるまで手間がかかるし……』

何もしないで、何でも出来たりしねーかなー、かつたりい』

散々文句を抜かしとて言うわ。『生きてりや仕方ないだろ』と吐き捨てて、手で彼を追つ払つた。それでやつと背を向けてくれたんだが、去り際にポツリとこう言つたんだ。

『そうか……。死ななければ、不死身になれば良いんだ』

こいつは真性のアホだと思つたよ。確かに死ななきゃ飲まず食わずで寝ていられる

かも知れないが、そんなアホな理由で不死になろうだなんて、下らないにも程がある。男が出ていってから、他人事ながら虚無感に襲われた。素性を知られた不安も忘れて、関わるだけ時間を無駄にした後悔で一杯だった。

だから思いもよらなかつたんだ。あんな事になるなんて。

後日に、里以外で初めて男と会った。霧の湖を知っているだろう？ ああの吸血鬼の館の傍にある、いつも霧がかかった大きな湖。

そこに一人知り合いが居てね。わかさぎ姫っていう、下半身がわかさぎの尾になっている人魚。そいつに会いに行つたんだ。

里からの道を抜け、やがて白い景色の中に光の揺らめく水面が見えてくる。

相変わらず神秘的な雰囲気だなあ、とか思いながら歩み寄ると、その水面の淵に一瞬暗い影たちが動いた。

誰かがいるみたいだけど、一人じゃない。それも互いに争っているようで、水に落ちるかと思う程荒っぽく掴み合っている。

それらを注視しようとした瞬間、耳をつんざくような悲鳴があがった。

『きゃあああーっ!』

その悲鳴は、紛れもなくわかさぎ姫の声だった。慌てて駆け出すと、誰かが姫の腕を掴んで詰め寄っている。近づくにつれてあの男だと分かった。

走る勢いのままに男を蹴飛ばすと、彼は予想外の衝撃に呆気なく湖畔に転がった。

放つて振り返ると、顔を真っ青にした姫が息を荒げている。私は不安が先立って肩を掴むや捲し立てた。

『おい、大丈夫か!? 何をされた!』

『な、何も……』

姫は首を横に振った。けどその口調は上ずって呆然としたもので、とても言葉通り受け取れるものじゃない。気掛かりが絶えず姫の全身に視線を巡らせると、尻尾の鱗が一部剥がれて、小さく開いた窪みから血が出ている。まだ赤い色の、真新しい傷。

『……怪我してるじゃないか』

思わず声が低くなった。自然と怒気が伝わったのか、姫がワタワタと目の前で両手を振る。

『ちっ、違うのよ! あの人は釣りをしていただけ!』

『は? 釣り?』

顔をしかめて彼を見ると、頭に血が上って気付かなかったが、成る程目を回した男の

周りには、釣竿や網籠が転がっている。モノグサに限って、趣味や気晴らしだけは妙に精を出すものだ。

でも、暴行じゃ無いとすれば彼女の傷は何なのか。尋ねてみると姫は困った顔で『それは……』とか呟き、戸惑いながら話し出した。

彼は最初、普通に釣りをしていたらしい。けど、釣り針が偶然姫の尻尾に引っ掛かった。暴れまわって針は取れたらしいんだが、針のギザギザのせいで周りの肉ごと取れてしまった。

けど、そこからが問題だ。姫は顔を出して釣り糸を垂らした男を見つけた。何も仕返しをしようってんじゃない。偶然なら一言声をかけて遠くに避難しよう。

けどすぐ後に、彼女は目を丸くした。

姫が見た時、男は釣り針にくっついた肉をじつと見つめていたんだ。妖怪の肉が珍しいんだろうか。自分の血が垂れる切れ端なんて、見つめられて気持ちいいものじゃない。いつまでも黙ってそうしているんで、見かねて口を出そうとした。

その時だ。男が肉をパクリと口に放り込んだ。呆気に取られる間に目の色を変えて、今度は姫にかじりつこうとしたって言うんだ。その様はまるで獣のようで、思わず悲鳴をあげたらしい。

『そんな美味しそうに見えるのかい?』

にわかに信じられずに口に出すと、姫はしばし視線を落とすし、遠慮がちに答える。

『人魚の肉って、食べたらずに不死になるとかいってしょ？ そのせいじゃないかな……』

確かに、人魚の肉を食べて不死や不老長寿になった伝説はある。以前男が言った戯言を思い出した。

でも、見知った仲で俗なお喋りも好きな姫に、そんな魔性染みた逸話なんて似つかわしくない。

……そう思っていた。けど、姫が俯いて沈黙し、その間に所在なく視線を泳がせた、その瞬間。

どうだろう。いつも微かに生臭い程度に思っていた尻尾が、血の臭いが混じったせいかなんとも芳しい香りを放っているように感じる。酒に酔って全身に心地よさが回り、鼻から抜けていくみたい。

頭の痺れをこらえてふと前を見ると、その芳香の主がいる。きらびやかに鱗を纏った下半身に見劣りせず、白く透き通るような肌、そして一本ずつ丁寧に染めたような藍色の髪が、水に濡れて鮮やかに照らされている。ビククリして此方を見る瑠璃色の瞳は、見ているだけで吸い込まれそうで、一点の汚れもない水に包み込まれたかのよう。

今や姫の全身が生きた美しい彫刻だった。隅から隅まで滑らかで、きめ細やかで、瑞々しく……その魅力を自分のものになりたい。そんな欲望が頭を焼く。

見たい、触れたい、抱き締めたい。いや—
食べたい。

脳内に、具体的にその言葉が浮かんだ直後。

『ふひ……ふひひ、へへへ』

背後から気味の悪い笑い声がして、私はふと我に返った。振り返ると、いつの間にか上体を起こした男が口の端からよだれを垂らしながら笑っている。

目が合つてギョツとした。瞳は焦点を結ばず、頬はだらしなく緩み、子供の落書きみたいな笑顔のまま男は体を揺らしている。

『なんだ、ありや……』

気味悪く思いながら眩くと、姫がごくりと唾を飲む。

『もしかしたら、酔っちゃったのかも』

『酔う?』

姫の方を見ると、彼女は尻尾の傷を押さえながら言った。

『私は食べさせた事ないけど、人魚を食べると死なない代わりにおかしくなっちゃうって聞いた事があるの。』

人には刺激が強すぎて、ちようどお酒や薬を飲みすぎたみたいに……』

姫の口調が次第に弱々しくなっていく。さつきまで姫に血肉を欲するまでに惹かれ

ていたのを思い出し、背筋に冷たいものが走った。私も一步間違えば、姫にかぶりついていたかもしれない。

流石に口には出さなかったけど、姫の言う人魚の肉に酔った説を私は信じざるを得なかった。

『あいつ、どうしようか?』

平静を装って男の対処を相談したけど、声は震えていた。私が同じく狂いかけたのを見透かされないかと内心ひやひやしていたが、彼女は素直さからか気づく様子もなく、ハツとなつて答えた。

『放つておく訳にいかないわ。どこかで休ませないと……』

言いかけて、『あ』と顔を歪めた。ここに寝かせておけないのは確か。だけでも姫は半身が魚で、脚がない。水中が得意な代わりに陸では思うように動けない。ましてや誰かを連れてなんて、ね。

姫はばつが悪そうに私を見た。男の事はそんなに心配じゃ無かつただけど、姫の顔を見ると知らんぷり出来なくてさ。結局『私が永遠亭に連れていく』って、男をおぶつて行つたんだ。

……で、永遠亭のある竹林に行った訳だけど。

最初は空から行くつもりだったが、結局歩いて行く羽目になった。なんせ背中ですつと気味の悪い笑い声をブツブツブツブツ発しているから、万が一放り出しちゃえば危ないと思つてね。

幸い何事もなく竹林に入るまでは良かったが、歩くとなるとそこからが大変なんだ。竹林そのものが広いのもあるけど、何よりそこが酷く迷いやすい。どこを見ても竹が高く高く伸びて、同じような景色が続く。おまけに辛うじて獣道がある他には看板も道しるべもない。実際私も何度も同じ場所を彷徨っていた。

……先生や藤原さんを頼れば良かった。

そう考えた時には後の祭り。気づいた時には自分の足跡が幾重にも重なっているのを見つけたりして、出直すのも困難な有り様だった。

そのうちとうとう夜になり、視界が闇一色になる。体は人一人背負い続けたせいで、肩が凝り、足腰が軋み、最早飛ぶに飛べない程疲れきっていた。

背中の男はいつの間にか黙り、ぐったりとのし掛かってくる。忌々しくて投げ捨ててやりたくなつたが、すんでの所で理性が止める。眠つたのなら、目覚めた所で正気に戻るだろうと考え直し、また歩き出そうとした。

その時だ。

『あのお……』

妙に軽く、呑気な声が耳元で響く。驚いて振り返ると、男が私の肩に顎を乗せているのに気が付いた。

こいつが喋ったんだらうか？ 確かに声は男のものだった。けど、こんな時に馴れ馴れしく何の用だろう。

横目に見ながらいぶかしんでいると、今度はこう言った。

『バンキさん、お付き合っている方っていらっしやいますかあ？』

『は？』

突然何を。まだ寝ぼけているのかと疑うのも目に入らないようで、男は同じ調子でペラペラと口を動かし続ける。

『え?! いない! そりや良かった。所でその、本題なんですがあ……』

いや、本当に言っただよ。耳元で私の名前を叫びながらの一人芝居。まだ狂つてやがる、そう吐き捨ててから努めて無視して、私は歩を進めた。男の口は止まるどころかますます勢いを増す。

『その、私と付き合っちゃもえませんかね』

『いえ、友達からで構わないんです』

『人間だ妖怪だ、この際何だつて良いじゃありませんか』

最初は嘖き出しそうになった。そんな風私を見ていたのかと、男を滑稽と思う余裕があった。

けど、次第にその余裕は消えていく。想像してご覧よ。肩越しに自分の名前を含めて、延々とうわ言を……いや、他人の妄想を垂れ流される様を。

あれは決してうわ言、寝言の類いじゃない。奴の口調はますますもって快活になり、受け答えが容易に想像できる程に明瞭なストーリーを紡いでいく。

私と冗談を言い合い、

一緒に里を歩き、

例のモノグサに小言を言われ……………

私は返事の一つもしなかった。代わりに背中がさあつと寒くなる。

奴は、確かに私と話しているんだ。ただし、奴の頭の中の、私と。

知らず知らず早足になっていた。もはや今どこを走っているのか、そんな考えは頭から抜けている。

男を背負っているという事すら忘れ、ただただ右も左も分らない、真つ暗な竹林の中を駆ける。

その時ふと、首筋にチラリと冷たい感触がし、びくりと足が止まる。今まで感じていた寒気じやない。それはするりと線を描くように背に落ち、どこか生暖かく、肌に嫌な滑りを残していく。

雨粒か何かかと思つたけど、宙に手をかざしても寒々しい風が掠めるだけ。ならば……。

嫌な想像が働いたがぐつと堪え、男がのし掛かる背中を振り返つてみる。段々と、視界の端に男の横顔が映る。心なしか上を見上げているようだった。頬に生ぬるい息がかかり、肩が強ばつた。出来るだけ顔を近づけず、眼球だけ寄せて目を凝らす。

一瞬、息をするのを忘れた。

男は白目を向き、口をぼんやりと開けて、その端からヨダレを垂らしていた。顔は相変わらず宙を向いたまま、釘付けの私に気づく様子もない。

それでも独り言は止まなかつた。私が一言も発せず立ち尽くすのを、『パンキさん』と呼ぶ声が現実を引き戻す。それでも彼に呼び掛ける勇氣は湧かなかつた。

ただ、背中から彼を引き剥がし、離れようと体が動く。目の前の相手に、自分とは別のものが見える。その事実が無性に怖かつた。

目だけは男から離せず、それでも足だけはバタバタと忙しくなく地を踏む。男がずり落ちる最中、本当に一瞬で酷く取り乱した。

するとその途端、たたらを踏んだ足が、急に捻れ、引つ張られたような気がした。

『うわっ!』

叫んだ瞬間体が重さを失い、尻に衝撃が走った。投げ捨てた男がもんどりうって私のすぐ横に転がる。

くらくら目眩がするのを抑え、座り込んだ状態のまま辺りを見渡す。白黒する視界が元に戻ると、最初に映ったのは土の壁だった。さっきまで前方には竹しか無かったぞ、と思つて上を見上げると、竹林の葉が夜空を覆う光景が丸く切り取られ、随分と遠くに見える。鼻には青臭い草の根の匂い。

ああ落とし穴か、とやつと理解できた。ホラ、ウサギが竹林のあちこちに作っているやつさ。こんなの引つ掛かっている場合じゃない、苛立つのを抑えて、落ちた男が気になつて振り返つた。

ところが、どうも落ち方が悪かつたらしくてね。首が変な方向に捻れていた。疲れていた所で出し抜けに目撃して、最初はギョツとしたが、何故か脱力感の方が大きかった。あの奇怪な独り言から解放されたと、そう思つたからだろう。

けど、一息吐いて腰が抜けそうになつた、その時だった。

『バンキさん、髪切りました?』

『わっ!?!』

また声がして、壁に背を打ちつけた。体はだらりと横たわり、捻れた首に繋がった顔はあらゆる方向を向いているのに、男はまだ確かに自分の口から喋っていた。

そこで思い出す。男の異様さにつられて忘れかけていた、人魚の肉の効能。

『不死身になる』。

正に男は変わらなず生きてまま、例の眩きを続けていた。腑抜けた、楽しそうな表情で。だが、顔は鬱陶しい程に台詞を吐くくせに、体はいつまでも立ち上がらない。やがてだらしなく地に伏した尻と股間から汚ならしい半固形物が流れ出て、異臭が立ち上る。

首以外はまるで屍。死なない、というのはそのう意味だったらしい。

長いこと立ち尽くして動けなかった。一人ぶん位の広さの中で、慣れてきたらしい男の軽快なお喋りが響く。靴が顔に触れても舌は回り、さん付けはもうやめていいですかなんて言いやがる。

ほんの気紛れで、軽く足で小突いてみた。あの呆けた顔が上を向く。一度は助けようとした男だったが、今はもう手遅れだと思った。首から下は木偶の坊、首から上はまるで笑い袋だ。

今度は強めに蹴飛ばしてみた。すると顔はサッカーボールのように飛び、穴の中を跳ね返って転がり糞まみれにまった。

目鼻に排せつ物がべっとり張り付き、真っ茶色に染まった首は、もう人間には見えな

かった。まるであんころ餅―いや、泥団子。

違う、もつと違うものが頭に引つ掛かる。この男がいつか言っていた。

そうだ。以前彼が私を羨ましいと言ってたつけ。

手足一つ、指一本動かさずに色んな事が出来るのが。

思い出してから彼を見ると、一つ気づいて目を見張った。頭の中でだけだが、こいつは夢を叶えた。一步も歩かず、私と付き合ひ、恋愛を謳歌している。糞尿にまみれて土気色も甚だしい死に損ないだけど、望みを叶えたんだ。

そう思うと急に、腹の底から笑いが込み上げてきた。むせ返っても止まってくれず、とうとうぶつ倒れてゲラゲラ笑いながら、糞尿の中を転がり回った。吐きそうな悪臭も気にならない。腹を押さえて手足をばたつかせ、茶色いものを飛び散らせながら笑った。涙が出て、喉がヒイヒイとひきつるまで笑った。

いつしか大の字になって空を見ると、もう竹の隙間から白い光が射し込んでいた。思えば何があんなに可笑しかったのか分からない。隣の死体を見て一応夢じゃないのを確かめてから、臭いが染み付いた体を起こした。

明るくなり、自分が酷く汚れているのが分かり、急激に虚しさが襲ってきた。さつさと帰ろう、とフラフラと穴を飛び出す。

男は今から眠るのか何なのか、ピロートークまがいの恥ずかしい会話を繰り広げてい

る……。いや、詳しい内容は覚えていない。すぐ埋めちやったんだもの。臭いも酷かったし。

足でバサバサと土をかけると、男の顔が隠れていく。夢の中の私とお幸せに、と一応言ったけど、何の感慨も無かった。

すっかり夜が明けて、竹林が竹の緑でいっぱいになる頃、やつと穴を誤魔化せる程度には戻った。あとは風呂に入りたいたい一心で、自分の家まで飛んで帰った。

それから彼がどうなったかは知らない。竹林に行く用事も少ないし。姫には残念だけど手遅れだった、と伝えてある。

けどねえ……。もし正気に返ったら、どんな気分なんだろう。土に埋もれて、もがく事も動く事さえ叶わずに、誰もいない一人きりで、死なないまま……。……。

想像するのも恐ろしくないか？ まあ私は知ったこつちや無いがねえ。

私の話は終わりだ。次は誰だい？

一周目・五話目—二ツ岩 マミゾウ

「ふむう、儂が五話目か。また中途半端な順番に当たったもんじやの。

とりあえず名乗っておくか。二ツ岩マミゾウ。元々は外にいた狸じやから、何か役立てる事があるかも知れぬぞ。勿論見返りはいたたくがな。

逆に、幻想郷に来てからは日が浅いが……ネタが無いわけじやない。例えばこんな話はどうじや？

……少し前に幻想入りした、ある少年の話じや。

……ある日、一人の少年が迷い込んだ。そいつは、年は十くらいじやつたかの。なんでも両親を心中で亡くしたかで、ポツンと人里に現れ、途方に暮れていたらしい。

この辺りは先生の方が詳しいか？ それとももう忘れてしまったかの。ああ、いやすまん。気に障ったなら謝る。

お前さんが分け隔てなく愛情を注いでいたのは知つとる。後に深く悲しんだ事もな。それをどうこう言うつもりは無い。ただ……顛末を知らないじやろう？ ヤツがどうなつたか……。

焦らずとも今から話してやるさ。何も儂はふざけて話すんじゃない。皆に聞いても

らいたいと思つてゐるからこそじゃよ。まあ、この場を借りるのはいささか抵抗があるが……。

怖い話でもある。少なくともいい話ではないな。多少は覚悟しておいてくれ。

……で、その外来人の少年じゃがな。

本当なら外の世界に返してやるべきかも知れん。ただ両親は既に他界、年は二桁やつと、おまけに里の面々に助けられたせい、帰りたいと言ひ出した。

外の世界で過ごしていた彼を受け入れるべきか多少は揉めたが、結局里の夫婦に引き取られる事になった。

幸いその夫婦も実の子のように可愛がり、子供の方もたまに起こしていたホームシックが治まつていった。しばらくしたら寺子屋にも馴染んでいったよ。

最初は出来すぎな風に思えたさ。しかしたまに見かけると、成る程優しい奴だなあ。お年寄りの荷物を持ってやつたり、年下に勉強を教えてやり、果ては友達の万引きを庇つて一緒に叱られたり、角が立たないのも納得な、お人好しともいえる少年じゃつた。

儂も人間の振りをしながら話しかけた事がある。『純粹な心を持つ人間は妖怪によくつけ込まれる』と冗談めかしてな。

けど、奴は動じなかった。それどころかニツコリ笑ってこう言ったんじや。

『純粹なんて言い過ぎですよ。ただ、天国のお母さんとお父さんが見てくれているだけです』

嘘には聞こえなかった。何より当時は初対面だった筈の儂に向けていた笑顔が、愛想笑いでなく本物のそれだったんじや。何とも感心したものさ。

あれは恐らく、その歳まで珍しいくらい純粹無垢に育ったんじやろう。普段の表情や行動のお陰で、子供の内の悪い噂なぞも聞かなかった。

ただ、その性格は良い事ばかりでも無かった。優しさに優しさで返す者ばかりではないという訳さ。程なくして寺子屋で、彼はいじめられるようになった。

通りすがりに小突くのから始まって、教科書を隠されたり、大勢の前で着物を脱がされたり……。段々とエスカレートしていく。

儂だって黙って見ていた訳じゃない。いつだっていじめは陰ながら陰湿に行われるものだ。だから先生だって気づけなかった。本人も義理の両親や周りに迷惑をかけまいと、必死で耐えようとした。

……結局、それが発覚したのは何カ月も経ってからじゃった。最初に気づいたのは

多々良 小傘（たたら こがさ）という、忘れ傘の付喪神。

一応妖怪なんじやが、これがまた人懐っこい奴でな、少年が来る前から人里では見慣れた顔じやつた。少年はいじめのお陰か少々人見知りになっていて、ちようど小傘が心配して声をかけたのじや。

流石に少年も限界に来ていたのか、それとなく尋ねられると呆気なく泣き出した。同情した小傘は話を聞いてやろうと、少年をある場所に連れていったんじや。

それが命蓮寺。寺といっても少々変わっていて、聖 白蓮（ひじり びやくれん）なる尼が『妖怪、人間が共に暮らせるように』と掲げた場所じや。争いを好まない妖怪には人氣があつてな、小傘は寺の墓地に住み着いているし、儂も世話になつてゐる。

そのモットーが少年に役立つかは分らんが、小傘にとって聖はとにかく頼りになる人物だったんじやろう。

聖は少年を笑顔で迎え、経緯を少しづつ、少しづつ聞き出していった。聖の笑顔は正に仏のようで、穏やかな話し振りで心を解きほぐす様には脇で見ていた儂も唸らされた程じや。

溜め込んでいた思いを吐き出して、少年も少しは落ち着いたか目を腫らし鼻を嚙りながらも表情を和らげていく。隣で見ていた小傘も、目を合わせると安心させるように微笑んだ。

聖はそれを好機とみたか、一つ領き語りかける。

『今まで、周囲の皆が人でなしかのように見える事もあつたでしょう。

けどそこで人を恨んでは負けです。先生や身近な人を頼って御覧なさい。それで駄目なら私達を。

きつと同じ人間なのだと、呆気なく思う日が来る筈です』

綺麗事、と言えばそうかもしれない。聖は元々そういう性格だった。当事者の性格次第じゃ『簡単に言うな』と怒り出したかも知れぬ。

だが、少年は多少悩みはしたものの、決意した表情で帰っていった。やはり本心は周囲と仲良くしたかったんじゃないやろう。

……しかし、寺子屋で大人に相談をしたらしい後、彼は浮かない顔でまた寺を訪れた。大体の予想はつくじやろう。嫌がらせなんてのはパツタリと止んだりせん。しつこくグスグスと後を引くものだ。そもそもが条件や理屈の通つたものじゃ無いのだからな。

それを割り切れたらまだ良かったが、彼はまだ子供で、それまでのお上品な良識を裏切られた状態じゃ。自分をオモチャにする連中を撥ねつける力は到底無かった。

それどころか、消えない鬱憤は更に悪い方向に流れ出したのじゃ。

庭掃除をする山彦の挨拶に応じず、小傘の心配にもおざなりに一言二言返すだけ。聖

が聞けば最近は何処でも逆恨みから金銭を要求されたり、暴行を受けたりしたらしい。

しかもその姿で目をつけられたのか寺子屋の外の妖怪までチョツカイをかけたという。本気では無いだろうが『生きてるのが嫌になった』とまで言い出す始末じゃ。ここで上手く吹き込めば妖怪側に引き込めたかもしれないが、流石の聖もそうはしなかつた。ただ今の状態で人間を信じろとだけ言つても中々聞き入れないじやろう。

そこで聖は苦肉の策で、身内の妖怪の話を持ち出した。

『この寺のご本尊の代理を知っていますか?』

『……はい、星さんですよね?』

『彼女、昔は虎だったのです。性格は大人しかつたですが、初めはひよんな事で人を殺してもおかしくない状態でした』

『本当ですか!?!』

こんな風に驚いた所で、聖は真剣な顔で言つた。

『仲良くなる、といえは仲良しこよしな関係を想像するかもしれませんが、しかし、虎と人となると警戒しない訳にはいきませんでした。』

獣と人の間にある壁を何度も思い知らされました。今こうしていられるのは、神格を得て理性を備えてくれたからなんです』

儂には少し意外だった。彼女が内心はともかく遠回しにでも童に『人外との壁』の事を話すとは。しかし聖は儂の驚きや小傘と少年の戸惑いにも構わず話し続ける。

船をいくつも沈めていた水蜜の話。人と妖怪の身で紆余曲折あつて打ち解けた一輪と雲山の話。

実体験を通じて、付き合いや友情、愛情には色んな形があつて、それぞれ適した距離がある、嫌いなら嫌いで、合わないなら合わないで良いんだと、追い詰められた少年の重荷を解こうとした。

当時の歳でどの程度理解できたかは分からなかったが……ともあれそれ以来、彼は再び周囲への態度を変えていく。

ただな……いよいよ問題なのはここからだ。

覚えとるか？ いじめられる姿を見た妖怪がチョツカイをかけたしたと。

そいつがよりにもよつて、あのおたずね者の鬼人 正邪（きじん せいじゃ）だったんじゃない。嘘と嫌がらせと反逆を是とするあの小物妖怪、天邪鬼よ。

これからの話はその天邪鬼と、寺に連れていった小傘の二人が重要になってくる。その中身は無論これから話そうと思つとるが……。

その前に一つ質問じゃ。先生、少年はずばり、小傘と天邪鬼のどちらと関わりを増やしていったと思う？」

※お好きな分岐を選択して下さい。

小傘と関わりを増やす

正邪と関わりを増やす

一周目・五話目—小傘と関わりを増やす

「小傘と関わりを増やす」

……そう。奴はやはり最初に気付いてくれた小傘になびいていった。恋……なのかは知らんが、里でちよくちよく話したりしていると、少年は表情の陰を無くしていったし、何より一人きりの時間が減れば里の子供らも手を出さない。彼も元の明るさを取り戻していった。

そればかりか、小傘は自分が一人の時も、里の子供らにこっそり接触しては件のいじめの事を問いただしていった。

小傘はさつきも言ったが人間たちと付き合いが長い。特に子供は世話を焼かれたりからかったり、なんだかんだ親しみがあつたんじや。彼女に言われて流石にいじめつ子もぼつが悪くなり、次第に一人、また一人と馬鹿馬鹿しい遊びをやめていった。

何故そこまでするか、疑問じやろう？ 儂も聞いた事があつた。すると小傘はこう言つたんじや。

『大した理由なんて無いよ。役に立てるのが嬉しいから』

考えてみれば、あやつは元々傘だった。捨てられて元の持ち主も忘れて妖怪になった

とはいえ、未だ他人に使われる事は喜びだったんじゃないだろう。人間に大した害を及ぼさないのも多分そのせいだ。

一方、小傘の内面はそんな健気なものだったが、肝心の少年はというと、少し困ったものでな。いじめが止み、ようやく平穏な暮らしが戻って来た頃、彼は小傘にこんな事を打ち明けた。

『皆が元に戻ってくれて嬉しいけど、元通りになったら、今度はあの事を忘れられたみたいだ』

早い話が、少年の中で鬱憤は晴れていなかった。問題の解決と溜飲が下がるかどうかは別じゃ。だからといって仕返しをしたなんて聞かなかつたが、ここでまた小傘のお節介が始まった。

『じゃあ、溜め込む位なら良い事してあげようよ!』

良い事、つてのは皮肉では無いぞい。小傘はまず何をしたかというと、里に捨てられていたボロボロの傘を拾うとそれを少年に持たせ、戸惑う彼にこう言った。

『わちきと組んで皆に傘を差してあげるのです。さすれば君の心は慈悲の光が差し込んで虹がかかり晴れやかになってウンタラカンタラ』

『はあ……』

……大体こんな内容じゃったろう。折しもその時期は梅雨に差し掛かっているな。

里ではにわか雨に降られる童の姿が見られる頃じゃ。そんな奴等に毎年小傘は張り切つて傘を貸していたんじゃが、その時は仲間が欲しかったのか少年の人柄を知つていたからなのか、彼に真似事をさせようとした。

それから少年の善行が始まった。土砂降りの中をお年寄りに、年下の子供に、妖精に傘を差してしていった。

良い事をするとう気持ちが良いというが、彼の場合はどうじやつたらうなあ。いや、儂だつて見返りを欲しがるのが当然なんて、卑しい考えは持つとらん。ただ、相手によつちや葛藤もやむ無しだったんじゃよ。

元いじめつ子さ。少年にとつてはしこりが残る相手。放つておいても風邪を引く程度の災難に手を貸すべきか、そこでどうしても二の足を踏んだ。

しかし隣には小傘がいる。目の前で見過ごす訳にはいかず、少年は結局何人ものいじめつ子に傘を差し続けた。

ところが、そうしてもらつたいいじめつ子たちはどうしたか。勿論最初は雨避けが出来るわけで、感謝した。二人きりではなく小傘があるので、万が一またいじめてやろうなんて輩も居なかつたらしい。これは小傘の目論見通りだった。このまま関係修復のきつかけになれば、そんな風に考えていたんじゃ。

だが、物事そう上手くはいかない。第三者がいる状況では、少年も怒つたりは出来な

い訳で。いじめっ子はそこにつけ込んで”謝罪”を شدした。

例えば、金を強引に取り上げた事があれば

『この前借りたお金、本当に返さなくて良いの？ いやー悪い、氣いつけるわー』

無理やり女子便所に押し込んだ事があれば、

『お前何回も女のトイレ入ったよなー。すっかり有名になつちまつたぜ、ごめんごめん』

蜂の巣に向かって背中を押された事があれば、

『そういえば虫に刺された傷、大丈夫？ お前自分より先に俺達を追っ払うんだもん。ビックリしたよ』

最初は小傘のいる安心からいじめっ子も取り敢えず謝った事にしたかつたんじやろう。少年は愛想笑いで誤魔化したのが、いじめっ子が帰宅して二人きりになった所で、隣で苦笑いする小傘に苛立ちを覚える。『何も分かつちやいない癖に』とな。

そして、何人目かのいじめっ子が何を思ったか、この時の少年の反応を『面白い』と言つて仲間内で広めていった。そして他の連中もやがて面白半分二人に会おうとしたのだしたのじゃ。中には明らかに傘を持たず、また何度も待ち構えた奴までいたそうだ。

少年はそんな奴等にも、分け隔てなく傘を差し出した。ヘラヘラ笑いながら親友面し、小傘にその様を見せつける奴等に、何度も何度も

そんな事を繰り返す内に少年も変わっていき、終いにはあの天邪鬼の正邪にさえ同じ事が出来るようになった。

奴はこう漏らしたよ、

『文字通り』皆の役に立つ、まるで聖人だよ。気色悪い』

まあ、天邪鬼の言だから真に受けるのもなんだが、確かに少年の背景を知っていれば我が儘や選り好みもやむ無しじやろうに。文句の一つも言わないのをやがて、小傘も気にするようになっていった。

……そして、梅雨が明ける頃。

小傘が青い顔をして少年と一緒に寺に飛び込んできた。

何事かと聞くと、小傘はこう言ったんじや。

『この子、皆の名前を忘れだした』

意味が分からず確かめてみると、元いた世界での話を振ると、両親の名に覚えが無いと言う。耳を疑って今度は義理の両親、寺子屋の面々、一人一人の事を尋ねたが、同じふざけているのでは無く、本当に忘れている。小傘が呆然としてみると、少年は笑って言った。『貴女は、どなたでしたっけ?』と。

小傘は話す内に涙ぐみはじめ、少年は相変わらず何を言っているのか分からない様子でオロオロしている。儂もどうしたらえか分からず、何か変わった事は無いかと少年を

観察した。

すると一つだけ妙な事があつた。外はからりと晴れているのに、少年は例のボロ傘を持ち歩いていたんじや。

『……のお前さん、その傘どうしたんじやい』

なるべく平静を装つて聞いてみる。すると彼はいつかのように屈託なく笑つてこう言つた。

『ああ、これは雨に濡れる人がいた時の為に』

しかし、もう雨などあまり降らぬじやろうし、特にお前さんが持ち歩いてまで備えることないじやないか。そう言つたら、奴はこう返したんじや。

『でも、たまにでも役に立てたら嬉しいんです。僕にはどうせ誰も同じですし』

それを聞いて、儂は思わず小傘を見た。そういえば彼女も元の持ち主などすっかり忘れて、何だかんだ役に立ちたがつていたつけ……。

……それから、少年は方々にあれこれ理由をつけて寺で預かる事になったんじや。元の記憶を取り戻すまで……といつても、あまり芳しくないがの。

以前、小傘が焼く世話に『理由なんか無い』と言ったのを覚えとるか？ あれは恐らく、本当に理由なんぞ要らなかつたんじゃないやろう。誰であろうとな。

彼が何故ああなつてしまったか、ボロ傘に取り憑かれたあの考えようはあるが、儂は……『使われる』のが使命だった妖怪と人間との違いを意識しなかつたツケが回つてきたように思えてならんのだ。

……まあ、どう捉えるかは任せるさ。先生も気が向いたら寺に来ると良い。割りと本格的に知り合いの手を借りたい状況まで来ているからな。

儂の話はお仕舞いじゃ。次はどなたかな？」

一周目・五話目―正邪と関わりを増やす

「正邪と関わりを増やす」

「ほう、正邪と関わりを増やす、か？　中々穿った見方をするな。……だが、それが正解じゃ。彼は里の周辺をこつそりうろついたりして、正邪に会おうとしたのだ。」

「何故そんな事をしたか？　まあ、儂にはその時の心情なんて想像するしかないが、天邪鬼は里でもろくでもない奴として有名じゃったから、嫌われ者を不憫に思ったんじゃないか。聖の話聞いて、妖怪と理解し合う事に憧れたというか。」

「あるいは、ある種の自信をつけようとしたのか。天邪鬼と友達になれたら、寺子屋での悩みなんで屁でもない、と。」

「とにかくそうこうしているうちに、つけ回されているのを察してか正邪の方から少年の前に現れた。弱いとはいえ妖怪と二人きりになった訳だが、少年は迷わず話しかける。」

『今までの事を水に流し、仲良くしたい』と。

「当然最初は怪訝な顔をされた。向こうからしたら好かれる道理なんて欠片も無かつたんだからね。それでも少年がいじめられるままの関係は嫌だと突っ張るものだから、

正邪も少しずつ興味を引かれていく。

まあ、興味といつてもただの好奇心か何か知らないが、段々と聞き入ってきた正邪は、彼にこう持ちかけた。

『じゃあ、ちよつと私に付き合ってくれよ』

ちよつと強引な口調でニヤリと笑う正邪。少年は少しだけ警戒しながら『何をするの？』と尋ねる。

すると今度は声を潜め、こう囁く。

『なあに、簡単な事さ。里の連中に嫌がらせをするんだ』

それを聞いて少年は眉をひそめたが、正邪はその内心を見透かすように瞳をジツと見据える。

『まあ聞いてくれよ。私は天邪鬼だぜ？ 巫女や強い妖怪は勿論、妖精や人間にまで馬

鹿にされてきたんだ。

憐れに思っておくれでないかい？』

『そ、そんな……』

目を逸らした少年じゃったが、正邪の誘いには幾らか動かされるものがあつた。特に何もした覚えの無い自分を執拗にからかいオモチャにする寺子屋の皆に、正直腹が立つていた。

不意に顎を掴まれ、無理やり正邪の方を向かされる。その表情はまるで誘惑する蛇。ぐいと顔を近づけ、鼻先に触れそうな距離で舌を出す。

『やられっ放しじゃ悔しいんだよ。お前にも分かるだろ？ 覚えてるぜ、お前のベソかいた面を』

他でもない正邪がつけた傷を抉られて、少年はムツと彼女を見た。その視線に正邪は一步下がりが、わざとらしく肩をすくめる。

『そう睨むなよ。悪いとは思ってる。だからお前さんの仕返しの手伝いもしたいのさ』
『仕返し……』

『そうさ。私もどうせなら、ムカつく奴を狙おうと思ってるんだ』

正邪への嫌悪感は消えない。じゃが、仕返しという言葉に押し殺していた悔しさが頭をもたげる。小傘や聖は優しいけれど、いや、じゃからこそ同じ事をやり返せだなんて言わんじやろう。

嫌いな連中に少しくらいなら……。口車に乗るまいとしていた心が段々と怒りに傾いてゆく。正邪はそこに畳み掛けるようにペコペコと頭を下げた。

『頼むよ！ 勿論冗談で済む程度にセーブするからさ！ 悪いことは無いだろ!』

少年はその勢いにうろたえた。が、大げさとはいえ哀れっぽく頼み込む姿には否応なしに気が引ける。見かけだけは少女の天邪鬼に目をやって、少年は数秒間巡視した後、

無言で首を縦に振っていた。

『本当か！ ありがとう。一人くらい協力者が欲しかったんだ』

両手を持つてブンブン振る正邪の、八重歯の覗く笑顔を見ながら少年は嬉しいような気味悪いような、複雑な気持ちだったらしい。

それから少年と正邪で組んでの仕返し、もとい悪戯の日々が始まった。具体的には嫌いな奴の机の中に蛙を入れたり、水筒の飲み口にワサビを塗ったり、梅雨の時期にわざわざ屋根に穴を開け、嫌いな奴の上だけ雨漏りするようにしたり……。

どれも後から正邪が『自分達でやった』とバラしたんじやが、あの少年にはその方が良かったらしい。悪事を心の中で笑うより、後から謝る方が結局性根に合っていたんじやろう。

正邪は楽しそうだとしても、彼はそれで何の得があるのか。小傘なんかは気になって聞いてみたらしい。

すると、彼は苦笑いしながら、こう返してきた。

『元は向こうがやってきたし……。それに正邪ちゃんも悪戯程度に抑えてくれますから』

しかし、いくら正邪が喜ぼうが、アンタはむしろ慣れない悪事で苦しんじやないか。そう小傘は食い下がったが、少年は首を横に振るばかりじやった。

『大丈夫ですよ、相手もやり方も選んでいますし。第一それで妖怪の女の子と上手くやれるんですもの』

そう言つて彼は寂しく笑つたが、小傘には本音を隠しているように思えてならなかつたらしい。

……そしてそんな事が一ヶ月程続いた後、ついに決定的な出来事が起きる。

彼が知つたのは母親の口からだつた。

『ねえ、最近アンタ天邪鬼と会つてるんだつて?』

母親は夕食の席で渋い顔をして聞いてきた。少年はまた悪い妖怪のイメージで判断していると早合点して、胸を張つて言い返した。

『うん! あの子そんなに悪い子じゃ無いもん』

少年は母親の目を真つ直ぐ見た。親心で小言を言ってくるんだろう、そう考えていたがしかし、彼女は心配そうに眉尻を下げ、静かに箸を置く。

『そうは言うけどねえ……』

思つた以上に暗く嘆き果てたトーン。何か不味い事言つたかと少年が眉をしかめてみると、母親はちやぶ台に目を落として語りだした。

『あの天邪鬼、方々で酷い事をして回っているらしいのよ。石をいきなり投げつけたり、往来で服をはぎ取つたり、最近では散歩中の犬を蹴飛ばしたりさ……』

『な、何だよそれ!』

少年は思わず立ち上がった。どれもこれも、共謀していた悪さの中に全く覚えの無いものばかりじゃったからじゃ。

しかし、母親はため息をついて顔を上げ、言う。

『しらなかつたのかい? 里では噂になつてるよ』

冷静な口調で返されて、少年は呆然と突つ立っていた。頭の隅で何が原因なんだと問いかける。全部誤解だという線は薄いだろう。ならば、天邪鬼が知らない所でやったのか……。

あり得ない話ではない。彼女がそこまで信用できる子には、いや、疑いだすと途端にとんでもないウソつきに思えてくる。

しかし、でも、まさか……

『……それで、信じられない話だけどね……』

母親が恐る恐る言いかける間にも、少年はとつ散らかつた頭でグルグルと自問自答を続けている。すると、不意に玄関の戸を叩く音がした。

既に日も沈んでいるのに、一体誰だろう。首を傾げながら母親は腰を上げ、愛想笑いに切り替えて扉を開ける。

外は雨が降っていたらしく、開けた途端にザアザアと叩くような雨音が飛び込んでき

た。その音に肩が跳ねて振り向くと、外にはずぶ濡れの女の子と、隣には父親らしき中年の男が二人立っていた。女の子はしくしく泣いて、中年は心なしか自分を睨んでいる。

少年は女の子を知っていた。寺子屋でいじめに遭う中、参加しないでいた数少ない生徒じやった。ふと懐かしい思い出に気を取られていると、中年の怒鳴り声が響いた。

『もう勘弁出来ないぞ！ あの天邪鬼、娘の傘を取り上げやがった!!』

天邪鬼、というワードに少年の視線が声の主に向く。すると目尻を吊り上げ真っ赤に怒った中年と視線がぶつかった。

中年は少年を見るなりシワを深くして、無言で怒りの雰囲気だけを伝えてくる。その表情に怯えながら、少年は震える声で尋ねた。

『あの……』

『あ?』

『天邪鬼……って正邪ちゃん、ですか?』

消え入りそうな疑問を聞くと、中年は大きさにハッ! と鼻で笑う。そして皮肉のこもった笑みを浮かべながら低い声で答えた。

『とぼけるんじゃない。奴は、お前に頼まれた』って言うてんだぞ』

『え……ええ!!』

少年の額からドツと汗が吹き出て、オロオロと中年、女の子、母親へと忙しなく視線を泳がせる。さすがのように母親を見つめると、言いにくそうに母が口を開いた。

『正邪はね、悪さをするとは決まってあなたの仇だつて言うのよ。いじめをして、見過ごした罪だつて』

『……………』

『ほら、最近一緒にいるつて言うから、まさかと思つて……』

少年はそこまで聞いて、草履を引っかけて飛び出した。母が呼び止め、中年が怒鳴る声も無視して、どしや降りの中を傘も差さずに、夢中で里の外へと駆けて……………」

「……………待ってくれ」

声を絞り出して話を遮つた。マミゾウがつまらなそうにこちらを見る。しかし周りの連中も続きが気になる風ではなく、気まずそうに顔を歪め、あるいは私の青ざめているであろう面を興味深く窺っている。

「その話……………最後はどうなる?」

目だけを上げて聞いてみた。マミゾウはピクリと眉を震わせ、ため息混じりに肩をすくめる。

「それを先に言つてどうする? これからクライマックスじゃと言うに」

興を削ぐな、そう言外に含まれて思わず手に力が入った。私に取つては教え子の話な

のだ。それが良からぬ方向に転ぶのを聞かされ、平静で居ろというのか。

「……おい、言つとくが、こいつは寺子屋で話す怪談のネタ集めだぞ」

妹紅が苦虫を噛み潰したような顔で言った。対してマミゾウは私から目を離さず、こう言い放つ。

「いいや、聞いてもらう。こんな機会は滅多にない。人妖の集うこの場こそ、『問う』に相応しい」

マミゾウの目付きが鋭くなる。そうか、彼女の話は決して悪ふざけや悪趣味ではない。聞いてほしいと思つてやつている。

「無茶言うな、お前な……!」

「妹紅、よせ」

立ち上がるうとする妹紅を制し、ゆっくり周囲を見渡す。汗がまつ毛にポトリと落ちた。

「私は良い……皆は大丈夫か?」

無理しているように見えたのか最初は戸惑う者ばかりだったが、私が笑つて見せると遠慮がちに一人、また一人と頷く。

「……すまない、邪魔してしまつたな」

腹を決め、どざりと腰を下ろす。マミゾウは今更ばつが悪そうに脇を覗んだが、一つ

頷くとまた話し出した

「それで……なんじやったか。そう、少年はかつて正邪に会った里の外へと向かった。雨のせいで土はぬかるみ、風で木々が煩く振り回され、里のそばの河はゴウゴウと今にも溢れ出しそうに勢いを増している。

そこに正邪は立っていた。例の奪ったであろう傘を広げて。

『正邪ちゃん!』

呼び掛けると彼女は首だけ振り向いた。会った時はいかにも楽しそうだったが、今度は鬱陶しそうに目を鋭く光らせ、雨音に混じり舌打ちが聞こえる。

『何か用か?』

ぶつきらぼうに言い放つ正邪。少年は一瞬怯んだが、恐る恐る問いかける。

『その傘……どうしたの?』

正邪は一瞬頭上を睨み、『取り上げたんだよ』と吐き捨て、続けざまにこう言った。

『お前の組の奴さ。恨んでいるだろ?』

舌を出して笑う正邪。しかし少年は弾かれたように口を開き、怒りを露にした。

『あの子は見てただけだよ! ずぶ濡れで泣いてたんだ。どうしてそんな……』

詰め寄ろうとする少年を、正邪は傘で追い払った。

『大して変わり無いだろう。うるせえなあ』

『なっ……』

馬鹿にしたように呟く正邪に、少年はどうとう爆発した。

『今まで、相手は選んでいたじゃないか！ そうやって、一緒にやっていこうって、やり方だって……』

声に嗚咽が混じる。間抜けな音が出た。

『どうして……どうして、あんな事を……』

母親の言っていた、隠されていた悪事の数々を思い出し、少年は裏切られた気持ちで一杯じゃった。息を荒らげる彼に向けて、正邪はやつと向き直る。

『今更何て事ないだろ？ どうせ今まで散々やり返したじゃねえか』

『あんな事まで頼んでないよ！ 僕の為だつて言う訳!?! ねえ！』

いつまでも事も無げに返す正邪に、少年は苛立ちと悲しさが募っていく。とうとう少年は地面にへたり込んで、涙声で叫んだ。

『ねえ……何かあつたら言つてよ、皆に恨みでもあつたの？ それとも僕に？ ねえ、どうして……』

段々と弱々しくなる訴え。地面に目を落としていると、正邪が近づいてくる足音がした。顔を上げる前に、声が降ってくる。忌々しげに。

『アンタの為、ねえ……』

気だるい余韻が残る。少年は本音を聞きたいと、耳に神経を集中させる。

じゃが、次の瞬間聞こえてきたのは、信じられない言葉じやった。

”君のいじめは関係ありません。陥れて遊んだだけです”。

……そう答えりや満足か？」

少年はハッと顔を上げて、ポカンとした顔で正邪を見た。ふざけていると思った。いや、そう信じた。しかし目の前の彼女は慥然として見下ろすばかりで、口も開かず、表情一つ変えない。

『何言ってるんだよ……そんな、嘘でしょ？』

うわごとのように呟く少年。しかし正邪はさぞ軽蔑するような、長い長いため息をついた。

『やっぱり人間だな。あれこれややこしい理由をつけたがる。理由をつけて安心したがるんだ……』

意味が分からず呆然とする少年。正邪は躊躇いなくその顔に蹴りを入れた。

『あつぐー！』

くぐもった悲鳴をあげ、少年は地面に倒れこんだ。濁った水溜まりが背中一面に張り付き、その中をもがいていると、正邪が去っていく背中が見えた。

『待って！……どうして、こんな……』

『また』 どうして』か。一生聞いてろや』

その台詞を最後に、正邪の背中では遠くなっていた。未だ傷心の彼を残して……。

それから、彼がどうなったか？

偶然通りかかった儂に全てをぶちまけて、河に身を投げてしまったよ。止める暇も無かった。すぐに泥水に流されて消えてしまったんじや。

真実を今まで黙っていた理由はな……。儂の言がどこまで信用されるか心配だったのが、まず一つ。

そしてもう一つ。これこそが儂の聞いてもらいたかった事なんじやが……。

これは、聞く相手によつては幻想郷の在りかたそのものへの疑問になりかねん。だから今まで黙っていた。

少し、話すと長くなるが………

『妖怪』とはそもそも何か、考えた事はあるか？

儂の以前いた現代ではな、大した妖怪はいない。代わりに妖怪のルーツが古い時代の象徴として語られる。

しばしば、ネガティブなものとしてな。

例えば、狐憑は精神を病んだ人間、一本だたらは目や足を酷使した人間、天邪鬼は余所者や嘘つきの嫌われ者、海の向こうじゃ巫人のモデルは異人種だなんて話もある。

昔は知らない事だらけで、人間や何でもないモノを妖怪扱いする事も多かった。分からぬ事は恐怖の元じゃ。

だがそれらは時代と共に取り払われていく……。一面的に見れば無知と偏見が消え去っていった。人間が病氣、障がい、他の人種、或いは周りの自然に理解を深めるにつれ、怖いと感じるモノは減っていった。

殊に、『自分をひたすら害する存在』なんてのはお笑い草じゃ。そんなものは擦り切れた人間の典型的な妄想さ。

……『現代では』、な。

幻想郷では違う。楽しいばかりじゃない。夢のようなものばかりじゃない。

あの小僧は妖怪が何なのか、最期まで分かっていたいかなかったんじやろう。だから早々にくたばりおった。もつとも、その方が幸せだったかも知れんが……。

いや、儂も現代が丸つきり幸せな世界だなんて言う気はない。今までこう話しておいてなんじゃが……。

最後に、正邪に向けて恨み言を吐く奴の顔は、それこそ妖怪みたいじゃった。いくら

時代が変わろうが、切り離せない何かはあるのだろうな。

……濃の話は終わりじゃ。胸くそ悪ければ忘れてくれい」

一周目・六話目―藤原妹紅

「お、もう六つ目か。アイツ、結局来ないのかなあ……。

ああ、すまん、こっちの話だ。

で……んく、ちよつと話す内容が被りそうで心配してたんだが、この時間まで来なかりや心配要らなそうだな。

ちよつと、永遠亭であつた話をしようか。

まず、永遠亭って何かと言うとな、あの迷いの竹林の奥にある屋敷で、沢山の兎と、平安から生きている不死のかぐや姫、後は怪しい奴だけど、何でも出来そうな頭の良い薬師がいる。

それだけ聞いたら訳の分からん場所だが、その薬師は付き合いの一環で人々に薬を売っていてな、これがよく効くんだ。目論見通り信用を築いて、今では病人や怪我人を治したり、頼りになる病院みたいな立ち位置になっている。

実は私も竹林の中に住んでいて、割と近所なんだ。その縁で永遠亭に用がある奴を案内したりしてる。本当は、屋敷のかぐや姫と物騒な因縁もあるんだが……。

それは今回どうでも良い。私が話したいのは、以前案内した一人の男の話だ。

私の住む近くは『迷いの竹林』の名の通り、幻想郷の連中も迷いやすくてな、私も人間妖怪問わず色々会って来たんだが、ポツンと立っていた件の男は事情が違った。

見たとこ三十そこらの彼は、道だけじゃなく、迷いの竹林自体、更にその周りの景色も全く覚えが無いと言うんだ。その表情は目を丸くして困惑そのもの。よく見たら男の服装なんかは私の方が覚えが無かった。

ははあ、外から来た外来人だな、と分かって、とりあえず相手の事を知っておこうと名前を聞いてみた。

すると分からないっていうんだ。変に思っただけ、元の住所、仕事なんかも尋ねてみたが、同じく首を横に振るだけ。

困った事に、外での今までの記憶も無いらしい。幻想入りしちまった上に記憶喪失。こうなると厄介だったが、見つけた以上放つとけば男は死ぬか、竹林から出られないだろう。やることは山積みだが、まずは記憶からだど永遠亭に向かった訳だ。薬師ならそういうのも詳しいかと思っただけな。

未だ右も左も分からない男に付いて来いと言っただけ言って歩き出した。自己紹介もしない私を最初は怪しんでいたが、結局は置き去りが怖くて駆け寄って来た。

その怯えっぷりは道中も健在でね。藪から兎が飛び出したり、落とし穴に嵌まったり、果ては風で竹林がざわめくだけでも肩を震わせていた。

言っちゃ悪いが、昼間に見ると滑稽だったなあ。いや、自身も周りも知らない事だらけだから、心細いのは当たり前なだけだよ。いや、自身も周りも知らない事だら

え？ 幻想郷の事を教えてあげなかったのか？ ああ、その辺は薬師に丸投げしたかったんだよ。どうせ永遠亭に行くんだから。

そうやっておっかなびっくりな彼を引き連れて十数分。見えてきたドでかい屋敷にあんぐり口を開ける男を尻目に、さつさと戸口で事情を話して中に連れていった。中にいる兎が二人にかぐや姫や薬師の出で立ちにも驚いてたけど、もう無視。

で、もう少し相手の状況に気を遣いなさいと怒られてから、あれこれ確かめるとやっぱり記憶喪失だとの見立てだった。知能や会話は問題ないけど、そのまま外に放り出せばトラブルを起こしかねないし、長くなっても幻想郷で治すしかないらしい。

しかし人里に一から住み処や仕事を用意するのも骨だからって、そいつはそのまま永遠亭に住み込む事になった。いちいち通う手間が省けるし、どうせなら小間使いでもしてもらおうってな。

それからちよくちよく私も様子を見に行つてたが、しばらくは何も起こらなかつた。薬学とか専門的な事はともかく、掃除や洗濯やら、家事なら一通り問題なかつたからね。そのうち永遠亭に住んでからの日々も長くなつて、訪れてくる患者たちも男を従業員のように認知していった。記憶はなかなか戻らなかつたけど、大きなトラブルもなく順調に過ごしていた。

表向きは、な。身内の中には、実はあまり良く思つていなかった奴もいたんだ。

例えば、あの屋敷に鈴仙・優曇華院・イナバ、あだ名はウドンゲつて妖怪兎がいるんだが、そいつが永遠亭で作つた薬を里で売る役目をしていた。

それであちこちの家を廻る訳だが、中には定期的に決まつた家に売らなきやいけなかつた。そういう家は大抵、病氣や怪我が重く、治療に長い時間がかつたりあるいは一生モノの持病があつたりで、永遠亭までは行けないけれどそれでも薬師の薬に頼らざるを得ない、そんな人々が多かつたんだ。

後は数は少ないけど、心を病んだ人とか。嫌な話だが、そういうのは家族が外に出しながらない。それに迷いの竹林ではぐれちまつたら一大事だから、訪問して効く薬を渡すんだ。

あんまり興奮した時などは、薬以上の荒療治もする。これはウドンゲならではの手なんだが、奴の瞳には精神の波長？ とかいうのを見透かして操る力があつて、それで相

手を大人しくさせられるらしい。逆に不安定にしたりも出来るらしいが、奇妙な能力だ。

まあそんな風にして、彼女は使いに出されてはへとへとになって帰る事が多かった。仕事とはいえアイツも聖人じゃなし、むしろ人間と深く関わるのは避けるタイプだったから、永遠亭に帰るとしよつちゆう愚痴を溢していた。私が行ってかち合うと、愛想なく出迎えられたもんさ。

そこで例の男が登場する訳だ。立場が似ていて話しやすかったんだろが、ウドンゲが苦労した患者の事を話す際、決まって訳知り顔でこう言っていた。

『そういう人らの相手は苦労しますよねえ、ウドンゲさんも疲れませんか？ 猿みたいな連中の相手をさせられて』

確かに苦労はしたし、仕事だと割り切らなきゃやってられない部分もある。けど参っている横でわざわざそんな言い方する事ないじゃないか。そう思うのを堪えて相づちを返すと、男はますます饒舌になる。

『いや実際、ウドンゲさん凄いですよ。相手は何も出来ない奴か、何するか分かんない奴等ですもん』

『……………』

『安い値で売っているのに、更に苦労させて。たまにはぶん殴る位してもバチ当たりま

せんよ。

その方が良いクスリですつて』

もしかしたら勞うつもりだったのかもしれない。それでも彼の良い様はどうも患者を軽んじていた。普通の生活に支障をきたす人々を苦しむ人間としてではなく、どこか厄介な、不気味な存在としてみるような……。

幻想入りしてから直接そういう人を見た事はない筈なんだが、所々頭に残っていたんだろうな。その知識も吹っ飛んでくれたら良かったのに。

ウドンゲは適当にあしらっていたが、何度も続くと流石に鬱陶しくなつて、いつしか早く記憶を取り戻せと念じるようになった。さっさと現代に行つちまえとね。

けど、何事もなくとはいかなかつたんだ。

ある日、二人連れの客が永遠亭を訪れた。私が案内したからよく覚えてる。それだけでは何て事ないんだが、男が偶然その二人を見て、目を丸くした。

その二人は手を繋いだカップルだったんだが、両方男だった。異性を恋愛対象にしない、いわゆるゲイって奴さ。付き合う上で病氣のリスクとか里での目とか色々あったから、永遠亭の薬師に世話になつていたんだ。

私は何度も会つて慣れていたが、初めて見た男は二、三步後退りして、何も言わないにしろ露骨に顔を歪ませて嫌悪の色を露にした。

私は、こりやまずいとカップルを薬師の部屋へと追いやった。けど二人は男の態度から覚えのあるものを察して、すぐそこ去っていく。

その背中が完全に見えなくなった頃、男が慌てて私に耳打ちしてきた。

『も、妹紅さん！ 何ですか今の！』

男の口調に驚きと恐れと好奇心と、キワモノ扱いする時の感情が皆こもっていた。そんな騒ぐ事かと閉口したよ。大体「何ですか」とは何だ。人をモノ扱いしやがって。

普段の言動がちらついてウンザリしたが、我慢して事情を話してやった。すると今度は『ええ〜……』と大袈裟に肩を竦めてひきつった笑みを浮かべた。

『そういう人からも来るんですね。ビックリしちゃった』

『お前な、やつちやったのはともかく、この先あんな態度は……』

『で、でも！』

諫められかけた事に気づいてないのか、男はまくし立てた。

『妹紅さんとかは平気なんですか？ すぐそばで男同士がイチャイチャしてんですよ！』

『何ともねえ、何回も案内してる』

『えっ……』

私の返事に今度は絶句しました。今度は何だと思つたら、また元の調子で詰め寄って

くる。

『つて事は、何度もここに来るんですか?』

『……うん、だろうな』

事実、睦みの対策なんてのはパツタリ止めるもんじやないし、あの二人は特段病気を治している訳じゃ無かったからな。

だけど、男はやたらと長い溜め息をついた。

『マジすか……。俺、男なんです……。』

『だったら何だよ』

『分かるでしょう! 俺いま、竹林で妖怪に会った時ばりにビビってますよ!』

分かるでしょう、つて、何も分からん。目の前でヘラヘラする男がすこぶる失礼だつて事以外はな。大体、男つてだけで怖がらなきやいかんのなら、里の連中はどうなるんだ。何人の男が住んでいると思つてやがる。

もう聞いているのがアホらしくて、さっさと退散しようとした。

その時、男の後ろでゆらりと影が動く。

『ウドンゲさんが治したり出来ないかなー、あの人の魅力にかかれば、女の子が好きにも……ん?』

男は独り言の途中で背中の中の気配に気付いた。振り返ると、そこには独り言の中の当

人、ウドンゲが立っていたんだ。

『あ、どうしました?』

男は酷い事を言っていた自覚もないのか、あっけらかんとして首を傾げた。対してウドンゲは無表情で目を閉じて伏せ、『ねえ』とだけ呼び掛ける。

『……へ?』

その雰囲気に男は一瞬たじろいだ。ウドンゲは少しずつ、少しずつ目を開けながら、平坦な声で言った。

『あなたの性根、治してあげましょうか?』

『え?』

『あ』

その瞬間、ウドンゲが何する気か感づいて止めようとした。けど彼女はそれよりも早く、自身の目を開いた。

精神の波長を操る瞳。時には発狂させる事も出来る狂気の瞳が彼を見据える。その真紅の兎の瞳を前に、男は石になったかのように、立ったまま硬直した。

しばらく、部屋の中から音が消えていた。男以外も、私は歩を止めたまま動けず、ウドンゲは身動き一つしない。

何だ? これから男はどうなる?

頭の中と視線だけが忙しく、ウドンゲと男へ交互に向く。しばらくしてウドンゲが目を逸らし、ふん、と馬鹿にするように鼻を鳴らした直後。

男が突如悲鳴をあげた。

『ギャアアアアーツ!!』

金切り声、数分ぶりの音に思わず耳を塞いだ。見ると男は後ろ向きに頭からぶつ倒れて、手足がそれぞれ塩をかけられたナメクジみたいに痙攣しのたうち回り、口からはアアアアと声にならない声をあげている。

『おい、何をした!?!』

我に返って私が叫ぶと、ウドンゲはスタスタと男から離れ、事も無げに言った。

『こいつの精神に巢食う恐怖を増幅させた。こいつは想像の中の、”おつかないゲイ”に犯されるのよ』

そう言われてウドンゲの視線の先を見ると、男は床に突つ伏してくぐもった声をあげながら、私達に向けた尻を震わせている。手足は指先まで突つ張らせてみるみる汗が浮かび、口からは零れたヨダレが飛び散って、床に煌めく滴を落としている。

あんまり苦しそうな様に、私の頭にふとある仮説が思い浮かんだ。男は記憶喪失だったけれど、もしかしたらゲイに嫌な思いでもした記憶が、うつすら残っていたんじゃないか。具体的な記憶が無いだけで、彼の嫌悪感にも理由があつたのかもしれない。

それから、私は永遠亭であの男を話題に出さない事にしてる。向こうも教えちゃくれないからな。今はどうしているのか、分かりやしない。

アイツは良い奴って訳でも無かったし、運が悪かったんだと諦めているよ。ただ……里とか見ているとな、” たまたま ” あんな目にあつたのは正直気の毒だと思う。それだけだ。お前らも気を付けろよ。

……七人目は、とうとう来なかつたな」

一周目・藤原妹紅END—『須臾の夢』

……妹紅の六話目が終わった。未だに妹紅が誘った七人目は姿を現さない。

来るかは分からない、と言われた手前話し終えた面々を帰さず待たせている訳だが……

皆、役目を終えたらドライなものだ。ある者はコックリコックリと船を漕ぎ、ある者は暇そうに畳を弄くり、隣の妹紅などは脚を伸ばしてプラプラと遊ばせている。

無言で膝を叩くと、面倒臭そうに脚を組む。横顔を見上げると微かに口を尖らせていた。お前は寺子屋で叱られた生徒か。

呆れながら向き直ると視界の端でまた妙な物が見えた。目を凝らすとمامィゾウが懐からコツソリと煙管を取り出している。「おい」と声を出すと注意するより早く赤蛮奇の手が伸びた。

二人の視線がぶつかり合う。鬱陶しそうに煙管を遠ざけるمامィゾウだったが、素早く赤蛮奇の手が追いかける。互いの肩から下の稼働域のみでの短い攻防の末、赤蛮奇が器用に指先で煙管を掠め取った。

が、勢い余つて二人の間で行儀よく座っていた妖夢に肘が激突する。
「いだっ!」

この瞬間、向かいの燐は噴き出し、メディスンは鼻から馬鹿にしたように息を漏らす。
そして。

「あ」

その拍子に赤蛮奇の手から煙管がすっぽ抜け、クルクルと放物線を描きながら私の頭上を通り過ぎ、襖に向けて飛んでいく。

それとほぼ同時に、襖がガラリと開いた。

「お邪魔するよ………いてっ!」

小さく硬質な音と、すつとんきような幼女の声が響く。真後ろを振り返ると、ピンクのワンピースを着て頭に二対の白い何かを乗せた女の子が、黒い癖毛の間から覗く赤く腫れた額を抑えながら私達を恨めしそうに睨んでいた。

彼女には見覚えがあった。特に頭の白いのはよく見ると頭から生えたものでフワフワの毛が伸び、位置からしても兎の耳にそっくりだ。

誰だっけか。背丈といいふてぶてしい面相といい、名前以外は思い出せるのだが……
「てゐ?」

妹紅が意外そうな声をあげた。そうだ、因幡てゐ。あの永遠亭の兎を纏めるリーダー

で、幼い見た目だが何千、何億歳とも言われる長寿の妖怪である。

彼女が妹紅の言っていた七人目なのだろうか。

そう尋ねようとしたが、当の本人は足下の煙管を蹴り飛ばすと、ドスドスと足音を立てて私と妹紅の間に割り込み、座布団も敷かず腰を下ろす。

横目に見る表情はあからさまな膨れっ面で、現れて早々の一撃が気分を害したのは明らかだった。彼女は口を尖らせたまま全員を睨み、ぼそりと呟く。

「とんだ歓迎だね」

険しい目付きの向く先には、車座の真ん中に未だ転がる煙管があつた。元はといえばマミゾウのこれがぶつかつたのだ。

「おや、その煙管は誰のかいのう」

「……………」

マミゾウが白々しく首を傾げた。一同が白けた視線を送る中、私は慌てて作り笑顔で問う。

「えーと、お前が七人目で良いのか？」

てゐがジロリと振り向いた。私の気を遣う様が見えたかは知らないが、瞳の鋭さは微かに緩む。

「ああ、姫様に頼まれてね。待たせちゃつたがよろしく頼むよ」

「……アイツ、結局身内に押し付けやがったな」

妹紅がやれやれと呟く。姫様、という言葉から察するに妹紅が誘っていたのは永遠亭の主人、蓬萊山 輝夜（ほうらいさん かぐや）だろう。幻想郷住民のご多分に漏れず気紛れで、予定をドタキャンしないでだけマシと言えるだろう。もつとも、他人だから言える事なのだが。

「それはそうと、今は何してたんだい？」

気を取り直したてゐるが皆に問いかけると、まずは妖夢が手を挙げた。

「ついさつき妹紅さんが六話目を話してくれまして。あなたで最後です」

「ふむ、じゃああの話にしよっか」

「いよう、待つてました！」

燐の拍手にてゐるは得意気に頷き、口を開く。

しかし、『永遠亭に来たある男の話だ』と言い出した所で、今度はマミゾウが待つてをかけた。

「なんだい、うるさいね」

「いや、同じ話を二度も聞きたくないわい」

マミゾウがかつたるそうに肩を鳴らす。てゐが振り返ると、妹紅が無言で気まずそうに手のひらを振った。

「……すまん、なかなか来ないから、ネタも被らないだろうと……」

「ありや、参ったね」

私が補足すると、話の腰を折られたてゐは脚を正座からあくらに直したりして、間が悪そうに天を仰ぐ。するとさつきまで無言だったメデイスンが口を挟む。

「もう何だつていいから早くしてよ。兎捕りの罫で死んだりとか、色々あるでしょ?」

「それ先に言ったら出落ちじゃないかい」

「死んでまでお姫様のパシリって悲しいな」

燐や赤蛮奇が軽口を叩くも、メデイスンは毒づいたその表情のまま急かすように膝を叩く。普段一人で気ままに過ごす彼女は大勢の中でジツと待つというのが堪え難いのだろう。皆が話し終えてからこっち、そろそろ限界が来そうだ。

「ああ、分かった分かった。んじや、後日談を話してやるよ」

てゐが半ば投げやりに両手を広げて言った。メデイスンや妹紅がピクリと眉をひそめる。

「後日……談、って」

「あの男の話に続きがあるってのか?」

妹紅の問いかけにてゐは溜め息を一つ、そして一拍置いてようやく頷く。

「正直、黙っておきたかったんだけどね……」

なにやら小さな声でぼやくてゐる。そんな彼女にマミゾウが顎をしゃくり催促する。

「この際だ、細かい事は言いつこなしじやろ」

「いいんですか？　もし嫌なら……」

妖夢が遠慮がちに言ったが、てゐる手でそれを制し、一つ咳ばらいをする。

そして話し出した。

「……………彼が、鈴仙にお仕置きを食らつて、ただそれだけじゃ済まなかつたんだ」

—

「確認するが、あの男が幻を見せられた所までは知っているんだよね？　OK、それなら

話は早い。

奴は今でも永遠亭にいる。ただし下働きとしてじゃない。患者……いや、それ以下の待遇で奥に閉じ込められているんだ。鈴仙のあの目を見た日から、それもずーっとね。

私がああの姿の彼を見たのは、たしか妹紅が帰った後だった。廊下を歩いてて、急にフツと、便の臭いがしたんだ。

廁が近い訳でも無いのに、一体なんだ？　といぶかしんで、こっそり臭いの方向に近

づき、ある部屋の前に行き着く。

覗いてみると、部屋の真ん中で男が、服を剥ぎ取られて無造作に転がされている。その横では茶色いものと一緒になった衣服が袋に詰められて、その横で鈴仙が床を無言で拭いている。ただ漏らした現場にしちや変だと思つてね。

『何やつてんの?』

部屋に入つて声をかけると、鈴仙が険しい顔で振り向いた。ウンザリしてるけど呆れている風じゃない。ただ面倒を片付けているような表情。

『こいつがやつたのよ。私は後始末』

未だ立ち上がる気配のない男を一瞥して、鈴仙がつっけんどんに言い放つ。彼を見ると、色々と見苦しい全裸より何より、赤くなつた男の目が興味を引いた。明らかに何かをされている。

『元はアンタの仕業と違うの?』

『漏らせなんて言わなかつたわよ』

じゃあどう言つたんだい、そう聞く間もなしに鈴仙は私の横をすり抜けて、スタスタと廊下を歩いていく。

追いかかけようとする、振り返らずに『そろそろ夕飯よ』とだけ言われた。

『放つておくの? 死体みたいになつてるけど……』

男がいる部屋は、物音一つしない。生きているのか死んでいるのか、脱げ殻のような

彼は未だ起き上がる気配がない。

鈴仙はピタリと足を止めて宙を眺め、ポツンと呟いた。

『……少し、強くやり過ぎたかな』

どんな表情だったのか、後ろからじや分からなかった。最後にもう一度彼を見る。もう日も暮れて、明かり無しじや暗くなつた室内。相変わらず見開かれた男の両目だけが、無機質で生気のない非常灯のような赤い光を放つて見えた。

用意されていた食卓には、既に姫様と永琳が待つていた。鈴仙はすとんと席につくとひと言『いただきます』と言つたきり、無言で食べ始めた。

私も隣に腰を下ろす。が……少々気まずい。さっきの出来事に加えて、席が一つ、あの男の分がいつまでも埋まらないのを、隣の鈴仙がまるで気にしていなかったから。

永琳や姫様も次第にいぶかしんで、『アイツが来ないけどどうしたの?』と尋ねた。すると鈴仙は箸を置き、つまらなそうに言つた。

『アイツは、しばらく動けません』

『へ?』

意味を掴めない二人に、鈴仙はスラスラと彼の狂気を弄つた経緯を話した。最初に私

に話してくれてもいいじゃないかと思っただが、相手が師匠と主人じゃ、聞かれた重みが違うってものさ。

内容を聞き終えて、二人はふん、と息をついた。鈴仙は参ったという様子で肩を竦めて、罪悪感を感じている風でもない。そんな彼女に諫める言葉が飛んだか？ そうではない。

最初に永淋が、姫様に向けて口を開いた。

『最近、彼も調子に乗っていましたからね』

『馬鹿は死ななきや……じゃないけど、疾患じゃないだけタチ悪いわ。』

『自覚がないんですものね』

二人の言い様、冷たい反応に思えるかい？ ……そっか、まあお察しの通り屋敷の皆にとつて彼の命は、そこまで価値のあるものじゃ無かつたんだろう。預かると決めたは良いが、性格も悪く、能力も利用価値もない。いざとなれば現代に帰った事にして消しちゃえばいい。巫女や紫も気にはしない。大なり小なり外来人の扱いはなんてどうにもなるんだ。

鈴仙もお茶を一口啜り、薄く笑う。

『もし取り返しがつかなくなっていたらすみません。始末しておきます』

『いえ、どうせなら実験に使うわ。私に頂戴』

早くも殺す相談まで始める鈴仙に永淋。その表情は赤字の計算でもするような、あつげらんとしたものだった。余計な口を挟むまいと黙っていたら、姫様がとびつきりの笑顔で浮かべて身を乗り出し、鈴仙に詰め寄る。

『ねえイナバ、その男、後で私にも見せてくれない?』

姫様は目を輝かせ、白い歯を見せていた。その顔は楽しい刺激を見つけた子供のそれで、あの方に関して言えば『良からぬ事を思いついた』に違いない。それでも聞かれた鈴仙は愛想笑いをして答える。

『ええ。お好きなように』

『やった! じゃあ手付かずにしておいてよ!』

姫様は嬉しそうに手を叩き、食べるペースを早めだす。永淋は行儀の悪さを咎めたが、相手の口から飛び出す勿体ぶった、面白い事をしてやるといふ予告にはハイハイと耳を傾けていた。内容を別にすればいつもの食卓での会話、食事風景そのものだった。

ただ一つの空席と、そこに居た筈の男が、これから何をされても不思議じゃないというちよいとした気掛かり。その二点を除けば。

食事が終わり、結局四人で男のいる部屋に向いた。姫様は言わずもがな、永琳はランプを掲げてその付き添い、鈴仙は自分のやった手前、私は……なんとなく、かな。ただ、心配する奴はあの場にはいなかったと思うよ。

部屋の近くに来るとまた便の臭いがしてきた。姫様が袖で鼻を覆いながら、それでも興味深そうに早足で臭いの元に急ぐ。そして部屋の引き戸をほんの少し開け、高い声をあげた。

『あらあ、良かった。まだ夢の中だわ』

姫様が小さく跳ねる。追いかけて戸口から覗いてみると、灯りのない室内の闇の中で二つ、赤く小さな光が浮かんでいる。鈴仙の術にかかったあの目だ。

背が低いから一番前で覗いていた私が、自然と部屋の戸に手をかけた。しかしその時、ふと手が止まる。

戸の隙間から、小さく低い声が聞こえた。耳を澄ますと、それは苦しげで途切れのないう、チャンネルが合わないラジオみたいな耳障りな声だった。風の唸り声に似ていたが、それはあの動かない男のものに違いなかった。

『どうしたの、てる？』

姫様が不思議そうに首を傾げる。彼女には見えていないのか。それとも件の企みらしきものがしたくてもどかしいのか。

『いや、何か聞こえませんか？』

『知らないわよ。とにかく部屋に入らなきゃ始まらないじゃない』

姫様は腰に手を当てて口をへの字に結んだ。臆病な兎の懸念なぞし知ったこつちやないという態度だ。私は怒るよりもかねてからのこの性格に閉口して、私はどうせ下つ端さ、と投げやりに扉を開け放つた。

残っていた悪臭が流れ出し、一気に部屋の中の闇が露になる。二つの赤い点だけ見ながら踏みいると、視界は真つ暗でも反響する床の音の違いで廊下とは違う形の空間に入ったのだと分かる。

幾分か男に近付くと、不意に背後の明かりがヌツと覆い被さり、私の影と、その前に横たわる男の姿を照らし出す。永淋がランプを近づけたのだった。

姫様がきやつ、と小さく叫ぶ。

『やだ、何よあの格好』

そういえば鈴仙が服を脱がしていた。振り返ると姫様は口に手を当てているものの、目は好奇心を湛え、ランプに照らされて一層輝いている。

『すいません、布でも被せておけば良かったんですが……』

鈴仙の形だけの謝罪も聞き流し、永淋からランプを引つたくって姫様は男を観察した。映し出された肌色の身体に不気味な陰影が出来、赤い目が瞳の奥を虚ろに鈍く、そ

れでも表面の眼光がボンヤリしたランプの灯りをはね除け、狂気の様を顕していた。

その赤に一瞬、目を引かれた時。

また声が聞こえた。近い分きつきまでハッキリと、微かに口元の陰を揺らしながら呻く男の声が。しかも、よく聞くと単語や短い呟きを繰り返しているように聞こえる。

急いで耳を傾け注視したが、生憎姫様は股間なんかを照らしてはケラケラ笑っている。気が散るので目を閉じ、耳だけに神経を集中させた。

途切れ途切れだが、日本語だ。嘆くような響きでもって、段々と意味を成していく。

『ああ、感染（うつ）された。感染された』

『もう皆には近付けねえ、結婚も出来ねえ』

『子供も無理だ。早死にも決まった』

『いつそ死んだ方がマシだ』

涙声で独り言みたいに言ってたから、大体聞き取れたのはこれだけだった。それでも鈴仙の話と照らし合わせると奴の台詞の意味が想像出来てくる。

……とある病気があるんだけどね。そいつは恐ろしい事に少し前まで不治の死に至る病だと言われていたんだ。

そしてその病気は、野郎同士のスケベで感染しやすいとも言われる。恐らく彼はその幻を見ているんだろう。

いや別に、異性でも普通に可能性はあるし、逆に必ず感染する訳でも無いんだが、そこは彼のこと、認識は偏っていたんだろうね。同性の恋愛だからって奇異に見られて、皆が病気持ちの異常者に括られるのは、悲しいけど外の世界でも考えられる事だった。病気自体もなにぶん恐れられたから、色んな噂があつた。なるべくそばに寄らない方がいい、子供も感染するからつくらない方がいい、長生きはどうしても出来ない、とかね。

……身近に永琳を見ているから言うけど、それらは誤解や古い常識だ。奴はそれらに今も縛られている。キワモノとして見ていた“ゲイ”の幻に悩まされたように、その後のついて回る恐怖もあれこれ誇張されて脳内に展開されているんだろう。未だ赤く光るままの瞳を見てもそれは間違いない。

『意外と幻が長引いてしまったようです』

鈴仙は事務的な口調で言った。隣の永琳はハナから姫様の挙動だけ見つめて黙っている。その姫様はと言うと男の顔を照らしたかと思えば、影の浮き出た顔をニツと楽しそうに歪め、皆を見回しながら言った。

『それが好都合なのよ』

私はどういふ事か分からず戸惑っていた。姫様はそんな私を細めた目で一瞥し、しゃがみこんで男の顔を見つめる。持っていたランプを床に置き、顔は振り返らないまま、

低い声で呟いた。

『私の能力、知っているでしょう?』

言われてボンヤリと思いついた。姫様の永遠と須臾を操る力。永遠とは変化のない無限に長い時間。須臾とは逆に誰にも認識出来ない程の短い時間。私もややこしくてよく分かんないんだけど、あの人は変化のない世界にずっと何かを閉じ込めたり、誰にも分らない一瞬で行動したり出来るんだ。

でもそんなものが今、何の役に立つっていうんだろう。いぶかしみながら姫様の背中を見ていると、彼女はフツと男の目の前に人さし指を立てて、ほんの僅かに上下させた。それだけで、後はピクリとも動かない。けど、どうした事だろう。さっきまで虚ろだった瞳の奥がみるみる生気を帯び、眼前の姫様の指先に焦点を合わせる。

まさか正気に戻ったか、と目を見張ったけど、奴の目の色は赤いままだった。しかし明らかにさっきまでと違う様子でキョロキョロと辺りを見回し出す。その姿は異様に心細く戸惑っているようで、色なぞ分からない筈なのに顔が確かに青ざめて見えた。

そして、震えながら口を開いた。奴の身に何が起こったんだろう。ヒントを求めて次の言葉を待つ。

しかし、聞こえてきたのは不可解なひと言だった。

『あ、あれ……おれ、しんで……』

死？ と眉をしかめている間も、男は自分がどんな状況にいるのか分からないといった様子で我が身や姫様、私達を見上げては目を丸くしている。誰のせいかといえれば思い当たるのは姫様だが、本人は涼しい顔でニコニコと微笑んでいる。聞いても答えちゃくれないだろうと無い頭で考えていると、鈴仙がポツリと言った。

『……あの一瞬で長い夢を見たのね』

へ？ と振り返ると、永琳が表情一つ変えずに説明してくれた。

『姫様はあの男を永遠の中に閉じ込めたのよ。ただし、私達にとつては一瞬の間だけだけどね。』

……あの男はウドンゲの見せた夢の中で人生を終えるまで、変化の無い世界の中で一人で居たのでしょうか』

姫様の力なら、たった一人を、永遠の世界に取り残せる。私達からしたら瞬きするよりもっともっと短い時間だけど、一人だけをいつまでも、いつまでも長く。

更に鈴仙の力を合わせたら、肉体も老いずに夢、幻だけを長く長く、それこそその中で死を迎えるまで閉じ込める事が出来る……らしい。

想像しにくいかい？ 私だってそうさ。突飛で話を呑み込みかねた。だからとりあえず、アイツが夢の中でどんな人生を過ごすだろうね、って聞いてみた。

すると永琳はふと、からりと笑う。

『どこまでも認識に変化の無い、自分の持つ印象や知識に縛られた人生。奴にとってはさぞかし辛くなるでしょう』

変わらない認識、自らを縛る印象や知識。男の持っていた様々な偏見が思い起こされた。

節操なく他人を弄ぶ同性愛者、そいつらが持つ疫病神のような病。その病を近づぐだけで感染すると信じる自他、妻や子供を持つべきじゃないという周囲、そして長くない寿命……。

奴の夢の中に、それらを偏見だと指摘してくれるものはいない。だって思い込みを思い込みだと知らないから。偏見を改めるどころか大人になっても引きずって凝り固まり、他人をいたずらに奇異に見ていた彼の見る、夢なんだから。

たとえ自身がその偏見に晒され、無知や無理解に苦しむ立場に変わったとしても、それは同じさ。

その死ぬまで苦しむ体験を彼は何度も、姫様の気が済むまで繰り返す事になった。止めなかつたか？ 言つたらう、私達にとって、彼の一生涯分の夢は瞬き一回分にも満たないってさ」

「……ひでえ女だ。人を玩具にしやがって」

てゐるの話を聞き終えて、開口一番妹紅が吐き捨てる。いつの間にか煙管を拾い上げた
ママミゾウが横から冷やかした。

「幻想郷でそれを言うかい。儂はむしろ清々したがのう」

「おい、悪乗りするのは止め。一々茶々を入れるんじゃない」

ママミゾウを睨むと、彼女はヘラヘラと手を振る。妹紅がむつと口を結び、妖夢が無言
ながら眉をひそめる。そこに口を挟んだのはメデイスンだった。

「何よ良い子ぶって。馬鹿な大人なんて死んじゃえば良いじゃない」

「ちよい、そんなむきになって……」

「皺寄せが来るのは子供の方なんだっつーのよ」

燐が咎めたが、メデイスンは知らん顔でそっぽを向く。子供故に不正義には敏感で、
尚且つ残酷だ。燐が困った顔で私を見る。まずい雰囲気だ。とにかく会合を一旦終わ
らせて、空気を変えよう。そう思つた時。

「……今更だな」

今度は赤蛮奇が呟いた。心なしか妹紅の方を見ているようにも見える。

「あ？」

「人が酷い目に遭う話は、これに限らないだろう。今回だけケチをつけるなんて、フェアじゃないぞ」

赤蛮奇の言葉に、妹紅は押し黙る。しかしまだ抗弁したいのか目が悩ましげに動く。すかさず妹紅に向けて言った。

「妹紅、お前多分、輝夜のやった事だから腹が立つんだろう。だがお前も私も、私情を挟む訳にはいかん」

私は人間側の半妖で、だからこそ恐怖も感じるが、やはり人間が苦しむの自体は心苦しい。しかしそれはそれとして、個人的な好き嫌いで貶すような真似はしてはならない。真剣な顔で見つめると、妹紅はやがてフツと目を伏せた。

「……………めん」

小さく呟く声。妹紅は私の言葉になら素直に謝ってくれる。自惚れかもしれないが、付き合いの長さから来る自信は確かにあった。

うむ、と一つ頷いた時。

「あの、ちよつと……………」

横からの声にハッと我に返ると、てゐが気まずそうに私を見ていた。まずい。場が収まった事に安堵して彼女の事を忘れていた。思わず生返事で返すと、てゐはフツツと長い息をつく。

「気を使わせて悪いね……。最後のは、その、嘘だよ」

「え？」

間拔けな声で聞き返す。てゐは目を逸らし、ポリポリと頭をかく。

「いやあ、落ちはなるべく恐ろしい方が良いだろ。実際は永琳が何回目かで悪ふざけも程々に、と止めたんだが、脚色しちまった」

「そ、そうか……。まあ、そうだろうな」

妹紅が戸惑いながら唸る。私含めさつきまで諫めたり謝ったりしていた口を皆が閉じた時、燐が明るい声で言った。

「なんだい、本当は大したこと無かったってのかい？」

「そういう事そういう事！ 何度も一生を繰り返したりなんかしたら、気が狂っちゃうって」

「も、脅かして〜」

妖夢が安心して息をつく。誰かさんがあんな風に怒り出すから……。とてゐが迷惑がましく眩くと、妹紅は完全に黙ってしまった。マミゾウがニヤニヤと口元を歪めている。

「ま、とにかく私はそろそろ帰るよ。明日も早いんだから」

もう用は済んだとばかりに、てゐは挨拶もなくクルリと背を向ける。しかし、その背

中にふと、気にかかるものを感じた。

……奴は話の種明かしをした。怖さの為に嘘をついた。しかし、そう言われて尚、何が引つ掛かる。彼女の言に何か……。

そうだ。最初。奴は男が『患者以下の待遇で閉じ込められている』と言っていた。

そして、男が見ていたのは、永琳曰く『自分の持つ印象や知識に縛られた』夢。

頭の中に、ある仮説が浮かんだ。

輝夜の見せた『死ぬまでの夢』が強く印象に残っていたとしたら。

夢の中の輝夜なら容赦する保障もない。男の印象次第で得体の知れない夢を見せる妖怪に見えても不思議ではない。何度も何度も、寝ても覚めても死ぬに死ねない夢を、夢の中で見せられたかもしれない。

いやそれ以前に、夢の中の一瞬で夢を見て、その中の一瞬、その中の一瞬、その中の……と無限に幻を見せられる可能性は無いだろうか？ 否、いくらでも考えられる。肉体は老いず、例え何十、何百年体感しようが、結局は男の頭の中の、夢なのだ。現実ではそれらはすべて須臾の夢に帰す。

鈴仙の能力が解けるまで、何度、彼は………

「………てる」

気がつくくと彼女を呼び止めていた。もう襖を開け放して廊下の奥に遠くなっている。

「なんだい？」

振り返って、面倒臭そうな返事。聞かれない事があるのか。そんな疑問が頭を掠めたが、意を決して確かめる。

「……その男、正気でいるんだろ？」

そういうと、てゐは肩をすくめ、からかうような口調で言った。

「……言つたろう？ 外来人なんて、扱いはどうとでもなるつて。」

正気だ、つて言えば安心するかい？」

そう言つてゐるは小さく舌を出し、廊下の角に消えていった。

二周目

二周目・一話目―藤原妹紅

「……へ？ 私が一話目？」

何だよ、初っぱなから指名してくるなんて、慧音も意地が悪いな。まあ良いけどさ。んで、あー、藤原妹紅だ。よろしくな。

皆私に呼ばれたから知ってるとは思うが、私はメンバー集めの方に奔走しててな。ネタが正直、ほとんど無い。

そこでだ。予め噂に目がない奴に教えてもらった話がある。射命丸 文（しやめいまる あや）を知っているだろ？ あの妖怪の山に住む、新聞を作っている烏天狗だよ。

そいつが教えてくれたんだよ。又聞きになっちまうけど、あの山の連中は元々身内の結束が強いから、その中で起こった事件っただけでも、聞く価値はあると思うぜ。

……聞きたいかい？ じゃ、ちよいと耳を汚させてもらおうよ。

―

舞台になる妖怪の山つてというのは、主に天狗と河童が住人の大部分を占める。で、今出てくるのは、天狗だ。

天狗の中にも種類があつてな。大きく分けて、さつき言った文みたいな烏天狗、里にもたまに顔を出す黒い翼を持つ奴等と、主に山の警備なんかをする、白く狼を思わせる現場型の白狼天狗。怪しい奴を見たらたちまちチームプレーで追い出しにかかるんだ。狼の妖怪だけあつて機敏な動きで連携をとつてかかつてくるから、強い奴でも大概は敵に回したく無いだろうな。

ところがその白狼天狗の中に、変わった奴が一人いた。女の子なんだが、ソイツが酷く間抜けでな。ちよくちよく遅刻したり、当番の日を勘違いしたり、大事な書類をなくしたり、とにかくトラブルの種には事欠かなかつた。

新人ならまあ、そういう事もあるだろうと皆思うかもしれないが、彼女の場合は何年経つても同じような癖が抜け切らなかつた。

小さい頃を知る同僚によれば、仕事に限らず遊び回っていた時代から、一人だけずっと同じ事に夢中になっていたり、玩具の片付けが苦手だったり、困った所がずっとあつたらしい。

そういう生い立ちだもんで、山の中で次第に彼女を疎んじる奴等が出始めた。狼つてのは時に容赦なく爪弾きにするものでな、女の子もガキの時代から程度の差はあれ同じ

ような目に遭ってきて、当然ながらすっかり引つ込み思案で通るようになっていった。

ただ、彼女も何も出来ないとかそんな訳じゃなくて、特技も持っていた。山の連中はよく将棋を楽しんでいたが、何を隠そう彼女は将棋だけは大得意だったんだ。

大抵の勝負には連戦連勝、将棋大会が開かれた日には尽く上位に食い込んだ。彼女もその時ばかりは胸を張ったし、周囲の冷たい視線も影をひそめた。

だが、一日経てばまたいつも通り、上手くいかない業務の日々。皆の表情も厄介者を見るそれに変わり、彼女は鬱屈とするばかりだった。

その日々がずっと続くのも嫌だったろうが、ある意味で変化が訪れる。山に居る厄神の事を知っているか？ 鍵山 雛（かぎやま ひな） つつー奴なんだが、雛人形のように悪いものを吸い取る力を持っていてな。一部の連中が

『アンタに天才棋士の怨霊でも取り憑いてんじやないの？ だからあんな鈍臭いのよ』
とか言って冗談混じりに女の子を厄神の元に引つ張っていったんだ。それで除霊なんかをやつても一応はホラーなんだろうが……

雛は連れてきた奴等に向けてこう言った。

『この子に、悪いものは憑いていないわ』

えー？、と張り合いなさそうにする知り合い達に向けて、尚も雛は言う。

『あなた達ねえ、オカルトのせいにする前に他に何かしようとか考えなかったの？』

それは思いの外強い口調で、知り合い達はムツと眉をしかめ、女の子は戸惑い、心の隅で気を落としていた。だけど、何故自分がガツカリしたのか、具体的な理由はその時思い当たらなかった。恐らく他の連中も、聞いている皆も雛の言い方にピンと来ないだろう？

けど、それから女の子が山でどうなつていったか、聞けばその内分かるだろうぜ。結局何もされずに帰された彼女が、どんな気持ちでいたか……。

それから、彼女に対する風当たりはますます強くなつていった。目立ったハンデも思い当たらない、それでいて変わらず足を引つ張る彼女に下された評価は『ただの間抜け』だったんだよ。

数少ない幼なじみなんかは、小さい頃から見ていた将棋の腕を盛んに誉めて慰めたりなんかしたが、将棋なんて金になる訳じやなし。それだけにあんまりのめり込む訳にもいかず、それどころか大事な趣味でいつも負け通しの奴等は『将棋の能力をちよつとも他に回しなさいよ』と陰口を叩き、次第に聞こえよがしに話すようになっていった。

それを聞いて彼女が傷つかない筈がない。能力を他に回す、それが出来たらどんなに良いか……。他ならぬ彼女が腹立たしさを抱え、いつしか特技も何もかも鬱陶しいものでしかなくなり、自分は役に立てないと後ろ向きな考えに囚われていった。

環境が変わればまた違ったかもしれないが、知つての通り妖怪の山は独自の社会が

あつて閉鎖的でな、文みたいな跳ねつ返りはともかく、内気な彼女に山を飛び出すなんて発想が出る事はなかった。

彼女の知り合いはこんな風に愚痴を聞かされたらしい。

『将棋の駒みたいに、裏になれば強くなったりしないかなあ。』

私なんて盤にいても文句言われるだけじゃない』

限られた枠の中で認められなきゃいけない、その内に彼女は焦り、追い詰められていった。

とうとうウンザリした彼女は、山の中でも天狗達とは気風の違う奴に助けを求めた。山の頂上の神社に住む風祝、東風谷 早苗（こちや さなえ）だ。

早苗は元々外の世界から来た人間で、御先祖は物凄いつわ者ながらも自身はホンワカした、外の世界の感覚を残す外交的な奴だった。

そのせいか出向いた天狗が自己紹介した時も、とりあえず否定はせずに聞いていたらしい。直接仕事で関わる訳じゃないから他人事だったのかも知れんが、堅物な山の連中よりはマシに思われただろうな。

『……苦労なさったんですね……』

だが、愚痴を言つて慰められて解決するなら苦労しない。彼女が早苗にあつた狙いは、もつと別の所にあつた。

早苗には、『奇跡を起こす』力があつたんだ。

さつき言つたつわ者の御先祖様つてのが、何を隠そう神様でな。その血のお陰か早苗が祈ると雨が降つたりとかするらしい。

ただ、大規模だつたりあんまり都合が良かったりする奇跡は、かなり、かなり長い期間が要ると云うが。なんたつて生まれて十年以上はただの人間だつたからな。

それでも天狗の女の子は、その力で自分の不出来を何とか出来ないかと頼み込んだ。アイツの奇跡が当てになるのかつてお前達は思うだろうが、自分が頑張るよりは望みがあると思つたんだらう。そう考えるだけの人生があつたんだよ、多分。

勿論出し抜けに言われた早苗は戸惑つた。奇跡なんか頼らなくても、出来る事があれば力を貸しますよ、つて説得までしたんだ。早苗はそういう優しい奴ではあつたが、少々相手には無神経に映つたようだ。

天狗は早苗を恨めしそうに睨むと、腹から絞り出すような声で言つた。

『今までだつて、頑張つてきたんですよ。早苗さんが現れるずっと前から、いえ、貴女が生まれるより前です。』

現人神だなんて言つて、たつた十云歳の子供が表舞台に現れて、どんなに羨ましかつたか』

更に止まらず、こう捲し立てる。

『聞いてますよ。貴女こそ外の世界じゃ色々奇異に見られたつて。貴女は幻想郷に来れて満足でしょうが、生憎私は新天地も気休めもお呼びじゃないんですっ!!』

珍しく耳を傾けてくれた早苗に、天狗はうっかり鬱憤をぶちまけてしまった。山を出られない以上、努力でどうにかなるビジョンが、丸つきり見えなかつたんだと思う。早苗も後から確かめるに、実際はもつと酷い事を言っていたけど、不思議と怒りは湧かなかつたらしい。

同情もあつたんだろう。叫ぶだけ叫んで気まずそうにする彼女に、早苗は神妙な顔になつて、こう耳打ちした。

『では、ほんの僅かな期間、お試しは如何ですか?』

どういう意味かと尋ねると、早苗は長々と話し出した。

『いくら奇跡でも、理想の成長をいきなりするのは無理でしょう。ただ、私なりに有能な方々の恩恵を貴女に授ける程度なら……』

しかし、私個人ではどうしても付け焼き刃です。どこかで誰かのように上手くいつては消えていく程度でしょう。

それでももし良いかとも思えばお伝え下さい。こちら本腰を入れます』

天狗は二つ返事で承諾した。猶予も選択肢も残しておいてもらえるなら、これ程有難い事はない。

『効果が現れるまで、一、二ヶ月はかかると思いますが……』
『天狗には微々たるものですよ。お願いします!』

かくして、彼女に他人の能力が備わる事になった訳だが、それでどんな結果になったか。

順風満帆? だと良かったが……まあ順を追って話していくよ。

まず最初に起こったのが、彼女の周りの印象への変化だった。今まで強面で厳しいと思っていた上司が、突然迫力の無い小物に見えてきたというんだ。

早苗の交流から察するに豊聡耳 神子(とよさとみみの みこ)の力が宿ったんだろう。他人の資質を見抜いたり、相手の欲するものや声に敏感になったりする。

彼女は戸惑いつつも業務にかかると、神子の如くスラスラと進めていった。すると驚いたのは上司だ。目を丸くし、本当にミスなく終わったかを何度も何度も確認していた。

天狗は神子の能力に感謝して胸を撫で下ろした。というのも、件の上司は一つのミスに三十分も一時間も説教をするような奴だったらしい。その間彼女は頭を下げて相づちを繰り返すしかなく、スケジューリングは圧迫し、おまけに萎縮してますます効率が悪くなる。

今回はそれを免れる。そう思って次の仕事にかかろうとすると上司がツカツカと歩

み寄ってくる。まさかまたやったかと身構えると、上司は眉にシワを寄せてこう怒鳴り出した。

『お前なあ、こんだけ出来るならなんで今までやらなかった？ お前が怠けてた間に同じ給料で皆が働いてんだぞ、おかしいだろ？』

そう切り出していつものように説教が始まった。早苗さんの力を借りました、と信じるともかく言い訳は出来た筈だが、彼女はそれをしなかった。

敏感になった耳に、感情が多分に入った怒声が響き、とてもじゃないが口を開く余裕は無かった。それどころか音としては聞こえない、上司の心の中の欲まで頭に流れ込んでくる。

曰く、怒鳴りつけてスツキリしたかったのに今日に限って失敗しない。見張っていた時間を無駄にした。俺が苦勞してないみたいじゃないか、イライラする……云々。

まあ、心の中なんて概して下らないものだとは思うが、実際に知ったらそれは呆れるだろう。彼女は慥然とするしか無かった。

どんなに理不尽でも口答えなんて出来ない。上司は年上だし、昨日まで落ちこぼれだった奴が不興を買ったりすれば、山の中でどんな立場になるか分からない。結局神子の能力が残る間中、同じような説教、もとい八つ当たりは続いたらしい。

またしばらくして、今度は周りの時間が止まり、自分だけが動けることが頻発しだし

た。

十六夜 咲夜（いぎよい さくや）の時間停止能力だな。仕事には便利だったから彼女も自分だけの時間を利用して仕事を進めた。そうすれば自ずと終わるのは早くなる。残業とやらもやらない日が増えていった。時には周りがヒーヒー言うのを尻目に優雅な後ろ姿で帰っていったとき。

文が言うには『皆ああしたら良いのに』という事だったけど。

しかし、同時に気になる事も出来た。最初の方で言ったが、彼女は掃除が元来苦手だな。咲夜の力が宿った途端に汚い部屋が目につくようになった。

この際大掃除してしまおう。そう思った彼女は一日休みを頂けないかと上に願いだした。

今まで頻繁に休む余裕なんて無かったから、たまになら許されるだろうと、軽い気持ちだった。

ところが、伝えた上の方の管理職は、どうしたことかカーツと怒り出した。休みが欲しいなんて言い出したヤツは初めてだ、なんて言ってから妙に力を込めてこう続ける。

『吐き気を催す邪悪とはッ！ 何も躊躇せず仕事場を利用する事だ……!!』

自分の利益だけのために利用する事だ……

労働者が何ら寄与しない『休み』を!! てめーだけの都合でッ！ ゆるさねえッ！

お前はまた我らの期待を「裏切った」ッ!」

いや、私が言っただんじやないぞ。念のため早苗に確かめたら趣味か知らんがこんな風に言っただんだ。

もしかしたら、天狗の管理職の趣味かもしれないが……とにかく怒ったのは本当らしくてな。渋々従っていたとき。しかし、内容だけ見たら目茶苦茶だよなあ。

極めつけは最後、色んな事に対して勘が鋭くなりだした。大雨が降るのを察知して見回りを切り上げたり、その後には遠回りして土砂崩れを回避したり。

言わずと知れた博麗 霊夢（はくれい れいむ）の天性の勘だな。

しかし、それで巫女のように変わりなく飄々と仕事を……。とは行かないんだこれが。

天狗達の業務はチームプレーだからな。雨で体調が酷くなったり、土砂崩れで怪我をした奴がいれば他のメンバーがフォローするしかない。自ずと忙しさが増していく。

そして休みの原因は直接的なものに留まらない。幼い子供が雨で風邪をひいたから、と言う同僚もいた。

ガキとはいえ妖怪ならすぐ治ると思うかもしれないが、妖怪は精神が脆い。特に片親の家庭だったりすると、一人だけ残すと不安で容態が悪化しかねないんだ。

だから件の天狗はしんどいのを堪えて巫女の鋭さやセンスをフル活用していた。

けど、巫女ならではの疑問が頭をもたげてくる。それは夜が更けても仕事に目処がつかない時の事だった。

終わるべき時間に終わらない仕事。その分はどんなに多くともお金は出ない。人数が減って一人当たりの労力は確実に増えているのに、だ。

金を寄越せ。正当な報酬を寄越せ。そう上に詰め寄りたくなるのを、元々の性格がギリギリ抑えていた。そのささくれだった心に釣られて敏感になった耳に、ふと同僚の会話が聞こえてくる。

『〇〇、まだ休み〜？　いつまで歩けないなんて言ってるのよ〜』

『その子はまだ良いっての。××なんてガキンチョの看病だぜ。健康そのもの』

どうやら仕事に出ない連中への文句らしい。愚痴の一つくらいなら無視していたかもしれないが、その陰口が弾んでいく内に、ある時彼女の手はピタリと止まる。

『大体〇〇ってば鈍臭いのよ。だから怪我なんてしたのよ。自業自得じゃない〜』

『それ言ったら××だって……。風邪なんて引かないように躡っておけっての。』

迷惑なのはこつちだぜ』

××『××ってしかもおっさんでしょ〜？　子供の世話とか似合わない〜』

『あークソ、アイツらの給料、俺達にくれねえかなあ』

怠けていると言わんばかりの言い草に、彼女は身を固くした。自分達より少しでも楽

なように見えれば相手の事情など、生活など知ったこっちゃない。そんな本音が透けて見えたから。

自分も恐らく今まで言われていた。自分達より能力が低い、だからデメリットを受けろ、受けないのは変だと。

同時に端で聞く立場になってみて、やがて諦めのような気持ちも充満していった。

そういう考えに行き着くのか。金金と執着していたのはもしまや自分だけ？　なんて考えると変な笑いが込み上げてくる。

早苗の奇跡に彼女が頼ったのは、その日が最後になった。

翌日、彼女は山頂の神社を訪れた。顔を見せると早苗がニッコリと微笑む。

『お久しぶりです！　あの……奇跡の具合は、如何ですか……？』

天狗はそれまでの事を思い出し、経緯を打ち明けた。良いことばかりでは無かったけど、以前のように自分を殊更責めるような気持ちは消えている。

『お陰様で視野が広がりました。落ち込むばかりなのは止めになります。』

だから、もう良いんです』

早苗はウンウンと頷き、天狗の手を取った。照れた顔を浮かべる天狗をイタズラっぽく見上げながら、早苗がしみじみと言う。

『実を言うと、私も外の世界では辛い思いもしましたが、未練もあります。』

だから幻想郷が嫌いって事も無いですが……。とにかく、せつかく生まれた場所を、一部に閉じこもって絶望するなんて、勿体ないですよ』

次第に口調は言い聞かせるようになっていき、感極まつて目を伏せ、瞼を閉じていた。『辛い場所なら逃げて、それで駄目なら戦いましょう。耐えるなんて馬鹿馬鹿しいですよ。』

私も別世界に来ちゃった身で何ですが、力に……』

夢中で喋りながら、顔を上げて視線を合わせる。そこには感謝してくれた天狗の少女がいる。

……はずだった。

『……………へ？』

そこには、いつの間にか誰もいなかった。早苗が神社の境内で一人、ポツンと立っているだけだった。

早苗はあちこちを探し回った。神社の軒下、裏口、山の中の滝や厄神の家まで。

それでも姿は見当たらず、遂に日が暮れて山の連中が行方不明だと言って山狩りを始

めたが、結局痕跡の一つも出やしなかった。

夜空で雲に隠れた月を見ながら、早苗は自分の言った言葉を思い出した。

”私も別世界に来ちゃった身で何ですが、力に……”

……奴が言っていた恩恵を貰える有能な方、つての、最後は多分早苗自身だったんだろ。うな。

……それから、彼女は一向に見つからないとき。

文や早苗の話だから、真に受けるのもどうかと思うが……。なんせ、妖怪の山は端から見たら全くの相変わらずで、そんな怪事件が想像しづらいんだよな。

ただ、どうも一人、行方不明なのは間違いないらしい。多分結界を越えて外の世界に行っただろうけど……。

幻想郷って元々、外で居場所の無い妖怪の為のものだった筈だが、彼女は今頃、どうしているんだろうな。気にしても仕方ないかもしれないが……。

私の話はここまでだ。もっと怖いのあるだろうし、どんどん次に行ってくれ」

二周目・二話目―火焰猫燐

「ん、あたいが二つ目？　ふふ、もうちよつと聞くのも悪くないと思つただけど、ご指名とあらば仕方ないね。

火焰猫　燐だ。こう見えてもお喋りとかは嫌いじゃないから、また会つた時は是非よろしく頼むよ。普段地底にいと毛嫌にする人も多くて、ちよいと寂しくなるんだ。

慣れれば良い場所なんけどね。堅苦しい世間体もなけりや、ギスギスした権力争いもない。信用できる人がいれば細かいこと抜きで飲めや歌えのどんちゃん騒ぎ、そうやって笑い合えれば、それだけで幸せさ。

まあ確かに、やつぱり向き不向きはあるね。地霊殿の屋敷はともかく、街の中に出れば追い剥ぎや喧嘩も珍しくないし、酔い潰れてゲロ吐いたチンピラもよく見かける。

この前なんて、飲み屋でお尻触ってきたバカがいてさ、思わず張り倒しちまったよ。繊細な神経を持った人には、ちとキツイだろうねえ。

ああ、気に障つたらごめんよ先生。別に皮肉を言つてんじやない。上品で、不自由なく生きていけるならそれに越した事はない。少なくともあたいは人様を僻むなんてア

ホ臭い真似はしないよ。

あたいは、ね。芯が強くなかったら、そうはいかないかもしれないけど。

なんの話かって？ そりゃあこれからの怪談に出てくる人の事さ。もつともかなり昔の事だし、時効と思って話すんだけどね……。

地霊殿の主を誰だか知っているかい？ 古明地（こめいじ） さとりって方なんだけどさ。

さとり様は今でこそ地底の有名人で怨霊の管理に精を出しているが、その前は割りとハードな人生でね。

元々はただの心を読む覚（さとり）って妖怪の一人だったんだが、そいつらは本音を探られたくない人間達に迫害されて、さとり様は地底に妹と二人で逃げてきたんだ。

環境がガラリと変わって、戸惑う事が一杯あったと思う。人の冷たさや醜さに嫌って程に触れて、逃げ延びた先が無秩序で制度も未熟な、未知の街だったんだから。

住居の当ても、頼るつても無ければ路地裏か、精々空き家で夜を明かすしかない。食べ物も盗むか恵んでもらうしか無かつたろう。時には馬鹿にされたり殴られたりした

かもしれない。

心を読めば恐らく地上と同じ、いやそれ以上の粗暴で下衆なものが見えたらう。

あたいの生まれる前の事だから詳しくは分からないけど、少なくとも聞いても話した
がらないと思う。順応するまで、ルールの無い世界つてのは冷たいんだよ。他人様を大
事にしてくれる保障なんか何処にも無いんだもの。

怨霊の管理を命じられて一定の地位を築いた後、さとり様はようやくその境遇から救
われた。あたいが今の姿になれるようになった頃には、とりあえず明日の心配をせずに
済むようになっていた。といつてもお空はまだ人格が出来ているかも怪しかったがね。

しかし、平穩、という訳では無かった。いや、外敵がいたとかじゃないんだ。既にさ
とり様の力も知れ渡って、良くも悪くもあの方に関わろうなんてヤツはほとんどいな
かった。問題はさとり様の心の中だ。

さとり様は当時、地上で忌み嫌われた体験と、地底での荒みきった環境、相変わらず
の孤独にあてられて酷く凝り固まった考えを持つようになっていった。

『私は周りの奴等とは違う』というものだ。

地霊殿の主となつたのも影響したんだろう。

繰り返しになつちやうけど、地底は酷い場所だね、暴力も盗みも性の乱れも日常茶飯
事だった。さとり様はそんな場所に居て、やむを得ない時に最低限の悪事をするだけ

だった。いや、もしかしたら大きな事をする力が無かったからかもしれないけど、それはさとり様のプライドを支えていただろう。

俗欲に耽る地底の連中を軽蔑するのとセットだね。

さとり様が狭量な人に思えるか……或いは、もっともな考えだと思う？ それとも、経緯の方に同情するかい？

だけどうしたって、生物学的に変わりようが無い以上、苛立ちは募るばかりだった。なまじ一度ドン底の生活をしているだけに、立派な屋敷も今の地位も、『別種の動物だ』なんて信念を保証してはくれない。そんなもの切っ掛け次第で呆気なく崩れ去る。

だから何かに追われるように、さとり様は仕事にのめり込んでいった。

あたいはと言えばまだ幼くて、心配はしても何も言えずにいた。

そんなさとり様が安らぎの表情を見せる時間は、専らペット達の世話をする時と、妹と触れ合う時くらいだった。

動物はあたいみたいに人格を持つのを除けば単純で素直だ。それに妹とは、単純に過ぎた時間が長い。

その妹つてのが、こいし様って言ってね。今でこそ無意識の内にあちこち出歩いたりしているけど、元々は普通の覚妖怪だった。心を互いに読めるのにずっと一緒にいるって、よく考えたらすごい事だよ。偽りや打算が少しでもあつたら片方が愛想を尽かすだ

ろう。よつぽど信頼しあっている訳だ。

さとり様も、こいし様の事は本当に大事にしている、差別意識にかられている間も小遣いを山程渡したり、豪華な部屋を用意したり、地霊殿の主ならではの今まで出来なかつた甘やかしには事欠かなかつた。

……ところが、そんな贅沢な環境に居たにも関わらず。

そのこいし様がある日、突如居なくなつた。

さとり様はあたいに血相変えて、最悪死体になつていても良いから旧地獄を探してくれと頼み込んできた。事情が分からないあたいが何があつたのかと聞いたたら、さとり様は涙ぐみながら経緯を打ち明けた。

—

さとり様の部屋に、珍しくこいし様がやってきた。仕事が出来て忙しくなつてからあまり訪ねてきたりはしなかつたんだけど、その時は深刻そうな表情を浮かべていたらしい。

どうしたの、と口には出さない。代わりに心を読む為の第三の目に神経を集中させる。覚妖怪はそうして互いに思考を思い浮かべる事でコミュニケーションが取れるん

だ。

さとり様にこいし様の思考が流れ込んでくる。その質問は予想だにしないものだった。

『お姉ちゃんは、私が邪魔じゃないの?』って。

さとり様はそりや動揺したよ。どういう意味よ、って心で叫んだ。するとこいし様はこう言い返す。

『だって、お姉ちゃんったら忙しくなった途端に、冷たくなつたじゃない』

そんな事はない。いつだって貴女の事を気にかけていたじゃない。そう狼狽えるさとり様の脳に、こいし様のこれまでの思い出が、”こいし様の視点で”映し出される。

地底はうろつくな、人に話し掛けるなど怖い顔で言い付けて、そう言う姉は仕事ばかりで構ってくれなかったり、

昔はワガママを叱られたのを、今は説教の代わりにお金を寄越されたり、

こいし様の失敗は何でも許す癖に、地底の妖怪達への心情があまりに高圧的だったり、気味悪がるようだったり。

その落差に、何か悩んでいるのかと心配して声をかけると、姉の言葉はいつもこうだった。

『貴女は気にしなくて良いことよ』

そう言われたこいし様は自分の部屋に引つ込んで、一人で居るには広すぎる部屋で玩具にも勉強道具にも興味を示さずに、その気になれば三人も寝られそうなベッドの上で膝を抱えて座っていた。

明かりをつけても、灯に暖かみは無い。今まで廃屋の中での蠟燭一本の明かりでも、たとえ皆が寝静まった路地裏で真つ暗な中で身を寄せあつても、大好きな姉が隣にいた。真夜中に見回りに行つたり、喧嘩をしたりして離れる事があつても、すぐに自分の元へ戻つてきてくれた。

今ではそんな優しさが感じられない。一つ屋根の下にいるのに遠くて、思い出すのは笑顔でも怒り顔でもない、見向きもしない背中ばかり。

貧しかった頃に妹の為としてきた事を、さとり様は知らず知らず忘れていた。裕福になつて、与えられなかったものを与えてあげなければとがむしやらになつていた。

心が読めるのにそんなすれ違いが起こるものか、つて疑問に思うかもしれない。けどさとり様のように与えるのに必死になっている人つて、自分ではすれ違っている自覚がないんだ。『誰かのため』つて言いながら、『誰かに嫌われて自分が傷つかないため』に必死になるのに気付いてない。

かくしてこいし様だけに、心の隅の本音が聞こえていた訳だ。

『忙しいから私の見えない場所で好きにして頂戴』

そして良くも悪くも、こいし様は家を出るといふ思いきつた行動に出た。

今でこそこんな風に振り返られるけど、聞いた時には背筋が寒くなって、しばらく言葉が出なかつた。

なんたつて今まで地底にはなるべく関わらないようにしていたし、いわんやこいし様なんて過保護も良いところで、友達どころか知り合いもない。何かあつても無法地帯に警察なんかいないし、さとり様の今までの態度のお陰で、地霊殿の身内に良い印象を持たない奴等が沢山いた。

その中に、こいし様はたった一人で。

下手したら死体すら拝めないかもしれない。誇張抜きにそんな考えがよぎつて、すぐに搜索を始めた。

あたいと数だけは揃えたゾンビ妖精はフル稼働。さとり様も仕事を繰り上げしまくつて寝食を忘れ、幻想郷の何倍も広い地底を駆けずり回つた。地霊殿の周りから、飲み屋街、長屋、裏通りのごろつきの吹き溜まりまで。

一週間過ぎ、二週間過ぎ、一月経つてもこいし様は見つからなかつた。さとり様は眠れない日々が続いてゲツソリ痩せて、あたいは『死んだんじゃないか』と囁くゾンビ妖精達を縁起でもないとい叱り続けた。内心、そうかも知れないと思いつながら。

そして季節が変わり、宿無しが道端で凍えて死んでいるのを見ては冷や汗をかいてい

た頃。

突然、こいし様が出ていった日の格好のまま、ふらりと地霊殿に帰ってきた。服はボロボロで目は虚ろ。さとり様は見つけるなり取りすがって、怪我はないか、私の事が分かるかと肩を揺さぶった。こいし様はしばらくぼんやりと宙を見つめていたけど、やがてポツリとこう答えた。

『よく覚えてない』

そんな答えはないでしょう、どれだけ心配したと思ってるの、って、さとり様はもう泣き叫ぶみたいになんか外間も憚らずに言った。こいし様が居なくなつたあの時みたいに。こいし様の前でそうなつたのは、もしかしたら随分久しぶりかもしれない。

そしたら、こいし様は赤ん坊みたいに無邪気に笑って、何でもない事みたいに言ったんだ。

『やっぱりお姉ちゃんが好きだから、戻って来ちゃつた』

なんか妙だと思つて、その時気付いたんだ。こいし様の、心を読む為の第三の目。それがピツタリ閉じられている事に。

それから、こいし様は心を読めない代わりに、『無意識』を操るようになっていた。何故、第三の目を閉じて、人の無意識の中で動くようになってしまったのか……。

その理由は結局聞けず終いだった。どうしても隠れていたかったのか、それとも心を読むのが耐えられない程の何かがあったのか。

とにかくそれ以来、こいし様は自分でも気づかない内にあちこちを出歩いたりするようになった。

理由は決まって『無意識』。何がしたいとか、しなきゃいけないとか、そう意識して行動する事は滅多にない。あるとすれば、さとり様のいる地霊殿に帰る時だけ。

お姉ちゃんが好き、それ以外はまるでハッキリした思考がない。ともすれば始めから居なかつたみたいに消えちやいな、掴み所のない別人になっちゃった。

さとり様はしばらく後悔し通しだった。あの子にとんでもない事をしちやった。もう少し早く気付いてあげれば。

またふとした切っ掛けで消えてしまわないか、そんな不安にかられ、埋め合わせをするようにさとり様はこいし様に何度も尋ねた。したい事はないか、欲しいものはないか。

その時の答えも決まっていた。

『何も要らないよ。お姉ちゃんのお節介』

さとりの様猫なで声もどこ吹く風で、悟りを開いたお坊さんみたいに満たされた顔で笑うんだ。心が見えずにさとり様が怯えるのを、まるで嘲笑うように笑うんだよ。

今ではさとり様も交友を広げて、以前より幾らかタフになった。こいし様も奇行が時々話題になる程度で、話せる相手が増えたようだ。後に生まれたお空は地霊殿が冷えきっていた頃を知らない。

だけど、あたいは……。

たまに今でも夢に見る。こいし様の第三の目がまだ開いていた昔に、必死でさとり様に呼び掛ける夢を。

もしああなる前に関係を直せていたら。本音をぶつけ合えていたら。そう願ってその先が見えるという所で、いつも夢は終わる。

そうしたらまたいつも通りの、夢と少しだけ違うこいし様とさとり様がいるんだ。本人達を差し置いて何だけど……すっかりトラウマになっちゃったよ。

皆、もし大事な人がいたら、しんどくても凝りが残らないようにしなよ。心が通じるところというのは、多少なりとも重たいものなんだから。

あたいの話は終わりだよ。次は誰が来るのかな？」

二周目・三話目—メディスン・メランコリー

「私が三話目かあ……。メディスン・メランコリーよ。ちよつと語彙とかに自信が無いから、皆ほど上手く出来るか分かんないけど、よろしくね。

実をいうと、人前で話すの自体、慣れてなかったり……。

私は普段、無名の丘に一人で居るのよ。滅多に人も来ないから、物心ついてから長い間人付き合いが無かった。一時期は人形達に革命を！なんて言つて、同志も無しに空回りしたり、格好悪い事をやってたものよ。

やつと最近、閻魔様に怒られて永遠亭に出掛けたりするようになったけど、未だに子供扱いされるわ。ちよつと、笑わないですよ。それでも気にしているんだから。

……けどね、いや、怒りはしないわよ。仕方ないかな、つて思っているから。自虐とかじゃ無いつて。最近、なんというか、未熟さを再確認したというか……。

聞きたい？ うん、話すつもりだったけどさ……。それがどうも、妙な体験でね。とにかく、順を追つて話すわ。奇つ怪な場面もあるけど、最後まで聞いてよね。

ある日、いつものように永遠亭に行った日の事だった。鈴蘭を売って、ちよつと出されたお茶を飲みながら、永琳と話していた時。

永琳の背中の本棚、その上を何気なく見たら、コケシみたいな小さな物が乗っていた。よく見たら日本人形だったの。赤い小さな着物を着て、おかつぱの黒髪を生やして、白い顔に小さく二つの糸目と紅い点みみたいな口紅が塗られた口が薄く笑っている。

今までそんな場所を気に留めた事なかったから、アレは何なの、と聞いてみると、永琳はああ、と思い出したように頷いて、教えてくれた。

『あれね、前いた患者が要らないからって置いていったのよ。もう何年も前に』
もう置いてかれた当時から相当古かったらしくて、永琳も目立つ場所に飾る気が起きずに放つたらかきにしてそのままだったんだって。

私が気づかなきや多分、ずっと同じ場所で一人ぼっちだった。動く事も喋る事も出来ないで、ずーっと……。

私も昔捨てられた身だからね。その初めて会った日本人形を不憫に思った。ついでに忘れかけていた永琳には、ちよつと怒りが湧いたわ。

それが伝わったんでしょね。永琳はひよいと日本人形を取って、愛想笑いしながら私に差し出した。

『これ、貴女にあげましょうか？ 置いてくより友達がいた方が、やっぱり良いでしよう』

間近で見ると赤い着物は色褪せているし、顔には点々と染みがついて、髪が乱れて埃を被っている。

普通の人なら確かに要らないって言うだろうけど、私は一層同情が湧いてね。二つ返事で受け取って、大事に抱いて帰ったわ。

それから、日本人形と一緒に生活が始まった。まずは埃を払って髪を解かして、手製のおんぶ紐を作って人形を背負い、出掛ける時はいつも一緒。寝る時は隣で抱いて寝たし、暇な時は隣に座らせてお喋りしてた。

それで答が返って来るかって？ そんな訳無いじゃない。向こうはずっと無言で同じ顔よ。でも人形って、私が言うのも何だけど、元来そういう物でしょ？ もし私みたいに動き出して意思を持ったら、その時は私が望むのと同じように、つきあい方を変えるつもりだった。

四六時中持ち歩いていたら、永遠亭でも兎や患者に人形を見られる事がある。妹紅も何度か見てたっけ。でも、見た反応するのがお察しの通り、皆失礼なものでね。

『あら、年代物の娘さんね』

『大事に持っておきなよ。ゴミと間違えられちゃ大変だ』

『古ぼけた感じが妹紅にそっくり!』

とかなんとか……酷いでしょ!?

けど、怒ったらまたからかわれるだけだし、その場ではグツと我慢して……。

後で二人で慰め合うのよ。あんな言い方って無いじゃない、今のままで十分可愛いって。

染みを取ったり、毛や服を取り替えたから見映えも良くなっただかもしれないけど、そうする気は起きなかった。だって素の姿じゃ可愛くないみたいじゃない。それが嫌だったのよ。捨てられる側が努力するなんておかしい。今のままで、何もする必要なんかない。

そう思ってた。私の生い立ちもあって、少しむきになる位にそう言い続けたわ。でもそれが正しいのかって……。

領けないわね。結局向こうは一言も返して来ないし。今思うと、日本人形を想つてというよりは、憎しみが先だっていたわ。それも自分の姿をあの子に重ねた、私の中の憎しみ。

頭の中で笑われる自分を想像しては、喋らない人形に話しかけた。あんな奴は最低だ。許せない。出来る事なら立場を入れ替えてやりたい。あなたは何も悪くないんだ……。そんな風にも何度も。

その時正直、日本人形を丸つきり自分の分身みたいに扱っていたと思う。別の存在じゃない、私自身を哀れむ道具よ。

あの子に心があつたら、綺麗になりたいかもしれない、持ち主が欲しいかもしれない。そんな考えはいつの間にか抜け落ちて、薄汚れたままの人形をただただ可哀相と言いつけた。

そんなある日。

永遠亭に出向いた時に、たまたま診察に来てた一人の女の子と目が合った。他人と話すのって苦手だから、会釈だけして行つちやおうとしたんだけど、その子が声をかけてきたの。

『ねえ、あなたって……人形？』

やっぱり私の頭身とかつて目立つんでしよう。それでいて人外は珍しくないから、女の子は物珍しそうに近づいてきた。

私ときたら人見知りだし、そんな目で見られて戸惑った。けどだからって無視も失礼だし、相手は一人きりだから、頑張つて答えたのよ。

『そ、そうよ。それが何？』

ぶつきらばうに聞こえるかもしれないけど、私は生まれてから人間にあんまり良い印象を持っていなかった。捨てられたのもあるし、最近マシになったとはいっても、そ

んな返事しか出来なかった。それでも女の子は上機嫌で詰め寄ってくる。

『へえー、スゴーい。可愛いー』

そんな事を言いながら私の全身をしげしげ見つめてきた。慣れない誉め言葉と視線がむず痒くて、ついそつぽを向いた。

そしたら、上から呑気な声が振ってくる。

『あれ、何これ？』

振り向いたら、女の子はいつの間にか私の背中を見て首を傾げていた。あのおんぶしていた日本人形よ。

『それは……』

答えようとして、ふと言い淀んだ。この日本人形は私にとって何なんだろうって。

同じ境遇のもりで愚痴を言ってたけど、家族みたいに先の事を思ったり、友達みたいに互いを励ましたり、考えてみたらそんな姿とは程遠く思えてきた。勝手に自分を慰める道具にしていた事に、ようやくうっすら気づき始めたのよ。

日本人形は黙ったまま。言葉が出なくなった途端に、私は意味もなく人形を持ち歩いている子供妖怪に過ぎなくなった。

『どうしたの？』

ハッと我に返ると、女の子が不思議そうに私を見つめている。慌てて言い繕ったわ。

『捨てられ仲間よ』って。

えっ？ と女の子は聞き返してくる。イライラして、『昔捨てられたのよ』と短く言つた。

自分で言つといて惨めになつたわ。どうせこの子も笑うんだろう。そう思つて目を合わせずにいた。でも、返つてきた言葉は意外なものだった。

『ひどい、こんな可愛いお人形さんを捨てるなんて』

は？ つつ思わず声に出たわ。この子は私を気味悪く思わないだろうか。顔を上げると何とも屈託のない、同情の目。

『気休め要らないわ。私の噂聞かないの？ 無名の丘の毒人形つて』

思いがけずそんな言葉が飛び出した。別に女の子が嫌いとかじゃないんだけど、純粋な気持ちを向けてくる人間つてのが、まだ信じられなかったのよ。でも女の子は『ああ』と手を打つて笑う。

『そう言えば……。私、阿求ちゃんの本嫌いなんだ』

ここまで来ると、身構えていたのが馬鹿らしくなつた。『それでさ』と女の子が言いかけた所で、彼女は永琳に呼ばれて行つちやつた。

背中が離れていく時、無意識に呼び止めそうになつて、振り返つた女の子に『またね』つて言われて、急にホツとした。

その日無名の丘に帰ってから、不思議な心境だったわ。私の中の、そして今までバカにしてきた人間のイメージと、どうしてもそぐわなかったから。日本人形に話してきた恨みは、もしかしたらちよつと言い過ぎだったかもしれない。

だとしたら、日本人形に悪いことをしたかも、そんな風にさえ思えてきた。一人ぼっちの私に付き合わせて、知らない内に嫌な奴等の印象ばかりを吹き込んだ。少し間違えば、あの女の子みたいな明るさにずつと触れられないままだったかもしれない。

あの女の子の元に、日本人形を行かせられないだろうか、ふとそう思った。出会ってから言い聞かせた事への裏切りになるけど、その方がこの子にとって幸せかも知れない。

『ね、どう思うっ?』

答えないのは分かってたけど、聞いてみた。今更、という負い目でしょう。自分の心変わりだけで他人に寄越してしまうなんて、決心がつかなかった。

日本人形は無言。身動き一つしない。分かりきった事だった。

でも、見つめていると妙な事が起こったの。

日本人形の周りに、紫色のモヤみたいなものが浮かんだ。とつくに日は沈んで、周りの鈴蘭の色も分かりにくい筈なのに、妙に濃く浮き出るの。オーラみたいに。

え、何なの、つて戸惑っていたら、日本人形の瞳が急に、グルリと私を睨んだ。作り

物だった筈の目に確かに光が宿って、輝いた二つが私を射抜く。

次の瞬間人形がガクリと揺れたように見えて、次の瞬間私の腕に痛みが走る。

『うっ!?!』

驚いて自分の腕を見たら、人形が噛みついていた。開かない筈の口を開けて、歯を立てて、ギリギリと力を込めてくる。血は出ないけど、次第に固いものが歪む音がしてきた。

無我夢中で髪を掴んで引き剥がし、遠くに投げ捨てた。人形は鈴蘭の中をゴロゴロと転がって、顔だけ上げて恨めしそうな顔で私を睨む。呆然とする私を置いて、人形は生き物みたいに駆け足で、鈴蘭畑を去っていった。

—

次の日、朝になって夢でも見たのかと疑ったけど、腕には小さな噛み跡がついていたし、あの人形は探しても何処にも居なかった。

すぐに永遠亭に行って、永琳にそれとなく聞いてみた。もし私が連れ回した人形が、ひとりでに動き出すなんて事があり得るのか、って。……私に噛みついた事は伏せてね。

そしたら、永琳はこう言った。

『生命つて、元々毒みたいなものなのよ。鈴蘭とあなたの影響を受けたら、あり得るんじゃない？』

何ともないような口調だったけど、私はさあつと冷や汗をかいた。だって、動き出さずぐさま私に噛みついた、あの時の表情は。

明らかに私を憎んでいた。まるで捨てられてすぐの私を見たように、裏切られた憎悪にまみれていた。もし、本当にあの子が『毒』で動き出したとしたら。

その毒は私がずっと吹き込んだ、周囲への憎しみだったかもしれない。この世を敵だらけのように言い続けて、あっさり覆した無責任な悪感情。

それから、私は毎日あの子の様子を見に行つた。何故つて？ 私には分かるのよ。もしあの子と同じ立場だったら、優しい持ち主が欲しいなんて思わない。幸せになりたいなんて思わない。

きつと、今まで信じていた大嫌いな世界を守ろうとする。私だけが信じられたあの状況の為に、好きになれそうな人を信じられず嘘つきに決めつけて、消そうとするでしょう。

そうさせたのは私。散々手前の嫌な部分を見せて、目に映る光を塗り潰した、私なのよ。

結局例の女の子は大したことなく来なくなつて、また私は一人で永遠亭に出向くようになった。

でもね、代わりに迷いの竹林で、日本人形が歩き回っているなんて噂が立ち始めたのよ。もしかしたら女の子をまだ探して、出られずに迷っているのかもしれない。

今では、道中であの人形を探すようにしているわ。見つけた途端に何してくるか、ちよつと怖いけど……。

自分の、影法師だもん。

私の話はここまで。次は順番からして……妖夢ね」

二週目・四話目―魂魄妖夢

「私が四話目……ですか。自信ないなあ……」。

ああえーと、魂魄妖夢です。今回はこのような集まりに呼んでいただいて少々緊張して……え、前置きはいいい？ すいません、ちよつと良い語り出しが思い付かなくて。

うーん、どこから話しましょうか。

私の住む屋敷、白玉楼（はくぎよくろう）には、今現在私と冥界の管理人である幽々子様の二人が住んでいます。実は昔もう一人いたんですね。

それが私のお師匠様であり、お爺様でもある、魂魄 妖忌（こんぱく ようき）様です。お爺様は今天界にいらつしやいますが、私が幼い頃は一つ屋根の下で稽古や寝食を共にしておりました。

その頃、小さい時の私の話なんです。一つ癖がありました。癖というのは、食事やおやつの際によくあるんですが、ついつい欲張って、好きな食べ物を余計にねだったりした事、皆さんはありませんか？

私もご多分に漏れず小さい頃はワガママで、唐揚げやお饅頭なんかが残ったら決まっ
て自分が食べたいなんて駄々をこねていました。

けど、ただ言っても聞き入れられない、というのは子供ながらに分かっておりまして、ので、ちよいと一つ、私ならではの常套句があつたんです。

それが、この私の半身、もとい半霊を使ったものでした。幽霊とのハーフである私は、体の半分がこうやって周りをフワフワと浮いているんです。もちろん何をするにも動くのは私で、半霊はついてくるだけなんです、それを逆手に取ってこう言うんです。

『もう半分』って。

要は、食事の出来ない半霊の分まで私は食べなきゃならない。だからもつと食べさせて、という訳です。

聞いている通り無茶な理屈で、今思い出すとちよつぴり恥ずかしいんですが、お爺様も幽々子様も幼子の言い分ゆえに見逃してくれて、私はしよつちゅう好物を頼張つては得意になっていました。

そんなある日、お爺様が上機嫌であるものを夕飯の席に持ち出しました。小さめの壺に入つて、頂き物の高級なとろろだと言います。

とろろ芋を摩つたアレですよ。見た目はやはりドロドロしていて、初めて見た私はこんなのをご飯にかけるのかと驚きましたが、勧められて恐る恐る舐めてみたら、これが中々のもので。あつという間に三杯もおかわりしていました。

いつしか残りも少なくなり、お爺様も夢中で食べる私を見て微かに、困つた笑みを浮

かべ始めました。

その時になつても私は、正直食べ足りなかつたのですが、高級品というものもあり、その時ばかりは駄々をこねず、大人しく箸を置きました。せつかくの美味しいものなんだから、朝までとつて置こうと自分に言い聞かせて、お爺様が残つたとろろを水屋に仕舞いに行くのを見送りました。

……ところが、その夜。

お爺様も幽々子様もとうに寝静まつて、屋敷から一つ残らず灯が消えた頃。

私は布団の中で延々と寝返りを打っていました。何度も姿勢を変えて目を瞑るのですが、いつまで経つても睡魔は訪れません。

理由は、あの夕飯に出てきたとろろです。お恥ずかしい話ですが、あの絶妙な舌触りと塩加減が、お風呂に入つても歯を磨いても、床に入つてからも忘れられず、丑三つ時になつても私は布団の中でお腹の虫を鳴らしていました。

食べたい、という欲を振り払おうと布団に潜り込んで息を潜めました。依然として未練が収まりません。放つて置いたら夢にまで出てくるか、魂だけがとろろを指して抜け出して行くんじゃないか、そんな風にさえ思えた程です。

モノノケよろしく行灯の油でも舐めて凌ごうか、そんな考えが頭をよぎつた頃、私はようやく体を起こし、そつと水屋を目指しました。既に喉が堪えられない程に乾き、

引つ張られるようにフラフラと歩くのが精一杯でした。

冷たい夜風の吹く廊下を抜け、台所と繋がった水屋に行くと、醤油や味噌などの貴重な物が常備されていました。

土間、ひいては勝手口のすぐ近くでもあり、廊下にもまして冷たい空気が流れてきます。

寝巻き姿で脚が震えましたが、構つてはいられません。私の頭はとろろの事で一杯でした。体までフワフワと軽く、他の事を考えられなかつたのです。

暗い中で目を凝らし、キョロキョロしながら水屋の前まで進みました。

しかし、そこでふと足が止まつたんです。我に返つたか、そうではありません。

片方の耳、私の死角になつている水屋の隅の方角から、小さく水のような音が聞こえてくるのです。

ピチャピチャ、ペチャペチャ……。

雨音かと思いましたが、水屋に来るまでも雨なんて降っていません。いぶかしんでみると、音は次第にズズ、ズズツ、と濁つた音に変わっていきます。何か液体を啜るような、意地汚い音です。

何かいる。そう確信して背筋が凍りました。こんな夜中に、泥棒でもない、不気味な音を立てる何者かがいるのです。そう言えば屋敷は冥界に建っている。害あるものが

迷い込まない保障なんて、どこにあるのか。

背中に嫌な汗が滲み、心臓が早鐘のように鳴り響きました。戸口に隠れて震えながら、唾を呑み込む音をやけにハッキリと聞きました。

逃げよう、咄嗟にそう考えたはずでした。しかし脚はピクリとも動かず、首を少しずつ動かすのが精一杯で、しかもあろう事かその首は戸口の中へと向かつていくのです。

顔は既に泣きそうになっていました。しかしどういふ訳か、不安な時は正体を確かめたいという欲が生まれるものです。頭の中で嫌だ嫌だと何度も嘆きながら、それでも視線は闇の中を動き、ついに水屋の隅を捉えました。

『ひっ……いっ』

叫びそうになって、咄嗟に口を押さえました。暗がりの中、隅っこに女の子が座り込んでいたのです。手の中に小さな壺を抱え、頭を突つ込みそうな位に顔を近づけ、一心不乱にベチャベチャと中身を舐めているのです。

あの壺はとろろの入っていたものだろうか。それにしても一体いつの間に入り込んだのか。あの女の子は何なのか。思考が追い付かずにその場に立ち尽くし、目だけが釘付けになっていました。一步も動けないまま、数十秒か数分間か、私は女の子を見つけた姿勢のまま、目を見張って固まっていたのです。

すると不意に、女の子が顔を上げました。そこで私は、我が目を疑いました。

女の子は、私とそっくりでした。慣れた目で見れば見る程、鏡で見た自分の顔と瓜二つなのです。

口元は壺の中にあつたらしい液体でベツトリと汚れ、手元は白い肌がうつつすらと浮き出て、目はジロジロと上目遣いに嫌悪感に歪んで光っています。

パクパクと言葉を出せずにいる私に、女の子は壺の中身を見せました。そしてイヤイヤする子供のようには首を横に振り、言ったのです。声まで私にそっくりに。

『もう半分』

『ウギヤアアアーツ！』

その声が弾みになって、私は飛ぶような勢いでその場を逃げ出しました。脇目も振らず音を立てて廊下を駆け、自分の部屋に飛び込んで布団を被り、朝まで一睡もせずにガタガタ震えていました。

—

何時間も経つてようやく朝陽が昇った頃、私は結局あの出来事は何だったのだろうと思ひ返しました。とろろを食べたいあまりに幻覚でも見たのか、それともドツベルゲンガーでも現れたか。

寝不足では考えも纏まらず、寝ぼけ眼のままのそのそと居間に行きました。既にお爺様と幽々子様は身支度を済ませていて、朝食の用意がしてありました。

『どうした妖夢、顔色が優れないな』

お爺様は私を見るなりそう言いました。さぞかし目に隈が出来ていた事でしょう。昨晚の事を話すべきかどうか、目を泳がせていると、お爺様はニコリと笑い、こう言いました。

『殊勝なのは結構だが、無理はするなよ?』

『え?』

お爺様の褒めているらしい言葉に、私は話が分からず眉をしかめていました。その私の前に、幽々様がお飯を運んできました。

そのご飯は、昨晚食べたのと同じとろろご飯。あれ? では昨晚見たのは夢だったのか? ご飯を見つめたまま混乱していると、お爺様は言いました。

『夜の間、よく儂の痰壺をすっかり綺麗にしてくれたのう……』

『いっ?』

聞いた瞬間、体がズツシリ重くなり、背中に陰鬱な気配を感じました。そして思い出したのです。昨晚の不気味な女の子が、食べ足りない時の私のように『もう半分』と言ったこと……。

まさか、そう思って振り返ると、半霊が私の肩にのし掛かっていました。心なしか土気色を帯びた、痰のような色をし、ぐったりと……」

「……………」

「それ、ギャグじゃんか!」

妖夢の話が終わって開口一番、燐が言った。気まずい顔をして言い淀む妖夢に、メデイスンが追い討ちをかける。

「で、美味しかった? お爺ちゃんの痰カスは……」

「ち、違います! 実際に食べた訳じゃありません!!」

「何だ、実体験じゃないのか?」

慌てて反発する妖夢に、隣の赤蛮奇が疑問を挟む。妖夢は周囲の白けた顔(私含む)を眺めて俯くと、歯切れの悪い口調で言う。

「実は、良いお話が無くて……何処かで読みかじった小説の落ちを、拝借、しまして……」
「何じゃ、くだらない。途中まで期待させておいて」

「マミゾウが壁にもたれて息をつくとき、妖夢は口を尖らせて黙りこんでしまった。ここ

で悔し紛れの言い訳などをしないのが彼女の潔きである。妹紅は呆れて半分眠ったような目をしている。かくん、と頭が落ちかけ、堪えながら呟く。

「じゃ、とりあえず次にいくか……」

「あたい、剣士さんの半霊がなんだか鼻水に見えてきた……」

「私は卵の白身に……」

「やめろ、白身が鼻水みたいじゃないか。……妖夢はともかく」

「なっ、皆酷いですよう!!」

叫ぶ妖夢を無視し、皆はげんなりして口々に言い合う。書く言う私も……暫くとろろが食べられなくなりそうだ……。

二周目・五話目—赤蛮奇

「次は私か。私は赤蛮奇。普段は里で人間の振りをしているろくろ首さ。あんまり顔は合わせないかもしれないけど、とりあえずよろしく。

先生、貴女は寺子屋で勉強を教えているんだよね。読み書きとか算術とか、あとは妖怪の対処の仕方とか、かな？

ふうん、やっぱり人間となると面倒臭いものを学ぶんだね。そこらの野良妖怪とか、学が縁が無さそうな連中だと会話さえ成り立つか知らん。

環境つてやつぱり大事だね。子供の内から何を言われるかで、その後の人生つて大きく左右されるからさ。

ん？ 何がいいたいか？ まあそう慌てなさんな。内容を思い返して、改めてちよつとね。

ともかくは、話を聞いてもらわなきや始まらない。下手でも聞き流さないでくれよ。

迷いの竹林に、一人の臆病な妖怪がいる。普段はひっそりと暮らしているから、知らない人も多いかな？ 今泉 影狼（いまいずみ かげろう）っていう女の子なんだが、狼女って種族でね。見た目は一見普通なんだけど、満月の夜にだけは全身に狼の毛が生える。

その時の姿に限っちゃ、ちよいと凄みがあるね。先生も満月の夜には獣っぽくなるらしいけど、向こうの場合は完全に人ならざる力強い姿だ。

ただ、肝心の本人は恥ずかしがっていたんだけどねえ。『満月の日は毛深いから来ないで！』とか言つて、おまけに人間を怖がってなかなか竹林から出ないわで、狼女といっても実際見たら、あんまし威厳は感じないと思うよ。……可愛いけど。

で、その彼女がしばらく振りに、人里へ足を運んだ日の事だった。買い出しなんかの用を済ませて、里の出口まで急いでいた時だ。

一人の女の子が、ポツンと里の端っこに立ってしくしく泣いていた。着物は汚れてボロ口同然で、髪も肌もろくに手入れされていない、見るからに貧しい身なりの子。

先生、貧民窟の事は知っているかい。里の中でもいっとう貧乏で、隅っこに身を寄せあつて暮らす、そんな奴等の溜まり場だ。里の住人でも近寄らない位だから、先生も詳しくないかな。とにかく見た目と見つけた場所からして、女の子が貧民窟の子供だとすぐに分かった。

影狼は何事かと駆け寄って声をかけた。乱れた髪の間から覗く目は涙も流さず、諦めるような淀んだ色に警戒心を湛えていた。

『お嬢ちゃん、何かあったの?』

再度問いかけて見たが、女の子は無言。辛うじて動く視線は影狼ではなく、一杯になつた買ひ物袋に注がれている。

影狼はこれ以上深入りしても仕方ないと思つたのか、袋の中にあつたお饅頭を一、二個取り出して渡して帰っていった。

名前も知らないし、お世辞にも愛着を持つてもらえたとは思えない。だけでも影狼は何故かその子の事が気になつた。偶然見かけたから、と言えばそれまでだが、放つて置けなかつたんだろうな。

その日から影狼は時々私も伴つて、その女の子に会いに行つた。住んでいる場所が近いのかいつも同じ場所に立っていて、次第に名前くらいは覚えてくれるようになった。

でも、何故女の子が最初に泣いたりしていたのか、その理由は聞けないままだった。『施しをやるだけじゃ何の解決にもならぬぞ』って、私は忠告したが、影狼もどうしたら良いか分からなくて、曖昧に頷くだけだった。

その内に一ヶ月近くが経ち、満月の日が来た。その日も影狼は気掛かりで、女の子の元へ走つた。ただし妖怪の姿が顕になるのを恐れて、昼間の早い内にね。

貧民窟の一角にそつと踏み込み、いつもの姿を探す。すぐに女の子は見つかったが、その時ばかりは様子がおかしかった。

苦しそうにお腹を押さえて、今にも蹲りそうな程、ヨロヨロと頼りない足取り。影狼が咄嗟に支えると、顔は真つ青で血の気が引いていた。

これはただ事じゃない。そう思つて肩を揺さぶつて呼び掛けると、女の子は虚ろな目を微かに開く。

『おね……さん。』

その声は掠れていた。

『具合悪いの？』

『お腹……痛い』

言つたそばから表情が苦痛に歪む。少なくともただの腹痛じゃない。余程の病気だ。放つて置いたらまずいと思つた影狼は、すぐさま病院に行こうと言つた。

けど、女の子は首を横に振る。

『どうして!?!』

『……お母さんが……』

女の子はポツリと呟いた後、また無言になった。焦つた影狼は黙つて勝手に行けないうらと、家を教えてくれと言つた。

でも、女の子はまた首を横に振って、俯いてしまった。どうして駄目なの、このままじゃ治らないよ、って何度も頼んだんだけど、何も反応は返って来なくなつた。

影狼は困り果てた。病院にも行けない、親にも会えない。強引に永遠亭に連れて行つたりしたら、妖怪の自分はどんな非難を受けるか分からない。それにしても、苦しんでいる他ならぬ本人が、ここまで対処を渋る理由は何なんだろう……。

苛立ちと困惑が頭の中をグルグルと巡り、ふとした瞬間に影狼は、自分を見つめる女の子の視線に気付いた。しかめた顔でも、目の奥は相変わらずどんよりと曇っている。

苛々しているのが伝わったか、そう慌てた影狼に、女の子はやっと口を開いた。が、その発言は今までの受け答えとなんら関係のないものだった。

『お姉さん。私、臭くない?』

『は?』

あまりに唐突な質問に、影狼は目を丸くした。しかし、女の子の表情は悲壮で、必死なように見えた。影狼も一時期、自分の臭いを気にしたりなんかしたが、そういう妖獣特有の悩みとも違う。気にかかつて仕方なくなるような、精神的な偏りの心配がした。

影狼も狼の特長を持って鼻が利くから、仕方なく女の子の体を嗅いでみた。確かに貧しい子らしく不衛生ではあったが、特段気になるものでは無かった。

『何も臭わないわよ。大丈夫』

『本当？ 本当に？』

影狼は微笑んでみせたけど、女の子はしつこく聞いてくる。いい加減あしらう訳にもいかず、思い切つて尋ねてみた。

『ねえ、どうしてそんなに気にするの？ 何かあつた？』

影狼の問いに、女の子は弱々しく目を逸らして、小さく震える声で言った。

『……お母さんが……私は、動物だって……』

『動物……』

それっきり、女の子は口をつぐんでしまった。相変わらず要領は得ないが、影狼はしかし動物という言葉に思い当たるものがあつた。

もしかしたら自分と同じように、獣の姿に変わる習性があるんじゃないか、と。教育の行き届かない貧民窟のこと、妖怪の特徴を持つてしまった子供に酷い扱いをするのは、あり得ない話ではなかつた。

ましてや満月の日となれば、体調に変化があるのも領ける。

影狼はとりあえずまた明日来ると伝え、こつそり私の家に来てある事を頼んだ。

夜の間に、変わった事が無いか見張つてくれ、と。

影狼の見立てではやはり満月の、それも夜がどうしても怪しいという事だつた。影狼が変身してしまう夜の間、私に女の子の事を頼んだんだ。

臭いを嗅いだお陰で、影狼は臭いを辿って女の子の家を突き止めていた。私は正直、面倒臭かったけれど、今まで付き合ってきた手前で断ることも出来なかつた。

んで、日が暮れてから私は例の家の周りに隠れた。少しばかりは工夫を凝らしたよ。私がスベアに持っている首を使って、場所を取らずに色んな隙間から家を覗いたんだ。土間に台所、寝室に風呂場、何処で何が起ころうがこの目で確かめられるのさ。

そうやって……見ることが出来たんだ。女の子の元気が無かつた訳を。

彼女はまさに『悪魔の子』だつたんだよ。

食事は獣のように這つて、箸も使わずに床に置いたものを食べた。

風呂に母親と入つても、お湯に終始おびえて震え上がつていた。体を洗う様子も、安らぐ様子もない。

寝る前も満月を惚けたように見つめて、朝まで眠らずに過ごしていた。ずっと身をよじるようにして、体を強ばらせていた。

明らかに普通の生活は出来て無かつたよ。家族とろくに会話もなく、唯一目だったのは警戒するような、怖がるような、そんな動物的な視線だけだつた。

まあ、家族といつても、いつもは母親と二人だつたようだが。久々に帰つてきたと言う父親は、娘の傍で寝ていたけど、私は心中とても穏やかじゃなかつたねえ。

その次の日から大変だつたよ。影狼に訳を話して、竹林の医者に手を回して、往診の

体を演じてもらって……。どうにか診断をでっち上げて永遠亭に連れて行った。何かあつてからじゃ遅いからね。

今でもその子は家に帰れていない。満月の夜には唸るような声をあげて苦しみ、兎には嘔みつきそうな睨みを利かせて、風呂にも嫌がつて入ろうとしない。

それどころか最近は何理由もなく暴れだしたり、理性の乱れも深刻なようだ。

恐ろしいのは、目立たない場所にいくらでも、同じような子がいておかしくないって事さ。目もくれずにいた他人が、ふとした瞬間に牙を剥いて、人とは思えない事をしてかす……。今回は医者に預けられたけど、まだ……まだまだ、地獄から出てきたような連中が潜んでいるだろう。

明日、自分がやられるかもしれないよ？

……ん？ 何だいその目は。何か隠しちやいないかって？

……はは、やっぱりバレてたか。余程ニブくなけりや気づくよねえ。

結論から言おう。

女の子は普通の人間だった。妖怪の気配なんて欠片もない。

ただ、栄養失調気味で……体が、生傷だらけだった。何カ月も前のものから、最近まで。

察しはつくだろう。……虐待さ。

皆に嘘は話しちやいない。

ただ、床のものを食べるのは母親に命じられて、生ゴミや腐った味噌汁を。

風呂ではお湯に怯えたそばから浴槽に顔を沈められた。

そして、彼女の父親がね。中々忙しい奴だったんだ。仕事で何日も帰れず、ちようど娘と顔を合わせるのが一月ごと……満月がまた丸くなるまでかかるらしかった。

その満月の夜に、父親は娘の近くに寝る。それこそ、手が届いて……身体中を撫で回せる位に。

繰り返すが、女の子は人間だ。それこそ毛なんて少しも生えていない、まっさらな、ね。

言つたろう。『悪魔の子』だって。

女の子は苦痛から他人を信じられず、決まった日の夜に悪夢に苛まれて、おまけに食らわされた暴力を学習して、周りに振り撒くまでになった。

知らない奴が見たら人間じゃないと思うかも知れない。そうさせたのは親だ。あの子を産んで苦しめた、二人の畜生なんだよ。

そして女の子が気にした自分の臭い……。医者が言うには、自分が愛される自信がない、そんな時に出る妄想の体臭が、あの子を未だに苛んでいる。

なあ先生、もしかしたら今後、里で行方不明者が出るかもしれない。だけどどうか騒ぎを大きくしないで欲しいんだ。

これでも随分悩んだんだよ。だけど、どう考えたってあの両親は生かす価値を感じない。むしろ血の繋がりが重荷になったら迷惑だ。

とつとと死んじまつた方が良い。先生や影狼に止められようが、この手でぶつ殺してやる。

本気か、だって……？

くく、まあ今はどうでもいいじゃないか。それより次の話をしよう」

二周目・六話目—ニツ岩マミゾウ

「おう、次は儂か。しかし何かが足りないなあ……」。

そうだ、七人来ると聞いたが、まだ現れないな。本当に呼んだのか？

まあいいか。儂の名はニツ岩マミゾウ。命蓮寺で金貸しをしておる。首が回らないとか一発当てたいとか、用があれば訪ねてくるといい。なあに、万が一素寒貧になつても寺に入門すれば死にはしないぞな。

……で、金はこの際どうでもいいとして、ちよいと仲間内での事を話そうか。ちよいと耳を貸せ。

そもそも命蓮寺がどんな寺かといふとな、聖なる尼を中心にして集まる、人妖混じつて修行をする場じゃ。

もちろん人と妖怪が集まる意味はある。聖は妖怪の差別を無くすべしという信念を持つ輩でな、人も妖怪も自らの存在を問ひ直し、互いに変わつて歩み寄れるようにと修行を課しておるんじゃ。その主義に賛同するかはともかく……骨のある人間じゃな。

だが、味方ばかりでは無かつた。今も昔も。

幻想郷が出来るより遙か昔の時代、聖は周りの人間たちから『妖怪の肩を持つ人非人』だの『いつ敵に回るか分からない』と言われて魔界へと封印された。それから長い長い間、聖は現世に戻れなかつたんじや。他にも地獄に追いやられたり、同志は散りぢりさ。その間聖の居た寺には、後に話すが留守を護る妖怪たちが残された。いつまた会えるかも知れない聖を待ちながらな。

時間にして……千年近くか。儂は当時を知らぬが……筆舌に尽くしがたいものだったじやろう。信じていた教義も人も、他ならぬ、信じて欲しかった人間たちによつて裏切られ、失われた。そこから寄り添う事もままならず、人は死に、時代は移り変わり、自分たちは忘れられていく……。

妖怪の感覚にしても、期間で片付けられるものでは無かつたろう。いつか帰つてきてくれる、そんな保証もないまま思い出の場所を護るなんぞ、ただの苦行よりずっと残酷な事よ。

そもそも、今こうして寺の連中が集まっているのも、元を辿ればただの偶然じや。忘れ去られた事や地底の異変のいざこざで昔の面子が結集し、新たな異変を起こしてまで聖の封印が解かれてやつと再会を果たす事が出来たのじや。

その時の喜びようといったら無かつたらしいぞ。やはり志を共にした仲間というのは、他に代えがたいものなんじやろう。

……儂はその時いなかったんじゃがな。もつと言えば知り合いも若干おいてけぼりだったそうな。はっはっは。

まあそれはさておき、幻想郷に居を構えてからは、皆も知る命蓮寺勢力としての生活が始まった。修行に励み、毘沙門天の代理としてあの妖怪が人を集め、聖が説法をする……。新たに折り合いの悪い連中が現れたりもしたが、変わらずいつか人と妖怪が『同じように』暮らせる時が来ると信じて、身を砕いておる。

その中でも特に熱心な奴がおった。さつき言った毘沙門天の代理、虎の姿が滲み出る妖怪。虎丸 星（とらまる しょう）という奴じゃ。

こいつは先ほど言った留守を任された妖怪でもある。独りぼっち……。いや、細かく言えば毘沙門天からの御使いが側についてくれたらしいが、やはり孤独に苛まれながら寺の再興を願ったじやろう。

悲願を以て風雪に耐えた星の、聖の役に立ちたいという気持ちを疑う奴は一人もいない。

今だつて欲深い人間が命蓮寺に来ようが、ちんけな道士がちよつかいをかけてこようが、威厳を持って接し、本尊としての役目を果たしておる。

ちよつと身内には、宝搭を無くしたとか言つてオロオロしたり、悪さが過ぎた奴にカツとなつて怒り出したり、完璧な奴には見えないが……。まあ内外含めて、頼れる奴

として通っている。

だが……幻想郷で仲間にも恵まれ、立ち直ったように見えて、星は未だに苦しんでいたようじゃ。

半年程前じゃったか、夜中に厠へ起きた折り、ふすま越しに話し声が聞こえてきた時があつた。

星と聖の声。それも何やら真剣らしい、沈んだ声色じゃった。思わず聞き耳を立てると、星の小さい涙声が。

『ごめんなさい……ごめんなさい……』

絞り出すような声色で、何度も繰り返していた。項垂れる様子が目に浮かぶようじゃった。それを慰めようと、聖が穏やかに言う。

『よしよし、大丈夫……大丈夫ですよ』

聖はあやすようにひたすらその言葉を繰り返した。一体何があつたんだろうと耳を澄ますと、星はしやくりあげながら、一人懺悔するように話し続けた。

『私は……人間たちの憎悪を恐れて、聖を……！ 信念を曲げて、人間の味方を演じて……』

途切れ途切れではあつたが、聞く内に段々と意味が掴めてきた。聖が封印された当時の事。

人間たちが聖に不信を抱き、敵として糾弾しだした時、星は人間に味方し、聖の封印を止めなかった。

止められなかったんじや。星は人間の信仰が無ければ、毘沙門天の代理として、あの妖怪の姿を保てない。たとえ自分の心を押し殺し、師を独り魔界に閉じ込めようとも、寺と教えを滅ぼされぬ為にはそうするしかなかった。

その事は寺の中では周知の事実じやったし、解決済みの事として誰も責めたりはしていなかった。しかし奴の中では罪の意識が消えなかったのじやろう。千年の別れは、たとえ本人が赦そうとも星の心を締め付けていた。

微かに隙間を開けて覗くと、やがて小さく嗚咽を漏らすだけになった星を、聖は何も言わずに抱き締めていた。落ち着いてくれるかとハラハラしたが、当事者じやないだけに出ていく事も出来ず覗いたまま身を竦めていると。

聖はふと、こんな事を言った。

『貴女は、情よりも私の教えを絶やさない事を選んでくれたんです。それは立派な事ですよ』

すぐには星は頷かなかった。そりやあ苦渋の決断だったものを、誉められてすぐに受け入れられるものではないじやろう。しかし聖はじっと目を合わせながら続ける。

『貴女の決断がなければ、私たちは人間と対立を深めてしまったかもしれませぬ。』

それを避けたお陰で、こうしていられるんじゃないやありませんか』

『でも、聖は……それにムラサ達だつて……!』

『他の皆も、人間との共存を捨ててはいませんよ。あの年月を経てそう思つてくれるのは、星が諦めなかつたお陰じゃないですか』

ゆつくり、ゆつくり貴女は悪くないと伝えていく。罪悪感をどうにか取り除こうとしたのか、最後に聖はこう言つた。

『貴女は、未熟な私に代わつて堪えてくれたんです。断腸の思いで、好きなものも犠牲に出来る、英雄ですよ』

『えい……ゆう……?』

『そう、英雄です』

その言葉は、聖にしてみればたまたま当てはめただけだったかもしれない。儂も英雄なんて言葉、どちらも好んでいた記憶はなかつた。しかし星は嬉しかったのか、幾分か明るい表情になつていた。

儂はそれでとりあえず解決したと思つていた。その時は、な。

次の日、寺に一人の人間がふらりと迷い込んできた。見慣れない服装で外来人らしかつたが、どうにも挙動不審で痩せこけた、薄汚い怪しい奴じやつた。

寺の仲間も皆、話しにくそうにしていたが、星が意を決してその男に事情を聞いてみ

た。どこから来たのか、自分の事は覚えてるか、と。

すると、彼はなんと自殺者だったらしい。恐らく再思の道から流れ着いた、『価値のない魂』と言われるものじやろう。大抵は幻想郷に来て早々に妖怪に食われてしまうものなんじやが、その男は運が良かったらしい。

聖は男を風呂に入れ、ちよつとした説法をした。幸い男の性根はそれほど腐っていない、子供のように泣き出した。

寺の奴等は男を慰め、死んでここに来たなら寺で預かろうとすんなり決めてしまった。男はそりやあ感謝したものだ。幻想郷が妖怪だらけの場所だと聞いたら、なおさらな。

ただ、本当の事は言えなかった。男は死んでいたのが普通で、幻想郷ではそれが黙認されているだなんて。

またしばらくして、例の男も寺での生活に慣れてきた頃。

今度は星の様子がおかしくなりだした。口数が少なくなり、聖の説法を聞いていてもボンヤリしたり、塞ぎ込んだりする事も多くなった。

喧嘩したりする事はあっても、そんな風に暗くなるのは珍しかったから、皆も心配しだした。最近の迷い込んだ男が原因じゃないかと勘ぐる者もいたさ。

じゃが、あの英雄と言われた時の事は、当然儂と聖以外、思い当たる者はいなかった。儂が関係があると確信したのは、偶然星と二人きりになった時じゃった。

儂が縁側で、一人で茶を飲んでいたら時じゃった。いつものように星が黙って口を結び、庭を歩いていった。

儂はまたか、と内心ため息をついたが、一つ、目を引くものがあつた。星があ的那天の新聞をじつと読んでいたんじゃ。確かまた『博麗の巫女が〇〇の快挙!』なんて記事じゃつたと思う。

そんなものが珍しいのか気にはなつたが、折角の話の種。暗いニュースでもあるまい、儂はこれ幸いと声をかけてみた。

『おうい、そんな紙束の何が面白いんじやい』

軽口混じりに呼び掛けると、星がきつと振り向いた。その顔は相変わらず沈んでいたが、眉をしかめて真剣そうじゃつた。何事かと思わず身構えると、星は暫し目線を落として、言いくそうに口を開いた。

『あの……彼の事なんですが』

『な、何じゃ、何かしでかしたか』

その時は、やはり原因はそれか、と考えた。しかし星の次の言葉を聞いて、儂は戸惑つてしまった。

『彼のような立場の人って、やっぱり……大抵は死んじゃうんですよ』

星が真っ直ぐ見つめてくると、儂は答えに詰まってしまった。結論から言えばその通りじゃ。幻想郷は外から自殺者や犯罪者を引き入れて、裏で妖怪の食料にしておる。

それは公然の秘密であつたし、嫌悪感を示す妖怪も、目立たないながら一定数いた。星もその一人じゃ。

『そうやって人を襲うのが、妖怪の定め……』

『んな悲観しなくとも。それが出来ない奴等の為に、この寺があるんじゃないか』

表情に影が差して、儂は慌てて叫んだ。すると星はこう言い返す。

『ええ、私は異端なんでしょう。幻想郷は今も昔も』 そういう場所』 なんですから』

吐き捨ててから、持っていた新聞に目を移した。いつの間にか握り潰されて、クシャクシャになった一面記事には、博麗の巫女の写真があつた。

『英雄って……ヒーローって、何なんでしょうね』

その台詞を聞いて、あの夜の事を思い出した。どういう繋がりがあるのかといぶかしく儂を余所に、星は独り言のように呟いた。

『いくら異変を解決しようが、その裏で、見えない色んな場所で人が死んでるじゃないですか。』

……だから妖怪は怖がられて、巫女は活躍して、その繰り返しじゃないですか！』

星は最後には激昂して、しかしいつもの怒った顔に戻ったかと思うと、プイツと踵を返して行ってしまった。

儂は暫く言った意味を掴めずに、呆然としていた。

星の台詞に、ピンとくる奴は……この場にいるか？　まあいい。儂も後になつて色々と考えて、やっと想像がついた位じゃからな。

少し、現代の話を……『ヒーローもの』つて、外の世界にあるのを知っておるか？　架空の物語の中に、強いヒーローと悪者がいて、長きに渡つて戦い続けるという……まあ、昔の陰陽師と妖怪の戦いを描いた古典と似たようなものさ。

これが中々人気でな、手を変え品を変え、何十年も続いておる。やはりそういった娯楽はいつの時代もあるのじゃろう。

しかし、それらはある程度大きくなれば皆離れていく。所詮は夢物語さ。現実は超人的な超能力なんぞあり得ないし、悪の秘密結社なんぞあり得ないし……自分を庇つて犠牲になる仲間なんてのも多分、出会う事は無かろう。

自他の平凡さに気づく、大なり小なり、それが離れる共通の理由さ。

ならば翻つて、幻想郷ではどうか。

これがまた、全く事情が違つてくる。巫女や魔法使いは一目置かれるし、妖怪は人を食うし、スペルカードルールを利用して異変を起こしては悪役を演じる。時にはドラマ

チツクな展開も有りうるのよ。

まるで現実世界の裏返し。そこでは陰ながら苦しむ人なんて無視どころか、悪の所業の引き立て役だ。助けたいなんて、そんなのは許されない。筋書きが陳腐になっちまうよ。

なあ先生、何処の事を言っているか分かるかい。そう、人里の事さ。怒っているようだが、見苦しい言い訳は止すんじゃない。歴史に詳しいなら、変革に数の力が必須な事くらい分かるじやろう。あの狭つ苦しい集落に閉じ込めるのは何故か、知らぬ訳でもあるまい。

星はそんな仕組みされた、英雄と悪役にお膳立てされた世界に嫌気が差したんじゃない。だからといって地道に要求を通すのは、全く展望が見えやしない。

あるいは、長い長い間に寺を守り、結局は他人の異変のお陰で再開を果たした事で、チマチマした努力を信じきれなかったのかもしれん。

星はある考えに取りつかれて、とうとう事件を起こしてしまった。

その日の夜の事。儂は昼間の星の態度が引つ掛かって、中々寝付けずにいた。廁に起き、またあの日のように同じ部屋の前を通っていた。どうにも胸騒ぎがしたんじゃない。

足音を立てないよう、そおーつと部屋に近づく。また二人で話していたりするのだから。だとしたら見守り、何かが起これば今度こそ止めよう、そう考えながら一步一步

足を進める。そして手を伸ばして覗ける程度まで、近づいた所で……

バン！ ドスン！ と誰かが争っているような物凄い音がした。まさかも遅かったか、と咄嗟に飛びついて、襖を開け放った。

そこにはやはりというか、星と聖がいた。しかし儂は予想外の一点に目を見張り、暫くその場から動けなかった。

……星の前には聖が蹲り、それを見下ろす星の手には、正装の時に携える槍が握られていた。槍の先からは黒ずんだ液体が滴っている。聖は脇腹から血を滲ませ、手で押さえたまま、信じられないという表情で星を見上げていた。

『おい、何をしとるんじや！』

我にかえって星に飛びついた。星は儂には目もくれず、聖から視線を外さない。その目は間近で見るとまるで死人のようじゃった。

『……聖に恨みでもあるのか』

そんな月並みな事を言うのと、星は口だけを微かに動かして言った。支離滅裂で、しかしある意味腑に落ちるような言葉を。

『いえ、聖は私にとって、一番大事な人でした。

だから犠牲になつてもらわないと。私が”英雄”になる為に』

……英雄が大きく幅を利かす世界の中で、星が選んだ変革の方法は『英雄になること』だったんじやろう。

その実順番も手段も狂っているが、奴とて必死だったんじやろうな。何度宥めて聞かせても、英雄だ英雄だ言つて聞かなかつたよ。

今では何事もなく日々を過ごしているが、人は呆気なく狂うもんじやなあ。あれ以来しみじみと思い知らされたよ。

お前達も気を付けるがいい。世の中、腹の中で何を考えるやつがいるか分からんからな。

儂の話は終わりじや。次が七話目、でよかつたか？」

二周目・二ツ岩マミゾウEND―『虚構の英雄』

……マミゾウの六話目が終わった。七人目は未だに来ない。それはそれとして、皆は無言だった。不機嫌という訳ではないが、やや重苦しい雰囲気に含まれている。

原因はマミゾウの話した怪談、もとい寺で起こったいざこざの話にある。幻想郷というシステムに疑念を抱き、壊れかけた妖怪の話。

今更だ、と鼻で笑う者もいれば、思う所があるのか宙を睨んで思考に耽る者、ぼつが悪そうに俯く者と反応は様々であったが、共通しているのは『感想に困る』というものだろう。

何しろその世界に暮らすものにとっては、『ちよつと面白い話しようぜ』と集まった筈なのにいきなり政治談義を始められたようなものだ。

私個人としてはそういった話題自体は嫌いじゃ無いし、全くするな、等と言うつもりもないが……

時と場合による。この気まずい雰囲気のままに良い例だ。ことに、ニヤニヤと周囲を見渡すこの狸のように、自覚して敢えてやる場合はタチが悪い。

「あー……妹紅。七人目は結局誰だったんだ？」

気まずさに耐えきれず、隣の妹紅に話を振る。彼女はつまらなそうな顔で振り向いた。

「いや……今更聞いて何になるんだよ」

……確かにそうだ。名前が分かってもこの場に来てくれない事には話が進まない。我ながらつまらぬ質問をしてしまった。自分の会話のセンスの無さを、ここに来て再び恨む。

「……まあいいか。寺子屋に誰かが来たら、私が対応しておこう。ここで解散とするか。皆、お疲れ様」

自分なりの愛想笑いを浮かべて別れの挨拶をすると、各々がゆっくり腰を上げる。撤回となる怪談の雰囲気もどこへやら、飲みかけのお茶をそのままに帰り支度をする者や、逆に勿体ないからと一気に飲み干す者もいた。夜も更けあとは帰るだけとなった面々が、解放された面持ちでメンバーと軽くお喋りを交わしだす。

「大した怖く無かったわね」

「お嬢ちゃん、良ければ送っていいこうか？」

「あの、むしろ、私をお願いします。怖いので」

「……あれ、酷い顔してるね剣士さん」

「古くなったジャガイモみたいだよ」

ザワザワと和やかなのかよく分からん喧騒をよそに、私は杯をお盆にまとめ、座布団を隅に重ね、黙々と後片付けを進める。妹紅も手伝ってくれているが、少々運び方が雑だったりと心配になる。寺子屋の、放課後の生徒などもそうだが、自由になつた途端に性分というのが見えてくるものだど痛感する。

「すまない、トイレだけ借りてもいいかな？」

「……ああ、右に曲がつた突き当たりだ」

赤蛮奇が近寄つて来たから、手伝つてくれるのかと顔を上げればこの台詞である。恐らくトイレが済んだら一人でそそくさと帰るだろう。一番の近所なのだから少しくらい……。

それを口に出そうか迷っている間に廊下の方に消えてしまった。せめて襖は閉めていかないか。

「先生、さよなら〜」

「お邪魔しました……」

「おう、気をつけて帰るんだぞ」

玄関口にいる連中に声を張り上げた直後、ガラガラと戸が開け閉めされ、一段の静寂が部屋を包む。粗方片付いた後は忘れ物などしていないか、一応部屋を見回して確かめ

……

後は、妹紅の他に残った厄介者に目を向ける。

「ぷはあつ」

暢気そうな吐息を吐くその女、ニツ岩マミゾウである。彼女は私が解散を告げるなり部屋の隅の丸まった羽織を取り、くるまっていたとつくりを取り出してどつかと腰を下ろすと、あろう事か酒をあおり出したのである。私と妹紅がセカセカ動き回っていた間もずつとそうしていたらしく、既に頬に朱がさしている。

「マミゾウ、お前はまだ用があるのか？」

「いやあ……なんだか、自分の中で収まりがつかなくてなあ」

仄かに酒の香りを漂わせながら、マミゾウはフツと目を伏せる。酔いが回って眠そうに目を細めていたが、その中にやりきれなさそうな寂しげな光が見て取れた。

「あの一件以来……儂が最近まで現代に居たせいかは知らぬが、何か引つ掛かってな」

マミゾウは壁に背中を預け、天井を見上げた。特に面白そうでもなく、二、三度瞬きしたきり動かない。

「星の奴は、清濁併呑なんぞ苦手そうだからなあ……」

ぼそぼそ、呟くように言ってから、マミゾウは笑顔を消して目を閉じた。すぐに寝息が聞こえてきそうな顔だ。

「おい、何でもいいけど、ここで寝るなよ」

妹紅が近寄って肩を揺らす。マミゾウは不機嫌そうに唸って薄目を開けると、強引に肩に担がれてしまった。

「む……………」

「慧音、こいつは私が送っていく。邪魔したな」

妹紅は早口でそう告げると、よろめくマミゾウを支えながら出口へ歩いていく。

マミゾウのやさぐれにも似た態度が気にかかりながらも、ぼんやり遠ざかる背中を眺めていた。

しかしその時だ。

「嫌じゃあ。オイ妹紅、まだ慧音に話があるんじゃない。離しんしゃい」

「え？ 私か？」

ろれつの回らない口で名を呼ばれるが、妹紅はウンザリした顔で振り返った。

「放っておけよ、酔っ払いの戯れ言だ」

妹紅はなおもマミゾウを引きずって行こうとするが、私はその横に駆け寄った。何も言わない内に私の肩にもたれ掛かるマミゾウの隣で、妹紅が怪訝な視線を向ける。

「……………おい慧音」

「酔って万が一里で暴れられたら、私も困るからな。七人目には悪いが、戸締まりをしと

こう」

出任せ、という程でもないが、実際の所マミゾウの発言が気になる、というのが大きな理由だった。職業柄か、接触を求める人物を無下に扱うのは気が引けるのだ。酔っ払いは子供のようなものとも聞くが、それもあるだろうか。

灯りを消し、戸に鍵をかけて三人で里の外へと歩き出した。とうにどの家も暗闇に溶けた時分とはいえ、夏だけに生ぬるい湿った空気が頬を撫でる。

「暢気に寝とるなあ、人間ども……」

マミゾウが低い声で喉を鳴らす。舞台の悪役のような、わざとらしい嘲りだった。

「言っておくが勝手な事するなよ。夜でも人間の住みかなんだからな」

「へいへい、分かっておるよ」

妹紅が釘を刺すと、マミゾウはヘラヘラと肩を竦めた。首にぶら下げたとっくりがちやぷんと音を立てる。

「その通り、里の外じゃあ、あやかしの時間さ。人を化かそうが、食おうがお咎めなしじゃ」

独り言にしては大きな声だった。私も妹紅も見ちゃいないが、空を見上げる両目は雲に隠れた月に照らされ、薄気味悪く光っていた。

「但しい！もし馬鹿な小童が襲われても、先生は何もしちゃいかなぞお。馬鹿は教え

ても治らん、死んでも治らん。かっかっか」

「……………」

「……………さっさと行こうぜ」

寝静まった里の中で、マミゾウは賑やかに、しかしちつとも楽しく無さそうに笑って肩を揺らしていた。

結局、私達は命蓮寺の方向を目指し、揃って細い林道を歩いていった。その間マミゾウが何を話したかと言えば、『一人で里を守るなんてご立派だ』だの、『今まで生徒が何人食われた』だの、いかにも煽るような口調と表情で言い続けるのだ。

つまり何が言いたいのかとは気にはなつたが、それ以上に言葉の端々に悪意が見て取れた。のらりくらりと誤魔化してはきたが、里を出てからこつち、とうとう怒りが湧き始める。妹紅などはとうに額に青筋を作っていた。

「未来のある子も等しく犠牲になるのさ。我々妖怪の、代わり映えしない箱庭の未来……………」

再び管を巻き始めた所で、妹紅がマミゾウを振り払い、道端に放り投げた。

「おわっちー！」

マミゾウは千鳥足になりながら木に手をつき、どうにか体勢を立て直した。それを見て長いため息をついてから、妹紅は私を振り返る。

「もう良いだろ。後は私一人でやる」

「あ、ああ……」

その声が想像以上にドスが効いていて、思わずたじろいってしまった。何とも後味の悪さを覚えながら引き返そうとした時、背中にまたあの間延びした声が響く。

「待てえ先生、あと一言」

振り向くと、マミゾウが再びとつくりを傾け、私を睨んだ。その目は心なしか、今まで一番力があつた。

「おい、いい加減にしろよ。もう何時だと思ってるんだ」

「そう言うな。やっとこのムカつきの正体が掴めたんじゃ」

「……何だ？」

妹紅は呆れた声を出す、マミゾウは私をじっと見つめたまま。鋭い目付きに忘れかけていた大妖怪の醸し出す気迫を感じ、ぴりぴりと肌が震える。

「何が腹立ったかってなあ、お主じゃよ先生。里の守護者と言うが、僅かな犠牲に心を動かしたりしておるか？」

「……」

「割り切っておるなら良いさ。じゃがなあ自分を善人だなんて思つとるなら傲慢じゃぞ。自分だけは別だなんて思つたらんかあ」

里とあまり関わりが無い彼女の言葉だが、何故か私は何も言えなかった。

自分が善人か。果たして。

「死ぬ間際にお前さんを恨む小童も何処かに……ぐえっ！」

「ん?!」

言葉が途切れて我に返る。見ると妹紅がマミゾウの襟首を掴んで引つ張って行く所だった。

「もう帰るぞ。ったく」

マミゾウがジタバタするのも構わず、妹紅は早々に離れて行く。しかし途中で思い出したように振り向くと、言った。

「慧音、あんまり気にするなよ。お前が悩むと……その、キリが無さそうだ」

「あ、ああ……」

何故か、生返事をしていた。妹紅はそれだけ言って、また歩き出す。

「……ゲー出そうじゃ」

「ああもう、分かったからこっち来い、な? ……はあ、本当は私、帰り道反対なんだぞ」

ぼやく声が遠くなり、二人の姿は夜闇の中に消えていった。後は明かり一つ無い道の真ん中に、私一人が残される。

鳥の鳴き声一つしない。妖怪が何処に潜んでいても不思議ではない、幻想郷の暗闇。それは恐ろしいものの筈だった。自身に妖怪の性質があるとはいえ、一人の所を群れで襲われたら無事で済むか分からない。

だが、どうだろう。今は不思議とそんな恐怖は湧いて来ない。ただ厭世感とでもいうのか、しばらくこのまま一人でいたいような、周りが自分の思考から切り離されていくような奇妙な感覚がしたのである。

フラフラと帰り道を歩く。気まぐれに見上げた空は木々の隙間から星の光を降らせてくれたが、私は美しいとさえ感じなかった。

ただ静かに見下ろしてくる景色を眺めていると、頭の中にマミゾウの言葉が蘇ってきた。

『割り切っておるなら良いさ。じゃがなあ自分を善人だなんて思つとるなら傲慢じゃぞ。自分だけは別だなんて思つたらんかあ』

割り切っているか。

改めて問われてみると、胸にザワザワと、砂を撒かれたような不快感、いや拒絶感が走る。

寺子屋の生徒が死ぬのは稀だが、無かった訳ではない。死ぬ時は死ぬ。両親は嘆いた。表面では短い間でもお世話になったと言いながら、子供の死に涙を流していた。

それから私はどうしたか。また教師の、守護者の顔に戻り、元通り歴史の編纂をしていたのだ。

割り切っていたのではない。堪えていたのでもない。考えずにいたのではないだろうか。

心が痛むから。

紫や阿求は私を責めないだろう。幻想郷はそんな場所だと言うに違いない。

だから私は『出来るだけ』里を守る事に徹した。

出来るだけ、なんと都合の良い言葉だろう。私はハナからどうにか『出来るようにしたい』という気持ちに蓋をしていたのだ。いかにも精一杯頑張っているという面をして。

「……ふんふん」

短い、不謹慎な笑いが漏れた。だって真剣に悩んだって仕方ないじゃないか。幻想郷で人間一人一人の命に執着していたらやってられないのだ。

一個の人間なぞは呆気なく消える。そうして人間という種が妖怪に怯えるようにと幻想郷が創られたのだ。私は、その片棒を担いでいるという自覚が無かったに過ぎな

い。

しかし、考えてみれば、『出来るようにしたい』なんて発想自体、幻想郷に馴染まないのではあるまいか。その発想、精神が支えてきたのはいわゆる科学という奴だ。人里からすればそれこそ、現実性の無いあやふやなモノではないか。

……待て。乱暴に言ってしまえば、もしかしたら、それらが作り出しているのは。

即ち、『諦……』

「慧音さん!」

「わあっ!」

急に声をかけられ、思わず飛び退いてしまった。完全に苦悩に囚われていた脳味噌を切り替え、声の主を確認する。

「あ、あの……」

そこには、子供っぽい瞳をキョロキョロと動かす、小柄な少女がいた。明るい色の髪を二つに結び、鈴を付けている。見た所、人間のようなだが……。

「君は……本居?」

「やっぱり! 慧音先生ですよね!」

ぱあつと顔を輝かせて駆け寄ってくる、その姿にはやはり見覚えがあった。

本居 小鈴（もとおり こすず）。里の中の鈴奈庵という貸本屋の娘だ。普段は接客

や掃除を明るい表情でこなしているが、その実仕事にも垣間見える、強い好奇心から危なっかしい噂も耳にする。それだけに、何故こんな場所を夜中に彷徨っていたのか気になる所だが……

「はあ……良かった。このまま一人だったらどうしようかと」

「……なあ、一人つて、一体何をしてたんだ？」

額に汗をかいて安堵する彼女に、暗い不安がよぎる。小鈴はそれに気付かないのか、
「実はですね……」と前置きしてから大して悪びれない様子で話し出した。

聞けば小鈴は、妹紅が言った七人目のメンバーだったらしい。唯一の人間として参加すると楽しみにしていたものの、当日まで良さげなネタが見つからなかった。なまじ家の本に飽きるほど目を通していた分、怪談にも目は肥えていたのだ。相手はなんとたつて妖怪、余程のインパクトを用意せねば、と彼女は考えた。

して、里の外、ほんの周辺にでも出てインスピレーションを得ようと、昼間からそこら歩き回っていたらしい。

と、ここまでは良かったが、妖精にちよつかいをかけられたり、夕暮れになればのさばり出す野良妖怪を避けたりしている内に疲れ果て、あろう事か身を潜めた茂みで眠りこけてしまったというのだ。

「思い付きで出掛けたら、やっぱりダメですね」

彼女は小さく舌を出して笑った。私は運が良かったと心の底から思った。今こうして話している少女が、一歩間違えれば死んでいたかも知れないのだ。

「……全く聞かされてないぞ、私は」

「妖怪だらけの寺子屋に行くなんて、親に言えなかったんですよ。大人達も行くの躊躇したんでしょ」

変わらず軽々しい口調に、ヘナヘナと腰が砕けかける。何と言うタイミングの悪さだ。私の頼みが巡り巡って小鈴を殺しかけただなんて。

そんな私の気持ちを知って知らずか、小鈴はスタスタと、軽い足取りで先を歩いて行く。私と会って取り合えず生き残れそうだから気楽、とでも言うのだろうか。

私にはその能天気さが分からない。貴女のせいだ、なんて責めてくれた方がマシだとさえ思えた。

「ええー、マミゾウさんも来ていたんですか？ 行きたかったなあ……」

彼女は怪談大会の様子を根掘り葉掘り尋ねては、悔しそうに肩を落としていた。私は正直、笑えなかった。楽しさを共有したいとも、残念そうな彼女を慰めたいとも考えてはいない。

感じるのは、親に絵本をせがむかの如く興味津々な、微塵も恐怖を見せない小鈴への、苛立ちだった。

彼女にとって、今日の事は単なる日常なんだろうか。怖がる事も、恨む事も無しに。さしずめ私は、その日常を守る役目を持つ一人なのか。

いつの間にか黙り込んでいた事に気付き、フツと息を吸い込んだ所で、小鈴がはしやいだ声で言った。

「そうだ！　また今度で良いんで、怪談大会やつてくれませんか!?　次こそ物凄いネタを掴んでみますから！」

さも楽しいイベントを望むかのように、あつけらかなとした笑顔を向けてくる。他の事なら気にせず頷いただろうが、私にはまた里の外をうろつくと言われたように感じた。

「……小鈴」

「えっ？」

呼び掛けた瞬間、小鈴の表情が固くなる。やつと気付いたか、と頭の片隅で毒づいた。「お前、また同じ事を繰り返すつもりか？　言つとくがな、今頃死んでいたって、何の不思議も無いんだぞ！」

「え、ええと……」

「そんな幸せそうな顔する位なら、里から一生出るな、ここは幻想郷だぞ！」

気がつけば大声を張り上げていた。息を荒げ、肩を大きく上下させる私とは対照的

に、小鈴はキュツと息を詰まらせ、肩をすぼませている。

「あ…………その…………」

「…………ごめんなさい」

謝ろうとした所で、先に頭を下げられた。その姿は叱られての反省ではなく、怒鳴りつけられて怖がる時のそれだった。

…………まずいな、苛立ちをぶつけてどうなるというのだ。今は彼女を里に連れ帰るのが先決だ。説教など後でも出来るじゃないか。

マミゾウの捨て台詞を聞いてから、どうも落ち着かない。とにかく立ち止まっただけも仕方ないと、大袈裟に咳払いした。

「私から離れずついて来てくれ。いいな？」

「は、はいっ」

ひきつりながら小鈴は言った。背を向けて先を歩くと、少し遅れて小さな足音がついてくる。

ざくつ、ざくつ。

さくつ、さくつ。

二人分の足音。規則正しくもう一人がついてきてくれる音。それが何故か妙に嬉しく、しかし頼りなく思えた。

振り返れば実は自分一人しか居ないんじゃないか、この他の一切が無音で、目指している里さえも灯を消している夜にあつては、そんな不安さえ頭をよぎる。

何度も後ろを振り返り、小鈴の姿を確かめる。彼女はそんな私を怪訝そうに見つめながらも、一定の距離でついて来てくれた。

小柄な、妖怪への對抗手段を持たない彼女。さつきまで真後ろに立っていても、次の瞬間には消えていそうな危うさ。

前に向き直るのが、何度目かで怖くなった。ジッと見つめていると、小鈴はやがて困惑の表情を浮かべた。

私が不気味なんだろうか。それでも目を逸らせなかった。この世界では彼女は容易く消えてしまう。そうならなかったのは奇跡に近いのだ。

近づくと、一步、二歩とたじろぎ、下がっていく。待ってくれ、離れるなど言っただろう。一人になれば、今度こそ妖怪に襲われる。そうに決まっているのだ。一瞬の内に、私の希望など無にしてしまう恐ろしい場所。

「あ……—」

今だって、ほら、後ろに。

闇夜に光る、二つの紅い眼。それが急速に小鈴の背後で大きくなったかと思うと、怪物はその姿を現し、大きく牙を剥いた。

ばり、と肉の裂ける音がした。

「きやああアーツ!!」

「小鈴!」

叫んだ時には一瞬遅かった。肩口を血に滲ませながら、小鈴が蹲る。その傍らで金髪
の幼女がケラケラと笑った。

ルーミアだ。闇に紛れ、真つ暗な夜には決まって現れる妖怪。見た目はただの子供だ
が、その気になれば躊躇いなく爪と牙を顕して人間を喰らう。寺子屋でも度々注意喚気
している妖怪だ。

知識として知ってはいた。だが、いざ目の前で襲う現場を見ると体がすくんでしまっ
ていた。私が必死に足を進めようとしている内に、今度は。

腕が、ばきりとひしやげる音がする。

「いやアアア!」

響き渡る二度目の悲鳴。この目の前の光景は、まるで悪夢だ。私が何度も頭の中で思
い描き、都度押し込めていた悪夢が、現実になつて降りかかる。見たくなかった、目を
逸らしたかった、”幻想郷”の姿だ。

「止めて、やめて……!」

先生!!

「……っ離れる!!」

小鈴の悲鳴に弾かれるように、ルーミアに拳を振るう。が、ルーミアはひらりと身をかわし、黒い闇を被るように景色の中へと消えてしまった。

「くっ……」

目を凝らし姿を捉えようとするも、動く影一つ見当たらない。油断するとまた来るかもしれない。そんな不安にかられて右へ左へ視線を泳がせる。その時、今度は背後で土を蹴る音がした。

慌てて振り返ると、小鈴が一目散に道を駆けて行く。待ってくれ、一人じゃ危ない。気持ち逸り、足をもつれさせながら必死で後を追う。

「小鈴！ 待ってくれ！」

「……ひ……」

息を切らしながら叫ぶと、小鈴は泣きそうな顔で振り向き、しゃがんで何かを拾ったかと思うと、こちらに向けて放ってきた。

「来ないで！」

「ぐっ!?!」

目蓋の辺りに重い衝撃。続いて鋭い痛みに目を押さえると、カタリと硬いものが転がる音がした。

下を見ると、小さな石があった。痛む目から熱いものが流れ出し、石を投げられたの

だと理解する。その直後に、小鈴は見えない程遠くに行ってしまった。

パニックになっていたのだろうか。ズキズキと痛みは続くが構ってはいられない。向こうはもつと重傷で、無力なのだ。一刻も早く見つけてやらなければ。

しかし、視界は明滅し、足取りは頼りない。こんな場所で倒れたら、私も……。
がくり、と空が揺れた気がした。

「……………」

意識を取り戻すと同時に、酷い倦怠感に襲われた。目を開けると、眩しい光が射し込んでくる。

「目が覚めた？」

落ち着いた女性の声。続いて銀髪の方が覗き込んできた。次第に目が慣れ、その人物の顔がはつきりと見えてくる。

「永琳……………」

「ああ良かった。ちゃんと分かるのね」

八意 永琳。竹林の医者兼薬師が頷いて顔を上げると、視界に白い天井が映る。どう

やら私は寝かされていられるらしい。

体を起こす。重くはあったが、痛みはない。永琳は手助けするでもなく、私を見つめながら淡々と言った。

「妹紅が道すがら見つけてくれたのよ。ラッキーだったわね」

「妹紅が……そうか」

「目はもう平気よ。特に外傷も無いけど……」

目……そうか、あの時の怪我が本当だとすると、やっぱり夢なんかじゃ……。

待て、だとすると、あいつは……！

ボンヤリしていた頭が一気に覚醒し、永琳の肩を掴む。対する彼女は予測していたようにビクともしなかった。

「小鈴は!? アイツは来てないか、怪我をした筈なんだ!」

肩を揺さぶる手が止まらない。あの血が滲む肩やあらぬ方向に曲がった腕が頭に浮かび、無事を確かめたい気持ちで頭が一杯になった。

しかし永琳は静かに手を払い、私を一瞥する。

「あの子なら大丈夫。命に別状は無いし、後遺症も残らないわ」

「そ、そうか。良かった」

ホッと胸を撫で下ろし、大きく息を吐く。私の至らなさで取り返しをつかない事にな

れば、小鈴やその家族に申し訳が立たない。ただでさえ昨日、幻想郷での人間の死に深い罪悪感を感じていたのだ。その上知人が死んだりしたら私は壊れてしまう。

こんな時には永琳の冷静さが頼もしい。そう思つて顔を上げる。

ところが、永琳は不審そうな面持ちで私をジロジロ見つめている。何だろう、何か変な物でもついているんだろうか。

服を払い、手元を睨み、念のため臭いまで嗅ぐ。

何ともないぞ、そう視線に含めて向き直ると、永琳は少し呆れたように一つ頷き、口を開いた。

「ええと、小鈴の事は置いといて、実は貴女に……」

言いかけた時に、ガチャリ、とドアの開く音がする。見ると永琳に付き従うウドンゲが部屋に入ってきた所だった。彼女は私に気付くと、一瞬永琳と同じように顔を曇らせ、しかしすぐに永琳に向き直る。

「小鈴の方は輸血終わりました。今は安定しています」

「そう、ありがとう」

極めて事務的に報告を終えると、ウドンゲはまた私を見つめる。二人とも私の何が珍しいのだろうか。外傷は特に無いと言つてたし、検査で偶然ガンでも見つかったか？

「なあ、さつきから私の方を見てどうした？ 感じ悪いぞ」

二人を見渡しながら言うと、二人は揃って顔をしかめ、目を見合わせる。一瞬あつて、永琳が屈んで神妙な表情で言った。

「ちよつと聞いて良いかしら？　昨夜どんな事があつたのか、教えてもらえない？」

「ああ、良いけど……」

私は怪談大会の帰りの経緯を話す。とは言つても特段永琳たちが驚くような要素は無い筈だ。夜中に妖怪に襲われ、幸いにも死を免れた。かいつまんで言えばそれだけだ。幻想郷ではよくある事だろう。

しかし、聞き終えた二人は無言で宙を仰ぎ、微かに唸るばかりだった。まるで途方にくれたようなうんざりした仕草だった。

「どうしたんだ、おかしい部分でもあつたか？」

「それって確かなの？　あやふやだつたりしない？」

「ほんの昨日だぞ？　大体珍しくも無いだろう、夜中に妖怪に襲われるなんて。それが幻想郷なんじゃないのか!？」

あまりに続く不可解な態度に、つい苛立ちが口調にも出てしまう。その内心にはママゾウのあの問いかけが未だ影を落としていた。

幻想郷での人間の立場はあまりに弱い。私一人にどうこう出来るものではない。

だから目の前にいた小鈴でさえあんな目にあつてしまった。生きて帰れたのは、本当

にただ運が良かっただけ。

運が悪ければ死ぬ。それは、周知の事実”だろうに、何を根掘り葉掘り聞き出そうと
いうのか。

死にかけたんだぞ。それも不思議でも何でも無い、幻想郷での”当たり前”なんじゃないのか。わざわざ突つき回す必要は無いだろう、違うか!?

怒りが頭の中をグルグルと蠢き、口から飛び出そうとする。それをどうにか押し留め、座ったまま目を伏せていた。

どの位そうしていただろう。私の意識を引き戻したのは、永琳の長い溜息だった。

「……頭の中で『当たり前』が膨らみ過ぎたのね」

「……ん？」

今、何と言った？ 頭の、中で？

「慧音、貴女は……」

—

”……今日、驚くべき事があった。親友の小鈴が大怪我をし、永遠亭に運ばれたというのだ。

それだけでも息が止まりそうになったが、驚きはこれだけに留まらない。永琳からこつそり聞いた所によると、『慧音先生が突然襲いかかつてきた』と小鈴はいうのだ。

里の守護者たる彼女が、まさかそんな凶行に及ぶとは信じられなかった。永琳は動機や原因をゆつくり探ると言つていたが、どうも強迫観念のケがある、らしい。

思えば、慧音は少々潔癖だったような気もする。何らかの割り切れない事柄があれば、気に病む場合も有り得なくは無いだらう。本人を前にしてはとも言えないが、長年の付き合いで想像が立つ。

ともかく、今は二人の友の回復を祈ろう。……”

稗田阿求 八月某日の日記

三周目

三周目・一話目―二ツ岩マミゾウ

「ん？ 儂が最初に話すのか？ 面倒臭いが、まあ仕方ないのう。それでは、しばし耳を汚させてもらおうぞ。

儂は二ツ岩マミゾウ。人里近くの命蓮寺という寺に居候しておる。修行中の奴等が何人もいてうるさいし、抹香くさくて慣れるまで時間はかかったが……住めば都という奴でな。今では修行もそこそこ参加して、馴染むにつれて居心地も良くなった。

ところが、どうにも寺の隣に気になる物がある。有るのがおかしいのかと言われると別にそんな事は無いんじやが……。

敷地の中に、墓があるのよ。それがなかなか金が掛かっておるらしく大きい墓地でな。亡くなつた連中の墓標が、均等に密集して数え切れない程、ズラーツ……と。

夜に見たりすると、闇の中に無数の霊が突つ立つとるようで、儂でもふとした瞬間にぎよつとする事がある。

知り合いは人を驚かすのに最適な場所だと言つたが、実際に見たら人でなくとも納得

するじやろうな。おまけに他にも死体を漁る猫や死に損ないの生き人形が姿を見せるもので、用が無ければ近寄りたくない場所じや。

死人というのは、変な奴を引き寄せる力でもあるのか知らん。

それで、一月ほど前じやつたか。月が灰色の厚い雲に隠されるような夜。その晩もまた薄気味悪い風が吹く墓地を眺めながら、儂は縁側で酒を飲んでおった。

夜も更けて酒も無くなった頃、体が冷めない内に寝ようと腰を上げた。

その時じや。

墓地の中に、ポツンと人影があつた。遠目からは細かく見えないが、背中にくつすらと浮かび上がるような白い布をたなびかせていた。

夜中に墓に現れるような奴には何体か心当たりがあつたが、遠くの人影はその中の誰にも似ていなかった。

酔つたせいで見間違えたのではないと一応目を凝らしてから、儂はすぐさまその影に向けて駆け出した。その時分に起きていたのは既に儂一人だけ。もし不審者だつたりしたら見逃した目撃者としてうるさく言われるに違いない。逃げ出す前に取っ捕まえてやる、そう心の中で息巻いている間に影はグングン大きくなる。

やがてその人物が手の届く程にまで近付くと、儂はソイツが何者か知る事となつた。

水色のワンピースに青い髪をかんざしで束ね、白い羽衣を肩に掛けた女……。

仙人もとい”邪仙”の霍 青娥（かく せいが）じやった。

そいつは詳しい事は省くが奇妙な力を持つ人間で、寺と折り合いが悪く、おまけに儂から見ても邪念に満ちたこす狡い女じやった。彼女は一つの墓石を見下ろしたまま、儂にも気付かず静かに佇んでいる。

『おい、こんな夜中に何をしとる?』

儂が声をかけると、そこで初めて気づいたのか青娥は一瞬驚いた顔をして、すぐにニツコリと微笑んだ。

『あら、こんな夜中まで起きていらしたんですね』

『何をしとるのかと聞いておる』

青娥の笑みは表面上はとても整っていたが、目の奥が笑っていないかった。普段の性格も知っていただけに、儂は少々身構えながら尋ねた。

一方、青娥はそんな儂の姿をつまらなそうに一瞥して、また手前の墓石に向き直った。

『そんな怖い顔しないで下さい。このお墓に用があっただけですよ』

『墓に?』

見る限り、そこには他と変わらないただの墓石があるだけだった。怪訝な顔をする儂を他所に、青娥はサワサワと石を撫でる。

『早く来すぎちゃったかな……。皆が寝静まる頃なら良かったかも』

青娥は屈んで石を見つめながら、独り言のように呟いた。依然話が見えて来ない儂は、『その墓は何か特別なのか』と聞こうとした。すると彼女は、急に『そうだ!』と言って立ち上がると、儂に向かって白い歯を見せながら、こう言ったのじや。

『待っている間暇ですから、ここの故人の話でも聞きませんか?』

そうして儂は、例の墓に眠る人間の話を聞く事になった。

……まだ最近の事だと言っておったが……。

青娥の身内には、本人に劣らず曲者が多くてな、特に豊聡耳 神子（とよさとみのみこ）。青娥の周辺のリーダー的存在で、元々はカリスマ的政治家だったらしい。今でもその威光は健在で、里を始め方々で事ある毎に様々な才能を見せつけておる。

後は物部 布都（ものものべのふと）。こいつは神子ほどの才覚は無いが、熱心な信奉者であり右腕じや。風水が得意で、後はよく分らんが、皿について詳しい一面もある。

ただ、布都の方は少々、間抜けというか単純な所があつてなあ。神子、別名”太子様”が好きなあまり、バカをやらかす事も多かったらしい。

例えば、粗末なものを見たり聞いたり、……食べたしたりした時。何でも良いが外界の珍しい、油でギトギト、糖分塩分てんこ盛りの『ふぁーすとふーど』なんかを食わされたら、当然最初は文句を言う。

『唇が油でヌルつくし、塩で舌が痺れるし、飲み物は甘ったるくて気持ち悪い。誰じゃこんなものを作ったのは！』

……とまあこんな具合にご立腹じゃ。

ところが、尊敬する神子がかもし

『その料理は私が作ったのです。何分慣れない素材ゆえに、分かりやすい味を目指したのですが、お気に召さなかつたでしょう？』

などとデタラメを吹き込めば態度が一変。一口ずつ丁寧によく噛んで食べ始め、もつともらしく頷いて言う。

『よく味わってみれば、このコンパクトなサイズの中に奥深い味わいが凝縮されておる。油は独特な食感の具材たちを見事に調和させておるし、塩気は刺激的じゃが甘い飲み物とのバランスを上手く取っておる。』

その飲み物も食べ終わる頃には氷が溶けて丁度良く薄まってくれる。いや、本当に計算しつくされた妙味。流石太子様、己の舌の未熟さを今、噛み締めておりまする』

こうやって感想が百八十度変わるんじゃ。それもおべつかや皮肉でなく、本音でな。

第一布都はあからさまな嘘をつくような奴じゃない。

大袈裟に思うか？　しかしな、その実大なり小なり似たような輩が沢山いるんだと。事前情報や外からの権威付けが、自身の判断を上回る。そういった奴等に限って吹き込まれた事をさも自分が理解したかのように吹聴する。

里にもそんな奴が一人いた。人間では金持ちの部類の、沢山の使用人を抱えた中年の長者。

こいつがまたかなりの神子のファンでな。里に神子が繰り出す度に挨拶をしては頭を下げ、時々ありがたい説法でも聞けばいたく感心し、屋敷に戻るなりそのままの内容を周りに語って聞かせた。本当に理解しているのかいないのか、決まって『あの方に失礼があつてはならぬぞ』と同じ事ばかり言つては得意気になつていた。

こういう人間の匂いを嗅ぎ付け、青娥はある悪巧みをした。まず里でこつそり安くて粗末な皿を十枚も買い、裏に布都和神子のサインを彫つて、例の長者の屋敷に持つていった。

そうしてどうしたかというと、長者に向けて二人のサインを見せ、こう囁いたのじゃ。『これ、神子様から貴方に渡したいのだそうです。布都様と一緒に作った有り難いお皿』
『これはこれは！　あなた様方から贈り物とは身に余る光栄!!』

もちろん嘘っぱちなんじゃが、神子の名を聞いた長者はやはりというか皿を手を取

り、目を輝かせた。そして質の悪い皿の土気色の表面をザラザラ撫で、しみじみと言った。

『おお、この無骨ながらも心地いい手触り。そして目に煩くない落ち着いた色合い。そこらの見た目だけ小綺麗な皿とは出来が違いますな』

さつき言ったが、渡したのはその辺で買ったものじゃ。神子の名が無ければどう評したか分からん。結局は皿そのものより『有り難いもの』という情報に注目していたのさ。喜ぶ長者を見ても青娥は涼しい顔。大金を支払われ、『他人にまた作れとせつつかれでも迷惑ですの、この事はくれぐれも口に出さぬように』とちやつかり口止めまでして去っていった。

……とまあ、どうしようもない話じゃが、本当ならここで終わる筈じゃった。青娥はしつかり得をしたし、その後の事なんぞ、保身を除けばちつとも興味は無かったからな。しかし青娥は、僅か二、三週間ほどして同じ屋敷で葬儀が行われているのを目撃した。骨壺を抱えてむせび泣く故人の両親らしき二人、その後ろにはゲツソリとした顔の長者が……。

『何かあったんですの？』

こつそり聞いてみると、長者は泣きそうな顔をして狼狽えだし、顔を地に向けて叫んだ。

『申し訳ございません！ あの皿を、馬鹿な者が割ってしまいました……』

『……え？』

詳しく聞けば、長者は言われた通り皿を使用人にも見つからないように大事にしまっていたらしい。ところが新人の使用人の一人が、替えの皿を探してそれを見つけて出し……。

うっかり、落として割ってしまった。

駆けつけた長者が見たものは、無惨に粉々になった有り難いお皿。他の者が見ればただの粗野な皿が一枚駄目になっただけじゃが、長者には命に代えても償い切れない大惨事に映った。

長者は我を忘れて激怒し、その皿をどう言つて渡されたかを細かく、大きく誇張して、加えて如何に新人が罪深いかを語った。

新人は不馴れもあつて長者の言葉をそのまま信じ、責任感、罪悪感に押し潰され……。自ら命を絶ってしまったという。

顛末を聞いた青娥はしばし言葉を失った。自分のした事が巡りめぐつてこうなるとは、流石に予想出来なかつたから。まさか十枚セットで売っていた安物ですだなんて、今更言える筈もない。

とりあえず『神子様が聞いたら悲しむから』とまた口止めをし、即急にお墓を作る手回しをしてコトの収束を図った。

『……その墓が、これなんです』

話し終えた青娥は大して悪びれもせず、物憂げな瞳で墓を見下ろしていた。儂はといえば後味の悪さに少しの間黙っていたが、やがて肝心な事を思い出して青娥に尋ねた。

『それで……貴様は結局どんな用があつたのじゃ』

すると青娥は面倒臭そうに髪を掻き上げ、また微笑んだ。

『慌てなくてもすぐ分かりますよ。もつとも、予想はつくかもしれませんが……』

そう言うつてすぐに、ヒュルリと音を立てて風が吹き、柳を揺らした。その風は妙に生暖かく、湿っていた。そして墓のある辺りから、風に乗せて知らない女性の悲しげな声が、確かにこう言つたのじゃ。

『一枚、二枚……一枚足りない……』

恐らく、未だにあの霊は現世に留まつて悔やんでおるじやろう。本人は神子からの頂き物だと信じたままじゃつたのだから。神子本人から赦しの言葉でも無い限り、ずっと

状況は変わるまい。

流石に儂も苦言を呈したよ。元はといえば貴様の詐欺が発端じゃないか。この際全
て打ち明けて解決したらどうか、と。

すると青娥は頬を膨らませ反論してきた。

『何で私がそこまでしなきゃいけないんですか。第一死ねだなんて言つたつもりはあり
ませんし、足りないのは皿じゃなくて連中の頭でしょう』

こう言い訳を並べてから、呆れる儂に向けて彼女はフツとほくそ笑み、こう付け加え
た。

『それに……私だけが秘密の解決法を知っている、なんて煽ればまた面白くなりそうで
す。

たとえば実は素人の真似事でも、やり方次第でどうにでもなるんですよ』

……それから、奴がどうしたのかは知らない。あまり関わりたくは無かつたからの。
ただ、最後に言つた言葉は今でも印象に残つておる。

『権威や恐怖や秘密を上手く使えば、案外人は簡単に騙されてくれるのですわ』と。

なあ皆、他人の生き方にどうこう言いたくは無いが、あまり周りに流されないよう気を付けろよ。ましてやそれで賢しらぶっていたら滑稽さは倍増だ。

そしてそんな奴等が、意外と至る場所に居たりするものよ。ははは……。

儂の話はここまでじゃ。最初にしちや中々だつたじゃろ？」

三週目・二話目―藤原妹紅

「二話目は私か。ま、いつかは順番が回って来るんだし、このぐらいが丁度良いのかねえ。

一応名乗っておくか。藤原妹紅。迷いの竹林に住んでるから、案内が必要なら承るぜ。もつとも、行く場所なんて大概決まっているんだがな。

皆も知ってるだろ、永遠亭。あのよく素性の分からない奴等がやってる病院さ。私はあんまり好きじゃないんだけど、低価格で腕も良くてアフターケアも万全ときてるから、その実客は多い。私もそのせいで仕事が増えるよ。

つたく、私は行きたいなんて思った事ねえのにさあ。正直面倒だよ。なんだって病気になるのは詰まらないキツカケで出るかね。もつと簡単に治ればあんな辺鄙な場所、あつという間に倒産だろうに。

口が悪い？ だけどさ、私は正直あんまり有り難いと思えないんだよね。というのも、私はちよつと変わった体でさ。病気になるっても最悪な事態は免れる。怪我だつて平気だし、ちよつとしたものならすぐ治っちまう。

不老不死、つて奴？ だから潰れるなら潰れちまえと思つてんの。それが嫌なら立地

を変えろと。

言つとくが別に、死なないのは私だけじゃないぜ。さつき言つた永遠亭の中には、同じような体をした奴がいるんだ。その名も蓬萊山 輝夜（ほうらいさん

かぐや）。屋敷に籠つてあまり外に出ないが、あの連中の頂点で力も強く、特に美貌は時の現人神を動かし了程だった。

輝夜に逆らう奴は滅多にいない。永遠亭の奴等は元より、他の住民も連中を恐れて手を出さないか、謎めいた雰囲気に着かれこそすれ憎しみを抱く奴なんてほぼ現れない。

しかし、私はその輝夜と度々大喧嘩、もとい殺し合いをしている。死なない同士だから、お互い手加減無しでな。

理由？ そんなん今はいいだろ。ま、昔色々あったのさ。

で、戦うとなるともう壮絶さ。手足がもげたり、体に穴が空くのはいつもの事。酷い時は首が取れたり頭が半分になつたりする。

痛いのは慣れてるけど、あんまりボロクソにされると痛みすら感じないどころか、意識まで飛ぶ。目の前が真っ暗になって、気付くと永遠亭のベッドに寝かされてるんだ。動きづらい程に余計な包帯を巻かれて、動くともた壊れちゃうわよ、なんて輝夜がニヤニヤしながら見下ろして来るのがお決まりだった。

優しいじゃないかって？ 冗談！ 何度あの面をぶん殴つてやりたいと思つたか。

つーか一度試したんだが、勢い余って上半身が180度回転したよ。あはは。
で、輝夜は寝たきりの私に尚も言うんだよ。

『アンタさつきまで丸つきり死体だったのよ。心臓が無かった』

『髪の毛が再生するまでのハゲ頭は傑作だったわ』

『脳味噌は本当に全部戻ったかしら？ ああ、元々欠けていたわね』

とか何とか……。起き上がれないで憎まれ口叩く位しか出来ずに、随分と惨めな思いをしたものさ。

けどな、ある時気になったんだよ。

……生き返った私は、元通りの私なのか？ ってな。

だって、脳味噌や心臓が無くなっても、元に戻るんだぜ？ 場合によっちゃ髪の毛一本になってもだ。確実に生き物じゃない状態から新しく作られた体。そいつはいわばクローンが成り代わったようなモンじゃないのか？

記憶があるじゃないか、って思うかもしれない。確かに今まで、記憶が飛んだ覚えはない。周りの奴等も自分の名前も、藤原妹紅としての生涯を忘れた事は無かった。

だが、例えばの話だけド魂を取り出して、そっくりな模造品に入れ替えたとする。起きたらさつきまでの出来事は覚えているが、隣に自分だった屍が転がってるんだ。それを見ても何の躊躇もなく『私が本物です』と言えるか？

というか、本物以前に、体の一部が散つたりした筈だが、再生して本体になるのは何が基準なんだろう？ 髪の毛から再生するっていうなら、一本につき一人ずつ私が増えたりしないのか？

今の私は本当に、唯一無二の藤原妹紅なんだろうか。

何度悩んだって、答えなんか出ない。むしろ喧嘩を繰り返す度に謎は深まっていった。肉体の傷は相変わらず元に戻り、傷がついた記憶だけが増えていく。

時には肉体の秘密を探ろうと、輝夜の腕を持ち帰ろうとしたり、戦つた場所で後から自分の欠片を拾おうとしたりしたけど、上手くいかなかった。輝夜の体の一部は永琳達に取り上げられたし、自分のは私が治療している間に綺麗サツパリ消えていた。妖怪に食われたのか、それとも誰かが片付けたのか。

気味の悪い事を考えているのは分かつてる。でもだからこそ忘れられなかった。輝夜と喧嘩をしても、永遠亭のベッドに寝ていても、家に帰って仕事をしても。

その雰囲気伝わったのか、輝夜もなんだか無口になって、以前のようにからかってくる事が少なくなつた。表情に陰があるというか、珍しく悩んでいるような……。

何に悩んでいるかなんて知らなかったけど、いつものムカつく顔と比べて、おかしな事でも相談出来そうな気がしたんだ。今なら少しは真剣に話に乗ってくれるかもって。

そしてある時、ついに冗談めかして聞いてみた。私達にとって、自分とは何なんだろう

う、お前も悩んだ事はないかって。

正直そこまで真剣な答えは期待していなかった。だって結局は輝夜だし、二、三言考えを聞かせてもらえたら、それで御の字だと思つたんだ。

ところが、輝夜は一瞬目を丸くすると、顎に手を当てて俯き、存外真面目に考え出した。まさかそういう哲学とか、興味あつたのかコイツ。そう驚いていると、輝夜は『やっぱり気になるんだ……』とか呟いたかと思うと、不意に顔を上げた。

『ちよつと来て』

『は？ いやまだ体が痛……』

『良いから』

返事をする間もなく強引に引つ張られて、私は永遠亭の廊下を歩き回つた。『怪我してんだから加減してくれ』と何回も抗議したけど、奴は『静かにして』としか言わなかつた。まるで何かから隠れるように。

音も立てずに忍び足で引かれて行くうち、いつの間にか普段あまり立ち入らない、屋敷の奥にまで入っている事に気付いた。陽も入らず薄暗くて、廊下は枝分かれしなくなり、手下のウサギたちも顔を合わせる事はなかつた。

一体どこに連れていく気だろう。興味が湧きながらもそう訝んでいると、やがて輝夜は廊下の突き当たりの、大きな襖の前で立ち止まつた。

『……は……』

『私の部屋。良いから入りなさい』

有無を言わず背中を押され、後ろで襖が閉められた。中は畳に書齋机、クローゼツトに本棚、押し入れとサツパリしたもの。

でも、入った瞬間に奇妙な臭いが鼻をついた。ろくに洗ってない汚れた包丁のような、不快な臭い。変な物でも隠しているのかと辺りを見回していると、輝夜がツカツカと部屋を突つ切り、押し入れの前に歩み寄った。

『妹紅』

『な、なに?』

輝夜は聞いたことも無いような低い声で言った。目付きは鋭く突き刺すようで、いつものふざけた態度からは想像も出来なかった。

『今なら引き返せるわよ。アンタの疑問は解けるかも知れないけど』

言われて、一瞬たじろいだ。額に汗が滲み、思わず生唾を呑み込む。でも、ここまで来て引き返そうとは思えなかった。

『いいから、早く、見せろよ』

『……そう』

私の上ずった声にため息をつく、輝夜は押し入れに手をかけ、一気に開け放った。

『ひっ!?!』

その途端、私は悲鳴を上げてへたり込んでいた。中には死体が山積みになっていったんだ。服を着ていない女の死体。それも腹が抉れたり、胸がザクロみみたいに裂けたり、首だけが転がっていたりなんてのもある。部屋に入った時に感じた臭いは、死体からの止めどなく溢れる血の臭いだったんだ。

『うっ……ええ……!』

出し抜けに見せられて、耐えきれずその場に戻しちまった。這いつくばって畳を汚したけど、輝夜は何も言わなかった。

『お、おい! 何の冗談だよ!!』

口を拭いながら怒鳴ると、輝夜は少しも動揺せず返した。

『これが再生のなり損ないよ』

『はあ……?』

『よく見てみなさいよ、呆けてないで』

輝夜が指差す先を見る。無造作に転がる生首、それには見覚えがあった。鼻の形、口元、顎のライン、無理矢理むしり取ったようにまばらに生える、白い髪。

……私だった。何度も鏡で見た自分に、そっくりだったんだ。よく見たら周りの死体も、形を留めた腹回りや肩の形がそれぞれ、似ているような気がしてきた。

呆然とする私に、輝夜は言う。

『私もね、気になってコッソリお肉を持ち帰った時があった。……この子たちも、最初は掌に収まるサイズだったのよ』

『……こいつら、全員生き返るのか？』

『いえ、どういう訳か途中で再生が止まるの。新しい奴でも……もう一月は経つわ』

輝夜は生首に近付くと、憐れむように頬を撫でた。悲しむべき死とは同じに出来ないと思うけど、人の形をしているあれらを見ると、理屈は感情に押し留められた。

『永琳なら、何も言わないのかしら』

『アイツ、私と同じ事しようとしたら止めて来たぞ』

『余計な興味を持たせたく無かったんでしよう。……私の部屋じゃ無きや処分されたでしょうね』

輝夜は消え入りそうな声で言って、パタンと押し入れを閉めた。再び元通り、簡素な部屋に戻る。

輝夜は、気の抜けたように押し入れの前で突っ立っていた。

『で、でも良かった。結局生き返れるのは一人だけってこつたな』

静寂が怖くて大袈裟に肩を竦める。輝夜は首から上だけをゆらりとこちらに向けた。

『本当にそう思う？』

『だって、これだけ居ても生き返らないんだろ？　じゃあ私が本物なんだよ。そうに決まってる』

一人で納得するように何度も頷く。輝夜はまた押し入れを見つめて黙ったままだつた。

その姿に何を言ったら良いか分からなくなつて、適当に挨拶して帰ろうとした。その時。

何気なしに、本当に偶然天井を見て、足がすくんだ。

天井の板、天井裏を隔てるそれをほんの少しずらした、暗闇の中から。

二つの目と、手と髪の毛が覗いていたんだ。遠目でもわかるカツと見開かれた瞳は血濡れのように赤く、天井を掴む手は骨張つてカサカサに干からびて、垂れてくる髪の毛は真つ白で、老婆のように細くみずぼらしかった。

目を疑い、瞬きする間に、そいつは音もなく消えていた。

あいつが何だったのか、詳しくは分からない。けどあれ以来、私は喧嘩の後に出来るだけ欠片を集めて、燃やして供養するようになっている。

だって、万が一生き返れる可能性があったなら、殺しているに等しいじゃないか。

後から不思議に思ってたんだ。何だって輝夜はあれだけの数を試して、動かないのも構わず処分しなかったんだろうって。

『また、生き返るかもしれない』、そう恐れて処分出来なかったと考えれば、成る程辻褄が合うんだよ。前例があれば、可能性はゼロには決してならないからね。

もつとも、蘇ったのが本人と同じ人間なのか、得体の知れない何者か、なのか……。確かめる気は起きないけど、さ。

私の話は終わり。長話は慣れないから疲れたぜ」

三周目・三話目―火焰猫燐

「えー？ あたいが三話目？ どうしようかなー、怪談物なんて辛気臭いの、どうにも慣れないんだけど……」。

ま、しゃーないか。遅かれ早かれ当たるんだしね。あたいは火焰猫燐。地霊殿に住んで怨霊の相手をしているよ。死の臭いが染み着いているけど、案外あつげらかんとして明るい場所さ。皆も一度遊びに来てみなよ。その時は歓迎するからさ。

ん？ そんなしけた面をしないでよ。本当に変な場所じゃないって。これでも旧都の中の掃き溜めと比べたら、天国かと思えるくらいさ。まあ、本当の天は真上の方向に気の遠くなる程離れてるだけだね。

家でネタ集めはちよいとキツイ、という訳であたいはちよいと足を伸ばして、知り合いの話を聞いてきた。キーワードは「ずばり」嫉妬」と呪い。もうこれだけでピンとくる奴もいるかもしれないけど、ちよいと聞いとくれよ。

三日前だったかな。どっかに怖い話を知ってそんな奴はいないかな、って街をぶらついてたのは。いつも目を引く甘味処や屋台を素通りして、知り合いでもないかを探していた。

ところがその日に限って知る顔はついで現れなかった。まっすぐ旧都を突っ切って、気がつけば地底の入り口まで抜けて来ていた。

街の人々の雑踏や話し声、お店の呼び声……色んなやかましさとつくに背中に向こうに消えて、目の前にはたった一つ、出入口の目印になるものがポツンとあった。

橋だよ。あのやたら長い縦穴を降りて、旧都の灯が見えてくると、風情のある橋が掛けられているんだ。少々年季が入っているが、石も鉄も無しに昔ながらの方法で作られたあの橋は旧都の賑やかさとの落差も相まって侘しいような、奇妙な魅力がある。チラチラと雪が降る日の夜にあそこで月見酒なんかやれば、さぞかし染み渡るだろうなあ。

でもその場所は、いつも先客がいるんだ。というよりもう指定席かな。一人の女の子が決まって橋に立っているんだよ。その日もそうだった。

その名は水橋（みずはし）パルスィ。妖怪なんだけど、元々は異国の人間だったらしくてさ。茶色がかかった黄髪と深い翡翠色の瞳が綺麗で、白い肌に物憂げな表情が似合うんだ、これがまた。体も細くてね、朱色の欄干にもたれ掛かった佇まいは、悔しいけど

かなわないと思つたなあ。

……ああ、妬ましい。

おつとゴメン、口に出ちやつた。あの娘は美人なんだけど、実は悪評がついて回るんだ。

というのも、彼女には『嫉妬を操る程度の能力』があつてね。こいつは俺より金持ちだ、私よりも人気がある……。そんな嫉妬心がある奴に近づいて、心を操り、糧にするんだよ。それも誰だつて安心は出来ない。彼女はほんの些細な事でも目をつける。理由も様々で、他人の幸せ、不幸自慢する安らぎ、あるいは不幸を受け入れる寛容さ……。他人のありとあらゆるものを妬む。

そういう性質だもんで、パルスィと気の置けない奴はほとんどいない。せいぜいが世間話程度で、腫れ物に触るように接していた。

だから橋の袂で見つけた時も、一瞬体が硬直した。言つちや悪いけど、回れ右して戻ろうかとも、一瞬悩んだ。怖い話は知つてそうだけど、つまらない用得嫌な顔されたくないし、何よりパルスィと二人きりで話すつていうのが、酷く神経を使いそうだった。

あれこれと考えている間、肝心の体はずつと固まっていたらしい。パルスィがフツと振り向いた瞬間、ぱっちり目が合つちやつた。

そうなると思つて返して逃げるなんて訳にもいかななくてね、意を決して愛想笑いしながら

ら近づいていった。

『やあ、パルスィ』

『ええ、どうも』

幸い機嫌は悪くないみたいで、微かに微笑んでくれた。のっけから本題を言うのは気が引けたから、一緒に橋の上に並んでしばらく最近の事を話した。こいし様が今度はどこに行ってきたとか、土蜘蛛のヤマメが風変わりな妖精を捕まえたとか。

意外かもしれないけど、ある程度打ち解けたらアイツ結構明るいんだよ。よく笑うし、それなりに話題も投げてくれる。

まあ、心中丸つきり穏やか、とはいかないけどね。表面は明るくても頭の中では嫉妬が渦巻いている時がままある、そうさとり様に聞いていたから。

緊張をごまかしながら話が弾んだ所で、ついに夏に絡めて怖い話を知らないかと水に向けてみた。ところが、パルスィは不意に言葉を詰まらせる。

『どしたの?』

『いや、えつとね……』

歯切れが悪い返事をしてパルスィは目を泳がせだした。あたいは何かまずい事を聞いたかと身構えたよ。どんな切っ掛けで心の奥底の、暗い部分が見えちゃうか分からない。嫉妬心を恐れて、この怪談大会の事も隠しておいたくらいなんだ。

パルスイがなにやら考えはじめて十数秒。あたかも黙って言葉を待っていると、やがて向こうが遠慮がちにこう言った。

『私に聞くって事は……あれだよ。呪い関連よね』

『へ、ああ、まあ……』

別に内容はどんなものでも良かったけど、期待していなかったと言えば嘘になる。

彼女は昔、恋愛絡みで怨みを抱いて自殺し、呪いの力を持つ妖怪になった過去があった。

特に有名な“丑の刻参り”、夜中に憎い相手を思い浮かべて藁人形に釘を打つ、あの方法を開発して広めたのはパルスイだって話がある。

だから怪談に縁があるかな、くらいには考えていたんだけど……先程の反応を見た後だと、怖い話自体アウトだったのかと思ひ始めた。

『そっか、まいったな……』

戸惑うあたいを余所にパルスイはため息混じりに天を仰ぐ。直後に向き直って放った言葉は、驚くべきものだった。

『あれ、実は嘘なのよ』

『は?』

『だから、全部デタラメ。呪いの力なんて無いの』

思わず聞き返しちやった。嘘？ だったら他人に見られて自分に返ってくるのか、そのせいで見た相手を殺そうとしてくるとか、そんな恐ろしい話の数々も全部嘘なの？

『という事は……効果なんて無いっての？』

『そうなのよ。呪われて死んだとかいうのは、みんな偶然か思い込み。藁人形で他人をどうこう出来るもんですか』

事も無げに言うパルスイを見て、報われないなあって思った。今まで信じていた人々は元より、地底でも怨みのあまり釘を打ったなんて話を人づてに何度か聞いていたし、世話をした怨霊たちも『アイツを呪ってやりたかった』とか言う事が珍しくなかった。それらが嘘に踊らされていたなんて。

『……呪う時のエネルギーが、私の力になるのよ。私はそういう妖怪。生きる為に仕方がないのよ』

あたいの心情を読み取ったのか、パルスイは真つ直ぐ目を合わせて言った。あたいもそうだけど、妖怪は自らの習性を変えるのは難しい。いくら元人間でも、ひもじさを覚えて味わうなんてバカらしいだろう。

『それに、呪いが全部実現したら大変よ。死んでしまえだの病で生き地獄を味わえだの、子孫が続く限り貧しさに苦しめだの……』

自分じゃ妥当だと思ってるか知らないけど、好き勝手言うんだから』

後ろめたさがあつたのか呪いの主たちを蔑んでいたのか、パルスイは薄ら笑いを浮かべていた。あたいは気持ちを量りかねて、愛想笑いしながら言う。

『信心つてのも楽じゃないねえ』

『そんな大したものじゃないわ。呪つたと思ひ込んで、すっかり能天気にごす奴の方が多いし』

パルスイの声に苛立ちが混じりだした。このまま話してもお互い良い気分はしなれないと思つてね、適当に挨拶をして帰つた。振り返ると、いつも通りパルスイは橋の袂で、物憂げな表情で佇んでいた。

……街に戻ると、時分はもう夜だった。飲み屋に灯りがつき始めて、早くも仕事を終えた奴等がたむろしている。

あたいもそういう喧騒を見ると、いつもは活力が湧いてくるんだけど、その日はモヤモヤした気分だった。取りあえずネタのストックにしようとか考えたんだけど、人が全身全霊込めて怨んでおいてああ言われちゃ、さぞ空しいだろうな、つてね。

浮かぬ気分をどうにかしようと思ひ込み屋に入った。途端に中にいた男衆が歓迎して、話の輪に加えてくれる。

顔馴染みたちの間では、あたいはもっぱら聞き役だ。男が集まるだけあつて愚痴が続く。喧嘩で負けただの、女にふられただの、博打で大損こいただの、酒に酔いなが

らの話題にいつも一緒に笑って応える。怨霊の話し相手をした経験のお陰で、すっかりお手のものだった。

だけど、パルスィの話を聞いた後だと、いつもと違う感情が湧き起こった。

『ああ、この人たちは人生が釣り合いの取れるものだと思ってるんだなあ』って。

よく、幸せと不幸は同じだけ来るとかいうだろ。誰が確かめたんだと思うけどまさにあんな感じでき。

喧嘩で負けてもいつかは見返せる。

女にふられてもいつかはまた出会いがある。

博打で大損してもいつかはひっくり返せる。

……そんな風に幸せが代わりに舞い込んでくる、もつと言えば幸せが実感出来るはず、そんな考えがにじみ出ているんだよ。

呪いに頼る奴も結局はそういう心境なんだろう。自分を苦しめた奴は、同じように苦しまなきゃいけない、とね。実際どうなるかは、神のみぞ知るなのにか。

あたいだって別に偉そうな事は言えないよ。でも酒を呑みながら惨めったらしく管を巻く姿を見てたら、『人生なんて所詮博打さ。機転と運と環境でどうにでもなつちまうんだよ』、なんて諦めの心理に傾いていった。

まあ、本人たちの前では言えないけどね。あたいはそれ以上はいたたまれなくて、酔

いもそこそこに地霊殿に帰って、すぐに床に入った。

布団の暖かさに包まれながら、人生は不公平だなあとか、あたいは恵まれてるなあとか考えながら、いつの間にかまぶたを閉じていた。

……次の日、あたいはまた橋に行った。パルスイに聞いた話を他人に話しても良いか、許可を取るのをうっかり忘れていたんだ。

また明るく応じてくれたら良いんだけどなあ、つて不安を抱えて走っていると、やがて目的地が見えてくる。

だけど、そこではたと足が止まった。パルスイはまた橋の上に立っていた。だけど明らかにいつもと様子が違ったんだ。

あたいから見えて背を向けて仁王立ちして、両手をこう、額に当ててるんだ。更に周りには、妖力が緑色の波になってパルスイから放出されている。遠くからでもハッキリと目に見える程で、心なしかドクンドクンと心臓の鼓動のような音さえ聞こえてきた。

一瞬遅れて我に返り、忍び足で近づくと。不審ではあったけど、万が一怨霊にでも取っつかれてたら大変だ。徐々に体が軋むような気がしたけど、手の届く場所まで来て思い切って声をかけた。

『パルスイ！ 何やってんだい!?!』

『わっ!?!』

予想外に大きな声が出て、パルスィが飛び退く。その途端やつと重圧から開放されて、腰砕けになった。

『な、なによお燐。脅かさないでよ』

『えへへ、ごめん……』

目を丸くして大きく息を吐く姿は、ごく自然体だった。取りつかれた訳じゃないらしい。取り繕って話しかける。

『いや、じつと向こう見てたから何かあるのかなって……』

言いながらパルスィの背後を見るけど、特に変わりはない。目を凝らすあたいの頭の横で、パルスィが『ああ』と呟いた。

そしてピースサインを両手で作り、手の甲の面から額に当てる。恐らく最初に見た時と同じ格好をしてから、ポツンと言った。

『これ、呪いのよ』

直後、また妖力の波が肌を叩く。近づいた分足が酷く震えて、脂汗がにじむ。全身の毛が逆立ち、生唾を呑む音がやけに大きく聞こえた。あたいがおののく目の前で、パルスィは涼しげに言い放つ。

『今まで丑の刻参りをしてきた奴等を、皆呪いのよ』

丑の刻参り？ だってあれは効果が無いって、自分の力になるって言ったじゃない

か。それに今やつてる呪いは、明らかにコケおどしじゃない。何の因果でそんな事を。重圧で言葉すら発せずにパルスイを見つめていると、彼女は不意に眉に深い深いシワを刻んだかと思うと、底冷えするような低い声で言った。

『私は呪いの為に人間を捨てたのに、呪ってにおいて幸せに生きる奴等がいるなんて、不公平だわ』

不公平、真剣な響きでもってパルスイがそう言った時、あたいの頭の中に、パルスイ自身の言葉が蘇った。

”自分じや妥当だと思ってるか知らないけど、好き勝手言うんだから”

パルスイがどんな呪いをかけたかは知らない。ただ、丑の刻参りと違って現実のものになるのは間違いないだろうね。

……それから、身の回りや付き合いが変わった訳じゃない。あたいが呪われる事は、よっぽどが無い限り大丈夫だろう。

ただ、呪いなんかは頼りたくはないね。他にいくらでもやれる事はある。幸せ者、なんて言うなら勝手にすればいいさ。皆いつかは死体になるんだ、幸せを享受して何が悪

いってんだけい。

……あたいの話は終わりだ。皆はくれぐれも怨みを引きずったりしないようにね。多分良い事なんかありやしないからさ。

さあ、お次は誰だい？」

三周目・四話目―メデイスン・メランコリー

「……ん〜？ はっ、ああ……私の番ね。

ごめんね、あんまり夜遅くなると眠たくなっちゃって。

私はメデイスン・メランコリー。無名の丘の鈴蘭畑に住んでる人形よ。最近は永遠亭に行ったりしてるから、妹紅とは何回か会ってたっけ。

他の人たちは……多分これっきりかな？ 私あんまり遠出しないし、人と会うのもそこまで好きじゃないし、あの鈴蘭畑は他人に立ち入らせたくないのよねえ。

私が見たいとしたら、やっぱり人形に縁のある人に限るわ。昔人間に捨てられた気持ちは、やっぱりそういう人でないと分かってくれないのよ。

けど、それでも意見の合わない奴っでいるものでね……。

鍵山 雛（かぎやま ひな）ってヤツがいたの。人間から厄っていう悪いものを集めて、神様に帰す仕事をしている。

その厄を集める方法が流し雛。あの雛祭りで飾る雛人形に厄をくつつけて、川に流して捨てられたのを集めるんですって。

それを知った時、私は人形を利用した上に捨てるなんて！ ってムカついたんだけ

ど、雛はそれが役目だから、って言って譲らない。こないだもそれが原因でしばらく喧嘩になっちやったんだけど、雛がついに怒って、こんな事を言い出した。

『ようし、分かったわ。そこまで言うなら、一つ怖い話をしてあげましょう』

『怖い話?』

『私は厄なんて集めているから、そういうのも詳しいのよ』

雛は得意気に胸をはって、ある雛人形にまつわる話をしてくれた。それを今から皆にも話そうと思うの。

へ? 面白半分で話していいのかって? 細かい事いいじゃない、そんな学校の先生みたいに。せつかくの機会なんだから、黙って聞いててよ。

—

少し昔の話なんだけど、里に一人の女の子がいたの。その子の家は少し厳しくてね。色んな言いつけを子供にしていたらしいわ。

道で会う人には必ず挨拶をしない。食べ物を決して残すな、こぼすな。遊ぶくらいなら勉強しなさい。物を買う前に親に必ず言うこと。……てな具合にね。

一つくらいなら決まりもいいけどさ、いくつもいくつもあつたら堅苦しいってもん

よ。私は普段一人きりで束縛なんて無いけど、貰えてもそんな親はいらないわ。

雛だつて言つてたもん。あんまり子供を縛る親は、振る舞いとか態度で元気を奪つていくつて。

彼女も例外じゃなくて、だんだん無口で自分からは何もしない子になつていった。親は言うことを聞かせるばかりで、言いたい事があつてもろくに聞いてくれない。遊んでもちつとも面白そうじゃない彼女には、友達もろくに出来なかつた。

女の子の楽しみは、年に一度の雛祭りくらいだつた。それも友達を呼んで騒ぐなんて出来ないし一人だけのお祝いだつたけど、お雛様はお気に入りで、何年も使つて喜んでいたらしいわ。

そして暗さを抱えながらも成長し、恋もする年齢になつた。既に両親の事は疎んでいて、秘密で付き合つたりもしたわ。

そこで彼女は初めてよく笑うようになった。お団子屋で話したり、騒霊のライブに行つたり、どんな事でも一緒にやれば楽しかった。十数年一緒だつた家族には少しも無かつた魅力を、彼女は彼氏にみていた。

けど、その様子のせいで親に勘づかれたんでしようね。両親は断りもなく金持ちの家と縁談を組んでしまった。他に好きな人がいた女性は反発したけれど両親は耳を貸さず、ついに付き合つていた男も離れていき結婚するしなくなつてしまつたわ。結局親

元を離れてからも、彼女は家族を嫌ったままだった。

家からの宝物といえるのも、毎年飾っていた雛人形だけ。

それから憂鬱な夫婦生活が始まった。もとより愛情を感じていなかった妻は何かを楽しむ事もなく、ただ良妻賢母を演じようと気を抜かずに家事をこなす日々だった。やがて子供を身籠つても、その様子は変わらなかつたらしいわ。

でも、その子供を産み育てるようになってから、彼女の人生が変わり出した。

女の子だったんだけどね、実の子だから当たり前なんだけど、自分にそっくりだったのよ。それがもう可愛く思えて仕方なくて、立派な親にならなきゃ！ とにわかに使命感に燃え始めた。

それ自体は別に良いんだけどさ……。家庭の中で子供に見せる姿は、少なくとも自然体じゃ無かったの。結婚してから良い妻を演じて久しいし、旦那さんは妻の子供の頃を知るよしもなく『君もお母さんだなあ』と呑気に構えてる。里での”家内”の立場なんて窮屈なものだろうし……。

何より、子供は『お母さん』として慕ってくる。子供に立派に見られるというのは立派な『お母さん』になる事、その役目を全うする事だと、少なくとも彼女はそう思った。

そして、彼女はこうしたか。子供は親の鏡、自分がいけないと思つたらどんな小さな事でも直してあげないといけない。そう信じてうるさい位にしつけをしたの。

曰く、道で会つたら必ず挨拶をする事、食べ物は決して残さず、こぼすなんて以ての外。遊ぶより勉強しなさい。物を買う前に私に必ず言うこと……その他色々。

……そう。馬鹿みたいな話だけど、彼女は嫌つていた筈の親にされた事を、子供にそのまま真似していた。一番近くにあった手本だから、知らず知らずにそうなつちゃうんだつて。結構よくいるパターンだつて、雛が言つてた。

ご丁寧に気が入りのイベントまで同じに、雛祭りでも毎年娘を祝つたそうよ。実家から持ち込んだ雛人形に、自分の血を分けた娘を守つてやつてください、つてお願いして。でも、娘も大きくなるにつれてお祝いをやらなくなつていった。代わりにお琴とか生け花とか、色んな趣味を探し始めたの。

まあ家は金持ちだし手を出すのに不自由はなかつたんでしようけど、母親には見慣れない物だらけだつた。父親は娘に色んな経験をさせたくて道具をよく貸したり、母娘と一緒にやらせてみようとしたけど、何故か母親は馴染めなかつた。

娘の夢中になる事に、自分は夢中になれない。はたから見たら珍しい事でもないんでしようけど、母親は酷く違和感を覚えた。

それから娘は更に成長し、母親の知らない事までどんどん学んでいった。同時に多感な年齢になつて……親と一番折り合ひの悪い時期がきた。母親からしてみれば、自分の両親と喧嘩ばかりしていた、思い出したくもない頃。

そして、娘も度々文句を言うようになった。私にもやりたい事くらいある、些細な買い物にまでケチをつけないで……って、ちょうどかつての母親と同じように反発したの。

母親は驚いて、どうにか言うことを聞かせようとした。昔の自分の真似なんかさせてはいけない。そう思つて。

『少しくらい遅くなつてもいいじゃない』

—昔は私もそう言つてたわ。でも駄目なの。

『櫛くらい好きに買わせてよ』

—その気持ちは分かるけど……。でも我慢して。私もそうだった。

『いちいち煩いのよ、お母さんは。放つておいて!』

—……私も何度もそう言つた。でも駄目だったのよ!!

母親は内心でイラ立つようになって、母娘の仲は急速に悪くなっていった。母親は嫌つてはいない筈なのにと自己嫌悪し、娘は早く家を出たいと思うようになった。

そして決定的な事件が起きる。娘がある時『付き合っている人に会つて欲しい』と言出した。両親は男がいるとは思ひもよらず、寝耳に水。黙つていなくなるのも出来たでしょうけど、そこは金持ちの娘だからか、律儀に申し出てきた。

父親は戸惑いながらも了承。母親はまた勝手な事を、と眉をしかめていた。

けど、通されてきた男を見て、母親は言葉を失った。

娘より背の高いその青年の顔に残る面影は、母親が昔に恋をして、引き離された男にそっくりだった。もしかしたら勘違いかもしれないけど、母親は「あの人の息子に違いない」と信じ込んだ。

母親が呆然としている間に話は進み、娘は結婚を前提に付き合うという事になった。でも母親はそんな一大事も気にかけて、頭の中は憎悪で一杯だった。

『……何故私が愛した人と添い遂げられず、どこまでも勝手なあの子がめでたく結婚できるのよ？ それもあの人の息子と』

どんなに問うても答えはなく、代わりに憎しみだけが募っていく。とはいえ父親と家が良いとした結婚を母親一人で覆せる訳がない。娘がどこ吹く風で仲を深めるばかりで、どんな時過ぎてもいつた。

……そして結婚間近の日。母娘はほとんど言葉を交わさずに黙々と嫁入り道具をまとめていた。慣れ親しんでいた物がどんどん片付けられていく中で、不意に娘が口を開いた。

『母さん、これどうするの？ 昔気に入ってたじゃない』

そう言っただけで見てきたのは、母親が持ち出した雛人形だった。もう長いこと使わず、ホコリを被っている。

『捨てて』。振り返ってそう言おうとして、母親は雛人形と目があつた。

厄を引き受けてくれる人形。女の子を幸せにしてくれる人形。そう言われてきた道具のすました表情を見て、怒りがふつふつと込み上げてきた。

『あんなに何度も飾っていたのに。お前は私を幸せにはしてくれないの？ 娘が好き勝手生きていくのを見ながら、つまらない人生を送れというの？』

変わらない人形の顔を見つめるうち、母親はとうとう我慢できずに娘から雛人形を取り上げると、思いつきり壁に投げつけた。

ぶつかつた音が部屋中に響き渡り、ゴロンと雛人形が床に転がつた。衝撃で首はねじれ、腕は千切れ、足が変な方向に折れ曲がつた。

訳も分からず絶句する娘の横で、母親は歯を剥きふうふうと荒い息を吐いている。

でもその様子は、突如一変した。

「ひいひいーッ!!」

ばきり、と固いものがへし折れる音がして、母親の体が変形しだした。首はねじれ、腕は千切れ、足が変な方向に折れ曲がり……。雛人形と同じような格好になつて、体の至るところから血を噴き出し、床一面を真っ赤にした。

悲鳴をあげる娘を尻目に、母親はまるで誰かに動かされているかのように体を引きずり、潰れた虫みたいな格好で赤い筋を残しながらどこかに消えていった。

……何カ月かして、その年の雛祭りがあった次の日、雛が川で紙の雛人形を回収していたら、白目を剥いた母親の死体が流れてきたんですって。それまで何をしていたかは分からない。だけど奇しくもその頃、大火に遭った例の家がすっかり取り壊された。いくら探しても、雛人形だけが見つからなかったそうよ。

『……その母親についていた厄が教えてくれたのよ』

雛は最後にそう結んだけど、私は信じられなかった。無駄に詳細なのは気になるけど、元々が『雛人形は使い捨て』って主張の為だからね。手の込んだネガティブキャンペーンじゃないかと疑ったのよ。

『雛、見つからなかった雛人形は放っておいたの？ 危なそうだけど』

『そりゃ探したわよ。でも私はあまり出歩けないし……』

『うっわ、やつぱり嘘臭い』

『失礼ね、厄ぶつけるわよ』

ヘラヘラ笑って、むくれる雛から目を逸らした。でもその時。

一瞬だけ見えたの。周りの、妖怪の山の木々の影から、血まみれで首がねじれた雛人形が睨んでいるのが。見間違いかと思って二度見したら、その時にはもう消えていた。

……ねえ、あなた達は雛祭りってしてる？ この話を聞いて使い捨てにしようとか、思ってたかしら。

でも私は、親子の方が印象に残ったなあ。なんだか人間の家族って、面倒臭いのね。

私には当分縁がないでしょうけど。

私の話はおしまい。夜中にならないうちに皆終わらせちゃってよ」

三周目・五話目―魂魄妖夢

「あ、どうも。魂魄 妖夢です。

むむ、ついに私の番ですか。そんなに経ったかなあ。まだネタがまとまって……。

あ、いえ違いますよ。ろくに聞かずに自分の分を考えていたとかじゃありません。誤解しないでください。

ん？ 良ければ巻きで……つてもう五人目!? いつの間に……。

え、えーでは、とにかく話しましょうか。これは妖怪の山の知り合いの方から聞いた話です。

犬走 権（いぬばしり もみじ）さんをご存知ですか？ 妖怪の山で哨戒の仕事をする白狼天狗です。私はあまり顔を合わせる事がなくて、会ったとしても『何か用ですか？』とつれない顔をされる事が多いのですが、主人の命があつてと頼み込み、今回は珍しく話を伺う事が出来ました。

その時ひねり出してくれたのが、これから話すものです。

あまり趣旨に沿うかは分かりませんが……私も権さんと同じく忙しい身の上ですので、どうかご容赦ください。

……これはまだ日の短い、雪が解けて間もない頃、夜中に椀さんが天狗の詰め所の見回りをしていた時の話です。

椀さんは提灯を片手に白狼天狗用の大きな剣を背負って、部屋の障子をつつ開けながら詰め所の縁側を歩いていました。

とうに他の同僚や上司は家路につき、灯りも火も消え、建物の中は真つ暗で未だ冷気を纏った風が鋭く吹きつけてきます。裸の足を擦り合わせながら、椀さんがスツと曲がり角を曲がった、その時です。

ある一室から明かりが漏れています。障子に影が映っているので、消し忘れでもないようです。

こんな夜分に、一体誰が？ 椀さんは眉をひそめ、いつでも剣を抜けるように身を屈めながら、そろそろと部屋に近づきました。

一步、二歩……。壁に張り付いて様子を伺うと、物音はせず、影も動きません。泥棒ではないのか？ ならば一体……。訝しみながら戸に手をかけ、一気に開け放ちました。

『誰だっ!?!』

『ひゃあああっ!?!』

椀さんが飛び込むなり声を張り上げると、中にいた人物が悲鳴をあげました。

そこにいた少女は腰を抜かし、目を見開いています。その視線が椀さんとぶつかる
と、今度は二人そろって目を丸くしました。

二人は互いに見知った仲でした。中にいたのは射命丸 文（しやめいまる あや）さん。種族的には椀さんの上の烏天狗で、仕事は哨戒ではなく事務などが領分です。二人の分野が違うのに加え文さんの場合は時々命令に背いたりするので、椀さんとは折り合
いの悪い方でした。

『……文さん? 何してんスカこんな夜中に』

『も、椀こそ!』

『アタシは見回りっすよ。ほら提灯』

狼狽える文さんを見ながら、椀さんはため息をつきました。というのも椀さんが私情
を挟まないタイプなのに対し向こうは全くその逆。しかも文さんの場合は単なる私情
でなく個人的に新聞を発行したりしていたので、こんな時間にいるというのは、大方仕
事場で勝手に新聞の原稿でも書いてるんだらう。そう高をくくったのです。

しかし、いざ辺りを見回すと確かに机に向かつてはいますが、机上はおろか文さんの

周りには紙もペンも見当たりません。

代わりに文さんの目の前に一葉の写真がポツンと置かれています。

『コイツは一体……』

拾い上げてみると、写真には三人の鬼が、旧都の通りをバツクに並んで写っています。ふと顔を上げると文さんは目を伏せ、小さな声で言いました。

『……私、呪われてるんです』

『はあ?』

椀さんは片眉を吊り上げ、写真を逆さまにしたりしてしげしげと観察しました。しかし文さんは力なく首を横に振り、また言います。

『撮った時は普通でした。でも今日の昼……』

そこで言葉が弱々しくなり、一つ唸って文さんは顛末を語り始めました。

その日の昨日、文さんは野暮用で旧都を訪れた際、三人組の鬼に声をかけられました。彼らがまた大の珍しい物好きで、見慣れない文さんのカメラを見ると記念に撮ってくれとせがんできたそうです。

まあ一枚くらい……と了承した文さんでしたが、おそらく偉そうにしていた鬼が気に食わないのか単に悪戯心からなのか、内の一人にコツソリ、ある嘘を吹き込んだのです。

”三人で撮って真ん中になった者は、魂を抜かれ近々死ぬ”と、当の本人に。

そこまではまだ良かったのですが、一日経って文さんが焼き増した写真を届けにいくと、なんと嘘を吹き込んだ鬼が亡くなったと言うのです。

曰く、何故か浴びるような酒を呑んで……。鬼は嘘をつかないと言います。知識不足もあって、真に受けてしまったのでしょうか。もう長くないと思ひ込んでやけ酒をあたり、本当に……。

まさか本当に死ぬと思っていたいなかった文さんは仰天。お悔やみの言葉もそこそこに、飛んで帰って今に至るという訳。

『今夜にでも化けて出るんじゃないかと……』

『うーん……』

文さんは話し終わると、頭を抱えて情けない声をあげました。聞き終えた権さんは腕組みして目を閉じ、数秒……。

パツ、と目を見開き、背筋を伸ばして。

『まつ、頑張ってください』

『エエエツ!!? 見捨てるんですか!?!』

提灯を持ちなおし出て行こうとする権さんの尻尾を、文さんはトビウオの如く掴みました。涙目になりながらしがみつく文さんを振り返り、権さんは面倒臭そうに言いました。

『放っておきやいいんすよー。お互い自業自得……』

『自業自得で通じるならいいんですよ！ 相手は馬鹿です！ 馬鹿の恨みは怖いんです！！』

『文さん本当に怖いんすよね？』

ズルズルと部屋の中に引きずられ、椀さんは渋々文さんと机で向かい合いました。二人が目を落とす先には例の写真。

『もし変に言いがかりをつけて祟られたらと思うと……』

『あー……』

肩を落とす文さんを見ながら、椀さんは改めて天狗の境遇を考えました。元々鬼より下の立場だったのが妖怪の山から旧地獄への移住で鬼が消え、代わりに勢力を作ったのが天狗。それまでは鬼から様々な苦勞、時には絡み酒なんかもされたのでしよう。

その苦境が去って久しい所に幽霊となつて襲来の危機。生きた同士でさえ酔っ払って会話しにくかった相手が、恨みを持つて死亡済みの体で戻ってくる。種族として大酒飲みの鬼が死ぬ程のやけ酒、さぞかし深い絶望の反動が襲い来る事でしょう。同じ時代を知る者としては、同情しなくもない。

『まあ、写真があるなら祓うなりしたらどうです？ 神社や寺で』
気を取り直した椀さんが提案しますが、文さんは浮かない顔。

『鬼には通じません。多分』

確かに、人間の幽霊のようにはいきそうもありません。椀さんはそこでもう一言。

『でも霊夢なら何とかしてくれそうじゃないっすか？』

『なーんか面倒な事言つてきそう……』

『お祓い代を、お払いなさい！ とかいって』

『……………』

シヤレを言ってみても文さんは暗いまま。霊夢の神社の家計が火の車らしい事を揶揄したつもりでしたが、その人気の無さから思い当たるのは嫌な事ばかりのようです。

『大体、霊夢がまともに霊を扱いますかねえ？ その気になりや墓石も粉碎しそうです

』よ

『霊園より0円が怖いだよ、なんつって』

『……………』

また一つシヤレを言うと、文さんは更にゲンナリ。ついには机に突っ伏してしまいました。

椀さんもからかうつもりはありません。彼女なりの少しは元気になってくれという、気遣いのつもりでした。しかし性根が堅物ゆえ、急に上手いギャグなど言える筈ありません。諦めて仕切り直し。

『じゃ、どうすりやいいんスカ？ ハッキリ言つて正攻法は無理つて事つスよね？』

椀さんが言うのと、文さんは目だけ動かして宙を睨み、自信なさげに首を傾げました。

『あの鬼、珍しい物が好きみたいでしたし……。なんか他に見た事がなさそうな物があれば……』

『供えればいいんスカ？』

『多分』

頼りない返事でしたが、手が無いよりはマシだとまた考え込む二人。うーん、うーんと唸つてから、文さんが先に口を開きました。

『そーいや、河童が鉄砲を売つて……』

『本当つスカ!?!』

『あ、でもあげちやうのは……』

言いかけて文さんは口を結びました。恐らくここにきて自分も欲しいと思つたのでしょう。そんな場合じゃないだろうと椀さんは頭にきて、メモを片手に問いただしました。

『私を買つときます。なんぼつスカ？』

『えーと……一丁きりです』

『じゃなくて、お代つスよ』

『台の方は確か櫛で』

『いや金ですつてば!』

『金の方は鉄で』

『だあーもう、値は!?! 値っスよ!?!』

『音(ね)はズドーン』

呆れて席を立つ櫛さんに、先程より強烈なタツクル。着物がすつぽ抜けそうな程に争つて、息を切らしながら戻り、仕切り直し。

『うー、櫛い、何かありませんかあ?』

困り果てた文さんは足をばたつかせてぐずり出しました。ここまで来ると流石の櫛さんもしんどくなってきた。

『あー、珍しい物、珍品はないんですか、珍ブツは!?!』

『……アタシにチンはありません』

『じゃ、何ならあるのよ』

『……女のナニなら』

『無かつたらヤバイでしょ!?!』

『さよう、タマらん』

なんだか空気が下手な漫才みたくなってきた。ついには櫛さん、らちが開かないと立

ち上がって背中の中の剣を抜く。

『ひ、直接戦闘ですか!?』

『じゃつかあしやい、例の写真っすよ。この際叩つ斬つてやる』

椀さんの背丈程にある刀身を余す事なく光らせる大剣を見、続いてヒラヒラと煽られる小さな写真を見て、文さんは頼もしいと同時に怖じ気づいた。

『お、落ち着いてください。故人の写真を切るのはいくらなんでも……』

『真ん中で撮ったのが原因でしょうか？ 1. 5人ずつに分ければ、真ん中はいなくなります』

『おお、なるほど』

すでに夜も更けて疲れ果てたのか、妙な理屈で行動する二人。椀さんが剣を渡して写真を押さえ、文さんは真下に剣を向ける。

『ほら、押さええますから。ちゃんと狙って』

『は、はい……むっ』

やはり決着は本人がつけようと文さんが剣を持った方がいいもの、なにぶん大きな武器の上に当人が事務方とくれば思うようにいかない。せめてのが動かないようにと、椀さんに万全を要求する。

『もつと、もつとしつかり押さええて』

『早くして下さいよ!』

最初は指先で押さえていたのを段々被せる範囲を広くさせ、やっと納得。文さんも剣を振り上げ、狙うは一点のみ。

『では行きますよ、いいですね?』

『油断しちゃ駄目つスよ?』

『分かつてます……。セヤアーツ!』

勇ましい声をあげ、振り下ろした刀が机ごと写真を貫く。ドスンと重たい音がして数瞬。

文さんはおそるおそる写真を見下ろした。いくら恨んでいようが所詮はただの無機物。真つ二つの哀れな写真があるのみで、正体見たり枯尾花と笑い飛ばせるに違いがない……。

と思いきや、写真の上にはまるで生物に突き刺したかのように赤い液体が噴き出し、瞬く間に黒いシミが広がっていくではないか。文さん、これを見てヒエエと腰を抜かす。

『ち、血、血! やっぱり祟りだぁーアーツ!!』

『いや、アタシの指を切ってるんスよ!!』

三周目・六話目―赤蛮奇

「次は私、か……。もう六話目だっけ？ 私が一番最後？」

……まあいいや。私は赤蛮奇。普段は人里に住んでるけど、れつきとした妖怪だ。飛頭蛮っていう妖怪がルーツの、平たく言えばろくろ首だよ。……ほら、こうやって首が外れる。

だけど誰にも言っちゃ駄目だよ。里では秘密にしているんだ。この場にいる皆ならともかく、名前も知らない人間に見られちゃ面倒だからね。軽々しく外に出られる程、力に自信は無いし。

隠すのは意外と大変でねえ。極力人付き合いは避けてるんだけど、先日には酔っ払いが寝ている私の部屋に入って来たりなんかして。

とつさに布団を被ったんだけど、首が離れたまま布団からはみ出て、胴から先が反対側から丸出しで、スッゴい胴長みたいになった。

あの時は流石に焦ったなあ。でも、案外見間違いかと思って騙されてくれたよ。人間、見えない部分があってもソレっぽい部分が見えていたら後は誤魔化しが効くものさ。

へ？　それが怖い話にどう関係あるかって？　そう慌てなさんな。ある妖怪が話してくれた、早合点からなるゾツとする話があるんだよ。

……あれは、この集まりの誘いを受けてすぐの頃だった。私は特段やる事もなく、いつものように里をぶらついていた。

適当に酒場で一杯やって、夕暮れになった頃。さて帰ろうか、と席を立った所で、怖い話のネタはどうしようかと思ひ当たったんだ。

実際の話、適当に受けて忘れかけていたんだよ。いや悪かったって。こうしてちゃんと来たんだから良いじゃないか。

……で、だ。思ひ出したからってそう都合よく話が浮かぶ訳もない。誰かにネタを頼もうにも知り合いは少ないし、どこかに出かけようにもあまり遠くに行くとは危ないし、何より面倒臭い。だからって、明日にしたらそのまま忘れてしまいかねない。

さてどうするかなあ、と考えあぐねていた所で、良いアイディアが浮かんだ。墓だよ。墓つていえば、皆は寺の墓地を思い浮かべるかもしれないけど、里の外にも人間の共同墓地があるんだ。

そこなら家よりマシな発想が浮かぶだろう。そう単純に考えて、私はスタスタと里を突っ切っていった。

……やがて墓地が近づいてくると、心なしか空気も冷え冷えとしてくる。単に夕暮れ時のせいかわからないけど、私はどうにも不気味に思えた。

でもだからこそ選んだんだと思ひ直して、駆け足で墓地に足を踏み入れた。

……だけど、そこには人影があつた。墓の一つの前に佇んで、辺りの景色に似合わないお洒落な日傘を持っている。

あちゃ、先にお参りに来た人がいたのか。これじゃあ一人でポーツと考え込む訳にいかないぞ、つてため息をついた。諦めて帰ろうか、それとも向こうが帰るのを待とうか……。

少しの間人影を睨みながら考えていた。その時、不意にその人影が、ぐるりとこちらを振り向いたんだ。

その瞬間、背筋が凍った。

そこにいたのは人間じゃなかった。妖怪、それも誰もが恐れるとんでもないヤツだったんだ。

風見 幽香（かざみ ゆうか）だよ。あの植物を操る……と言えば穏やかそうだが、その実、桁外れの腕力と妖力で泣く子も黙るともつばらの噂の。

何故彼女がこんな場所にいるのか、そんな疑問を浮かべる余裕はなかった。相手はもうこちらに気付いていて、背中を向ければ間違ひなく不興を買うだろう。身の安全を考えたら、とにかく悪い印象は与えられない。

『や、やあ、意外だね。貴女が墓参りなんて……』

顔をひきつらせ、早口で言いながら歩み寄る。幽香は表情を変えなかった。緑色の髪の毛の陰から覗く瞳、その先には墓前に供えられた真新しい菊の花があった。

『ここに、知り合いが……』

『そんなんじゃないわ』

幽香のつまらなそうな声。おそろおそろの振り向くと、鋭い視線とぶつかった。どうやら彼女は苛立っているらしい。

『本当なら人間に花なんかやらない。ただ、以前失敗しちゃったから』

失敗、いかんせん簡潔すぎて伝わらない。私が何も言わずにいると、幽香は一つ咳ばらいして言った。

『……仕方ない。この故人に何があつたか、教えてあげる』

『え、いやでも』

『いいから聞きなさい。私が人間の死を悲しんできるとか思われちゃ、たまつたものじゃ無いわ』

そう一方的に言ってから、幽香は去年の事を話し出した……。

去年の夏、幽香の住んでいる太陽の畑では例年通り、一面に黄色くヒマワリが咲いていた。白い雲がくつきり浮かぶ青空と肌を小麦色に焼く熱気。その中で咲き誇る花々とところ構わず妖精がはしやぎ出すような雰囲気のせいか、夏には妖怪たちのコンサートが行われて盛り上がる頃だった。

もつとも、幽香は騒がしいのが好きじゃなくて、ただこれからやってくる喧騒と次いでにうだるような暑さに辟易しながら過ごしていた。

そうして汗をかき日に焼けながら、いつものように花に水をやっていた時。

何か、人影のようなものが見えた。最初は気温のせいで蜃気楼でも見えたのかと疑ったけど、確かに髪の毛の長い女がポツンと立っていた。

ただ、妖怪の格が高いからか、幽香はすぐに常人とは違うものを感じ取った。何となく陰気で冷めた雰囲気、しかし一見普通に見えた事から、そいつは亡霊だと分かった。だけど……。

『ちよつと、ここは人様の庭よ。勝手に入らないで』

幽香の対応は強気なものだった。たとえ神様だろうが、彼女の花畑に踏み込むというなら容赦しない。いわんや死に損なつた亡霊となれば、花に悪影響が出ないうちに追い出してしまいたかつた。

幽香がズカズカ詰め寄ると、やがて亡霊が悲しそうに振り向いた。死んでからそう経っていないのか、髪にはツヤがあり目元もパツチリとしている。

『だけど、ここで彼を待っているんです』

『彼?』

亡霊の言葉に幽香が首をかしげると、亡霊は胸の前に手を合わせ、か細い声で言った。『私が付き合っていた人です。夏のここでのコンサート、一緒に行こうって言ったのに……』

亡霊が涙声になつて俯く。自分には鬱陶しいばかりのコンサートだったが、人によつては大事なイベントなのか、と幽香はため息をついた。亡霊は下を向いたまま、今にも泣きそうに体を震わせている。

『だけど、貴女もう死んでるじゃない。行くべき場所に行かないとまずいわよ』

『そんなあ……結局一度もデートしてないんですよう……』

亡霊は情けない声をあげて、とうとうベソをかき始めた。その様子はちようど泣きじゃくる女兒そっくりで、幽香は額に指を当てて唸るしかなかった。この様子では簡単

に出ていってくれそうもない。力づくで追い出してもいいが、立っているだけで汗が吹き出るのに戦いなど御免被りたい。

幽香が頭を抱えている間にも、亡霊はしゃくりあげながらチラチラと幽香の表情を伺いだした。面倒臭い事この上ない。

とうとう一人で対処するのが嫌になった幽香は、彼氏とやらの助けを借りる事にした。そもそも発端は彼氏と彼女なのだ。責任をとってもらわなきゃ困る、と幽香は亡霊に向き直った。

『仕方ないわね。男の名前を教えなさい』

『えっ！ 手伝ってくれるんですか!?!』

『その方が簡単そうだからよ。いいから名前』

『はいっ！ ○○君です！ 今は確か、17でした』

幽香は○○という名前に聞き覚えがあった。最近里の花屋でよく会うようになったハンサムな青年だ。年の頃も確かに同じくらい。案外楽に終わるかも、と幽香は胸を撫で下ろした。

『そして髪型は短めで、趣味は野球、好きな食べ物はニシン蕎麦で、好きな色は焦げ茶—』
『あぁ—もう分かった分かった』

彼氏についてペラペラまくし立てるのを遮って、幽香は近日中に彼を連れて来ると約

束した。亡霊は何度もお礼を言い、ウサギのように跳ねて去っていく。

その後ろ姿と、周りを振り回しそうな口調や素振りを思い出しながら、幽香は恋をした人間は皆こうなのかと肩をすくめていた。

次の日、幽香は人里に繰り出した。いつもの花屋を見つけると、案の定青年が花を買っていた。手元を見ると、小さい菊の花。

『こんにちわ。これからお参りかしら?』

『え、どうして分かったんです?』

『買った花で分かるわ』

『あ、そうですよね』

照れたように笑って歩き出す青年。彼は既に打ち解けた気であったのか、幽香が偶然を装って並んで歩き出しても、里の外にある共同墓地まで着いて行っても嫌な顔をしなかった。

やがてある墓の前に来ると、花を供えて手を合わせた。

『お知り合い?』

『……まあ、そんな所です』

青年は手を合わせたまま、振り返らずに言った。墓石を見ると、確かに亡霊から聞いていた名字と同じ。幽香はさりげなく彼の背中に向けて聞いてみた。

『……彼女さんか誰か?』

『……何て言うか、ええ』

彼は誤魔化したけど、幽香は恥ずかしかっているんだと解釈してそれ以上追求しなかった。元々興味は無かったし、何より亡霊から秘密にしておいてくれと頼まれていたんだ。死んだ者が会いたがっているなんて聞くより、直接会って話した方が却って普段通りでいられるだろうって。

さて、そこから青年をどうにかして太陽の畑に連れ出さなきゃならない。この段になって幽香は理由付けに悩んだ。知り合いといっても結局はそれだけ。自分の家もある場所にどう言って来てもらうか……。

しばらく考えて、幽香はおもむろに口を開いた。

『……明日、空いてたら太陽の畑に来なさい』

『え、何ですか突然』

『良いから。正午に、あの花屋で待ってなさい』

直球だった。幽香としては必要な事だけ言ったつもりだったけど、青年にしてみれば違う意味に聞こえたようだ。

『……ええ、俺って意外にモテるのかなあ』

『違うわよ。いいから明日ね』

幽香はむすつとして吐き捨てて、早足で家路についた。自分も誤解させる言い方をしたと思いつつも、一ミリも恋慕の情を感じない相手から勘違いされて舌打ちしてしまふ。

そして、故人とはいえ彼女の墓の前で出す態度ではないだろう、と心の中で呆れた。まあ、死んだ相手ならあんなものか、と諦めて、亡霊に明日来ると経緯を伝える。もつとも、彼が幽香になびいた事は言わなかつたけど。

そして、あくる日の約束の時刻。いつものように晴れた青空と咲き誇るヒマワリが鮮やかな色で輝く中へ、幽香が青年を連れて来た。彼はまだ事情を知らない。ただ景色を見て『綺麗ですね』と呑気に関心している。

しばらくして、幽香がひまわりの陰から亡霊が顔を出しているのを見つけた。久しぶりに会うからかあの能天気さは影を潜め、キョロキョロと自分達の方を窺っている。

『ほら、彼女さんがあそこにいるわよ』

青年に声をかけて、亡霊を指差す。つられて見た彼は一瞬、目を疑った。視線は釘付けになり、目を真ん丸に見開いて、口をポカンと開けている。

最初は亡霊と会ったからだろうと思っていた。けど、それだけじゃない。額にはじわじわと汗が滲み、足を外れてしまいそうな程震わせ、歯をガチガチ言わせ始めた。

何かがおかしい。幽香が隣の様子を見て顔をしかめていると、ふわり、と亡霊の方角

から冷たい風が頬を撫でた。

振り向くと、亡霊が両手を広げ、浮かんだ状態のままどんどん近づいてくる。その表情は喜びなんでもんじやない。目の瞳孔は目一杯小さくなり、口を三日月の形に開けて歯を剥いて、食いつかんばかりに詰め寄ってくる。まさに”狂喜”だった。

『うぎゃあアアーツ！』

気付くと彼は背を向けて一目散に駆け出していた。それが数歩もいかないうちに、背中に煩いほど髪をなびかせた亡霊が覆い被さって—

それつきり、二人は陽炎のようにふつ……と消え失せた。

『……へ？』

幽香はしばらくして我に返り、辺りを見渡した。立っているのは自分一人。サラサラと風がヒマワリを揺らしているばかり。次に花畑中を探し回った。だけど、とうとう二人の姿は見当たらなかった。

元の場所に戻って色々と思いついてみる。亡霊は青年を彼氏だと言った。一度もデートしていないけど、好きなものを色々知っていた。そして曲がりなりにも青年に会えて喜んでいた。

しかし、青年の方はどうだったか。

彼女かと聞くとハッキリとは答えなかったし、幽香の言葉にお誘いかといとも簡単に

浮かれていた。何より、姿かたちもそのままな亡霊を見て、見るからに怯えて逃げ出している。

二人は本当に恋人同士だったのだろうか。幽香の頭をそんな疑問がよぎった。亡霊の言葉を信じて事を進めたけど、二人が”付き合っている所”を一度だつて見たことがあつただろうか。

当人たちが消えた後から疑問は膨らみ、幽香は腑に落ちない気持ちで家に戻った。

……そして夜が開けると、机の上に一通の手紙があつた。戸締まりはしてあつた筈だけど、幽香は何故か不思議にも思わず封を切る。

そこには、こう書かれていた。

『やつと一緒になれました。ありがとうございます』

そして手紙には、一つの花が添えてあつた。スグリっていう、白く小さな花。

スグリの花言葉を知ってるかい？ 色々あるけど、その中にこんなのがあるんだ。

”あなたに嫌われたら、私は死ぬ”。

……あの二人が果たして普通に交際していたのか、今となつちや闇の中だ。だけど、ちようどそのすぐ後に太陽の畑で行われたプリズムリバーのコンサートで。

気質に敏感なあの三姉妹が、時折怪訝そうに顔をしかめるのを、確かに見たんだつてさ。

全く、他人との関わりは面倒臭いね。まあ私は恋人どころか友達もないけど……。
なに？ 友達はあるだろって？ ……別にどうでもいいだろ、そんなのはさ。
私の話はここまでだ。もう多分誰も来たりしないよな？」

三周目・赤蛮奇END―『思い出せない』

……赤蛮奇の六話目が終わった。彼女は自分の分が終わると後は知らないという態度で、ため息一つついて気だるそうに壁によりかかってしまった。

……部屋を退屈そうな沈黙が包む。これで一応全員の話聞き終えた訳だが、私は解散を告げるのを躊躇していた。というのも、妹紅の言った“来るかどうか分からない七人目”の事が気にかかっていたからだ。

もしその七人目が遅刻をして来たとして……―とんでもない大遅刻な訳だが―出迎えるのが家主の私だけだったりしたら。

そいつは私とマンツーマンで怖い話をする事になるのだ。これが恐れられる。

生徒の補習で時々二人きりになる事があるが、私が真剣に教えると決まって相手は退屈そうにしている。

あまりに長くなると帳面に落書きをしだしたり、私に向けてギャグを飛ばしたりする者もいる。暇な時に思い出すと笑えたりもするのだが……。

仕事の最中だと言ってしまうのだ。“ふざけないで真面目にやりなさい”と。良いところ軽く流して勉強に話を戻すのが私のクセである。これでは石頭と揶揄される

のも仕方ない、そう陰で自嘲したのは一度や二度ではなかった。

本職である学業が関わってさえこの始末だ。義務でも何でもない遊びの場で二人きりで場を持たせるなど、私には荷が重いように思う。

苦い回想をしてふと我に返ると、視界の隅に隣の顔が入った。つられて顔を上げると彼女は天井を睨み、チラチラと気忙しそうに視線を泳がせている。

ネズミでもいるのだろうか。掃除は週に一度はしている筈だが、思わぬ見落としでもあったのだろうか。

どうせ授業は無いのだし、明日辺り気合いを入れて掃除するか……。そんな風に呑気な事を考えて皆の方に向き直ると、そこにはやや顔をしかめる光景があった。

ほぼ全員があらぬ場所を睨んでいる。壁をじつと睨んだままのママゾウ。首だけを静かに回転させて部屋を見渡し、苦虫を噛み潰したような表情をする赤蛮奇。メデイスンも生意気そうだった顔が青ざめ、礼儀正しかった妖夢までが壁に掛けた刀に手を伸ばし、荒い息を吐いている。

何が起こっているのだろうか。私の目にはそれこそ彼女らの様子を除いて変わったものは見当たらない。

不安にかられて隣の妹紅を見る。するとまるで敵対者に向けるような険のある視線を送られた。思わぬ落としとしてしまう。

悪ふざけでは無いと思うが、これでは私は丸つきり置いてきぼりだ。そう戸惑いながら肩を落とした時。

突如つん、と鼻を突く臭いがした。とつさにスンスンと嗅ぎ回れば、疑いようなない気色悪い空気、まるで廃材置き場に死体を放置して腐るに任せたかのような臭気が脳髓まで届く。

思わず胃液が逆流しかけ、慌てて押し留める。酷い臭いだ。このメンバー以外誰も出入りしていない筈なのに、まるでずっと部屋で籠っていたかのような激臭。

「すまない、ちよつと外の空気を……」

言いながらヨタヨタと腰を上げると、立ちくらみと頭痛が一気に襲ってきた。不可解な現象に首をかしげる余裕もなく倒れそうになった。その体を誰かに受け止められる。

霞む視界には、私を見下ろす妹紅の顔があった。彼女は険しい表情のまま私の肩を担ぐと、耳元で短く囁いた。

「出た方が良い」

その意味を聞き返すより早く、いつの間にか帰り支度を終えた面々が私達の横をすり抜けて行く。

そして妹紅は明かりも消さずに一目散に廊下に飛び出した。ドタドタと音を立てて走り回り、やがて向こうに開け放たれた玄関が見えてくる。

その戸をくぐり抜けて闇の中に飛び込むと、途端に涼しい空気が身を包む。さつきまで汚水の中に溺れていたかのように、品もなく大量に息を吐いた。

「はあっ……はあっ……」

里の通りまで引きずられる間、肺一杯に酸素を交換する。さつきまでの体の不調が嘘のように消え失せ、額にびっしょりかいた汗が清々しく感じた。私は一体どうなっていたのだろう。息を一つついて周囲に視線を巡らせると、待っていた皆それぞれが曇った表情で顔を見合わせていた。

その中から、燐が私に振り向く。

「怨霊だよ。あたいたちに惹かれて寄って来ちまったんだ。ありや厄介だよ」

燐は頭を掻きながら寺子屋の方角を睨んだ。そういえば最初にメデイスンがふざけて言っていたっけ。これだけ妖怪が集まれば悪霊とか寄ってくるかも、と。まさか本当になるとは。

「本当に来る事ないじゃない。気味悪いつたら」

「嘘から出た真、か……。一気に酔いが覚めたわい」

「やっぱりに集まるなんて不味かったな」

「わ、私達、どうなっちゃうんですかあ?」

口々に不安げな声が飛び出す。妖怪がそこまで怖がるのか、と訝しむ者がいるのかも知

れない。しかし精神的な存在である妖怪は怨霊のような気質に作用する存在に対し、意外に脆い。燐が言うように悪質な霊だった場合、手を出さないのはむしろ正解だ。仮に魂への対抗手段を持つ妖夢が勇敢でベソなぞかいていなかったとしても、向かつて行くかは別問題だ。

「とりあえず霊夢を呼ぶしかないか……」

「夜中に押し掛けて大丈夫か？」

「仕方ない、緊急事態だ」

言うが早い。妹紅は飛び出し、その後が続いて一斉に空を一直線に飛ぶ。全員が博麗神社の境内に着くや否や、私は神社の戸を叩いた。

「霊夢、居るか!? 出て来てくれ!」

大声で呼び掛ける。二、三度繰り返すと扉の向こうからドタバタという煩い音が響き、やがて寝巻き姿の霊夢が顔を出した。無理に起こしてしまったようで髪は乱れ、目はしょぼぼくれて不機嫌そうに吊り上がっている。

「何の用よ?」

舌打ち混じりに低い声で訊ねてくる。一瞬たじろいでしまったが背に腹は代えられず、先程の出来事を説明する。寺子屋で怪談をしていた事、集まったメンバーのせいかな不安な心配がした事、それがどうやら怨霊らしい事……。合間合間で妹紅や燐が補足し

てくれ、妖夢が涙声で危機を訴えた。

しかし、それを聞いている間も、聞き終えた後も。

霊夢は私達を睨みつけたまま口を横一文字に結び、一言も喋らなかつた。

最初は起こしたのを根に持っているのかと思つたが、窮状を全て聞かされても黙り込み、動き出さないのは不自然に思われた。いざという時は必ず出張ってきたのが霊夢だ。

彼女が何故そうしているのか、段々と皆も不思議に思えてきたのか、隣と不安そうに視線を交換する。すると霊夢はゆっくりと口を開いた。

「……それ、本当？ あんたら、霊の気配が全くしないわよ」

え、と訝しむと、霊夢は困つたような表情で肩をすくめた。その仕草は本当に原因が見当たらず戸惑っているようだ。

「う、嘘だつて言うんですか! 私なんて寒気が止まらなくて気持ち悪くて泣きそうだったのに!」

「そうだよお姉さん。怨霊をあたいが間違う訳ないって」

「肩が外れそうなくらい重かつたのよ。あんなの鈴蘭畑でもそうそう無いわ」

口々に反論する面々を霊夢は半信半疑といった表情で眺めていた。やがて額に手を当ててひとしきり唸ると、「着替えるから待ってて」と言ってくるりと背を向けた。

巫女装束に着替えた霊夢と共に、今度は寺子屋へと向かう。怨霊が発生した場所を探せば何かしら手がかりが見つかるだろうとの判断だ。

月明かりもろくに届かない、厚い雲が立ちこめる夜空。私にはまたあの悪臭と倦怠感が襲つてきそうな、暗くねばついた空気が感じられた。霊夢は、何ともないのだろうか。

寺子屋の戸を開け、霊夢を先頭にズカズカと踏み込む。やがて怪談をしていた広間に踏み込み、霊夢は注意深く部屋中を見渡した。

一巡、もう一巡。

そして私達に振り返る。しかし、言つた言葉はまたしても期待とは違つていた。

「もう何もいないわ。騒ぎすぎじゃない?」

霊夢の白けた表情に、思わず唇を噛んでしまう。あの時の魂をすり減らされるような感覚は生々しく頭に残っている。簡単に片付けられて納得は出来なかつた。

「もつとよく調べてくれ。どこかに潜んでるかも知れん」

「だけどねえ、モノによつちや目より勘の方がアテになるのよ。実際、今つて気分悪い?」

霊夢の言葉に自分の体を見回してみる。そういえばあれほど息を苦しくした臭いや、立つのも困難にした重苦しさが今はほとんど感じられない。慣れてしまったのかと神経を集中したが、それは逆に気のせいという可能性を深めただけだった。

「……………」

「まあ、たまたま寄って来ただけでも、焦るのは分かるけどさ」

霊夢が黙りこんだ私に微笑んでくる。もう心配ない、悪く言えば気にしすぎだと言外に含んでいた。

「もう気にしなくていいんですか?」

「とりあえずはね。本当に害意があれば、話すだけで影響あるくらいだし」

「そ、そう……良かったあ……」

妖夢が一気に表情を弛緩させる。霊夢はそれを一瞥すると、挨拶も無しに玄関へと歩き出した。

「あ、霊夢……悪かったな。呼び出して」

「気にして無いわよ。教えてくれてありがとう」

手だけをひらひらさせながら、霊夢は神社へと去っていった。後は私含めて拍子抜けした七人が残される。

さつきまで大騒ぎしていただけに、誰もが間が悪く雰囲気を引きずったままだ。感覚で驚異が去ったと分かってても、すぐには気持ち切り替えられない。

端から見たら間抜けであろう無言の空間を打ち破ったのは、مامィゾウだった。

「じゃ、帰るかの……」

そう言つて羽織を翻し、里の出口へのんびり歩いて行く。キセルを吹かしているのか、微かに焦げ臭い香りがした。

それを見送り、一人、また一人と別れの為の笑みをつくる。

「ばいばい、先生」

「ま、悪くなかつたよ」

「あ、あの、誰か一緒に来てもらえませんか？」

「ハイハイ、あたいが行きますよつと……。そいじゃあね、先生。せいぜい参考にしなよ」

明かり一つない野山の向こうへ手を振りながら消えていく。その姿も暗闇と静寂の中へ溶けて無くなり、寺子屋の前に私と妹紅だけが残された。

「すっかり遅くなつちまつたな」

「悪かつたな、妹紅。色々してもらつたのに、こんな幕切れになつて」

「なんで慧音が謝るんだよ。お前は何もしてねえだろ」

妹紅は呆れた風に言つたが、私は素直に頷けなかつた。コトの発端が私のわがままだっただけに、何かしら劳いの一言でもかけてやりたかつたのだが、性分のせいか氣の利いた台詞が出てこない。

「お前は氣にしすぎなんだつての。大体文句を言うなら来なかつた七人目だろ。曖昧な

返事しやがってよ」

言い淀む私をよそに、夜空に向けてぼやく妹紅。ふて腐れたように宙を蹴るのを見て、つい笑ってしまった。

「そういえば、七人目は結局誰だったんだ？ 勝手にサボるような奴なのか？」

「んー？ ああアイツね。名前は……」

ブツブツ文句を言うのを窘めてから、それとなく聞いてみる。人物によつては体の調子を崩したとか色々考えられるのだ。事と次第では見舞いに行こうかとも考えていた。

「……あれ？」

しかし、今にも名前を言おうとしていた妹紅は、ふと言葉を切った。ポカンと開いた口がそれきり動かなくなり、代わりに夜空に向いた目が、次第に頼り無げに泳ぎ出す。数秒間それが続き、ついにこちらから尋ねてみた。

「どうした？ 言ったらまずいのか？」

「いや、そうじゃねえんだが……。え、とな」

私が尋ねると、妹紅は歯切れ悪く呟くのみ。見ず知らずの人間でも誘ったのだろうか。いや、それにしても名前くらいは聞くだらう。最初だって秘密だとは言ったが知らないとは言っていないのだ。

しばらく妹紅の答えを待つ。地面に目を落としてから未だ腑に落ちない表情で出さ

れた返答はしかし、こちらの予想を裏切るものだった。

「……わかんねえ……」

「ええ？」

思わず聞き返すと、妹紅は本当だ、と念を押すように頷いた。どういう事だろう。彼女はわざわざ名前も思い出せないような人物を誘ったのか？ 別に七不思議じゃあるまいし、人数合わせなどの必要も無いはずだが……。

戸惑う私を見て、妹紅は慌てたように私と地面に交互に目をやりながら話し出した。

「いや、違うんだ。さっきまでハッキリと誘った覚えはあつて、顔も名前も知ってたつもりなんだが……。いざ思い出そうとすると……」

「……分からない、のか？」

私の問いかけに、釈然としない様子で妹紅は頷いた。

「頭の中で出てこないんだ。確かに顔も名前も確かめた筈なのに……」

妹紅が頭を抑えて悩み出すのを見て、私はどうにも奇妙な心地であった。

顔も名前も思い出せない？ どれか一つならまだしも、両方ド忘れするなんてそうそうある事だろうか。それも直前まで覚えたつもりでいて、だ。

大体、それがあり得たとして、その人物とはどんな関係になるのだろうか。一定の付き合いがあれば少し悩んでもピンとききそうなものだ。妹紅も幻想郷に来て長い。知らな

い者ばかりでもないだろう。

或いは、新入りを誘ったのか。しかし今日集まったメンバーを思い出してみる。あの中に一人だけ新しい顔を飛び込ませるような真似を、新入生の歓迎会でもあるまいに妹紅がするのは考えにくかった。

ふと顔を上げると、妹紅はまだ記憶を辿っていた。このまま悩んでも気の毒だと、私は妹紅の肩を叩く。

「ま、結局来なかつたんだからいいさ。それより早く帰らないと」

「あ、あー……そうだな」

妹紅は生返事をすると言別れをつけ、駆け足で里の外へと去っていった。ボンヤリ見つめていると背中はずぐに見えなくなる。こういう所はいつもアツサリしていた。

しかし、何故か今回だけは後を引くようなものを感じた。

妹紅の誘った七人目。単に思い出せなかつただけかもしれないが、彼女は元来つまらない事で悩むような性格ではなかつた。あの真剣な様子では、本当に思い出せずに困惑していたように思う。

その不可解な現象に加え、先程の騒動……怨霊騒ぎが不気味さを深くした。霊夢は心配ないと言ったが、他の疑念と組み合わせると途端に正体の掴めない恐怖に見えてくるのだ。

思い出せない、妹紅の頭の中でそれは一体どういう光景に……。
「ひゃっ」

思考に耽つていた所で、ひゆるり、と風が吹き抜けた。夏には場違いな程冷たいその風は、一気に私を現実へと引き戻した。

気づけば私は夜中に里の真ん中で突っ立っている奇特な女であった。こんな事はしてられない。何日もせずには本番が来るのだ。余計な事を気にかけては楽しみにしている子供たちの興を削いでしまう。

「よしっ」

一発頬を叩き、そうそうに我が家へ引つ込む。布団を敷いて床に入る頃には、とうに一時を回っていた。

—

「……それから、そのお店では店員が全員知り合いの筈なのに、数えてみると一人だけ増えてるんだって……」

「きゃ——！」

「へへ、怖かったでしょ？」

生徒の一人が得意気に微笑む。結局あれから何事も起こることは無く、無事に怪談大会は開催できた。数十人の子供たちはついこの間ここに妖怪が集まっていた事実など露知らず、例年のように怖がらせあつて盛り上がっている。

今年こそは、この場を盛り下げずにいきたい。私は知らず知らず肩に力が入っていた。今までは一人で考えていたが今回は加えて六人分のアイディアがあるのだ。

あの時とは違い部屋にあるのはロウソク一本。それぞれの顔がかるうじて見える以外は真つ暗闇で、不気味さも一層高まる。

もうすぐ私の番だ。今しばらく生徒の張りきりを見守ろう。そう考えて姿勢を正した時だった。

「俺の番だな。やつぱり怪談は人がたくさん居なきやならねえ」

隣の生徒が言う。その途端、記憶にある臭いが鼻を突いた。

あの腐ったような異臭。身体中が軋むように鈍い痛みが走り、頭が重く、意識が朦朧とします。

痺れる腕を押さえながら、あの六人が集まった夜の事を思い出した。怨霊がいると言つて逃げ出した、あの時。

あの時のように汚水のような空気が瞬く間に部屋中を包み、生徒たちも次第に顔をしかめ、肩を抱き、うめき声をあげ始めた。

「実を言うと以前話す機会があつたんだがね……。まあこつちの方が話しがいがあるか」

その中で、隣の生徒だけが何ら動じる事なく、むしろ楽しそうに言葉を紡ぐ。その内に生徒たちがバタバタと倒れ、胃の中のモノを吐き出した。室内にも関わらず風に煽られるかのようにロウソクの火が揺れ、生徒たちの苦悶の表情と畳にぶちまけられた内容物を代わる代わる、忙しく照らし出す。

ネジが切れた玩具のように頭を動かし、話している隣の生徒を見た。この子も早く逃げなきや危ない。そう思つて霞む目を見はる。

しかし、その顔は。

ロウソクに照らされた彼の顔は、誰なのか全く分からなかつた。さつきまで何事もなく全員集まり、寺子屋の皆で怪談をしていた筈なのに、何かがおかしい。

部外者が紛れ込む暇はなかつた筈だ。そんな事があればたちまち他の生徒が気づくだろう。考えられるとすれば、私のド忘れくらいだ。

しかし、あり得ないのだ。どんなにその場に溶け込んでいても、先程まで誰もが生徒だと信じ込んでいても、あり得ない。だつて。

その生徒の顔は、”無”だつた。ロウソクの明かりで居る場所はハッキリと分かるのに、首から上だけがまるでくり抜いたかのようにぼっかりと、光の無い黒を晒していた。

そいつがゆらりと私を見る。表情も何もない顔。その穴がひゅうう、とひび割れから吹く風のような音を漏らした。

お前は、一体。震える声でそう言おうとした時。

ふっ……とロウソクの火が消えた。微かに白い煙を残し、月明かりすら差さない黒塗りの闇が訪れる。あの苦しむ子供たちの声もぱたりと止み、私はチリ一つ見えない中で一人取り残された。

何が起こった、奴はどこへいった。どこを向いても代り映えしない闇の中を忙しく見渡す。背中に嫌な汗が滲み、抑えようとしても齒の隙間から情けない息が漏れる。

畳に手をつけて、無音の中を手探りでそろそろと進む。怯えて立ち上がれないのではと自分で疑うほど、ゆっくりと、赤子のように床を這う。

すると、私の耳元、四つん這いの私を横から見下ろすような場所から、声が出た。

誰か分からない、人かも疑うような底冷えする、濁った低い声で。

「今度は、逃げるなよ」

四周目

四周目・一話目―赤蛮奇

「ん、私が最初を話すのかい？ ま、いーけどさ、つまらないかもねえ……」

私は赤蛮奇。人里に住んでいるしがない妖怪だ。この先会うことがあるかもしれないけど、挨拶はほどほどにしといてくれ。私はあまり目立ちたくないタチでね。下手に親しい人を作りたくないんだ。

変わってる？ それこそ人間の決め付けだね。いつも群れているクセして面白くもなさそうな顔を何度もする。ああいう連中を下らないと思う奴はそこかしこにいるものさ。覚えておくといい。

で、本題なんだけど……もう五、六年前になるのかな。霧の湖ってあるだろ？ あの紅い館の隣の、いつも霧に覆われた大きな湖。

あの場所に知り合いがいるんだよ。わかさぎ姫といってね、下半身が魚で、着物を着て蒼い髪を生やした、美しい人魚なんだ。いつもは湖のほとりで歌をうたい、綺麗な石を集めたり、のどかに過ごしている。その子から聞いた話。

ある日、昼下がりに姫が湖の景色を眺めていると、人がいるのが目に入った。そいつ

がどうも小さな子で、湖のそばで水面を見ながらパチャパチャやっている。

子供が一人きりで湖に来るなんてのは、そりや珍しかった。里と違い妖怪は普通に出るし、あの辺りは強力な妖精もいる。姫はともかく他に見つかればひとたまりもない。日の暮れる前に帰らせなければ、そう思つて姫は子供の元へ泳いでいった。

その内近くまで来ると、水音でビックリした子供が振り向いた。背の低い男の子で、肩をすくませて気弱そうな瞳をくりくりさせた。

『こんにちわ』

その少年は妖怪に声をかけられて後ずさった。だけど姫が何もせずにいると、ようやく『こんにちわ』と小さく返す。

『ボク、何が御用？ なるべく早く帰った方が良いわよ。暗くなると危ないわ』

姫が問いかけると、少年は悲しそうに目を伏せた。答えを待っていると、下を向いたまままた小さな声で言う。

『用は、無いです……。ここで一人でいるの、好きなので』

その答えに、姫はやや首をかしげた。確かに自分も好きな景色だけど、少年はお世辞にも楽しんでる風じゃなかった。笑顔は明らかに作られたもので、冷たい湖畔の風のせいか目元が微かに光っている。

とりあえず、一人じゃ確実に危ないと思つて『お友だちと一緒に来てみたら。そうし

「たかもつと楽しいわよ」と笑つて見せた。けれど、少年は顔を上げると、黒曜石みたいに黒く寂しげな瞳を真つ直ぐに向け、戸惑う姫にポツリと言つた。

『僕、一緒に来るような人がいないんです』

『あ……』

彼女は口に手を当ててしまった、と思つた。友達がいなければ一人きりなのも悲しい表情も合点がいく。偶然とはいえまずい事を聞いてしまったが、もう遅い。

しばし気まずい沈黙が流れた。少年は膝を折り畳んで黙り込んでしまい、姫も何も言えずに俯いていた。

しかし、しんとした空気の中で少年はふとたどたどしく、こわばつた声で、こう尋ねた。

『どうしたら……仲良く出来るんだろう』

一人で呟いただけなのか、それとも姫の優しい雰囲気になやまして勇気を出したのかは、分からない。だけど姫はお節介にも頭を捻り、少年にちよつとした話をする事にした。

まず少年に湖面を見るように言い、互いの顔が映るようにしたまま話し続ける。

『今の君、ちよつと悲しい顔をしてるでしょ？』

『はい……』

『見てるとだんだん悲しくなつてこない?』

『……そうですね』

次に、怒つた顔で拳を振り上げてみろと言う。

『こうすると、どう感じる?』

『殴られそうで、怖いです』

『向こうも、そう思うでしょうね』

次に棒切れを拾つて、水面に向けて構えてみろと言う。

『他人とこうなつたら、どうする?』

『逃げます。じゃなきや先に叩く』

『向こうも、そう思うでしょうね』

少年は次第に姫の意図が掴めず、ムツとしだした。結局何をやらせたいのかと、不満げに姫の方を見る。

すると姫は、少年にふつと顔を近づけて、こう言った。

『ごめんね、ここからよく聞いて?』

そして目を真つ直ぐに見つめて、柔らかく笑う。不意に向けられた曇りの無い笑顔に、少年はひよ、と目を丸くした。それを見て姫は白い歯を見せる。

『笑つて見せたら、どう? 嫌な気分にならないでしょ?』

姫に言われて、少年は口ごもった。目を逸らした先には水面があつて、自身の顔が映る。

その顔はしかめつ面だった。眉の間にシワが刻まれ、唇が貝の口みたいいきつぱりと閉じている。その顔がおかしくて、少し吹き出した。瞬間、綻んだ表情がわずかに姫に似ていた気がして……。

ぎこちない顔の筋肉を動かしながら、じわじわと口角を上げていく。苦勞の末笑顔が出来上がると、姫と顔を見合わせる。いつの間にか苛立ちが消えていた。

『皆に向けて、にっこり笑つてごらん。お友達もきつと出来るわ』

そこで初めて本心から笑いあつた頃、時分は既に夕暮れに近くなつてきた。何度かまた湖に向けて笑顔の練習をした後、姫に礼を言つて少年は去つていった。

私は、その日の事は知らない。後から姫に聞いたんだ。少なくともその時は清々しい一コマとしてね。

だけど、私もその少年と直に対面した事がある。姫が最初に会つてからもう半年も経つた日の事だった。

その日はどんより曇っていた。私は姫とお喋りしてたんだけど段々暗くなつてきて、今日はもう帰ろう、と姫は湖に潜つた。それを見て、私も降つてこないか心配になりながら背を向けた。

その時。

どぼん、と重たい水音がした。姫じやない、もつとずっと遠く。音の方向に目を凝らすと、湖面に微かに波紋が残っている。

まさか飛び込みか、そう思った瞬間に姫が泳ぎだした。私も岸から走って追いかける。ほどなくして姫が一人の少年を抱えて水から上がる。

早く寝かせろ、と私は叫んだ。だけど姫は、少年の顔を見て、言葉を失いまた離してしまいそうになった。彼が以前話した、友達作りに悩んでいた子なんだと、姫は早口で言ったよ。

とにかく放つてはおけないから、陸に引き倒して頬をひっぱたいた。姫が泣きそうな顔で覗き込む下で、少年はうすぼんやりと目を開けた。

『あ……』

姫がかかる言葉を探し出す。その間に少年は寝ぼけているようにむっくり起き上がると、姫を薄目で見つめたまま、立ち上がりもせず黙っていた。

『私を覚えてる?』

姫が問いかける。少年は二、三度瞬きして頷いた。姫は乏しい反応がもどかしかったのか、がばりと肩を揺すって悲痛な声で言った。

『ねえ、何があつたの? まさか自分から飛び込んだんじゃないわよね!』

孤独に苦しんでいた事から、姫の中でも嫌な予感がしたのかもしれない。確かめるような言葉でも、口調に願望が混じっていた。

そしてその願望を裏切るように、少年は何も言わず、ふて腐れたように目を逸らした。姫がそれを見て、感情を爆発させる。

『どうして?!』 笑つてみるつて言つたじゃない! まだ子供なのに、これからいくらでも仲良くできるでしょうに、なんでこんなバカな事!!』

音が鳴りそうな程に強く肩を掴んで、姫はまくし立てた。少年は一言もしやべらず、座ったまま魂が抜けたように揺さぶられている。

しばらくして姫がやっと我に返り、地面を睨んで息をしながらそろそろと少年から手を離す。今度は姫が怖がるように、少年に目を合わせずにいた。

私は口出し出来ず、沈黙が続いた。

しかしややあつて、姫は少年に向き直ると、悲壮な表情を抑えてにつこり微笑んでみた。少年も笑顔を返してくれるだろう。多分、そう期待して。

だけど、期待は裏切られた。少年は姫の笑う顔を見ると、その消え入りそうだった表情に突如怒りを燃え上がらせた。眉をひび割れのように歪ませ、口はわなわな閉じも開きもせず痙攣し、私の眼下ではギリギリと拳を握りしめていた。

姫は拳に気づいていないのか、困惑の色を浮かべた。その一瞬。

『イタツ！』

少年は拳を姫の頭に見舞った。訳が分からず目を丸くする姫に向かって、少年はなおも拳を振り上げる。

『いた、痛いってば！ やめてよ!!』

姫が叫んでも、手で遮っても、少年は同じ場所をポカポカ殴り続けた。かんしやくを起こした子供みたいに。

あんまり理不尽だったから、私はしばらく呆気に取られていた。我に振り返り止めに入つた時には、慌てて予備の首を全部動員したくらいだ。

『おい、何やってんだ!』

肩を掴んで振り向かせると、途端に少年の顔が青ざめるのが見えた。そこで生首をいくつも見せちゃつたのに気づいて後悔したんだけど、今さら隠せやしない。構うものか、少しくらい怯えさせた方が落ち着くだろう。そう考えて、たくさんの首と一緒に、彼を睨みつけた。

でも、それからの反応がなんというか、予想外だったんだ。ひやあああ、つて掠れた悲鳴をあげたかと思うと、パツと背を向けて、湖に視線がぶつかった。水面に映つた自分と、私の首を見るや、今度は手の平で顔を覆って、その場にうずくまってしまったんだ。

『どうしたのよ、急に……』

姫が声をかけても、少年はびくともしない。ダンゴムシみたいに丸まって、まるで触らないでつて訴えてるようだった。

しばらく、姫はなすすべもなく彼を見つめていた。私も、かける言葉が見当たらない。落ち着かないまま、ソロソロと首を仕舞った。その時ようやく少年が、ぽつり、ぽつり、と微かな声で話し出したんだ。

『皆、僕を笑うんです』

『えっ？』

姫が怪訝な顔を見ると、少年は上半身を跳ね上げて、地面に生えている草を掴みブチブチと千切りながら、涙ながらに叫んだ。

『皆、取り囲んで僕を笑うんですよ！ 笑顔を作っても、殴ろうとしても、棒っこを振り上げて！ ニヤニヤしているだけだったんです!!』

そう言うってから、彼は嗚咽を漏らしていつまでも動こうとしなかった。私も姫も察していたたまれず、ぼんやりその場に突っ立っていた。

しばらくして私が里に送っていったが、何も話した記憶はない。覚えているのは、少年の心を表したような曇り空。雨も降らずただただほの暗い、ネズミ色の曇天だけだ。

……何故、何年も前の話を、それもホラーって訳でもない話を今さらしたか。

実はつい先日、合ったんだよ。向こうは背も伸びて大人っぽくなってたけど、あの氣弱そうな目つきだけは変わっていなかった。

声をかけてみると、向こうも私の顔を思い出したようだった。寺子屋は無事卒業したか、今どうしているか、なんて他愛もない話をする間、彼は普通に笑っていた。

そして最後に気がかりだった事をおそれるおそれる尋ねてみたんだ。あのトラウマみたいな事は、もう起こってないかい、とね。

そうしたら、何でもないと言った。その返事に胸を撫で下ろす。でもその直後に、機械みたいな平坦な声で、彼はこう付け加えたんだ。

『今はもう、誰もいませんから』

そして急に解放されたような、晴れやかな表情になったかと思うと、グニヤリ、と姿が歪んだような気がした。その光景に瞬きする私を尻目に、彼は音もなく脇をすり抜けて……。

色が瞬く間に薄らいで、そのまま、消えるようにいなくなつた。

後には、誰もがいつも通りの里の喧騒があるばかり。彼の事なんてだれも気にかかけないなかつた。

多分、生きてやしなかつたんだろう。

……あの時の印象からしてね、彼はとうの昔に死んだんじゃないかと思う。あの解放された、未練のなさそうな顔からして幽霊にでもなつて、彼岸にも行かずに第二の人生を楽しんでるんだろう。

問題だ、つて？ まあ確かにね。亡霊はともかく、幽霊なんて空気みたいなもんだ。虫みたいに湧いて出て、いつの間にか消えてしまう。人間みたいには暮らせないだろうさ。

でも、それが彼の望みだったんじゃないかなあ。誰とも関わらず、一人で気ままに漂う。生前は望んでも出来なかつたろう。

大体、考えてごらんよ。人間の里も、寺子屋も一つしかないんだ。居場所も世代も、生きていたらほとんど変わらない。私が人間なら息がつまるよ。まるで金魚鉢だ。

良いんじゃないか、妖精も妖怪も神様ものさばってんだ。空気みたいな生き方もさ……。

まあ、今話す事でもないか。私の話は終わりだよ。お次は誰だ？」

四周目・二話目―二ツ岩マミゾウ

「む、次は儂か。どんな話にすべきか悩んだぞ。単に化け物が出たー、なんてのは割とありふれておるじやろうし。

いや、危なく無いとは言わんさ。子供が妖怪に遭ったりすれば、そりゃ命に関わる。当然じゃ。

しかし例えば、『夜中に散歩して、宵闇の妖怪や夜雀の妖怪に襲われました、怖かったです』と言われたら、先生、恐怖を感じるか？むしろ叱るじやろ、バカな真似をするなって。

怪談の恐怖というのは、もつとこう……よく分からないものや、非現実的なものから生まれる感情じやと思う。これが幻想郷では存外難しいんじや。現代なら火の玉や幽霊で事足りるじやろうが、こつちじや現実の一部だ。

里に危ない妖怪は来ない、都会に熊は下りて来ない。
狼藉者には巫女を呼べ、不審者が出たら警察を呼べ。

ここにいる連中には分かりづらいじやろうがな。現代にいた頃と同じように考えていたら、怪談なんぞ思いついても興ざめする事請け合いじや。儂も誘われてから後で

キャンセルしようかと思つたくらいよ。

だつたら帰れ？ まあ待て。儂もそれから考えた。

そもそも怪談は、他人に怖いと思つてもらわにや始まらない。ところが妖怪やら幽霊やらじゃ怖がらせるネタとして弱い。そうなつたらどうするか。

もしかしたら、人間と妖怪その他を分けて考えるからいけないんじゃないか。両者が両者とも怖いと感じるものを見つけ出せば、悩みは解決するんじゃないか？

そう思いついてからは早かつた。何年か前にうつつけの話があつたのじゃ。

そんな都合よく転がつているのかつて？ まあまあ、それは聞いてのお楽しみ。つまらないものかどうか、それから判断しておくれ。

儂が寺に住み着いて、段々と幻想郷にも馴染めたかな、という頃じやつた。

慣れていなかつただけで、昔から今まで不足は感じとらん。寺の連中は気のいい奴等が多いし、こちらの狸たちもさほど喧嘩を売つてきたりせず、慕つてくれた。むしろ現代でお目にかかれないような自然の野山はお気に入りじゃ。川の水をそのまま飲むような場所、向こうじゃどれ程あるか。

ただ思い通り、というのは違つてな。寺を取り仕切る尼……聖 白蓮（ひじり） びやくれん」という奴を知つとるじやろう。奴がまあ、過去に並々ならぬ事があつたらしいが、昔から『妖怪と人間の共に生きる世界を』と言つて、幻想郷に流れ着いた後でも寺を建てて妖怪を悟りに導く為の活動に精を出しておる。

しかし、その手法がな。仏教の、人間が己の悩みから解放される為の修行を、妖怪にも課しておるんじや。

元来恐怖や負の念から生まれた妖怪からすれば、『お前は幻だ』と繰り返し聞かされるようなものさ。

自身の存在そのものの否定に繋がるような言葉を、精神が要の妖怪が聞かされてみる。心がもし立ち直れなくなれば肉体の活動も呆気なく止まり、最悪の事態に……なんて事もあるかも知れん。

聖はだからこそ教えが真に届きやすいのだと言うが、儂にはそれが気にかかつてな。彼女に前々からやんわり疑念を打ち明けたりしたもんじやが、流石は聖者。『それは貴女の意味で決めていただいて結構ですよ』と微笑みながら言いおつた。

そうなる、賛同者も確かにいる事だし儂には何も言えず、どうにも釈然としないなあと思ひながら寺で暮らしていた。

そんなある日の事じやつた。聖の弟子の一人が、儂に相談を持ちかけてきたんじや。

封獸（ほうじゆう ぬえ）という妖怪でな。以前は地獄に棲んでいた。地底の異変を期に寺に入信したクチで、それより前は儂と一緒にいたんじや。最近になつて久しぶりに会つたかと思えば、厄介な勢力が現れたから寺を助けてくれ、などと言つて儂を幻想郷に引つ張り込んだ。曲がりなりにも聖たちは好いておるようじや。

ただ、真面目に過ごしているかといえはそうでもなく、皆が修行をしておる中でつまらなそうにサボる事も多かつた。

そんな気ままな輩じやつたから、ぬえが『話したい事がある』としよげた顔で切り出してきた時には、少々意外に思つた。

『何じや、なんで悩みごとか？』

聞くと、ぬえはボソリと、当時から三ヶ月程前の事だと言つて語りだした。

いつものように、ぬえが寺の縁側で座り込んでサボつていた時の事じやつた。ぼんやり脚を遊ばせながら空を眺めていると、やがて日が西に傾き、お堂での読経の音が止んで大勢が腰を上げる音がする。

やれやれ、これで晴れて自由時間だ、とぬえが伸びをして立ち上がった時じやつた。

『ぬえ』

後ろから厳肅な、聞き覚えのある女の声が出た。ぎよつとして振り向くと、そこには聖が静かな大木のように立っていた。いつもの柔和な笑みは消え失せ、ただただ真摯に

心配する真つ直ぐな瞳がぬえを見据えている。

ああ、これは逃げられないな、とぬえは直感した。瞬く間に聖はぬえの手を引いて、小さな部屋に連れていった。ぬえの前に座布団を敷き、自身は正面に正座して経典の巻物をばさりと広げる。

『……何する気?』

嫌な予感がしてぬえが尋ねると、聖はピシヤリと言い切る。

曰く、今までサボっていた分、貴女に特別に読経の時間を設ける。これを期に自分を見つめ直しなさい、との事。

ぬえはゲツ、と嫌な顔をしたが自業自得の当人が抗弁出来る筈もなく、ストーンと正座して手を合わせ、目をつむった。

間もなく聖の経を読む声が部屋に響く。互いに一言も口を開かず、他人が見ればさぞおごそかな風景に見えたじやろうが、ここに来てもぬえは真面目に修行する気はさらさら無かった。

何しろしばらく経てば脚は痺れるし、肩は凝るし、おまけにお経は相変わらず妖怪にとつて毒電波さながらの、吐き気がする程ありがたい内容。ぬえは背筋が寒くなり頭痛がするのを感じながらも、このまま石みたいに固まっていれば解放されるんだ、チョロいもんだよ。と、心の中で舌を出していた。

ところが、その心境は突如一変する。

次の時間割りに移ったのか、寺の当番が庭に備え付けられている大きな釣り鐘を、寺中に響くような音で。

ごおおん、と叩いた。

その音を聞いた途端、ぬえは唐突に虚しい気持ちに襲われたという。お経はすでに忌々しいものですらく、窓から抜ける隙間風みたいに、寒々しく耳を抜けていく。あの時は信心も罪悪感も苛立ちも消え、ただ大人しく座る物体に成り下がっていたと、本人は言っておった。

いつの間にか読経は終わっていた。

聖はそれから一言二言何か言っていたようじゃったが、ぬえの心には響かなかつた。あのお経が、それを尊ぶ聖が、周囲の寺が、急につまらなく、下らないものと思えて、一人でトボトボと、皆のいる広間へ向かった。

出る頃には夕方になっていて、他の弟子たちが夕飯の支度やら風呂の用意やらでせかせか動き出した。

いつもならぬえは食材をつまみ食いしたり風呂場のゲジゲジを追っかけ回したりして皆の邪魔をしたものじゃが、その日に限ってそんな気も起こらず、ただ言われるままにキャベツの芯など取って感心されていたそう。

だが、ぬえの内心は一向に晴れなかつた。風呂に入つて湯に沈んでも、飯を食べて腹が膨れても、あの鐘の音を聞いた時のような、何の感慨もない、ただ転がっている石ころにでもなつたような気持ちが消えなかつた。

ぬえは体まで重くなるような気がしつつも、もう寝てしまおうと強引に布団を被り、珍しく一番に眠つた。

朝になり、ぬえはまた珍しく夜が白んでいる内に起きた。いつもはギリギリまで寝ていたくて、半分目覚めてはまたトロトロ眠るような事を繰り返していたようじゃが、その日は特にそうも思わず、顔を洗おうと洗面所に向かつた。

ところが、そこには先客がいた。まだ足元が冷え冷えとして、張り詰めた空気で肌が痛むくらいの時分なのに、桶に水を張つて顔を洗う一人の少女がいた。

『あ、ぬえ。おはようございませす。今日は早いですね』

そこにいたのは寅丸 星（とらまる しやう）。寺の毘沙門天の代理で、財宝を集める妖怪じや。彼女は冷たい水にかぶりを振りばしやばしやと水滴を飛ばして、頬を赤らめて微笑んだ。

『おはよう』

ぬえはぶつきらばうに言つて、星の前の桶から水を拝借しようとした。ところが、星はその手をスツと止める。

『駄目ですよ、他人が使ったのなんて、ばつちい。後でまた井戸から汲んできますから』
そう言つて星は、桶を見ながら髪をパサパサいじりだした。首を傾げるぬえの視線に
気づいて、星が振り向く。

『今日は里人への説法がある日ですから、髪を整えているんです。だらしないと恥ずかしいですから』

へえ、人前に出るのは大変だね。なんて言つと、星が呆れたように笑つた。

『ぬえだつて少しは気を遣つてください。女の子なんですから』

言われてひよいと目を落とすと、桶の水に自分が映つていた。確かに寝癖が結構ひどい。恥ずかしくなつてグシグシと髪の毛を引つ掻き回すと、星が手を添えてくる。毛づくろいみたいに優しく撫でられるうちに、段々とマシになつてきた。

『元が良いのにもつたない。少しのおしゃれで可愛くなれるのに』

桶の水面に後ろで立つ星の姿が見える。屈託なく笑つて言われると本当にそんな気がしてきて、ぬえは自分の顔を見ながら微笑んだ。

おしゃれをしてみようか。ふとそんな興味が湧いた。色んな髪型や、服を試してみよう。付け爪なんかも良いかもしれない。寺では質素なのが理想かもしれないけど、聖なら少しくらい大目に見てくれるだろう……。

ぬえはとりとめの無い妄想で胸を膨らませていた。気がつくると自分の表情が、一層口

角を上げて目を輝かせているのに気がついた。

しかし、その時。

「ごおん、と、またあの鐘の音が聞こえた。朝の起床の合図だったか、または気のせいかもしれないが、確かに聞こえたのだという。」

その瞬間、そこには桶を見ながらにやついた、寝癖が直らない一人の女の子が立っているだけじゃった。

ぬえの胸はスツと冷たくなり、酷く興ざめた。不思議そうにする星に振り返って微かな目ヤニを発見して、彼女が慌て出した間に使い古しの水を掬って被り、乱暴に腕で拭って立ち去った。

あの鐘の音の呪縛は、解けていなかった。それどころか日を追う毎にいたる場面で聞こえるようになったのじゃ。

また別の日に、ぬえは昼下がりに雲居 一輪（くもい いちりん）の姿を見かけた。いつもは紺色の頭巾を被っているのに、それを脱いで膝に乗せ、何やら弄くり回している。

『何してんの？』

気になったぬえが覗くと、一輪は顔と右手を上げた。その手には小さな針があった。

『見て分かんない？ 頭巾直してるのよ。破けちゃってさ』

一輪は答えるなり視線を戻し、黙々と手を動かす。よく見ると目立たない青色の糸が

細かく巡っている。

ぬえがボンヤリ眺めていると、一輪はそれが気になったのか何度か視線を歩き来させ、やがてポツリと言った。

『やってみる？ あと少しだけ』

『え？ いいの？』

ほんと渡された頭巾に戸惑いつつ、言われるがままに手を動かす。最初は針の先をあちこちに滑らせて慌てたが、次第に要領よく糸を通していく。集中して黙り込むぬえに、一輪は横から声をかけた。

『上手いじゃない。筋が良いのかな』

もしかしたらお世辞かもしれないが、褒められて悪い気はしない。

『雲山なんか不器用でさあ。手が無骨なのよ、やっぱり』

たはは、と笑う一輪を見ながら、ぬえは針仕事が楽しいと思いつつ始めていた。

それから二、三週間はその趣味が続いたらしい。村沙の帽子や響子の靴下、小傘のハシケチなんかを預かつては穴を塞いでいた。そういうえば儂も一度、スカーフを直してもらったつげ。

皆は取り立てて急ぐ訳でもなく、直してくれるなら、という程度の気持ちじゃったが、ぬえは自分なりにキツチリと仕事をした。糸の色や細さにも気を遣い、当て布で似合う

のが無ければお忍びで里へ出向いたくらいじゃ。頼んだ奴等も仕事ぶりに感心し、彼女を見直したもののよ。

しかしいつの間にかやらなくなっていた。ハッキリした理由は本人にも分からなかったらしい。ただ、儂のスカーフを縫いながら、フツと自分の指を見て、そんなに細いのかな、とか考えながら糸を留めようとした瞬間。

「ごおん、とまたあの鐘の音が聞こえた。障子を開けて庭を見てみたが、誰もいない。今度は完全に、しかし現実感のある空耳じやった。」

振り返ると、完成寸前の、糸と針がそのままになったスカーフがあった。あとほんの三十秒程で終わる、自分の仕事。

しかし、それは最早どうでもよくなった。床に転がった白いスカーフがふやけたワントンみたいに見えて、自分の物でもあるまいに何でこんなのを細かくチクチクやっていったんだろう、と傍らの諸々の裁縫道具も戸棚に仕舞い込み、ため息が一つ出た。

「何故ほぼ直った物を『後は自分でやって』と手渡されたのか、その時ようやく分かったよ。」

またある時、今度は村沙に声をかけられた。ちようど午前の暇をしていた頃で返事をするのも面倒だったが、村沙はお構いなしの笑顔で、分厚い紙束を見せてきた。

見ると

”妖怪のえん罪主張の権利及び裁判権を求める呼びかけ”

というタイトルに必要性を訴える説明文が長々と書いてあり、その下に住所氏名を書く為の空欄、それらが印刷された紙が何十枚も山になっている。

『何これ？』

『署名よ。今から里で集めに行くから、手伝って』

村沙はざつと紙束を二つの袋に分けて突っ込み、片方をぬえに持たせる。話を呑み込めないぬえが待って、と言う前に、村沙は早足に駆け出した。

里に着くまでに村沙は詳しい話をしてくれた。

曰く、巫女の判断による制裁では、万が一誤解があつた場合に妖怪が抗弁出来ない可能性がある。

それを防ぐ為、望む者に限り証言する場と調べる人と弁護する人、総合的に判断する人がいる所謂、裁判制度を作ろう。寺でそんな話が持ち上がったという事だった。

『で、第一段階として、賛同する人妖の名を募るといふ訳』

村沙はそう言うてはにかむ。ウキウキした表情と対照的に、ぬえは署名用紙を担ぎ直して顔をしかめた。

『ずいぶん気の長い計画だね。巫女やスキマ妖怪が聞く耳持つかない』

『直接言うよりは望みがあるでしょ。人数が多い程に、さ』

望み薄、それ自体は村沙も否定しなかった。にも関わらず彼女は表情を曇らせるでもなく、むしろ楽しそうに鼻唄なぞ歌い出す。その様子が何故か気に食わず、ぬえはムキになって質問をぶつけた。

『だからって、そんなに多く書いてくれる保障は？』

『さあねー。期待はしてるんだけどさ』

『そんで仮に制度が出来て、活用する奴が何人いるのよ』

『制度が出来る前は皆そー言うの』

てんで調子が変わらない。ぬえは意気揚々とした村沙の背中を見ながら、彼女の生い立ちを思い出した。

地獄にいた頃からの古い付き合いの彼女。しかしそれ以前から村沙は聖の教えに傾倒していた。船幽霊として人を襲う荒んだ日々を過ごしていた所を、聖に救われたんじゃない。

ぬえはその時の事を知らない。村沙が見たであろう人妖の別け隔て無い社会が、ぬえには想像もつかない。

やがて里に着き村沙が道行く人に声をかけ始めても、ぬえは隣で白けた顔をして突っ立っていた。

妖怪にあるまじき明るさを敬遠され、署名の内容を話せば煙たがられ、ある時は無言

であしらわれる。それでも彼女は一向に挫けない。

それを支えるのは信仰か、意地か、はたまた義務感か。どれもぬえには縁遠かった。だからやってみな、と用紙を渡された時には聞かれぬように毒を吐いた。

とりあえず仲間が見ている手前、形だけでも真似なきやいけない。一人目、二人目……ことごとく残念賞。もはや情性で決まった文句を繰り返す。

しかし、一人だけ、見知らぬ老婆が引つ掛かった。人の良さそうな婆さんで、おぼつかない手つきで名前を書いた後、『頑張ってね』と微笑んでくれた。

その時、急に気分が晴れやかになった。自分の手に残った一筆のサインが、とても誇らしく、気高いものに見えてくる。

村沙が『やったじゃん』と背中を叩いてくる。彼女の望んだ社会が、ほんの少し分かりかけた気がした。自分達を平等な目で見てくれる人がいるのだ。理解してくれる人がいるのだ。この調子でもう一人。

そう思つて足を踏み出した。しかしその時。

ごおおん、と鐘の音がした。最早またか、という心地じやった。

改めて周りを見渡せば往来にはいつも通り、様々な人が行き来している。誰も自分には目もくれない。だのに怒りも湧いてこない。

手元の用紙に目を落とすと、まだ名前の書いてないのがつらつらつら、山になつ

ている。『明日もやろうね』なんて言われたが、寂しく灰の舞うような心中には欠片も火の気が戻らなかった。

寺に戻ってからナズーリンに『星の監視って、給金とか出るの?』と聞いてみた。

『はあ?』

怪訝な顔をされただけじゃった。

……長いあらしを語り終えてぬえは、深いため息をついて肩を落とした。

人間なら鬱や気の迷い、そんなものを想像するじやろう。しかし儂にはぬえの苦悩の訳が分かったのじゃ。彼女の背中が、うっすらと色が薄くなっていたのが見えた。

『お主、存在が危うくなつとりやせんか?』

口に出した瞬間、ぬえは素早く顔を上げた。その瞳はリンの焰が燃えるようで、不安と恐怖にせき立てられ、しかしその日で一番真剣そうな色を宿していた。

心なしか早口で、ぬえが呟く。

『正体不明なんだ言って、自分が何なのか分からないんだ。人を脅かしたいのか、共にありたいのか……』

『聖のせいじゃない、ただどうでも良くなつたんだ。化け物に戻るのも、乗り越えるのも』

話す内にぬえの視線は下がっていく。体はともかく、心が死んだら妖怪はどうなる

か、儂にも分からない。奴の体はついたら倒れそうだった。

しかし同時に、仮にも格のある妖怪がこうまで弱くなるものかと、いぶかしんだ。

そして、ふと目を泳がせた瞬間。答えは向こうからやってきた。

『やあ、元気かい』

寺の誰とも違う、気に障る甲高い声。見るとそこにはいつの間にか一人の少女が立っていた。肩までの黒髪に白と赤の毛がそれぞれ混じり、小さな日本の角を生やしている。

天邪鬼、鬼人 正邪（きじん せいじや）だ。

嘘つきで嫌がらせも大好きな、目障りな妖怪じや。危険度はともかく、幻想郷中から追われて日に日に悪評が広まっているような輩じやった。

『……何か用か』

儂の声も自然と険が混じった。それでも奴はケタケタ笑って、ぬえを指さした。

『いやあ、隣の方が相変わらずしよげていらっしやるようで、様子を見に来たのですよ』
 白々しい慇懃な口調。それでもぬえは黙ったままじやった。相変わらずという言葉からして、前々から何か追い詰めるような事をしていたに違いない。そう推察した直後に、奴はその所業を尋ねるまでもなく、良く回る口でもって見せつけてくれた。

『可哀想にねえ、昔は京で一目置かれる妖怪だったのに、今や見る影も無いねえ』

『おい』

『仕方ないか、もう人間の方が覚えてくれて無いもんね。だからこつちに来たんだもんね。しかも寂しいからって寺に居座って、巫女にも住職にもお目こぼしいただけるしよーも無い悪戯で糊口を凌ぐ日々だもんねえ』

『何の用かと聞いた！』

堪らずに身を乗り出すと、天邪鬼はひよつ、と肩を竦めた。そして儂を舐めるように見つめた後、鼻を鳴らしてまたべらべらと喋り出す。

『おいおい、狸さんも他人事じゃないぜ？ 隣の奴の義理で寺に居るんだろうけどさあ、正直アンタだつて教えを信じちやいないんでしよう？ だのに中途半端に里に溶け込んでさあ。』

早い話がくすぶつてんじやねえか。妖怪として開き直りもしないで、消えちまわない程度に騒がなきゃならねえんだ。大変だね、辛いね』

あんまりまくし立てるものだから黙って聞いていると、正邪はかくんと首を傾げ、ぬえの方に視線を移す。

『妖怪の寿命って長いんだっけ、百年、千年？ その間、今みたいな中途半端な生活を続けるわけ？ でもそうしないと消えちゃうのかな？ 平和な世の中で嬉しいかい？』

『災いを演じて楽しいかい？』

もしかしたら実際には、もっと色んな事を言つてたのかもしれない。じゃが、そんな事は重要じゃない。儂はその時間聞いてみた。

『お前はそんな憎まれ口を叩いて、何が楽しいんじや?』

そう言うのと正邪は鼻白み、やれやれと首を振ると、またぬえを指さした。ぬえは反応するのも面倒そうに黙つてうづくまつている。

『楽しい楽しくないじや無いんだよ。』

私はこの為に生まれたんだ。……辛そうだねえ』

そう言つて正邪はさつと背を向けると、ネズミのように素早く去つていった。儂はぬえと縁側に取り残され、言葉も出ずに抱き寄せて慰めていた。

気づけばもう、空は茜色に染まつていた。

その次の日、儂は舎弟の狸たちの元へ出向いた。目下の奴等の集めた金を確認せにやならなかつたんじや。

正邪への苛立ちが消えずムシャクシャしている儂を見て、狸どもは震え上がつて金を差し出した。一般人なら滅多に目にしないであろう、ずしりと重い札束。それを一枚一枚数えながら、儂はどうかぬえの悩みを払拭してやりたくて、頭の中で色んな事を考えていた。

……世の中は金じゃ。安心も満足も買う事が出来る。俗だと言われようが構わん。理想や平和なぞ糞喰らえじゃ。

苛立ちのせいか酷い言葉を思い浮かべて、また札束を見たら今度はとつぴな思いつきをした。

仮に儂がこのまま影響力を広げ、金の力で幻想郷を牛耳ったらどうなるか。いわゆる拝金主義を持ち込んで、神も仏もない混沌を作つてやれば、面白いんじゃないか。そうすればぬえの生き方への見方も変わりやしないか。そんな発想がそぞろに浮かんできたんじゃ。

そこからなんだかうきうきしてきて、二枚三枚まとめて数えたりなんかして、最後の束に手を伸ばした。

その時。

ごおおん、と。儂にも聞こえてきたんじゃ。寺の鐘の音が。

それからは積み重なった金がもうどうでも良くて、なんでこんな物に執着していたのだろうと虚しくなった。

それきり仕事を勝手に切り上げて、戸惑う舎弟を無視してトボトボ寺に帰ってしまった。

昼過ぎに寺に着き、まだ皆がバタバタ動き回っているのを尻目に、儂は縁側でキセル

をふかしたり酒を飲んだり、ダラダラと過ごしていた。ちつとも美味しく無かったが、他に何をやる気も起きなかった。

そのうち雨が降りだして、あつという間にザアザアと大雨になった。寺の面々は部屋の中に次々と引つ込んで、縁側に居るのは儂一人になった。

遠慮なしに風があたり、体が冷えてくる。それでも動く気にならず空を見上げていると、またごおん、と鐘の音が、雨の中なのにハッキリと聞こえた。

儂もぬえのように消えるかも知れぬ。そんな恐れがふと浮かんで、こつそりと庭に出て、鐘の場所へ走った。

傘もなく瞬く間にずぶ濡れになり、草履はぬかるんだ地面に容易く埋まる。それでも構わず本堂つたいに回る。

そこで見えたんじゃ。鐘の下に正邪が立っていた。傘も差さずに、しかし気にも留めず悠然と立っている。

『お前が鐘を突いたのか』

奴は答えない。一步一步近づいて行つたが、逃げもしない。

『答えろ』

儂がまた言つても同じじゃつた。ただ、水滴がついた眼鏡の向こうで、三日月みたいに口を開いた気がした。

『辛そうだねえ』

憐れむような、あの時とそっくり同じ口調。どういう意味だ、と聞くよりも早く、奴はまた聞いたことのあるような台詞を口にした。

『私はこの為に生まれたんだ』

鬱陶しくなつて、撞木を取つて正邪にぶつけるような勢いで振り抜いた。ドゴオン、と間近で青銅の震える音がして、正邪は驚いたように走つて逃げていった。

それでもムシヤクシヤは治まらずに、意味もなく何度も、やたらめつたらに鐘をついた。憎しみに任せて打ち鳴らしたせい、か、割れて軋むような音が混じりだした。

周りも気にせず、我を忘れていた所で、誰かの驚いた声が響いた。

『何をしているんですか!?!』

見ると正門から、いつの間に出かけていたのか笠を被つた聖が走ってくる。無我夢中に鐘を打ち鳴らす姿がよほど異様に見えたらしい。目を見開いて息せき切らしている。

『いや、さつきそこに正邪がいたじゃろう? ちょっと嫌な事をされてな、ストレス解消じゃ』

我ながら下手な言い訳じゃと思つた。しかしそれ以外にどうとも言えなかつたんじゃ。

じゃが、聖は儂の言葉に瞬きすると、怪訝そうに眉を寄せた。儂も無言になられると

戸惑い、しばし雨の中二人で見つめ合っていた。

しばらくして、聖が口を開く。その言葉を聞いて儂は頭が真つ白になった。

『さつき帰つてきましたが、私には誰も見えませんでしたよ……』

そんな馬鹿な、そう思つて辺りを探したが、雨でぬかるんだ地面には確かに儂と聖の足跡が残っていたのに、正邪の足跡だけが、いくら探しても見つからなかった……。

—

……あの時に見たのが、何だったのかは分からん。ただ、正邪のやつが時々羨ましくなる時がある。『この為に生まれたんだ』なんて中々言えたものじゃないからのう。

……ああ、鐘の音か。相変わらず聞こえておるよ、今でも……。

……この際、言つてしまおうか。この場に来てから、ひっきりなしに鳴っているんじや。こんな集まりに参加するつまらなき、バカらしさが、どうにも我慢しがたくての。それでも、ポンと放り出す気にはなれんのじや。今は聖の説法を聞きたくなる時もある。

なにしろ、儂らは人間みたいな生き方は出来ん。心が死んだら、そのまま跡形もなく消えてしまうかも知れぬのじや。聖の言つた事も、まんざら間違つていないのかも知れ

ぬな。

……儂の話は終わりじや。長くなつてすまなかつたのう」

四周目・三話目―藤原妹紅

「え、私が三つ目？ うーん、あんまり面白くないと思うがな……」

とりあえず自己紹介しておくか。私は藤原妹紅。人間の体をしているけど、実は不死身だ。それも不老不死つてやつだな。普段なら簡単に人に話したりはしないんだが、こんな場だからな。

にしても、ここまでさりとて言うようになったのは、自分でも驚きだ。今まで長いこと生きているから、不死の秘密を打ち明けた事も、無いわけじゃない。ただ、大抵は笑われるか、大騒ぎになるか、口外しないで付き合ってくれたとしても、五十年かそこらで皆死んじまう。

そんな訳で、私は長いこと素性を明かさずに隠れるようにして生きてきた。

幻想郷に来るまでは、な。

ここじゃ人外の輩なんぞ珍しくはないし、頼りにできる奴もいる。昔は色々あつて人を恨んだりもしたもんだが……今はさほど気にしなくなった。

同じく不死身の奴もいるんだぜ。知ってるか？ 迷いの竹林にある永遠亭つて屋敷

の主、悠久の時を生き、時の帝も惚れ込んだといわれる伝説のお姫様……。

蓬萊山 輝夜（ほうらいさん かぐや）さ。あまり表に出て来ないから謎めいた噂も耳にするだろうが、馴れば大した女じゃないぜ。意外に俗っぽくてワガママで、不老不死も凄いというより面倒だと感じるだけになる。

物騒だつて？ 別にいいじゃねえか。事実死なないんだし、三日もすれば元通りだ。

姫様だからつて、本当に遠慮する事ないつての。私は過去にアイツと色々あつたが、それを抜きにしても馬鹿野郎の一言くらい、平気で言つてバチは当たらねえだろ。

……しかし、な。ここまで言つといてなんだが、いざつて時は逃げ出した方がいいかもしれない。というのもアイツは人間じゃないどころか……この星の生き物ですらないらしいんだ。

あまり驚かないか？ それとも信じてない？ ま、本人が言つたから間違いはない。だからなのか、少し変わつてるといふか……ゾツとするような所もあつてな。

これから話すのは本当にあつた事だ。本当に、あつという間の出来事だつた……。

—

永遠亭にある日、一人の男が運び込まれた。妖怪兔に支えられているのは二十代後半

くらいの男で、腕から血を流している。なんでも連れてきた兎いわく、妖怪から兎を庇って怪我をしたらしい。

竹林に一人で入って、妖怪に立ち向かうなんて無謀だと思いかもしれない。ところが彼はよく見ると、見慣れない服装をして、永遠亭にわんさかいた兎たちにも戸惑っている様子だった。

外来人だったんだろうな。とにかく怪我人は放っておけないってんで、彼はひとまず永遠亭に入院する事になった。

時間にして一ヶ月くらいか。竹林はともかく永遠亭の中は安全だったから、男は色々な事を聞かされた。幻想郷という世界の事、妖怪が実在し跋扈している事、人間の居場所に限られている事……。

それを聞いて男は震え上がり、『死にたくない、どうか元の世界に返して下さい』と懇願したんだけど、返事は『最初からそのつもり。安心して』とそれつきりだった。説明したのが永琳だったせいか、ひどく事務的だったらしい。お返しというべきか男も素性を話したんだけど、これもまた特異って訳でもなく、本当に偶然、自殺とか事故もなく流れついてきただけらしい。

そんな経緯には永琳はもとより誰も興味を示さず、男は早々にいち患者でしかなくなつた。毎日決まつた時間に検査があり、後は寝ているだけ。話し相手になりそうな他

の患者もいなかったし、片腕じゃ本もろくに読めない。向こうのケータイ？　なんてもこつちじゃ使えなかった。他人から見てもえらく退屈そうだったつてさ。

それだけなら患者にはよくある話なんだが、永遠亭のメンバーにも色々あつてなあ。本人の預り知らぬ所で勝手に盛り上がる事があるんだと。あの患者は可愛いとか、格好いいとか。そいつが態度に出て、愛想がやたらと良くなったりする。永琳はよく分からないつて冷めた目をしていたらしいけど。

ただ、それは逆もしかりだった。件の男はどつちかつつと口下手で、大人しい奴だった。退屈すぎて周りに話しかけたりしても、会話が続かず二、三言の世間話で終わつちまう。

そういう事が続くと、次第に兎たちも男に親しみを失つていった。日々の仕事もあるのに、わざわざ時間を割く理由もない。咄嗟の勇気で庇われたあの兎も、感謝はすれど取り立てて鼻負するような事も無かった。

陰口なんかもあつたらしいぜ。出っ歯だの鼻の穴が大きいだのどうでもいい事から、友達が少なそうとか、恋人もいなさそう、絶対童て……オホン、とにかく色々見えない場所って言われてたんだつて。人とナリが出たと言うべきかなあ。たまにいるだろ、特に悪い奴じゃないけど、妙に近づきたくないつてタイプ。勇気を出して一度兎を助けたとはいえ、普段の男はまさにそんな感じだったんだろうな。

とにかくそんな状況が続いて、男が面白かろう筈もない。ふて腐れたように毎日横になつていと、話しかけてきた奴がいた。

そいつが輝夜だったんだ。

彼女は冷やかしか知らんが、男によく話しかけるようになった。男は既に愛想を使うのをやめてムスツとしていたんが、輝夜は現代の生活の事とか色々聞いてくる。質問に対して必要最低限の答えを言うだけの男だったが、何日も繰り返されると流石に意地を張つて無愛想にするのがバカらしくなつてきた。

そんな折、彼は輝夜に聞いてみた事がある。

『俺に話しかける時間で、もつと他の事が出来るんじゃないやありませんか』

それは自分との会話が楽しいと言つて欲しかったのか、あるいは暇なんですな、というイヤミだったのかもしれない。実際に輝夜は暇人だったしな。

でも、輝夜は動じずにニコリと笑うと、見てなさい、という風に自分を指さした。なんだ？ と男が彼女を注視した瞬間。

ぱつ、と一瞬で輝夜の着物が変わったんだ。その日は黄色だったのに、いつの間にか赤になつてゐる。彼女の着た服は十二単というやつで、生地を十二枚も重ねた分厚いものだった。男は念のため服を触つてみたが、確かに十二枚ある。着替えるにはどうしても時間がかかるし、下にあらかじめ着ていたとしても目立つに違いない。第一脱ぎ捨て

たような形跡も見当たらなかった。

何ですかこれ、手品？ と焦る男が尋ねると、輝夜は裾で笑みを隠し、『私の能力よ』と言った。

アイツには不思議な力があつてさ。瞬きより短い時間や、逆に途方もなく短い時間を、自由に操れるんだつて。例えば皆が気づけない程の一瞬の間に輝夜だけが一億年の時を過ごしたり、はたまた周りで一億年が経つまでを、輝夜だけが一瞬の間で過ごしたり。

だから、自分だけ着替える時間を作ったり、退屈な時間の埋め合わせをするくらいはお茶の子さいさいだと言った。男が呆気にとられる様が面白かったのか、カラカラ笑いながら。

その笑顔が男の機嫌を直したのかもしれない。それから現代の事を詳しく教えるようになって、自分についての思い出も語りだした。

思い出といつても、決して明るいものじゃなかったらしいけどな。席替えて女の子に机を離されたとか、女の子の持ち物を拾おうとして叫ばれたとか、女の子たちに指を指して笑われたとか。

人によつちや反応に困るような、それも女の子がよく出てくる辺りが悲しいエピソードの数々だったが、彼なりの自虐ネタというものだったんだろう。大人になつても兎た

ちに避けられてる彼の事、会話のセンスは推して知るべしって所よ。

だが幸い輝夜にはウケていたみたいで、男は調子に乗ってその路線で自分の魅力の乏しさを毎日語り尽くしていた。

そんな日々が続き、男の腕も治り、退院の日も近くなっていた頃。

いつものように輝夜と話していた男は、すっかり心を許した様子で、ふと、こう呟いた。

『ああ、世の中は不平等だなあ』

輝夜がどういう意味かと尋ねると、男は口を尖らせてまくし立てた。

『イケメンたちはモテるのにさあ、俺みたいな男は生まれてこの方、一人も好きになつてくれないんだ』

今まで散々男の自虐を聞かされ、更に愚痴る様を間近に見ていた輝夜にはこの上なく説得力があつた。それで世の中まで恨むのかつて話だけど、彼は浮かない顔。

『お見合いとかはしてないの?』

『あー、そういう文化も廃れてきてるんすよー』

男は輝夜の問いには至極簡単に答え、また宙を睨んで愚痴りだす。

『あーもう自由恋愛なんて不公平なんだよお。何を望むんだ、金か、権力か。そんなの握りしか持つてないぞ。顔は替えがきかないつてのにさあ』

しまいにはバサリと布団を被つて寝てしまった。その時の輝夜の心境は分からないけど、もしかしたらイライラしていたかも知ない。というのも彼女は昔、美人が崇つて貴族や帝から言い寄られて苦惱した過去があつた。アイツはアイツで苦しかったんだろう。金か権力か、なんてばやく男を見て、笑つていられたかは分からない。

それから何日かして、ついに退院の日がやってきた。その日は私が兎に呼ばれてな、慧音とも親しいことだし、里まで案内してやれつていうんだ。

私も暇だつたから引き受けて、男を連れて二人で歩き出した。男は特に輝夜と別れるのを残念がつていてな。年甲斐もなくいつまでも手を振つていたよ。輝夜も笑顔で答えていた。

竹林を歩く間中、男は入院生活の話をしていたよ。兎たちに冷たくされたとか輝夜とよく話していたとか……まあ要するに今までのあらましをな。私はボンヤリ聞いていたんだけど、彼は本当に楽しそうだった。

やがて、竹林の出口が見えてきた。この先に人間の住みかがあるから、とりあえずそこに行こう。そう言つたら、男はフツと表情を曇らせた。

『なんだ?』

私が首を傾げると、男は沈んだ声で言った。

『やっぱり、ゆくゆくは元の世界に帰るんですか……』

『は？ まあ、一時は里の世話になるが、いずれはな』

まさか幻想郷に住みたいなんて言わないだろうと思つて素つ気なく言つたが、男はガツクリと肩を落としてブツブツ言い出した。

『やつぱりそうなるか……。嫌だなあ、入院中は姫様が優しく相手してくれたのに……。あんな人他にいないよ……』

元の世界でよほど女に縁がなかったのか、やたらと輝夜の事を口にした。けどどこまで未練があるうと、永遠亭に戻すなんて訳にもいかない。いいから来い、そう言おうとした時。

男が紐で縛られた重箱を一つ取り出した。何それ、弁当？ と聞くと男は満面の笑みになつて答える。

『姫様のお土産ですよ。最後にくれたんです』

そう言つて、聞いてもないのに経緯を話しました。

………なんでも、輝夜が”この世で数少ない平等なもの”だと言つて箱を渡したらしい。贈り物なんて良いんですかと遠慮すると、輝夜ははにかんで頷く。

『いいのいいの。どうせ今まで不平等を味わつて来たんでしょ？ ほんの饞別よ』
プレゼントも縁がなかったんだらうさ。男は何度もお礼を言つた。しかし、輝夜はそんな彼にこんな事を言つた。

『でも、出来るだけ開けない方がいいかもねえ』

『え？ 開けたらまずいんですか？』

『そうね、もしこの幻想郷にどうしても未練がある、って時にだけ開けなさい。その時、真の平等を知れるでしょう』

……その話を聞いて、私はなんとも不可解な気分だった。餞別はともかく、なるべく開けるなどはどういう事だ？ しかも数少ない平等なもの、って一体何を詰めたんだろう？

思考に耽っていた私がハッと我に返ると、男は既に重箱の紐を解いていた所だった。

『おい止せ！ いくらなんでも怪しいって！』

私は慌てて止めたが、男は邪魔するなど言う風に私を睨み、鼻で笑って言った。

『気にしすぎですって。大体、どうせ幻想郷への未練は消えやしないんだ。今開けたって同じですよ！』

男は言うが早いか、勢いよく重箱を開け放った。中には一体何が入ってるんだ、と男と私が目を見張った。

次の瞬間。ほんの一瞬だった。

男が、老人に変わったんだ。

顔がみるみるしわくちやになり、眼はギョロリと黄色く濁って、髪の毛は細く白く変

わり、風も無いのにハラハラと抜け落ちた。齒は腐り落ちるように唾液の糸を引いて地面に落ちていく。体が弱々しくしぼんで、乾いた肌の下から飛び出してきた。骨の形が浮き出てきた。

『いつ……!?』

地獄にいる餓鬼を思い出し、私が立ちすくんでいた間に、その男だった老人は枯れ木のように倒れ……二度と動かなかった。

慌てて駆け寄ったが、もう息はしていない。……死んだんだろうな。

箱の中には呪札が入っていた。多分輝夜の仕業だろう。奴の能力を中に封じ、開けた者だけが一瞬の間に何年、何十年……それこそ死ぬまでの時間が経つよう、予めセツトしていたんだろうな。ただ、本人でもなけりや意識はなかついていかない。男は体だけあれよあれよと年月が経過し……なすすべもなく殺されたようなものだ。

私は箱を掴んで取って返し、輝夜に詰め寄った。お前はなんて物を渡したんだ。アイツは死んじまったぞ、とね。

ところが、奴ときたら罪の意識どころか、全く動揺せずに『あーあ』と言ったきりだった。なんとか言え、と怒鳴ると輝夜は鬱陶しそうに答えた。

『ちゃんと警告はしたわよ。それに言った通りじゃない』

『ああん!』

輝夜は私の憤る様子を面白そうに眺めてから、目を細め、裾で笑みを隠しながら言った。

『死と老いは誰にだって平等よ。私たちは例外だけどね』

そう言つて輝夜は着物を翻し、何事も無かつたかのように去つていった。

……彼の死体は、私がこつそり埋葬したよ。しかしやり切れない事件さ。元の世界で頑張る気さえ出していれば、思い出を持って帰れたつていうのに……。

皆、軽々しく不死とか万能とか、完全なものみたいな触れ込みを信じない方がいいぞ。ンなものは大抵サギか……：：：～

私の話は終わりだ。こんなんで良ければ、酒の肴にでもしてくれ」

四周目・四話目―火焰猫燐

「やあ、あたいが四話目？ ようし、じゃあちよいと友達の話を見せてもらおうか。

黒谷（くろたに） ヤマメって子を知ってるかい？ 旧都に住んでる土蜘蛛の妖怪だね。蜘蛛糸を出したり、虫の蜘蛛と話をしたり出来るんだ。ちよいと病気を媒介しちゃったり、気味の悪い所も多いんだが、ま、本人もそれが妖怪らしさだって自負してる。

でも、悪い所ばかりじゃないよ。外見はすごく可愛いし、性格も気さくですぐ仲良くなれる。だから”地底のアイドル”なんて呼ばれてんだ。両極端だよねえ。

で、特技は大工仕事。これも小柄でよく意外に思われるんだけど、土蜘蛛の得意分野なんだってさ。長屋の雨漏りから新築まで、あつという間に済ませちまう。旧都じゃ色んな方面から頼りにされてるんだ。

これは、そんなヤマメに関する話だ。もう二、三十年前……。先生が赴任するよりずっと前の話らしいから、レアだと思っよ。

昔、ヤマメや鬼たちがまだ妖怪の山にいた頃の話だ。既に地上と不可侵条約を結んでいたかはハッキリしないけど、どっちにしろ易々と追い出される気はねーぞ、と突っ張っていたらしい。

その時のヤマメは、山の中の洞穴に巣を作って暮らしてた。

隠れていた訳でもなく化け蜘蛛の棲みかとして有名だったはずなんだが、そこにしょっちゅう子供が近くをうろついていた。

どういう訳かというと、当時も寺子屋らしきものはあつたんだが、今ほど里の情勢は穏やかじゃなくてね。子供らもその影響を受けて荒んでいたんだって。

で、やはりというかイジメが流行っていた。中でも妖怪の棲みかに昼間に来て、ターゲットを一人で置き去りにして帰るってのが人気だったんだ。

ターゲットも大体決まっていた。毎日集団に小突き回されていたのは、気弱そうなチビの男の子。で、お決まりの場所はヤマメの住む洞穴の近くだった。

いじめられっ子は洞穴のそばに放り出されて、『戻ってくるなよ』と念を押される。そしていじめっ子たちが笑いながら去るのが見えなくなり、更に日がくれるまでの間、洞穴のそばですつと泣いていた。

その洞穴がまた凝っていてね。ただですら暗い岩戸の奥の奥に、また深い深い縦穴を

掘るんだ。流石に今の旧都への入口ほどじゃないにしろ、それでも幾ら目を凝らそうが底が見えない長さだった。覗き込むと冷たい風がひやりと頬を撫でて、その風が穴の壁を反響してウオオン、ウオオンと得体の知れない唸り声のような音を立てている。それを聞くとね、嫌が応にも震え上がっちゃうんだよ。

落ちたら一体どうなるんだろう。

この穴の底に住む土蜘蛛というのは、一体どんな姿なんだろう。よほど大きな蜘蛛なのか、それとも他の動物が混じったような姿なのか。

どんな風にして食われるのか。一呑みか、かぶりついて少しずつ中身を吸うのか……。

ヤマメは実際、我関せずでいたんだけど、いじめられっ子は時々穴を覗き込んで逃げ出すのも忘れるくらいに青い顔をしてすくみ上がっていた。

それでも手を出さずにいると、次第に恐怖は畏怖に変わる。想像がどんどん膨らんで、洞穴の中に邪神がいるかの如く祈りの言葉を口にするようになった。

『あいつらを、どうか地獄に落としてください』

『僕を生け贄にしたって良いから、食いつくして二度と息を出来なくしてやってください』

『お願いします。お願いします……!』

苔むして湿った空気が充満する中で、いじめられっ子はどんどん陰惨な願いを口にす
るようになった。

とはいえ、その子が悪人かといえはそうでもない。妖怪って元来、人の負の念が大好き
なんだけど、それがいまいち感じられなかったんだって。

優しい人間でも、境遇によっちゃ破滅を願うまでになるんだ。いやはや、過ぎた恐怖
や憎しみつてのは人を歪ませるものだねえ。まあ、その願いは叶わなかったんだけど
ね。だって、閻魔様じゃあるまいし、ヤマメは人間の善悪なんてどうでも良かったから。
でも、全くノータッチって訳じゃ無かったんだ。ある日、ちよつとした揉め事があつ
た。

いつものようにいじめられっ子が洞穴に連れて行かれたんだが、何度も続いてつい
カツとなったんだろう。座れと言われた場所で暴れだして、揉み合いになった。

所詮は一对多だから全員を返り討ちには出来なかったんだけど、必死になれば物凄い
力が出る。普段は口ごたえ一つ出来ないガキ大将に掴みかかって、後先考えずに放り投
げた。

その先が偶然、ヤマメの巣穴だった。ガキ大将は叫ぶ間もなく、気の遠くなる程深い
穴の中へ真つ逆さまに落ちていった。

『ああっ！』

慌てて穴を覗いても後の祭り。どれだけ身を乗り出して目を凝らしても、視界にはいつも通り風の唸り声ができる筒形の闇が、ポツカリと口を開けているだけだった。

しばらく無言の時間が続く。ガキ大将の姿はちらりとも見えてこない。汗ばんだ手が小石にぶつかり、カラカラ音を立てて穴に落ち、遠くなつていった。

誰かが唾を呑む音がいやにハッキリ聞こえて、無言に耐えかねた奴がガキ大将の名を叫んだ。けれども返事はなく、エコーがかかつて繰り返されるばかり。

子供たちはいよいよ青ざめて、額に汗を浮かべながら例のいじめられっ子を睨んだ。睨まれた方は周りの視線に気づいて目を伏せる。こんなつもりじゃなかった。そんな目で見ないで。必死でそう叫ぼうとしたが言葉が出てこない。

けど、同時に心のどこかで安心してもいた。これでいじめられなくて済む。どうせバチが当たったんだ、ざまあみるとね。頭を抱えてブルブル震えながら、未だ意志通りに動かない口が、自分でも気づかないうちにニヤリと歪められた。

けどその時。

『よっ』

不意に呑気な声でしたかと思うと、黄髪の子がフワリと浮かんで地面に降り立った。茶色の服を着て、どことなく奇抜な雰囲気を漂わせている。

子供たちの頭に『？』が浮かんだ。あの吸い込まれそうな土蜘蛛の巣穴から、苦もな

い様子で下から出てきたこの女の子は、何者なんだろう、と。

一方、女の子は背中に視線を浴びながらも知らんぷりで、片手を手の甲を上にしてスツと掲げた。すると五本の指先に白い糸が垂れ下がっている。糸は巻き取っている訳でもないのにズルズルと動き、指に吸い込まれて短くなっていく。

それを見て、子供たちも流石に気づいて震え上がった。こいつは黒谷ヤマメだ。ここを巣にしている妖怪本人だ、とね。そうこうしているうちに糸は吸収されていき、それに掴まったガキ大将が姿を現した。

『だ、大丈夫か!?!』

子供たちが次々に駆け寄ると、ガキ大将は眩しさに顔をしかめた後にポカンとして頷いた。特に怪我もしていなさそうな様子に子供たちは一斉に胸を撫で下ろす。そんな中でいじめられっ子だけが、未だ信じられないという目付きでヤマメを睨んでいた。

しかし、ヤマメは彼に目もくれず、いじめっ子の方を向いて言った。

『借りは返したよ。これつきりだけどね』

ガキ大将は相変わらず困惑していたけど、少なくともヤマメは理由があつて助けたらしい。そう勤づくや否やいじめられっ子はヤマメに詰め寄った。

『なんで助けたんですか、なんで!?!』

声が震える。そこでハッキリと自身の中に渦巻くどす黒い感情を自覚した。けどヤ

ママは興味がないのか涼しい顔で、肩口からもぞもぞ動く物体を取り出した。それは手の平台の大きな蜘蛛だった。

ヤマメは蜘蛛を横目に見ながら言う。

『ずっと前に、このガキンチョが蜘蛛を助けたんだよ。だからお返し』

ヤマメが微笑むと、蜘蛛は返事するように脚を振り上げる。はたから見たら和む光景だが、いじめられっ子には怒りを煽るようにさえ見えた。

『そんな、つまらない理由で……』

ぼそりと呟くと、ヤマメが面倒臭そうに振り向く。いじめられっ子はガキ大将を指さして、洞穴に響くような怒鳴り声をあげた。

『知ってるんですか!? アイツはずつとイジメをしてるんですよ!! もう何か月も、僕の前には他の子だつて……! 誰も止められなかったんですよ!?』

もう周りのいじめっ子たちは意識から消えていた。ただ誰にも言えずに燻っていた感情を、目の前のヤマメに当たり散らす。

『やつとバチが当たったと思つたのに……。助けるなんて、思つてなかった……!』

最後の方では、怒りというより悲しみがこもっていた。何度も巣穴のそばで捧げていた祈りを、裏切られた悲しみ。

だけど、そこまで言つても返つてきたのは、ヤマメの困つたような苦笑이었다。

『そう言われてもさ……。私はお釈迦様じゃないんだ。知らないよそんなの』

いじめられっ子は理不尽な思いで一杯だった。良い所があるなら自分にも良い事をしてくれると信じていた。悪い人間には自分にも見える場所で裁きが下ると信じていた。おかしな話だよ。自分でもイジメを見てみぬ振りをしてたんだろうに。

そっけなく言つて、ヤマメは他の連中に向き直ると、一転して陽気な声で言つた。

『で、あんたら。もうここには来ない方が良いよ。私に近づき過ぎると病気になる』

さつさと帰んな、と手で払われ、子供たちはいそいそと背を向ける。いじめられっ子だけがヤマメの後ろで苛立ちを堪えていた。

なんでこうなるんだ。たかが一度蜘蛛を助けただけじゃないか。そうだ。その蜘蛛がそもそも悪いんだ。蜘蛛がいなけりや……。

いじめられっ子の視線が、次第にヤマメの肩に乗った蜘蛛へ向く。そこからほぼ衝動的に、いじめられっ子は蜘蛛を手で払い除けていた。

『わっ！』

ヤマメが驚いて振り向く。蜘蛛は存外勢いよく飛んで、子供たちの眼前を通りすぎて岩壁にぶち当たり、体液の跡を残して地面を転がった。

『うわっ……』

子供の一人が顔をしかめた。蜘蛛はぴくりとも動かない。気まずい空気が流れる中、

いじめられっ子だけが、振り返ったヤマメと目があつた。

『ひっ!』

いじめられっ子は息を呑んで固まった。ヤマメの目は怒りさえもなく、ただ黒く塗り潰したような光のない瞳が、ギョロリといじめられっ子を捉えていた。ちようど蜘蛛の複眼を間近で見たような、無機質な目だった。

いじめられっ子は何も言えなかつた。口は開くそばから情けない吐息が漏れるばかりで、足がガタガタと芯から震え出す。そんな彼を、丸つきり無価値な物を見るように、ヤマメは黙つて見据えていた。

『おら、行くぞー!』

いつまでも動かないいじめられっ子に痺れを切らし、子供の一人が無理矢理連れ出した。いじめられっ子は山道を引きずられながら洞穴の方を振り返つたけど、そこにもうヤマメの姿はなかつた。

次の日。

ヤマメと顔を合わせたせいか、洞穴に行つた子供たちは揃つて熱を出して体調を崩していた。寺子屋の教師は一旦授業を休みにしようかとも考えたけど、そこに真面目ないじめられっ子が出席してきて、頭数が揃つたからと結局普段通りに授業を始めた。

いじめっ子たちは最初調子が悪くて大人しかつたんだが、いじめられっ子の方は様子

が違った。陰険な目付きで時折辺りを睨み、気付かれると頼杖をついて知らぬ振りをする。昨日死ななかつた事を根に持っているように、ガキ大将の目には映った。

それが面白くなかつたのか、ガキ大将はまたしても絡みに行った。『お前のせいで結局授業が始まっちゃつたじゃねーか』とか言つてね。それでも意地になつて無視していると、とうとうガキ大将は怒り出した。

『おい、何とか言え!』

そう怒鳴ると、初めていじめられつ子が向き直つた。そこでやつと、その顔が汗ばみ、目には酷い隈が出来て、唇まで紫色になつているのが分かつた。

『だつて……家にはいられない……』

消え入りそうな声でそう言われて、ガキ大将はギョツと仰け反つた。いじめられつ子はよく見ると何かに怯えているようで、手をついた机をカタカタと細かく振動させていた。

『ど、どうしたんだよ』

辛うじてそう尋ねると、口だけがほんの微かに動く。

『だつて、蜘蛛が、いる……』

そこまで言つた時に、急に天井の板が音を立てて外れた。子供たちが驚いて上を見上げると、大人の背丈程もある、まだら模様の何かが突き出てきた。

丸太ほどに太く、先が鷹の爪のように尖って、蟹のような殻が全体を覆ってその上に毛が生えている。パキパキと枯れ枝が折れるような音を響かせながら、生き物のように何かを探って緩慢に蠢く。それらが何本もぬうつと下に垂れ下がってきたかと思うと、いじめられっ子を抱え上げ、するりと天井裏に引つ張りこんだ。

それつきり何の音もしなくなり、いじめられっ子は姿を見せなかった。後で大人たちも一緒になって探したが、とうとう痕跡一つ見つからなかったつてさ。

……ねえ先生。これを聞いて、ヤマメが残忍な奴だと思ukai。

隠さなくつたつていいき。結末からしていじめられっ子は死んでるかもしれないし、もし加害者の口からこんな話が出たらそりや苦言の一つも出てくるだろう。

でも、誤解のないように言うかね。これを話してくれたの、実はヤマメじゃないんだ。じゃあ誰かって？ それが名前は分からない。ヤマメの大工仲間の一人がコツソリ聞かせてくれたんだ。それがまた、奇妙な奴だね。見た目はあたいの半分くらいの背丈しかない、子供なんだよ。男の子だね。それでいてベテラン並みに手際がいい。

いじめられっ子本人？ そんな訳ないと思うなあ。だつて明らかに妖怪だよ。オデ

コにこう、蜘蛛の複眼みたいな点々がついてるし。第一さっきの話は二、三十年前だよ？ 人間の子供が知るわけないじゃん。

やけに被害者目線なのが気になる？ そんなの演出、で片付くつてば。じやなきや

……作り話さ。

……でも、万が一、聞かせてくれた妖怪が件のいじめられっ子本人だとしたら……。

何があつたんだらうね。

あたいの話はおしまい。モヤモヤを残すのもテクニクだつて、その子は言つてた

「よ」

四周目・五話目―メデイスン・メランコリー

「え、私の番？　もうそんなにいったつて。えーと、五番目かな？　また微妙な順番が回ってきたものねえ。

メデイスン・メランコリーよ。生まれたばかりで怖い経験なんかはあんまり無いけど、それでも人に聞いた話ならあるわ。それ一つしか用意出来なかったけど、勘弁してね。

で、先生。あなた、アリス・マーガロイド……間違えた。アリス・マーガトロイドって知ってる？　そうそう、時々里に来て人形劇をやつていくつていう、あの人形遣いよ。金髪の。

人形の縁でたまに話すんだけど、まあとにかくいけ好かない奴でね。人形を何個も作つては武器にしたり爆発させたり、危ない使い方ばかりするのよ。私から見たらもう少し労つて欲しいというか、『他の武器は無いの？　キャラ付けなの？　馬鹿なの？』つて言いたくなる奴よ。というか言つてたかな……。二、三回くらい。まあいいや。

そんな神経の凶太い奴だからね、怖いものなんて絶対ないだろうと思つてただけど……ホラ、私、知り合い少ないからさ。怖い話を集めようつてなつて、仕方なく聞いて

みたのよ。

案の定、すぐには出てこなかったみたいで考え込んでただけど、しばらくして気まずそうに口を開いた。

『あるっちゃあるわね……五年前くらいに』

五年前つていえば私が生まれるかどうかって頃だった。それなら私も知らないだろうし聞かせてよ、つて頼んだんだけど、アリスはまた渋い顔。額を押さえたまま煮え切らなくて、『早くしてよ』つて言ったら、やつと頷いてくれた。

『じゃあ、笑わないでよ……』

—

五年前、アリスはちよつとした“発明”をした。アイツは昔から人形を作っているんだけど、中でも『自律人形』つてのにご執心でね。人間みたいに自分の意思で動く人形を作りたかったらしいの。私に近いけど、それとも違う。生まれながらに心を持つ人形よ。

私からしたらそんな作るなんておこがましいって思うけど、それでも一定の成果はあつたらしいのよ。ある時大きな節目を迎えた。それが五年前。

アリスが一体、特別な人形を完成させた。でも聞いたことないでしょ？　あまり長い間は一緒にいなかったみたいだから。でも今までで最も自律人形に近かったと言っていたわ。

外見の精巧さや華やかさなら引けをとらないのはいくらでもあったけど、その子には他とは違う際立った特徴があつた。

アリスは自律人形とは何かつて考えた時に、とにかく強い意志が肝要だと考えたの。表面上、自分の考えで動いているように見えても、實際命令に従っているようじゃ自律人形の意義がない。作り主の言う事もはねつけるくらいじゃなきや、挑戦する価値はないと思つたの。

だから、作る間中『強い意志を持って』つて言い聞かせた。アリスの思い通りでなく、ムカツクくらいに怒つたり、悲しんだり、笑つたりするようにと願つたの。

そうしてついに小さな小さな男の子の人形が出来上がった。名前はケニス・マーガトロイド。

努力の甲斐あつて、ケニスは癖のある性格だつたわ。四六時中変なことしてるとか、そういう訳じゃないんだけどね。服や髪型にうるさかったり、自分の恰好よさをよく気にしていた。自分でイカシテると思つたら、よくアリスに見せに行つていた。『恰好いいでしょ？　見て見て』つてね。アリスも笑つて受け答えしていた。

やがてアリスの家の書物、というか絵本を見るようになってから、その傾向が強くなった。その頃アリスが付き合っていた、ごっこ遊びが顕著な例だった。

ごっこ遊びつてのはつまり、なりきりね。絵本に影響されたから、童話が遊びのタネだった。アリスがもつぱら悪役の魔女や狼の役をやる、ここまでは普通なんだけど。ケニスはやりたがる役が少し変わっていた。”本来は存在しない”役だったの。

例えば、”三匹の子豚”とか、三兄弟しかない物語の中で『四番目の兄弟役』をやるといって、自分で設定を考えるのよ。

やる事だつて遠慮しない。狼役のアリスが藁の家と木の家を壊し、ついにレンガの家へと追い詰める。いよいよクライマックス、狼と子豚たちの知恵比べだ。

といった所で、四番目の兄弟が颯爽と現れる。『兄さんたちはボクが助ける！』と言って何倍も大きなアリスにチョップや蹴りを入れる。

『ぐわっ！ やられたぁー』

そうされるとアリスはやつつけられる素振りをする。最初は戸惑ったんだけど、話の筋がどうよりケニスの役に見せ場をあげる方が、当人は喜んだんですつて。

ケニスは『悪は滅びた』と言わんばかりに喜色満面。それ以上遊びを続けようとはしなかつた。

ケニスとの遊びは毎回そうだった。”狼と七匹の子やぎ”で八人目の兄弟を、”桃太

郎”で相棒の柿太郎を演じて……何かしら活躍っぽい事をすればケニスが飽きて終わりになる。

活躍の中身もぶっ飛んでいてね。八人目の兄弟なら生き残った七人目と共謀し、下剤を飲ませてお腹から他の兄弟を救出する。柿太郎なら『この柿の種とお宝を交換しないか』と鬼に持ちかけて不意討ちする。

時にはどこで聞きかじったのか外の世界のネタが飛び出す事もあった。

”白雪姫”の魔女に向けて。

『北斗百〇拳っ!! ……お前はもう、死んでいる』

”ヘンゼルとグレーテル”の魔女に向けて。

『ヘンゼル! グレーテル! 奴にジェットストリームアタックを仕掛けるぞ!!』

『食らえっ! 牙〇零式!!』

なんかもう世界観とかメチャクチャで、知らない人から見たら訳分かんないんだけど、まあ小さい子どもの遊びだし。アリスも笑いながら付き合っていたのよ。ごっこ遊びの時には、ね。

アリスは、なついた頃からケニスを連れ回すようになった。もつとも里に出かけたりする機会は限られていたんだけどね。その機会っていうのが、アリスの公開している人形劇よ。

ケニスを観客席の隅っこに座らせて、アリスは仕事に集中する。唯一の自律人形候補もその時ばかりはお客の一人。アリスは何人もの人形を細かく操作して動きに、物語に命を吹き込んでいく。

観客はその世界に没頭し、終わった頃はやり抜いたアリスに惜しめない拍手を送る。そんな大人数じゃないにせよ、間近で見えていたケニスはさぞかし心を揺さぶられたでしょうね。

やがて自分も拍手を送らねえ、そう思うようになった。作り主が奮闘して人々に感動を与えるのを見て、自分もアリスの側に行きたいと思つたのは、自然なことだったわ。ある日、ケニスがあるものを見せてきた。鉛筆で殴り書きされた紙の束。めくつてよく読めばそれは劇の台本みたいで、漢字が少ないながらも配役や演出が細かく書いてある。

アリスは何故か嫌な予感がした。いつもやっている、あの生暖かい目で見守つていたごっこ遊びの風景が頭をよぎる。

その想像を知つてか知らずか、ケニスは笑顔で言つた。

『ボクにも劇をやらせて！ ボク主人公ね！』

アリスは一瞬渋い顔をしたけれど、他ならぬ家族の頼みを無下には出来なかつた。精一杯のつくり笑いを浮かべて、『ちよつと手直したいから、私に貸して』といつて台本

を預かった。

それは「人魚姫」をベースにした、二次創作っていうのかな？ 言うなればそんな代物だった。人魚姫が王子様に恋をして魔女に足をもらうけれど、王子様は人違いをして隣国のお姫様と結ばれ、人魚姫は泡となって消える……。という大筋から、大きく違う部分もあつたの。

人魚姫の三人の姉……。その中に一人、弟が追加されてたの。人魚姫が恋に悩んだり失恋に嘆いてるシーンの随所に弟と絡む場面が入ってる。そいつがケニスのやりたがつた役よ。名前も「丁寧」に書いてあつた。そっくりそのまま「ケニス・マーガトロイド」。

『うああっ』

アリスはそれを見た瞬間、自分の事でも無いのにとてつもない羞恥心に襲われた。理由は分からないけど、怖気が走って肩が震える。じゃあ人魚姫一家はマーガトロイド一家なの？ とかどうでもいい事に思考を逸らせて少しづつ改稿の筆を走らせた。

そして公開当日。アリスは初めて劇を二本立てにして、前座にケニスの出演作をあてた。

人魚姫が恋をして弟たちに打ち明け、止められても結局我慢出来ずに魔女に脚をもらい、声を差し出す。しかし声が出ないが故に王子様は他のお姫様と仲を深めていく。も

し恋が実らなければ、人魚姫は魔女の魔法で泡となって消えてしまう。弟たちが再三諦めて帰ろうと言っても人魚姫は諦めず、そうこうしているうちに王子様とお姫様は結婚式を……。

とうとう今夜、式が挙げられる。そこで姉は最後の手段として王子様を殺すように言った。そんな事はどうしても出来ないと言う人魚姫。自分から泡になって消えるのか……。

そこでケニス、もとい弟が意を決して言った。

『俺が結婚してやんよ!!』

その瞬間、何故か魔法は解け、人魚姫に声と尻尾が戻り、ケニスと結ばれてめでたく海に帰りました……。

つてのがケニス作品のあらすじ。

え、魔法は何故解けたの？ というか弟と結婚していいの？ という細かい疑問は残るんだけど、アリスは強引に次の演目に移行して乗りきった。まあ泡になって消えるよりは救いがある……でしょ？

夕方、どうかその日を乗りきって、アリスが後片付けを始めた。すると客席に行っていたケニスがとことこ駆け寄ってくる。

『お疲れ様』

ねぎらいの言葉をかけたけど、当の本人は頬を膨らませて不満顔。その理由を台本を渡されたアリスは分かっていた。言葉を待っているとケニスは一ストレートに言い放つ。

『アリス、なんでボクの出番削ったりしたのさ』

実は、ケニスの構想には人形劇でやらなかった場面があった。人魚姫が口を利けずに追い詰められていく中、弟は伝説に伝わる南の島に渡る。その島の大王様にカメハ○波を伝授されて魔法をかけた魔法を打ち倒すというオリジナルシーンだった。

声や尻尾が戻ったのも、本当は魔法を倒したからだだった。結婚したのは、ケニスが実は人魚姫の弟ではなく南の島の大王の血を引く、選ばれた人間だったから。にも関わらず、アリスは矛盾点が出るのも承知でそのシーンを削ったの。オリジナルシーンは弟、ケニスの独壇場だったし、観客が楽しんでくれるか不安だったから。

『次の演目との時間のかね合いよ』

口ではそう言ってごまかした。それより、アリスにとっては『元々の悲恋哀話はどうしてくれなんだ』とか『つかケニスって誰』っていう非難が出る事の方がよほど怖かったんだって。

まあ、客は思ってもわざわざ文句なんて言わないでしょうけど。とにかく終わらせることが出来て、まあ良かった良かった……とアリスがため息をついた。

その翌日。

『アリス！ 今度はこれ見て!!』

昨日のふくれっ面はどこへやら、白い歯を見せてまた紙の束を見せてきた。

アリスはデジヤブを感じてそれに目を通す。やはりというか、また童話で活躍するケニスの物語が綴られている。

今度は何の話かって？ 何だって良いわ。その日から覚えきれないくらいの勢いで、次から次へと台本を渡してきたんだから。

印象に残ってるのはケニスが考えたキャラの名前くらいよ。”赤ずきん”から”西遊記”、”分福茶釜”にいたるまで、名前は全部『ケニス・マーガトロイド』。日本人のケニス、ドイツ人でもケニス、中国人でも、ペルシア人でも、アラビア人でも、イタリア人でも、ケニス、ケニス、ケニス！ オリキャラはみんなケニスツ!!

それらを毎日のように渡して改稿してくれてんだから堪ったもんじゃない。『締め切りがある訳じゃないんだから、もつと練りなさいよ』と細かい性格のせいで言いそうになるのをこらえて、これも他ならぬ家族の為に机に向かい続けた。

でも、一週間と経たずにアリスは後悔することになる。目を通せば通すほど、突拍子もない展開や独特の雰囲気呑まれていく。子供だから整合性には目をつむるべきなんでしょうが、それでも厳しいものがあつた。

先生、寺子屋で劇なんかやる時、子供たちで台本を作った経験ない？ あれ大変で

しよう。みんな終着点とかくくに考えずに、その場その場で面白いと思つたネタをほいほい放り込んでくるの。おまけに誰だつて目立ちたいし、ともすれば悪乗りで一人だけ不憫な役を背負わされたりする。先生がまとめなきや絶対迷走するわ。

ケニスはそれを自分一人の頭でやっていたのよ。アドバイスする大人もなしにさ。だから活躍シーンは誰かに片寄るし悪役にはいじめまがいの制裁が加筆されるし、加えて中途半端に原典のストーリーをなぞつてるからケニスの存在が浮くの浮かないの。アリスもクソ真面目だったせいで放り出す事も出来ず、これで客は楽しんでくれるだろうかとどこまでも悩み続けた。

一方で、ケニスはそんな苦悩もつゆ知らず度々『ねえあの台本見た？ 見てくれた？』と目を輝かせて迫ってくる。見たといえは『面白かった？ どこが良かった？』としつこく聞いてくるし、まだ見てないといえは途端に不機嫌になり、すねて手伝いをしなくなる。

話の構成に悩むストレスとケニスの能天気さを相手にするギャップの中で、アリスはふと、ケニスを作りながら『自分の意思を持って』と強く念じていたのを思い出した。そして初めて、自分の作ったケニスを恐ろしいと思つたの。

『あの子はただの人形じゃない。』自分が目立ちたい、自分が誉められたい” 欲が行きすぎた、無自覚なオバケなんだわ』って……。

疲労を抱えたままズルズルと時は過ぎ、次の公演予定日が近づいてきた。アリスが遅くまで準備に勤しむようになると、流石にケニスもワガママを言わずにコーヒーとかを淹れてくれて早寝するようになった。

アリスは複雑な心境のまま、劇で使う新しい人形を作っていた。傍らにはまだ読んでいないケニスの台本が山になっている。合間に啜るコーヒーは、酷く苦い。

そして当日。前のケニスの作品で評判をちよつと気にしたけど、客入りはあまり変わらなかった。その日もケニスの作品をええいままよと割り切り終わらせ、次の演目に入る。

アリスは客席の隅をチラリと見た。ケニスが期待に満ちた目で座っている。対して自分の顔はどうだろう。沈んだ気持ちで作ったばかりの人形を操った。

演目は“ハーメルンの笛吹”。

ネズミの被害に悩む町ハーメルンで、市長のもとに怪しい男がやって来て、大金と引き換えにネズミを退治してやるという。

冗談だと思った市長はいくらかでも金なら出すと約束するけど、男は笛を鳴らしてネズミを引き連れたかと思うと、あつという間に河にみんな飛び込ませてしまった。

呆然とする市長へ、笛吹男は報酬を要求する。けれど大金を惜しんだ市長は男の約束を突っぱねた。すると笛吹男は『今に後悔しますよ』と言って町に戻り、また笛を吹く。

すると今度は、笑みを貼りつけた子供たちが次々と飛び出した。大人たちの制止も聞かずに、子供たちは笛吹男に導かれるまま……。

というシーンまできて、異変が起こった。新しい笛吹男の人形が、操作を間違えた訳でもないのに急にピョン、と舞台を降りたの。

あれ、とアリスが見ると、勝手に動いて自分から離れていく。今までそんな事は無かったから、どういう事？ と戸惑った。観客もポカンとしている。

けど、直後に同じ位の大きさの影が後をついていった。ケニスよ。勝手に動く人形を止めもせずに、楽しそうにスキップしながら一列になって歩いていく。

『待ちなさい、どこ行くの!?!』

アリスが呼び止めると、ケニスは一度だけ振り向いた。屈託のない、夢でも見ているかのような笑顔。

アリスは人形劇の道具もそのままに駆け出した。相手は同じ歩調のまま。何倍も体の大きさは違うはずなのに、一向に追いつけない。それどころか更に距離は開いていく。

やがて里をまつすぐ抜け、人通りの少ない林道を通り、人の手の入らない藪に入つて……。

決して安全な道ではなかった。いつ妖怪が出て来てもおかしくない。それでも笛吹

男とケニスはいっそう愉快そうに、笛の音が聞こえてくるような軽い足取りで歩き続けた。背中はどうどん、どうどん遠くなっていく。

やがてその姿が豆粒のように小さくなった頃、妖怪の山へと入って行き……。それつきり、見えなくなっちゃった。

アリスは山の中に飛び込んで泥だらけになりながら何日も探し回り、帰ってからも家で一才出かけずに待ち続けたけど、とうとうケニスは帰ってこなかった。

アリスは、『私が殺したんだ』ってずっと嘆いてた。今でも山に探しに行くけど、やっぱり見つからないままですって。

今でも、ケニスの台本はしょっちゅう読み返しているそうよ。なにしろ、五年も経ったらケニスが活躍した劇なんて、里の皆はすっかり忘れているらしいんですもの。せめて生みの親の自分くらいは覚えておきたいってさ。

皆も、良かったらこの話覚えておいてあげてよ。流星に不憫だし。……まあ、忘れても減るもんじやないけどね。

私の話は終わり。次で最後かしら？」

四周目・六話目―魂魄妖夢

「私が六話目ですか？ むむむ、ついに来ましたか……。というか今いる中で最後じゃないですか。期待されてない余り者がトリを任せれちゃうっていう、最悪のパターンですよこれは。」

期待に沿えるかは分かりませんが……。とりあえず自己紹介をしておきますか。魂魄 妖夢（こんぱく ようむ）です。普段は冥界にある白玉楼で庭師をしております。亡霊なんかが珍しくない、慣れないうちは不気味がられる地域ではありますが、主の方が頼もしいので、なんとか大事もなく仕事をしております。

本来であれば怖い行事に首を突っ込むつもりなど無かったのですが……。ね。

まあ愚痴を言っても仕方ないでしょう。先ほど言った主の方……。西行寺 幽々子（さ いぎようじ ゆゆこ）様というのですが、そのお知り合いに八雲 紫（やくも ゆかり）様がいらしっしやいます。皆さんには紫様の方が馴染みが深いでしょうか。

今更と言われるかもしれませんが、紫様がまた面倒くさい方ですね。いきなり現れたかと思えばスカートをめくってきたり、作りかけの料理にカラシをたくさん放り込んだり、時には剣の稽古の最中に背中をつついてきたりするんです。思わず木刀を振るっ

て、目の前に紫様の顔があつた時は、心臓が止まりそうになりました。万が一ぶん殴つてしまつたら、幽々子様からどんなお仕置きを受けるかわかりません。

多少の悪戯なら幽々子様もよくなさいますが、紫様は神出鬼没な上にやる事も一層悪質です。最近ではこっそり家中の時計を早めたりなんかもありました。毎日屋敷の世話を一人でこなす私は、その日とうとうクラクラきたものです。

それでも私は仕える立場ですから、なかなか人には不満を言えません。似た立場の友達もいますが、上司の性格も仕事の大変さもまちまち故、辛さを共有するにもあまり深くは難しいのです。

そういう意味では、紫様の従者の八雲 藍（やくも らん）さんが良い話し相手でした。私よりずっと頭も手際も良い方で、なにより紫様と幽々子様に近いので互いに不満も理解してくれるのです。時には相談に乗つて解決策を出したりもしてくれました。

……だから、先日深刻な顔をしていた時も、心配になつて声をかけたんです。大丈夫だと言われても、しつこいくらいに確認しました。だって何度も助けてもらつてるんですもの。もし一人で抱え込んでいる事があれば解決してあげたいと思つたんです。

私がいじつと見つめると藍さんはしばらく無言で目を泳がせ、やがて観念したように目を合わせて言いました。

『……妖夢は、紫様をどう思うっ?』

一瞬きよとん、となりました。藍さんは確かに仕事を押し付けられ、紫様の気まぐれに振り回され大変な目にあっていました。それでも普段は温厚で私よりとても芯のある方に見えていたので、紫様の人となりに疑問をはさむ……もつと言えばネガティブなイメージをほのめかすような言動はとても意外に思えたのです。

しかし普段は真面目ゆえ、崩れる時は一気に崩れる、そんな予感もしました。正直に言おうか、しかし身近にいる藍さんを差し置いて私が悪し様に言つて良いものか……。かける言葉を選重に選び、私はおそろおそろこう言いました。

『貴女と、思いは一緒です。藍さん』

少なくとも味方であろうと伝えると、藍さんはただ黙つて頷き、しみじみとした様子で目を伏せていました。私が見つめていると、藍さんは一言『分かった』と呟き……。

こう付け加えました。

『君の心情は紫様に報告させてもらうよ。実に残念だ』

……妖夢の話が途切れる。終わつた事に気づいてから、何名かが吹き出す。妖夢はその反応に目を白黒させた。

「劍士さん……ジョークで受け狙いかい？」

「無理しなくとも良かったんだぜ？」

「な、なんで笑うんです！ あの時ビックリしたんですよ！」

燐や妹紅の苦笑いに妖夢は手をわたわたさせて反発する。どうやら本当に怖いつもりだったらしい。まあ本人の状況を考えれば分からなくもないのだが……。

「……？ どういう意味？」

首を傾げるメデイスン。それを見て黙っていた赤蛮奇が答えた。

「結局どちらも不満だらけだったけど、妖夢は口に出しちやつたからヤベー、つて話さ」
「……ふーん……」

メデイスンは興味も無い様子で肩を鳴らした。意味を掴めないのでは怖いも何もない。妖夢はその様子を見てか口を尖らせてそっぽを向いた。というか、当事者が話す体験談として、怖いかはともかく他人に聞かせてウケを狙うような内容なのだろうか。私には過労やパワハラなど現実的な懸念がそぞろに頭に浮かんでくる。

「……妖夢、あんまり大変なら相談に乗るぞ？ 万が一シヤレで済まなくなつてからじゃ遅いだらう」

「そういう返事を聞きたいのではありませんっ」

純粹な心配のつもりだったがかえって怒らせてしまったらしい。妖夢は「クワツ」

と効果音が鳴りそうなほどの大口で叫んだかと思うと、自分のお茶を取って物凄い音を立てて飲み干した。空になったコップを畳に叩きつけ、眉間にあからさまなシワを刻む。

「あーもー、そんなに言うなら皆さんは面白い事が言えるんですよね？　じゃあ手本を見せてくださいよ。聞いてあげますから。言えないんですか？　言わなきや帰しませんよ。さあどうしました」

周りを見渡して大声で煽りだす妖夢。他の面々は「やけになったな」「酔っぱらいかよ」「面倒くさいなあ」と口々に不満の声を漏らす。妖夢は聞こえていないのか鼻息荒く膝を叩いている。ここは開催者の私が体を張るべきなんだろうか。そんな考えもよぎったが元来私に冗談の才はない。今いるメンバーでは妖夢が最後なので、どうにか幕引きの雰囲気を持っていかねばならない。

「なら、儂が手本を見せてやろうか」

思考を巡らせていると、マミゾウが不敵な笑みを浮かべていた。手にはいつの間に取り出したのか酒を入れるとつくりが握られている。

「……自信ありげですね」

妖夢がすねた口調で言う。マミゾウは呆れたように首を振った。

「お前さんよりは、な。大体基礎がなっちゃいない。怖い話なら物語として中途半端

じゃし、ジョークならもっとスマートにまとめにや」

講釈をつらつら述べてから、マミゾウが目を細めて身を乗り出す。そして不満顔の妖夢と向き合いながらも全く動じずに話し始めた。

くくく

「……ある日の紅魔館で、パーティーを開いた時の事じゃ。

客人の一人にレミリアが命じた。

『フランドールが退屈してるわ。あなた、遊んできてくれない?』

『そんな、死ぬかもしれないじゃないですか』

怯える客人に、レミリアは肩をすくめて笑う。

『心配は要らないよ。十回に一回は生き残れるさ』

『馬鹿な! ほとんど死ぬじゃありませんか』

『君で十人目だ。すでに九人は死んでいる』

くくく

今度はより多くの人数が吹き出した。マミゾウがふふんと笑うのに合わせ妖夢が悔しそうに口を結ぶ。

今度は妹紅が手を上げた。妖夢がしぶしぶ手で促す。

「……じゃ、妹紅さんどうぞ」

「たまたま思い付いたからな」

くくく

……永遠亭に一人、新入りの妖怪兔がいた。慣れない職場でカチコチの新入りに、てゐが声をかける。

『心配は要らないよ。上から下まで、ハラスメントとも、残業とも、薄給とも無縁なんだからさ』

と、そこに目を輝かせたウドンゲが割り込み、こう言った。

『そんな夢みたいないな職場があるの!? ぜひ教えてちょうだい!!』

くくく

今度は私まで笑ってしまった。ここまで来たら皆が乗り気だ。次々と口角を上げ今にも誰かに話したいという顔で名乗りを上げる。

くくく

「……あるお金持ちが、竹林の嘘つき兎を捕まえてくれれば多額の礼金を払うと言いつた。

応じたのは三人。

一番目の東風谷早苗は『奇跡の力で解決してみせます!』と意気揚々と竹林に入つて行つた。

数時間後、彼女は両腕一杯のタケノコを持ち帰つた。

二番目の霧雨魔理沙は魔法で竹林をあらかた焼き払つた。そして一面を見回し、『いねえなあ』と一言つぶやいて兎の焼き肉を持ち帰つた。

三番目の博麗霊夢がついに『竹林近くで兎を捕まえた』と発表した。

しかし見てみると、首根っこを掴まれているのはどう見てもボロボロの狼。それを群衆が問うと、狼が泣きそうな顔で叫んだ。

『私が兎です! 間違いありません、私が兎です!!』

くくく

「……博麗神社に氷精が『頭をよくしたい』と言って訪ねてきた。霊夢は奥から御札を取り出してきて、こう言った。

『これから十日間、毎日ここでお札を買いなさい。きつと賢くなれるわよ』

氷精は喜んで御札を買い続けた。しかし十日たつても、一向に効果がある気がしない。

『霊夢、この御札きかないよ!』

むくれる氷精に、霊夢は微笑んだ。

『ほら見なさい。一つ賢くなれたでしょう?』

くくく

「この際だから、先生もやってみないかい?」

「え、私か?」

「大丈夫じゃやて。今更一つくらいつまらなくとも文句は言わん」

促されるがまま、慌てて頭を捻る。急にやれと言われても不安だが、ここまできて私だけ傍観するのにもつまらない。

くくく

「……ある日、早苗と霊夢が妖怪の山のロープウェイについて話していた。

『つたく、新しく作ってもあまり使わないんじゃないの?』

『少しくらい、使わないモノがあっても良いと思いますよ』

『あん?』

怪訝な顔をする霊夢に、早苗は笑って言った。

『博麗神社にもお賽銭箱があるじゃないですか』

くくく

今までの雰囲気のお陰か、なんとか楽しそうに笑ってくれた。あまり馴染みのない感覚だが、冗談がウケるといのはわりかし気分が良い。

さて、あとはお開きまでにジョークを披露したい奴は……。

「あつ」

小さく声が出た。浮かれていたせいで気づかなかつたが、メデイスンが壁に寄りかかって眠ってしまったている。

皆が笑っている間も退屈だったのだろうか。この子は少しずつ他人と親交を深めつつあるというのに、教師ともあろう人間が芽を摘んでしまつては一大事。とにかく起こそうと駆け寄り、軽く頬を叩く。

「んう……」

微かに不機嫌そうに唸り、メデイスンが薄目を開ける。居眠りする生徒を起こす時は苛立ちや呆れが強かつたが、今この場ではまどろみながらも睨んでくる瞳が妙に可愛らしく見え、一層申し訳なくなつた。授業ならともかく、楽しもうと思つて来てくれたものがつまらないまま終わるのはメデイスンも不本意だろう。

「あ……私寝てた……？」

「ああ、ごめんな、退屈させちゃつて」

目をパチパチしながら呟くメデイスン。怒つてきたら謝るつもりだった。もし寝ての方がマシだと言われたならば、責任は場をつくる全員……もとい自然と司会つぽい立場に収まっていた自分にあると思つたからだ。

ところが、意外なことにメデイスンはニツコリと笑い、眠気の残る声で言った。

「ううん、ちゃんと面白いところあったよ」

「そ、そうか？ それは良かった」

嬉しさと戸惑いが同時にきて、つい馴染みの子にするように頭を撫でていた。毒の能力のせいか手がピリピリ痺れるが、気にはならない。

「ちなみに一番好きなのってどんなのだった？」

「全部終わった時が、一番良かったよ」

四周目・魂魄妖夢END―『嘘』

「綺麗に落ちがついたものじゃな」

「やっぱジョークなんてのは予告されない方が、真価を發揮するもんだよ」

皆がめいめい、雑談しながら帰り支度を始める。メデイスンに先ほど「終わってせいせいたよ（意識）」とやけにあっけらかんとして言われたせいとか、一発で解散の雰囲気が出来てしまった。

妹紅は「あれもジョークだろ」と言って慰めてくれたが、私には相変わらず冗談が分からないようだ。妖夢とちらと目が合って、自然と互いに苦笑いしたのは偶然だろうか。

「じゃ、先生。機会があればまたね」

「儂は忙しいから覚えておいてくれよ」

「……邪魔したな」

三者三様に挨拶を残し去っていく。さて私も片付けて寝る準備をしよう、と腰を上げた時だった。

「……あの、慧音さん」

上から遠慮深そうな声がした。見上げると妖夢が肩をすぼめて私を見下ろしている。「?」 どうした?」

「夜分になってすいません。もう少しここにいてもいいでしょうか?」

……はて、構わないが、私に特別な用だろうか。冥界筋から私へそういうのも珍しい気がするが……。

「あー分かった! アンタ一人で帰るのが怖いんでしょ!?!」

「なんならついてくぜ? 同伴なら竹林の案内で慣れっこだ」

重ねられた座蒲団に座るメディスンと、片付けていた妹紅がからかう。しかし妖夢はその声に「違いますっ」とやんわり怒って訂正すると、私に向き直ってこう言った。

「実はお迎えを頼んでいるんですが、少し遅れているみたいなんです」

「ああ、なるほど」

冥界まで行くとなると危険ではないとしても骨なのだろう。もし次回があるとすれば会場についても見直しをせねばなるまい。

「分かったよ。そんなかしこまらなくとも、一人くらいどうって事ないさ」

私がそう言うのと妖夢はホッと表情を緩ませ、座蒲団を一枚拝借しようとする。が、メディスンがそれを掴み、笑いながら引つ張りあいを始めた。呆れた妹紅がメディスンの

頭をはたくとメデイスはあつきり手を離し、妖夢が反動で尻餅をつく。

「あだっ」

「じゃ、私らは帰るぜ。本番頑張れよ」

「ちえー」

妹紅が無造作をふすまを開け、メデイスが口を尖らせて後について行く。足音が遠くなり、玄関の戸が開いてやがて沿道で話す声がここまで聞こえてきた。

「お前の家って遠いのか？」

「まあね。……退屈だから何か話しましょうか？ 怖い話とか」

「それは皆に話してやれよ。なんで今さら」

「一話ずつじゃ足んないってのよ。聞きたくないの？」

「はいはい、たくさん聞きますよ」

少しは打ち解けただろうか。里の外へと小さくなる声を聞きながら、しばし私と妖夢の表情は綻んでいた。やがて声も聞こえなくなり、残るは晴れて二人だけになる。

「ありがとうございます。お呼ばれ頂いた上にワガママを聞いてもらっちゃって」

「元は私の要望だ。気にするな。……それより、堅くならなくていいんだぞ？」

皆が帰り、私しかいなくなつた今になつても妖夢はキツチリと正座していた。背筋が伸びて足も浮かせていないその様は寺子屋の生徒たちに見せてやりたいくらいだった。

「いえ、これはクセみたいなものなので」

そう言つて妖夢はこれまた堅さの残る笑顔を見せた。私もよくお堅いと言われてしまふが、こうされてみると却つて気まずい気がする。

「だったら、別の部屋に行かないか？ テーブルとかあつた方がいいだろう」

「……実は、足がしびれちゃつて」

「……そうか」

妖夢の笑顔がちよつぱり恥ずかしそうなそれに変つたのを見て、私も観念して腰を下ろす。これ以上あれこれ世話を焼くのも無粋というものだろう。

しかし困つた。互いに座つて動く者が居なくなつてからというもの、妖夢は時おり身じろぎする他は何もせず、一言も喋らない。元来無駄口は聞かない夕チコチと無情に時を刻む。とてそうだ。だから会話が弾む訳もなく、時計の音だけがコチコチと無情に時を刻む。

二人きりで無言。それが長く続くのは流石に辛いものがある。とはいえ何を話せば良いのかと言うと、石頭と名高い私には咄嗟に浮かばないものだ。怖い話という本題は終わつてしまったし、妖夢とは仲が悪くこそ無いが親しい訳でも無いのだ。

「なあ、妖夢……」

「何ですか？」

「紫のイタズラの話……本当に平気か？」

話題が思いつかず結局口に出したのは、未だ心の中で気になっていた妖夢の愚痴だった。皆は大して気に留めていなかったが、日々積み重なる鬱憤や表立って言及しなかった部分というものがあるかもしれない。そんな恐れを抱いての質問に、妖夢は目を丸くして口に手を当てた。驚いた様子だ。

「あ……まさか、最初に言ったあれですか？」

「ああ、余計な心配かもしれないが……。こんな機会少ないからな」

「うーん……」

私の返答に、妖夢はうつむいて言いにくそうに口ごもる。急がず、黙って答えを待つ。妖夢には一緒にするなと言われそうだが、彼女はなんとなく一人で抱え込みそうな、近しい気性を感じるのだ。互いに人間の血が残っている故の体力面での懸念もある。しばらくして、妖夢が顔を上げ、おそるおそる口を開く。

「実はあの話……続きがあるんです」

やはりか、と軽く身を乗り出す。皆に話した時は一種の冗談のようなまとめ方をされたが、一対一ならもっと深く教えてくれるかもしれない。真剣に聞くぞ、と態度で示すと妖夢は一つ頷き、ぽつり、と小さな声で言った。

「あれ、嘘なんですよ」

「へ？」

自分の中で張り詰めていた緊張の糸が切れ、ひと声飛び出したきり固まってしまふ。妖夢はぼつが悪そうに愛想笑いし、私が首を傾げるのに合わせて笑顔を傾ける。

「え、嘘？」

「はいそうです」

「どこからどこまでが？」

「最後ですよ、藍さんから告げ口されそうになる部分です」

ああ、あのまるで独裁下を思わせるような薄気味悪いオチか。という事は、紫を悪く思っていたからって罰を受けたとか、そういう訳ではないのだろうか？

「もしあんな事言われたら怖いなと思って、脚色したんですよ。笑われましたが……」

「ああ、よく分かるよ。慣れない冗談で引くに引けなくなつたな」

「まあ、忙しいのは本当なんですけどね。愚痴ぐらいなら散々言い合ってますよ」

妖夢の口調に私への呆れまで混じりだして、とりあえずは安堵する。私が思うほど深刻な事態ではなかったという事だ。

「しかし、あのスキマ妖怪はどんな事をしてくるんだ？ 愚痴だけで済む程度なのか？」

「ええ、大概がしよーもないイタズラです。よくやるのだと……そうですね」

心なしかウキウキした様子で、妖夢は頭上に視線を巡らせる。「よくやる」のが何種類もあるのか。

「靴の左右を逆にするのが今の所一番多いです」

「そいつ、急いでる時に困るだろ」

「全くですよ。ヒモを結ぶ靴じゃなくて良かったです」

むくれる妖夢を見て、左右の靴ヒモを結ばれたのに気づかずコケる様子が容易に想像できた。でも黙っておこう。

「雑巾がけの最中に足を掴まれたりもしました。派手に顔ぶつけましたよ」

「危ないなあ、蹴飛ばしてやりや良かったんだ」

「そうしようと思ったんですが、スキマを弄られましてね。自分の足がぶつかりました」
頬を撫でながらたははと笑う妖夢。代わりに一度くらいひっぱたいてやろうか。

「あと一番びつくりしたのは、やっぱりお風呂場ですね」

「まだあるのか、何されたんだ」

「頭を洗ってたら、後ろから『綺麗な髪ね……』と急にボソツと言われて、うわっ！　つて鏡を見たら、背後に金髪の女が……」

「最初に紫の名前聞いてたら、全然怖くないな」

「本当。私でさえ『またか』って思いましたもん」

興奮して頬をほんのり染めながら、妖夢は大袈裟にそっぽを向いた。恐怖も何もなかった。ただの悪戯者扱いされるまでになった紫に、私は幻滅に近い感情を覚えた。やってる事

は子供みたいで、普段大妖怪だ賢者だと言われている姿とはあまりにかけ離れている。

一体そんなのが楽しいか……と聞けば、まあ標的が妖夢なら楽しいのかもしれないが、あんまり調子に乗りすぎれば被害者に気の毒だ。

こうして見ると同情の念を覚える程にも、また少しちよつかいをかけてみたくなる程にも親しみを持ってた事を実感する。思えば妖夢がここまで喋るのを私は初めて見た。

「もう慣れっこになっちゃって……」

妖夢が尚も喋り続けようとした矢先、彼女の背後で突如、虚空にがぼりと黒い穴が開いた。そして怪しげな笑みを浮かべた女性が顔を出す。

「こんばんは〜」

「ひゃっ!?!」

妖夢が悲鳴をあげて飛び退いた。対して初めから見えていた私は相変わらずだ、と思わず眩いた。

「あれ、リアクション薄いわね」

そこにいたのは八雲 紫。さつきまで話していた妖夢の主の、友人だ。なるほど、空間を自在につなぐ紫なら、冥界へのお迎えだろうが一瞬という訳だ。

「ああ、さつきまでお前の話をしていたからな」

「あら、ゆかりんそんなに美人?」

「そんな話はしとらん」

扇子を優雅に振りながらわざとらしく目元を細める。長い金髪が微かに揺れた。確かにこの白々しさやその他色んな事を除けば美人なのだが……言い出せばキリがないので割愛する。

「紫様、お迎えいただきありがとうございます」

「大した事ないわ。大事な友人の従者だもの」

すつくと立ちあがり深々とお辞儀をする妖夢。意外と裏表があるのか、否、これは切り換えの早さというものだろう。さぞかし目上のものに対しては生真面目な正直者であろうとしているのだろう。先ほど素の状態を目の当たりにしていた者としては、少々気の毒にも映る。

「お前なあ、だったら仕事中にイタズラするの止してやれよ」

「え？」

紫が何の話、とでも言いたげに瞬きをする。こいつはとぼけているのか、それとも普段は頭から抜けているのか……。

妖夢が横から「もういいんですよ」とやんわり静止してくるが、私は構わずさつき聞いた内容をそのまま話した。

「靴の左右を入れ換えだとか、雑巾がけの邪魔をしたとか……」

「ああ、その事ね」

紫は今思い出したかのように大袈裟に手を打った。目の前でそうされると流石に怒り出さないか、そう思つて隣を見たが、妖夢は苦笑いするばかりだった。いつもの事らしい。

「ごめんねえ妖夢。貴女があたふたしてると面白くて……」

「あ、あはは。気にしないでください」

酷い理由だ。妖夢も一瞬笑顔がひきつったが、しかしこの場ではどうしようも二人でやりとりが完結してしまう。そう思っていると、妖夢がフツとうつむき、遠慮がちに言った。

「でも……お風呂場に入つて来るのは、流石に恥ずかしいです……」

「そ、そうだぞ。いくら見知つた仲でも、思春期の女の子に」

「……私、一応歳上ですよ……?」

便乗して窘めようとしたら、逆に妖夢からジト目を向けられた。ええい、私の言動は余計なお世話か。いやそうなのかもしれないが、とにかくこの紫の、人をバカにしたような態度が気に入らない。一度くらい真摯に、ごめんなさいと頭を下げて……。

……などと思つていたら、ニヤニヤしていた紫の顔が、すうつと眉を寄せ、怪訝なものに変わる。何か変なことを言つたかと、私と妖夢はキョトンとして顔を見合わせた。

対して紫は不振そうに視線を巡らせた後、妖夢を睨むようにして言った。

「ねえ妖夢……お風呂つて何？」

「は？ いえ、一週間くらい前に脅かしてきたでしょう。忘れたんですか？」

紫の声色が急に真剣になり、妖夢は焦りながらも念を押して説明する。しかし紫の表情はついで変わらず、冷静に首を振って言った。

「私……覚えがないわ」

「ええっ!? だってあの顔は確かに紫様……」

「本当よ。他のイタズラなら覚えてるけど、お風呂は本当に知らない」

妖夢は驚き、淡々と答える紫の前で、次第に怯えだした。私も話を聞くだけで紫が犯人だと思っていたが、その前提が覆るとなると、一体……。

「ああ、でも……お湯のせいで確かに見えにくかった……。けど、屋敷に金髪なんて、他に誰が……」

自問自答し、混乱する妖夢。フィクションの怪談とは違う、身近に、現実に向つてい
る恐怖。気づけば目に見える程に足はすくみ、頭を抱える。紫は、そんな妖夢にそつと
近づき、背中を撫でて……。

一言、ここう言った。

「いやあ、やっぱり妖夢は面白いわ」

「おいつ!!」

「う、嘘だったんですか!? 紫様の意地悪っ!!」

夜も更けた里の寺子屋に、二人ぶんの大声が響く。すでに時刻は丑三つ時へと差し掛かっていったが、一人きりで眠ることに微塵も恐怖を感じそうにない。ただ、ゲラゲラ笑われながら引っ張られる妖夢にだけは、同情の念を禁じ得なかった。

五周目

五周目・一話目―魂魄妖夢

「え、私が最初なんですか？ うーん、怖い話といえば……。ああそうか、まずは自己紹介からですね。

魂魄 妖夢と申します。冥界にある白玉楼で庭師、及び管理人である幽々子様のお世話をしております。

毎日亡霊を見ているので、さほど怖い事など無いのですが……。いえ、嘘です。かなりブルつています。今でも怖いです。なので帰らせて……。え、駄目ですか？ そんなぁ……。

あ、でしたら……。何年か前にあつた奇妙な体験をお聞かせしましょう。大丈夫です。ホラーには違いありませんから。

何年か前に、私が里の乾物屋に買い物へ言ったのが始まりでした。いつものように商

店街へ赴き、店頭を覗くと、何やら熱心に商品を覗き込む人間の影がありました。

それが男の方だったのですが、見るからに買物に慣れていない様子で、頼りなく視線をうろろさせて、棚の隅から隅まで舐めるように眺めておりました。中年かそれ以上であつたようで、見回す度に禿げた頭のとっぺんがキョロキョロと、哀れなほどに光を反射させました。体は大きく、でつぷりと太り、おでんに入れたまま膨らんでブヨブヨになつた、かまくら型のはんぺんみたいならしないお腹をしておりました。

私は、それを見て嫌悪の情とまでは行かなくとも、『邪魔だなあ』と思いながら男の脇に入り、棚を見回しました。

すると、珍しくカツオ節の塊が置いてありました。海のない幻想郷では魚は貴重で、それも削ればたくさん使える塊があるとなれば買わない手はない。

そう思つて、私は男と棚の隙間に手を差し入れ、カツオ節をかつさりました。

すると突然、男がぐるんと振り向いて私を見つめました。知らない顔です。なのに男は何やら目を凝らしてジロジロと私を眺めています。

『あの……何か……?』

絞り出した声は震えています。息があがり、足が木彫り細工のように固まりました。店の人は間が悪く奥に引つ込んでいます。何かあつたら叫ぼう。そう思つて構えていた矢先、男はゆつくりと口を開きました。

『あの……それって、どんなものに使うんですか?』

『え?』

意外と丁寧な物言いに、一瞬戸惑いました。男の視線が私の手の中のカツオ節に向いているのに、少し遅れて気づきました。

『こ、これは……まずカンナで薄く削りまして、おひたしや冷ややつこにまぶしたりとか、煮物や味噌汁に使ったりなんかしますね』

早口にも、どうにか質問には答えていました。男は宙を向き、もつともらしく頷いていきます。

私は不審さが拭えず、一目散に逃げ出しました。振り返ると男は追ってくる訳でもなく、乾物屋の前で相変わらずぼんやりと立っていました。

その日から、彼をよく商店街で見かけるようになりました。八百屋でも、肉屋でも、金物屋などでも、どんな面白い物をしているのかいつまでも商品を眺めるばかりで、次々と商品を持っていく奥様たちに取り残されていました。

私も用事は手早く済ませたいのですが、あいにく私の主人は健康家といえますか、よく食べる方ですので買う品数も多く、必然的に遅くなります。

そんな時には、決まって例の男が声をかけてくるのです。別に変なことではありませんが、鹿肉の臭みの消し方だとか、山菜のアクの取り方だとか、料理ごとにどんな包丁が

合つてるかだとか、他愛もない事です。私も無視などはしませんでした。

しかし、鈍重な出で立ちと厚い頬肉に隠れがちの、妙にキヨロキヨロした目つき、薄くなった頭などが妙に印象に残っていました。いえ、私が人見知りなだけかもしれないですね。しかし卑屈な笑みで馴れ馴れしく話しかけられると、嫌でも警戒してしまうのです。互いに名前も知らないのですから。

そんな日々が続くうち、奇妙な事が起こり出しました。最初に出てきたカツオ節ですが、私は塊を早く使つてしまおうと連日カンナで削つて料理に使っていました。するとそれを呼応するかのようになり、男が痩せ細りはじめたのです。

カツオ節が無くなる程でもない、せいぜい一、二ヶ月の間です。その間に、男の腹が空気の抜けた風船のようになり、頬骨の形もおぼろげに分かる程になりました。

病にでもかかったかと疑いましたが、男は変わらず買物で、頼りない笑顔で料理の事を聞いてきます。偶然なのかもしれませんが、しかし私には、カツオ節を削る度に男の体が削り取られていくような、奇妙な想像が浮かんだのです。

あの時、手に取つた、男が舐めるように見つめていたカツオ節に、もしかして何かあったのか。男が妙に気にしていたように見えたのは、私の知らない理由があつたのではないか。

薄れかけていた気味悪さが、新たな恐れを以てまざまざと頭に蘇つてきました。カツ

才を削るシユリシユリという音が恐ろしく思えました。

それから何日もしないうちに、更に怖い事が起こりました。每晚私の枕元に、知らない女性が立つようになったのです。白い着物を着て青白い肌。明らかに幽霊です。女性には長い黒髪を垂らすようにうつむき、寝ている私をじっと見つめています。

顔を背けようにも、体はピクリとも動かせません。手足の先まで床に縛りつけられたように硬直し、まぶたまで彫像のごとく意志がまるで通じないのです。

いやだ、いやだ、見ないでください。口を利こうにも頬の筋肉がひきつるばかりで、女性には遠慮なく濁った死人の視線を注ぎ込んできます。その眉間には心なしかシワが寄っていました。

そして、ボソボソと、消え入りそうな声で言うのです。

『違う……違う……』

何が違うと言うんだ、私が何をした。心の中で何度問いかけても幽霊は答えてくれません。結局、私が力尽きてしまうまで幽霊は眩きながら私を睨むだけで、毎朝汗だくで疲れはてた体を起こす日々が続きました。

そんな中でも、私は重たい体に鞭打って買い物へ行っていました。従者は私だけなんです。大病でもなしに休む訳にはいきません。

ある日、フウフウ言いながら買い物を済ませ、さあ帰ろうと思った時。

一人の小さな女の子が、体に似合わない買物袋を一杯にして、よろよろと歩いているのが目に入りました。右へ左へ足がよろめき前も見えない様子で、いつ転んでもおかしくありません。

私も疲れてはいましたが、やはり放っておけずに声をかけました。

女の子はキョトンとして振り向きませんでした。その拍子に買物袋に引つ張られたので慌てて袋を代わりに持ち、『お父さんか、お母さんは？』と聞こうとしました。

その時です。

『ああ、すいませんすいません！』

聞き覚えのある声がありました。あの男です。しかし、顔を上げて私は目を疑いました。面相は確かに違いないのですが、体はあの太っていた頃の面影が少しもなく、痩せぎすといってもいいくらいに細く骨ばっていました。両の手に持った買物袋がへし折れそうな体を更に引き立てています。見るのが久々だったら確実に別人と間違えていたでしょう。

あまりの変わりように私が呆然としているのに男は気付かず、女の子と話し始めました。

『勝手に居なくなっちゃ駄目だろう。もう……』

『おねーちゃんがもってくれたー』

娘さんは息を切らす男に構わず、私を指さしました。続けて苦笑いする男と目が合います。こうなると私も黙って帰る訳にはいかず、代わりに袋を持ってなし崩しの男の家までついていきました。

その時の心情を正直に言いますと、恐怖と、興味が半々でした。

家に行けば、男の急変の理由も、毎晩の怪現象の原因も分かるかもしれない。無言で後をつけながら、私は悶々としていました。思えば男と会ってから全てが始まったのです。

しかし、同時に間近で見ても普通の人間にしか見えない男に、果たして関係はあるのだろうかと疑問にも思っていました。眼前では男と娘さんが並んで楽しそうにお喋りして歩いていきます。

やがて住宅地の一角で立ち止まり、二人は私を招き入れました。その敷居を跨ぎ、家中を見た瞬間、私はあるものに目が留まり、ハッと立ちすくみました。

玄関からまっすぐ向かいに、仏壇が置いてあったのですが、そこにあつた遺影らしき写真。それには、三、四十代ほどの……紛れもない、毎晩私の枕元に立っていたあの女の顔が写っていたのです。

やはりこの家には何かあつたのか。私はどこで恨みを買つたのか。しかめっ面して頭でぐるぐる考えたまま、その遺影から目を離せずにいると、男が首を傾げていました。

『どうかしました?』

『あ、いえその』

慌てて取り繕おうとしましたが、突っ立ったまままで遺影を見つめる視線にはすぐに気づいたのでしょう。しみじみと男は目を落とし、こう語りました。

『妻が、少し前に亡くなつてね……』

『あ……』

毎晩会っていました、なんて言えません。彼の奥さんだったとは知らずに、私は黙っているしか出来ませんでした。

すると、続いて言います。

『娘の世話も慣れなくてなあ、だらしなかつた体が、こんなになつちまつた』

『え?』

呟いて腹をさする男に、私は思わず聞き返しました。男の急激な痩せかた。カツオがどうこうと怯えていたその疑問に、至極単純な答えが差し出された気がしたのです。ポカンとしている私に男は向き直り、柔和な笑みを浮かべ言いました。

『料理の事も手探りで、不躰に色々聞いて済まなかつた。驚いたろう?』

『あ、ああ』

生返事しか出来ませんでした。私の頭の中では、今までの疑問がパズルのようにカ

チャカチャと、次々に解けていたのです。

この人は、奥さんに先立たれてからとても苦勞なさったんだ。それこそ別人のように瘦せてしまうまで。娘さんの健康を願いつつも知らない事だらけで、たまたま、切羽詰まって私を頼ったんだ。

カツオ節なんて、何も関係なかった。彼は変人でも、不審者でもなかった。だのに勝手に怯えられたら、そりゃ奥さんも違うと言つて怒りたくもなるだろう。

そうだ。そうだったんだ。

私は一人で何度も頷き、恥ずかしさのあまり口を結んでうつ向きしていました。親子が仲睦まじくしているのを見てなお一層恥じ入り、それでは、と形ばかりの挨拶をして、自分のぶんの品物も忘れて私は冥界へ飛んで帰りました。

食事の席で、幽々子様がこの話をしてみました。幽々子様は笑つた後に、もうちよつと他人を公平に見てあげなさい、と叱られました。

それからは枕元に誰も出なくなり、娘さんも一人でおつかいをするくらいに大きくなりました。今でも付き合いは続いています。『お父さんの料理が美味しくないから、自分で覚えたい』なんて言つてたので、近々簡単なレシピでも教えてあげようかと思つている、今日このごろです」

五周目・二話目—赤蛮奇

「んーと、私が二番？ 赤蛮奇だ。よろしく。

ふむ、どこから話し始めようかな。……先生、霧雨 魔理沙（きりさめ まりさ）つて子を知っているかい？ キノコを研究する人間の魔法使いだよ。

知ってる？ そりやそうか。たまに里にも来るんだもんね。

私、実はこの前会ったんだよ。里の酒場でバツタリね。その時アイツ、酷く酔っててさ。久々に会ったからか私のプライベートを根掘り葉掘り、聞くの聞かないの。やれあの時の魚と狼はどうしたただの、天邪鬼とは会っているかだの、そりやもう一方的にまくし立てられたもんさ。

あんまりしつこいから、『そろそろお忙しい魔法の研究に戻ったらどうだい』と嫌みつたらしく言つてやると、魔理沙はへへつと笑つて

『今日やつと目処が立ったんだよ。この酒はその記念さ』

そう言つて、また猪口の酒をぐつと飲み干す。私はふと嫌な予感がした。何かを成し遂げて達成感に溢れている時つてのは、決まってどれだけ頑張ったかを話したくなるもんだ。酔つたこの分だとそのうち何日寝ずに過ごしただとか、何種類のキノコを試した

だとか、そんな聞いてもない苦勞話をされるかもしれない。

そんな事を考えながらそわそわしていたんだが、ちらと横目で覗くと魔理沙は素知らぬ顔でツマミを食べていた。

私がおの様子を眺めていると、彼女は振り向いてキョトンとした顔になる。しばしそんな時間が続いて、『なんだ、魔法の話をするんじゃないのかい』と痺れを切らして聞くと、向こうは急に真面目な顔になった。

『いや、その……カッコ悪いだろ。自分からそんな話すなんてよ』

『……なんだ、私から”教えてよ”って言って欲しいのか?』

『違えよ、バカ。そうじゃなくて……』

そう言つて魔理沙はガリガリ頭を搔いて、腕組みしながらしかめっ面でこう言つた。

『私はな、努力の成果は黙つていても滲み出るものだと思うし、大体、人に見せるために研究してんじゃない』

その言い様が妙に力んでいて、私はつい仰け反つてしまった。言つておいてすぐ後に恥ずかしそうにする魔理沙に、失礼したねつて頭を下げたら、彼女は慌てて手を振つた。そして、言つたんだ。

『ああいや、気にしないでくれ。個人的に、嫌な思い出があつてな……』

『思ひ出?』

『そうなんだよ、一年前くらいかなあ……』

そう呟いて、魔理沙は酒を呷りつつある体験談を話してくれたんだ。

魔法の森にある魔理沙の家に、ある日手紙が届いた。それも何故か新聞記者の文が直接門を叩いて渡してきたんだ。

わざわざ何だと思つて宛名を見ると、送り主は知らない名前だった。文から聞くと相手は一人の里人の少女で、新聞を取るのと引き換えに手紙を届けるよう頼まれたのだという。

会ったこともない里人から、一体どんな手紙なんだ？ と尋ねると、文は何故かニマニマして、詳細は中身をご覧下さいと言う。どういう意味だ、と更に言い募ろうとしたら、彼女はまた届けに来ると言つてさっさと去つて行つてしまった。

怪訝に思いながら封を切ると、他愛もない内容だった。

『里で決闘をなさつていた折、魔理沙さんのお使いになつていた光輝く魔法の数々に見とれてしまいました。……これからも綺麗な魔法をどうぞ見せてください。里の片隅でお慕いしております』

要するに、ファンレターみたいなものさ。

魔理沙はさほど興味もなく、すぐ忘れていつもの実験を始めた。手紙はそれから何度か送られて来たけど、返事は出さなかった。

そんな状態が何カ月か続いて、文からも『たまにはお返事してはどうか』なんて言われるようになった。魔理沙は面倒臭かったが、まあ手紙だけなら、とため息ついて文面に目を通す。

その日は、『魔法使いに必要な事は、ずばり何ですか?』という質問が書かれていた。どうやら賛辞の言葉だけでなく、具体的に聞きたい事まで出てきたらしい。

魔理沙はこう返事をしたためた。

く『何をするにも、じつと我慢して勉強する癖をつけるといい。大成の為にはそれが
まず不可欠。』

なお、自分は日夜研究でしばらく里にも行けそうもない。お互い頑張ろうく

後半には、嘘が混じっていた。出かける暇も無いほど忙しい訳でもないのだが、魔理沙はとりあえず放っておいて欲しかったので、遠回しに多忙だと書いたんだ。

ともあれ、これで何かしら独学に精を出してくれたらしめたもの。自分は研究に集中できるし向こうは学を積んで賢くなる。一石二鳥だ。

文に手紙を託して、魔理沙は得意顔だった。

ところが、その目論見は外れた。ほどなくして次の手紙が送られてきたんだ。

『なんだ？ 急な用でもあったのか？』

しばらくやりとりしなくて済むと思っていた魔理沙はイライラしながら文につつかかったが、文は気まずそうに首を振るだけ。

『いえ……ただいつも通り、渡してくれと』

文がおおずおおずと差し出した手紙を引ったくり、封を乱暴に破る。

中身は、こんな内容だった。

『魔理沙さんに言われたように、私は勉強を始めました。英吉利（いぎりす）の伝承を調べております。存外面白く、布団に潜って朝まで鈴奈庵で借りた本を読みふけてしまいました。流石に無理をしたので、さしあたって三時間ほど、今までより睡眠を削ろうかと思えます』

魔理沙はその手紙を読んで、なんとも白けた気持ちになったという。英吉利の勉強？面白かった？ そいつあ良かったね。でも別にそんな事を教えて欲しかった訳でもない。里のいちファンが何に打ち込んで何時間、睡眠時間を削ろうが、魔理沙は一向に興味がなかった。もつといえ、そもそも返事自体いらなかったんだ。

大体、私にそれを書いて何と言って欲しいのだ。頑張れという言葉は直前の手紙に書いたじゃないか。

魔理沙は少女の綴った私事が煩わしくて、妙に鼻について、その手紙を丸めて捨ててしまった。

ついでに『自分は実験の為なら二、三日寝ない事だつてある』と返事を書こうとしたけど、やめた。どうも無駄な時間を取らされたような気がして、ムシヤクシヤした。前々からやりとりが無かったら、あるいは違う感情を抱いたかもしれないけど、それからまたしばらく魔理沙は返事を出すのをやめちゃった。

ただ、少女の手紙は一方的に、二重の意味で一方的に送られてくる。
いわく、

く『英吉利の本を読み終え、伊太利亜（いたりあ）の本にも手を出しました。魔法と
いうのはとても、奥が深そうです。相変わらず睡眠時間は、短いままです。眠い目を擦
りつつ、お手紙も書いております』く

く『いつまでも座つて本を読んでいると、体のあちこちが痛みますね。母などは家事
を手伝えと怒ります。大変さを分かってくれないのです』く

く『魔法を実践するにも、色々な道具が必要なようですね。私は情熱ばかりが先を行
き、あの大きな稗田さんの屋敷をぶつ飛ばすような派手な魔法を空想しては、毎日やき
もきしております』く

返事を出す気はなかったのに、何度も続くとふと『なんて応えたらいいのだろう』と

考えた。手紙の少女は身辺や内心の小さな事を、ちよくちよく記して魔理沙に寄越した。加えてその中身には自分の日頃の頑張りを、情熱の高さを見てくれという気持ちがほの見えて、魔理沙はますます味気なくなつた。

魔理沙は元々、自分の努力をひけらかすのは嫌いだつた。出来ないなら出来ないで、自分でなんとかするものだと思つている。

道具にしたつて、あれは親戚から譲り受けたガラクタを修理したもので、上等な代物じゃない。魔力の源などは森に生えているキノコ、自然物だけ。あくまで研究の主体は自分なんだ。それを深くやらないうちから口だけアレコレと。

ここにきて手紙を読み続けた魔理沙も嫌気がさしたのか、ちよつとしたお叱りの手紙を書いた。

『貴女には本当にやりたい事があるのか？ 無いなら無いで悪い訳じゃない』

『わざわざ何かに打ち込んでいる風を書いて私に送る辺り、失礼ながら他人に誉められたという気持ちが見える』

『貴女の性格に意見する気はないが、賞賛や同情を期待して、背伸びした目標や恰好つけた言い繕いするのは全く身にならないことだろう』

『なお、これは私自身にも多分に覚えがある事なので、そこまで深刻に考えていた
だかなくて結構』

こんな内容をちよいとキツク書いて、最後に『直接会ってお話しできればまた印象も違うのですが、ここで言うべき事ではありませんね』と結んだ。魔理沙も見栄っ張りなだけの人間とは思わず、顔を合わせてみればなんてことない普通の女の子だろうと信じていたんだ。

その手紙を文に持つていってもらい、向こうはそれが堪えたのか、ぱったり手紙は途絶えてしまった。魔理沙は正直な気持ち传达了から幾らか寂しい気もしたが、結局は向こうの自由だと思いい直して、元の日々に戻っていった。別に彼女が自分から興味を失い魔法から離れようが、一つも不満は無かったんだ。他人の人生なんだから。

そうして、魔理沙も次第に手紙の少女の事を忘れかけていたある日。

ポストに一枚、クシャクシャの紙が入っていた。明らかに無理矢理突っ込んだようで、角がポストから不恰好にはみ出し、しかも何故か土まみれで枯れ枝などが一緒に入っている。

『なんだこりや。イタズラか?』

いぶかしみながら取り出して見ると、それには見覚えのある宛名。奇妙に思つて封を切り広げると、乱雑な字でこう書いてあった。

く『最近になって、魔法の才能がようやくと開花しました。環境を変えると良いことがありますね』く

魔理沙は反射的に、手の中の手紙を放り投げた。才能だの環境だの、言い訳の決まり文句を心の中どころかぬけぬけと他人に話すだなんて。自分の手紙で思い直してくれたと思っただけに、魔理沙はうんざりした気持ちでいっぱいになった。

それこそ、手紙が土にまみれていた事も、その日に限って文からの手渡しではなかった事も気に留めなかったくらいに。

その日から同じような事が何度も続いた。汚れた手紙がひとりでに届き、中身はますます浮わついた夢物語のようなものにエスカレートしていく。

『平凡な日々が終わり、私の周りで見違えるような出来事が次々起きています。体まで作り変えられていく気分です』

『人間とはかくも小さな生きものだと思ひ知る今日この頃。出来ない出来ないと嘆く事は、もう無いでしょう』

『『こうなるのが、もっと早ければと悔やみます。貴女に無様なお手紙を差し上げる事もなかったでしょう。才能の使い道を知りませんでした』』

魔理沙は少女の豹変ぶりに閉口した。地道に頑張っています、というポーズをとる事すらやめて、自分に才能があるという妄想に逃げ込んで。華やかな、恐らく心の中に思っている描いていたであろう台詞を書き綴るのを想像して、うすら寒くなった。

ことに、『才能の使い道』というワードが癪に障った。自分はそんなものを見つけれだ

なんて意見したつもりはない。自らの意欲が大切だと伝えたつもりだった。まだ分からないのか。

腹が立ったが同時に不審にも思い、魔理沙は妖怪の山に出向いた。手紙を預かっているはずの文に聞けば、詳しいことが分かると思っただ。

山に着いて文の顔を見るなり、魔理沙はぼやくような口調で問い詰めた。

『おい、例の手紙くれてた女の子な、最近おかしいぞ。何か知らないか?』

文はそれを聞いて、出し抜けなせいか怪訝な顔をした。魔理沙はもどかしくなつて、更に言い募る。

『こないだだつて届けてくれただろ。お前顔くらい見ないのか? 手紙はなんか、アレな感じになつてやがるぜ』

そこまで言つて、文はふと思ひ当たつたように目を見開いたが、すぐに眉のシワを深くする。そして焦つたように首を何度も振つて言つた。

『そんなバカな! そんな筈はありません。だつてあの子は……』

魔理沙は、急に否定しだした文に戸惑つた。そして文が口ごもりながら、ささやくように言つた次の言葉で、仰天する事になる。

『恐らく、もう……死んでいるんですよ』

『はあ!?!』

信じられない事だった。手紙の宛名は全て、最近届いたのまで彼女の名前だったから。

『お、おい！ いい加減な事を言うな！』

『本当です！ あの子の家で言われたんですから！ 手紙だって、それ以来置いてつてません!!』

肩を揺さぶられながら、文は必死に説明した。『私は聞いてないぜ……』と呆然とする魔理沙に、彼女は弱々しく話す。

『……聞いた話ですが、魔法の森に行くとか言つてたらしくて、伝えづらかったんですよ。魔理沙さんのせいじゃないと思いますが』

それを聞いて、魔理沙は背筋がひゅつと寒くなった。いつか書いた『直接会つてお話しできれば』という一文が頭をよぎる。

それには気づかない様子で、文は懐から便箋を一枚取り出した。

『あの子が最後に書いたらしい手紙です。今渡しておきます』

便箋には確かにあの子の名前があった。文は気の毒そうな目つきで一瞥すると、飛び去っていつてしまった。

魔理沙は家へ帰る道中、その手紙を恐る恐る広げてみた。

く『魔理沙さんへ

貴女からのお叱りのお手紙、拝見致しました。

多くは申しません。ただ恥じ入っております。私はいつの間にか、夢を追う様を常に貴女にお見せしなければいけないかのような、そんな義務感にかられていたのです。

今にして思えば、貴女に憧れた瞬間だけは、そんな気持ちとは無縁であったように思います。自由に飛び回り、伸び伸びと研究して身につけた実力を振るう。光り輝く魔法ではなく、それらを発揮する貴女が眩しかった筈なのです。

何故こうなってしまったのでしょうか。いえ、自分でも薄々分かるのです。これこそ私事だと思い黙っていたのですが、私は昔からそういう所がありました。

何事も上手くいかず、それでいて馬鹿にされたくなくて理屈をこねくり回してしまうのです。

何か秀でた才能があれば、と未だに考えてしまいます。私にはこの歳になっても、独り地道に頑張つて悩むという所業が――

嗚呼、いけません。手紙ですとまた見苦しい御託を並べてしまいそうです。自分の口で話す事が出来れば、そう思います』く

手紙はそこで終わっていた。文いわく、少女の書いたものはこれが最後。ならば最近までポストに届いていたものは……。

ただのイタズラ、到底そうは思えなかった。違和感のある奇怪な文面。自分は慣れた

が、常人には耐えられないであろう森の瘴気。そして何より、少女の文面から漂う卑屈さ、諦め……。

ふと辺りを見回すと、人を食う事もあるルーミアという妖怪が自分をじつと眺めている。闇を操るといふアイツがもしかしたら、少女の行方がある意味知っているのかもしれない。魔理沙は首筋に嫌な汗をかきながら、いつの間にか自分の家の前に来ていた。

ポストにはまた、クシャクシャの手紙が入っている。震える手でそれを取り眺める。

「『魔理沙さん、突然ですが今夜、貴女のお家に伺おうかと思えます。随分と醜い姿になってしまい躊躇していたのですが、今なら素晴らしい魔法をお見せできると思うのです』」

醜い姿、その言葉を見て魔理沙は少女がもはや普通の人間ではないと直感した。態度の変わりようからして辻褄も合う。魔理沙は家に飛び込み鍵をかけ、じつと外に出ないようにした。

……一体何時間経つただろう。夜も更け、窓の外で虫が煩く鳴いていた頃、玄関の扉を叩く音で魔理沙は目を覚ました。

『魔理沙さん』

知らない、酷く低く濁った声だった。足音を忍ばせて戸口まで歩くと、ガタガタと扉を揺すつてくる。

『開けて下さいいよお、頑張つて会いに来たんですからあ』

間延びした声の中に、地鳴りのような息遣いが混じっている。人の声じゃない。魔理沙は足の震えを感じながら、必死に声を絞り出した。

『……お前か？ 手紙をくれたのは』

『そうですよ。机の前で言葉を飾つてばかりいた、あの私ですよ』

笑いながらの自虐。同時に『いた』という言葉に今は違うという含みがあった。

『……あの後何があつた？ 急に魔法をやりがつたりしてよ』

戸を隔てながら、魔理沙は汗ばむ手で魔法の武器を掴んだ。語られる経緯次第じゃ、躊躇してはいられない。それを知つてか知らずか、変わらぬ調子で向こうは答える。

『森に来て世界が変わつたんですよ。今なら魔法も出来ると思つたんです。だから開けて下さい。いい魔法使い仲間いきつとなれますよお』

出来ると思つた、その響きに、魔理沙はふと引つ掛かるものを感じた。恐ろしい事態が起こっている筈なのに、心の中で恐怖とは別の……鬱陶しさのような感情が頭をもたげてくる。

『……以前聞かなかつたか？ 本当にやりたい事があるのかつて』

その言葉には知らず知らずトゲが混じっていた。扉の向こうの何者かが一瞬黙り、おどけた口調で返す。

『やだなあ、出来るからやりたくなくなるんでしょう。魔理沙さんだってそうでしょう。才能があるのに謙遜しちゃって』

魔理沙はその言葉に侮辱を感じ、思わず大きな声をだした。未だに恐怖は残って少し裏返ったが、それも気にならない内から言葉が飛び出した。

『私に才能があるってか？ そりゃ随分と買いかぶりだぜ』

それを聞いて、向こうは不機嫌そうに返してくる。

『……いいなあ、私も一度は言ってみたいですよ』

『言えばいいさ、その気だったらな！ 今すぐどっか行って、しばらく一人で黙って苦しんでみる、私に構わずな!!』

氣づけばそんな台詞を、ヤケクソ気味に叫んでいた。何故だか分からないが、荒い息を吐きながら、相手の次の言葉を待つ。

しばらく無言の時間が続いていた。お互いどんな顔をしているかは分からない。魔理沙が少しずつ落ち着きを取り戻し始めた頃。

『ごあつ……う……』

くぐもったうめき声が、不意に沈黙を破った。魔理沙は反射的に扉の取っ手に手をかけ、何度も押してから鍵を解いていなかったのに氣づき、もたつきながらそれを外し、外に飛び出す。

そこには、凄惨な光景があった。

ルーミアが、人の体を引きちぎり、くちやくちやと食べている。手や口、服は血にべつとりとまみれ、鉄臭い臭いが鼻を突いた。

そして、食べられているのは少女であつただろう肉体。腕や首をもがれ、断面から白い骨が覗き生々しい赤黒い液体が止めどなく流れていく。

しかしそれより異様なのは、肉体から白いカビのようなものが、ボロボロになつた服の破れ目から全身に吹き出ていた事だつた。死んだ肉体に菌がはびこつたような様相。抉つたような痕を残して胴や脚が欠損しており、その周りは干し肉のように干からびて血も出ず、ずいぶん前から怪我をしていたのが窺えた。

そう、到底生きてはいられない程の怪我を。

魔理沙が何も言わずにいると、ルーミアがふつと顔をあげ、真つ赤になつた牙を見せた。

『そんな顔しないでよ。助けてあげたんだから』

そう言つて小さな骨をぺちやぺちやぶりポイと捨て、なに食わぬ顔で他の肉に手を伸ばす。魔理沙はそこで、カチカチ歯が鳴るのを堪えながら尋ねる。

『アイツ……どうなつたんだ?』

顔も知らない相手の死に方を聞いた。目を落とすと、とうに人のものではなくなつた

首が、じつと自分を見据えている。

ルーミアはふん、と鼻で笑うと、じつとしたまま体から何かを吹き出した。夜の闇の中でもくつきり浮かび上がる、墨のように黒い彼女の闇。その中では、三日月みたいな口で剥いた牙まで真つ白に見える。

『この子の心は美味しかったよ。いつとも自分から光ろうとしない、暗い暗い心』

ルーミアはそんな事を言うと、転がった残骸もそのままに、ふよふよと浮いて消えていった。

―

……その日から、魔理沙はルーミアと会うのを避けているらしい。といつても普段自分で自分を真つ黒く隠しているから、見つけづらいんだけどね。

でも、新月の夜……月の出ない日だけは例外だ。なんでも本人から聞いたらしいが、月も出ないような暗い夜は、自分の中の闇も寂しくなつてチヨロチヨロ出て来ようとするんで、抑え込んでるんだとき。

……私の話は終わりだ。次は誰がやるんだい？」

五周目・三話目―二ツ岩マミゾウ

「おう、儂の番か。二ツ岩マミゾウじゃ。もう新入りという程ではないが、この機に仲を深められたらと思う。どうかよろしくな。

……なあ先生、聞くところによると、お主は元々人間だったんじゃて？

……ふむ、そうか。なるほど。それなら納得じゃ。いや、人里の守護者なんて出来るのなら、そうじゃろうと思つてな。

なんせ、人間社会じゃ人間ならではの価値観があるからもう。儂も人里に行く時には姿を変えるんじやが、やっぱり内面については戸惑う事が多い。やたらと死に怯えたり、そのくせ短い人生の中で怠けていたりな。慣れはしたが、溶け込むのは未だに性に合わん。

向こうで人間の振りをしている奴等は、果たして上手くやつとるかいの……。

ああ悪い、儂は思い出話をしたいのじやない。ただ、半端に人と馴れ合おうとするのはやめた方がいいと、そう言いたかったのじや。

なんの、根拠があつての持論じや。というのも、これから話す実体験が、少々頭に残つていてのう……。ちよいと、聞いてもらえるか？

あれは確か、雪も解け始めて春の陽気が見えてきた、そんな頃じゃった。儂は里から魔法の森をブラブラ散歩していた。まだ桜は咲いていなかったが、目覚めの春というだけに色んな場所に兆しが見えてな。雪解けで湿った土の中から色んな植物が芽を出してくる。小さな雑草から、七草と言われる山菜まで。白銀一色に見慣れていると、ちよいと土気色が小汚なく見えるかもしれないが、それもまた生命の妙味を感じられて良いものさ。

もつとも、魔法の森に関しちゃ、あの場所は年がら年中化けキノコだらけじゃがな。日が差さずキノコの胞子と湿気で淀んだような空気の中に、ぴゆうつと時おり冷たい風が吹いて、まだ春には遠いかなあと、肩を小さくしておった。そんな時じゃ。

『もし』

ボンヤリしていると、突然女の声が出た。はて、儂以外に森に入り込むような物好きがそうそうおるかとかキノコキノコ辺りを見回したが、人影のようなものは一人も見当たらない。空耳かとい瞬疑ったが、同じ辺りから、同じ女の声がまた聞こえてくる。

『すみません。ハハハです。ハハハ』

その方向によくよく目を凝らして見ると、人ではない。二、三歩さきの道端に座り込んで、上目遣いで困ったように儂を見上げる……狸が居つたんじや。儂のように人の姿をとっている訳でもない。毛むくじやらで目の隅もそのままの、獣の姿の狸がいた。

なんだって儂に人間の言葉で話すかの、と目をパチクリしながら見下ろしていると、狸は鼻先をヒクヒクさせながらこう続ける。

『脚をくじいてしまったのです。どうか、私の家まで運んでいただけないうでしようか。ささやかながら、おもてなしもいたします』

それを聞いてピンときた。狸や狐が人を騙す時によくやる手口じや。妖術を使い綺麗な女に化け、豪華な屋敷に見せかけた巢穴に連れていき、料理と騙して馬糞や泥水を飲ませ、酒で酔わせて身ぐるみをはぎ、放り出す……。

同時に、自分が里から歩いてきて、人間の姿のままだったのに気づいた。その狸はおそらく、儂の正体を見抜けなかった上に化ける術が通じると思つたんじやろう。妖艶に身をくねらせ、涙ながらに芝居をする。人間の美人の姿ならさぞ引き込まれたじやろうが、しかし目の前には一匹の狸。

恐らく妖力の弱い、群れから追い出されたような輩じやろう。儂の顔を知らない事からも、狸の社会に馴染めていないのが窺えた。

『はあ……それは気の毒に。さ、儂におぶさりなさい』

内心呆れながら、それでも気づかない振りをして背中を差し出す。騙されたふりをして面白いかと思つたんじや。狸は儂の考えなど一向に読めぬよう、爪を立てながら四つ足で儂の肩に這い登る。

首の後ろにチクチクと毛の感触を感じながら、背中中の狸の道案内に従つた。そこを左、そこ真つ直ぐと指図されながら進むうちにどんどん木々は鬱蒼と繁り、人が滅多に入らないのを示すようにキノコが大小様々、色とりどりに、森にデキモノができたようにボコボコと増えていたが、構わず奥に進んでいった。

そうやって歩いて十分ほど。やがて道を狭めていた木々がふと途切れ、少し開けた場所に出た。そこで背中中の狸が言う。

『ありがとうございます。あれが私の家です』

そう言つてひよいと背中を降り、トテトテと先を走つていく。それを追いかけて視線を動かすと、山の中から岩が顔を出して口を開けたような、ちよつとした岩屋があつた。

『どうぞ、おいでください。お茶をお出しします』

ちよこんとお辞儀する狸。茶と称して一体何を出されるやら。そう思つて苦笑しながら歩いていく。

近づいてみれば岩屋は案外広いようで、奥の暗闇が、穴が遠くまで伸びている事を示していた。はぐれものの癖に良い場所に住んでいるなと思ひながら、『良い家じゃな』と

言うど、『死んだ父さんが道楽で建てたのです』と笑っていた。

中ほどの広い場所に通され、葉っぱの敷き詰められた場所を勧められる。座布団だと思ふ事にしてどつかと腰を下ろすと、今度は葉っぱに乗せた饅頭、それに竹筒に入ったよく分らない液体が運ばれてくる。液体は濁った黄色で、水面には白っぽくドロリとした澱が浮いている。

顔がひきつるのを感じながら狸を見ると、キョトンと首を傾げる。茶菓子はともかく、お茶に見せかけているつもりなんじゃろうか。騙されたふりをするのも楽ではない。

お茶だけ奇妙なのは気になったが、このまま付き合ってもらくな事は無さそうだし、さつさと茶だけ飲んで退散しよう。そう思って急いで竹筒を持ち上げた時。

つん、と鼻を突くような臭いがした。

思わず竹筒を離し、恐る恐るまた臭いを嗅いでみる。小便を飲ませるイタズラの類いとか、そういうものではない。森を歩く最中、ずっと嗅いで慣れていた筈のあのムツとする臭い……。

化けキノコの胞子が、森の空気とは比較にならない程の濃度で大量にぶち込まれている。鼻が麻痺するかと思つて顔をそむけると、常人なら耐えられない筈の森の空気が、その時ばかりはまるで緑豊かな山を想わせる爽やかなものに感じられた。

『おい、なんじゃこれは！』

思わず竹筒を突き返して怒鳴っていた。狸は驚いて飛び退き、オロオロしながらこう言った。

『え……お茶、ですけど……』

『ふざけるな！ 言っとくがな、貴様の妖術はハナっからお見通しなんじゃ！』

目の前で妖怪の姿に戻ってみせると、狸は目を白黒させて、しばらくしてガツクリとうなだれた。

『そうか……あなたは、人間ではなかったのですね』

『どうしてこんな真似をした。普通に騙すならいざ知らず』

いくら妖怪でも、むやみに危害を加えても良いことはあるまい。年のせいかな、そんな気持ちで質問をぶつけていた。すると狸は恨めしそうに儂をじつと見て、ぼそりと言った。

『人間じゃない貴女には、想像出来ないでしょうね』

『なぬ？』

『……お話ししましょうか。私の、大間拔けな失敗を……』

そう呟くように言って、狸は自分の事を語りだした。

……元々、そいつは人間に酷い事をするのを躊躇する性格だったらしい。そして案の

定仲間から腰抜け扱いされ、一人で森にひっそり暮らすようになった。

一応、人を化かして騙す事はあつたらしい。しかしそれは、夜に一人で出歩くような馬鹿者が行き倒れないように、巢穴に案内して保護していたんじや。もちろん立派な家も豪華な料理も見せかけだけで、朝になれば全部バレてしまう。それでも大体の奴らは感謝してくれたんじや。

幻想郷じゃ妖怪に食われなかつただけで幸運じゃし、ことに冬には岩屋の屋根も、抱き枕になつてくれた狸もとてもありがたいと、助けられた連中みんなが口にした。

じやが、ある夜……。

狸はその時も迷つた人間を、娘に化けて連れて行こうとした。しかし、いつもならホイホイ着いてきてくれるのじやが、その人間は出し抜けに、こう言つた。

『千代……お前、千代じやないか!』

話から察するに、狸の化けた娘が、偶然にも昔に亡くした子供にとてもよく似ているらしい。こうなると人の好い狸は夢を壊す訳にもいかず、『お久しぶりです、父さま』と応じた。

道中、物好きなた方の屋敷に拾われたのだとか言つて、見せかけの金持ちな家に案内し、見せかけの豪華な食事を振る舞い、精一杯幸せな娘を演じる。人間も妖術と嘘に騙され、狸のでつち上げを信じて安らかな顔で床に着いた。

その夜までは、狸は深く考えていなかった。夜が明ければ正体はバレてしまいが、その方がいい。私は事実、死んだ娘さんではないのだ。現実は変わらないのだ。この人間も一夜の夢だと笑ってくれるだろう。そんな風に思っていた。

しかし、夜が明け、傍らの狸と、周りの変わり果てた風景に気づき、全てを聞かされた人間は……。

『なんで騙してまで助けたんだ！ 娘に会えたと思つたのに！ 幸せでいたのだと思つたのに、何故あのまま死なせてくれなかった!?!』

……そう言つて激怒した。そして狸が弱虫なのを良いことに、さんざん山の中を追い散らして、自分は森の奥に消えてしまったんじや。

『……あれ以来、私は気づいたんです。人間は結局夢を見るのが好きだつて。そしてそれは普通の人間には出来ない……』

いつの間にかうつむいたまま、ポツポツと話す狸。その不気味な雰囲気にとじろいでいると、不意に顔を上げて儂を見据えてくる。

どんよりとした、光のない目。そして後ずさる儂をにらんだまま、パチパチと火花のような音を立てて、全身の毛を逆立てはじめた。まるで針ネズミのような異貌。紫色の小さな雷のようなものが、激しく明滅して狸にまとわりつく。

妖気を高めている。そう察した瞬間、奴は風のように迫り、何かを振り下ろした。

焦つて飛び退くと、着物が爪で引つかかれ、まっすぐ切り裂かれていた。狸をみると、さつきとは打つて変わつて、目をらんらんとギラつかせ、地面には目玉を容易く抉り取れるような爪を立てて、牙を剥いてその隙間からシューシューと音を鳴らしている。

まるで別人のような様相に呆然としてみると、狸は顔を歪めて口を開け、今までとまるで違う地の底から響くような声でこう言つた。

『お前のような、心ない妖怪は邪魔なのだ……！』

そう言つて唸り声をあげ、毬のように襲いかかつてきた。儂はすぐさま背を向けて逃げた。同族とやり合うなんぞゴメンじゃし、理性が効いているようには到底見えなかつた。

四つ足で音を立てて駆け回り、辺りの木の皮を見境なく爪で抉るそいつを相手に、儂はとにかく撒いてしまおうと右へ左へ逃げ回つた。そんな事をずっと続けて日も落ちかけ、ようやく見失つてくれたかとホツとした頃……。

念のため周りをキョロキョロ見回していると、小さな岩屋がまた見つかった。位置から思い出すに、最初に見た狸の巣穴が、そこまで前後でトンネル状に繋がっていたのじゃろう。

そこを何気なしに、フツと覗いた。その時。

人間が何人も積み重なつて倒れていた。暗がりではハッキリとは分からなかつたが、下

に押し潰されたようになった人間は白骨になったり、土色に腐って虫がたかっていたり、枯れ木のように痩せ干そつていたりした。そして目を凝らした瞬間、一番上にいた人間が、『ううん……』と唸って……”寝がえり”を打った。

その表情を見て言葉を失った。白目を剥き、髪はボサボサ、ボンヤリ開けた口からはヨダレを垂らして、うわごとのように何かを呟く。肌も服も薄汚れて、何日もそうしていたのが窺えた。

寝ているんじゃない。明らかに何かをされている。頭の中に、あの化けキノコの胞子が入った液体が浮かんだ……。

—

……それから、儂は結局逃げ出して以来、詳しいことは分かってない。だが、あの狸は今どうしているかの……。直接聞いてみたら、真相も分かるかも知れん。儂はやりたくないがな。

先生、もし狸に招かれる事があつたら、用心するといい。化かされるだけならまだしも、もつと酷い事をされるかもしれないからもう。ほっほっほ……。

儂の話は終わりじゃ。次はどなたかな。」

五周目・四話目―藤原妹紅

「……えーと、次、私か？ 四番目つてなんだか縁起悪いな。まあ私は死なないからいいけども……。」

ん？ 先に自己紹介？ ああそうだったな。

藤原妹紅だ。里にはあんまり来ないし、あんまり会わないだろうけど、まあよろしくな。

で……そうさなあ、知り合いの話をしたら早いか。皆も会った事はあるかもしれないけど、竹林の医者たちとは比較的よく会うんだ。永遠亭つて場所の連中なんだが、知らないか？ ……あれ、医者つーか薬師だっけ？ まあいいや。

ちよつと前にそこでちよつとした珍事件が起こつてよ。いや、異変とかそういうのじゃない。もう解決済みの事なんだが。

個人的に、背景がちよつと薄気味悪いもんでよ……。まあ、少し聞いてくれよ。

―

ある日、竹林の奥の永遠亭に、一組の男女が駆け込んできた事があった。二人とも血だらけで息も絶え絶え、足を棒みたいになりながら門を叩いた。

『化け物に襲われた』。そう聞いた永遠亭のウサギたちは驚いた。一つは怪我の凄惨さ。腹やら腕やら切り裂かれて、二人の服はもう何色だったのか分からなくなっていた。

そしてもう一つの理由は、二人きりで、私がついていなかった事さ。あの屋敷のある竹林つて場所はそりや迷いやすい場所でな、よほど慣れている奴じやなきや入ろうとはしない。どうしても用事がある時には道を知っている案内人をつける。

早い話がその案内人つてのは私なんだが、そのカツプルについてはついぞ何も聞いていなかった。二人が竹林を知り尽くしていたのかといえば、そんな事はない。本当に偶然、あの医者の方に怪我をしながら辿り着いたというんだ。

これだけ聞いたら、無用心だと思うだろ？ 妖怪にやられたか知らんが、人間が二人だけで、道も知らずに竹林に飛び込むなんて。死んでもいつこもおかしくないぞ。

しかし、ただの間抜けつて訳じやなかった。永遠亭で後々話を聞いて分かった事なんだが、そいつら外来人だったんだつてよ。お決まりの自殺者のパターン、それも二人揃つての心中ときた。

びつくりしたろうな。一緒に死んだら、いつの間にか知らない場所において、戸惑う暇

もなく妖怪に襲われたんだ。聞く所によると、治療を始めてしばらくは二人とも夜な夜なうなされていたとき。

それもしばらくして治まり、怪我もいずれば治る。しかし、それでも外の世界に返して終わりつて訳にはいかなかった。

元々自殺者、自分から死んだ奴らだからな。元の世の中には戻りたくないつて、駄々こねだしたんだよ。親との確執とか、家の借金とか、暴力とか、なんだか色々あつたらしい。

永遠亭の連中は多少呆れながらも、考え直すように言つた。幻想郷は人間が暮らすのに良い場所とは言えないし、外と比べてなら尚更だ。それも一から生活を作るとなりや、一筋縄ではいかない。

……といつても、それらの現実的な理由をそのまま言つた訳じゃないけどな。人間、多少は情が無きや動いちやくれない。ウドンゲなどは『メンタルケアとかは手伝うから、落ち着いて彼女との行く末を考えよう』、となだめたし、てゐは『金なら少しは世話するよ。……姫様が』とかアイツなりに気を遣つた。輝夜までそれに賛同したんだ。

だが、ただ一人……薬師の永琳だけは違つた。

『寝ていたら分らないでしょうけど、外と比べてここはずつと危険なのよ』

『食料も思うようには手に入らない。それどころか味覚も違いすぎる』

『衛生事情だつて発達してないわ。いつでも病気を治せる保障もない』

そんな野暮な意見をいくつも、素つ気ない態度で淡々と言うんだ。確かに重要な事ではあつたが、みずから死ぬまで追い詰められていた二人の心に響く訳がない。生活上の問題はどうあれ、まず心の整理をつけて前向きになつてくれなきや始まらない。それを周りの大体の連中は分かつていた筈なんだが、永琳だけは別だつた。

そんな風に言われて二人はますます頑なになつた。食事を運ばれば恵まれなかつた境遇を訴えて、説得しようとするれば布団をかぶつて聞こえない振りをする。

特に女の方は感情的になつた。私には彼氏しかいないんだ、の一点張りで生半可な言葉じゃ耳も貸さないし、キツく言えばヒステリーを起こして泣きわめいた。その様子には彼氏さえ時々うんざりして見えたとき。

そこまできて永遠亭の連中も頭を悩ませて、せめて永琳に気の利いた事は言えないかとウドンゲが進言した。正論を言えば良いというものではない、もうちよつと男心と女心をくすぐつてやらなきや、人つていうのは意固地になつて凝り固まつちやう。そうやんわりと伝えたんだ。

ところが、永琳は顔をしかめて俯き、しばらくしてこんな事を言った。

『そういうの、よく分からないのよね』

『へっ？』

ウドンゲが首を傾げると、永琳は続ける。

『二人の言い張るような、不合理よ。妖怪に襲われた時点で、自分たちがバカな事を言ってるのは察せるでしょうに』

そして、終いには肩をすくめ、参ったと言いたげににため息をつく。

『自由になりたいとか、愛があれば大丈夫みたいな事を言うけど、根拠もなく言える神経を疑うわ』

……なんて風に、冷たいというか丸つきり考えが機械みたいなんだ。気の迷いで無茶な事を口にするとか、嫌な事から目を逸らしたくて夢みたいな事を言うとか、そういう機微への理解が全然ない。それも悪気がある訳じゃない。本当にキョトンとして、分からないって顔をするんだ。

そのうち、彼氏までがウドンゲその他に同調して、外の世界に帰ろうと言い出した。気弱そうな顔で、覇気のない声で、周りの奴らの忠告にいちいち頷く。あからさまな手の平返しだ。

その辺は私もこの目でいたから分かる。ありや自分の気持ちに嘘をつけて、その場だけでもやり過ぎそうとする、そんな態度だ。恐らく彼女のワガママに付き合いたくなくなっただろう。あるいは、元々そんな性格なのかもしれないけど。

呆れたのは、永琳が男の手の平返しに同調した事だ。彼もこう言ってるんだし理にも

かなっているから、彼女さんも納得してちようだい、とね。端から見りゃ、いくら理屈は正しくても無責任な言葉にかこつけて、厄介払いしたいという図にしか見えなかつた。

でも、それも永琳には読み取れない様子だった。感情に任せてわめき散らすにしろ、本心を覆い隠して利口ぶるにしろ、結局は不利益になりそうな行動をするのが想像出来ないみたいでな。

まあアイツ、言つてしまえば冗談抜きで天才で常識外れの、おまけに宇宙人だからなあ。そういう所は鈍いのかもしれない。医者としちやある意味向いているかもしれないけど。

でも、彼氏の本心を知ってる身としちやダメ人間にすら見えてくる。いつだったか永琳たちが居らず、彼女も眠っている時に、彼氏に話しかけられた時があつたんだ。

夕暮れ時に茜色の陽に照らされながら、ベッドの上で膝を抱えている彼氏。私が部屋に入ると、大袈裟に驚いた顔をした。誰も見ていないと思えば塞ぎ込む。悩みを抱え込んでいる奴にありがちな事だ。

相手は悩む姿を見られてうろたえていたが、気にせず話しかけた。同情はするが私も同意見だ。幻想郷に住むのはよした方がいいって。

ただし、お前の本音はどうなのかと念を押しした。どうあつてもお前だけは本心を語ら

ないと、彼女は誰も信じなくなっちまうぞ、と言った。

彼氏はバツが悪そうに目を逸らして、足元を見つめたまま黙りこくってしまった。情けない野郎だと思いつながらもずつと、私が呆れて去るのを待っているかと思うほど長い時間を待つてから、彼氏は呟くように言った。

『なあ、俺はいい子かね』

『は？』

『自分ひとり、いい子になろうとしてるのかね』

何を今さら。そう言いたくなるのをグツとこらえて、『んなもん自分で考えろ』と言って帰った。後悔を厭わない、つてのは言うが易しと思われるかもしれないけど、他人にはやっぱり優柔不断な様子なんて見せられたくないもんさ。少なくとも私は、帰るにしろ残るにしろ、譲りたくないなら無理強いしないつもりだった。二人の事情を深く知らないし、押しつけが一番まずいと思つてたんだ。

それから、三日くらい経つてからだったかな。永遠亭に出向いてみると、なんだか広い屋敷の中からドタバタと、騒がしい音が聞こえてくる。

すわ何事、と駆け寄つていくと、妖怪ウサギの一人が私を見つけるや、事情を話してくれた。曰く、永琳はこれ以上ズルズルと滞在を延ばしてもメリツトはないと判断して、強引にスキマ妖怪に運ばせようとした。しかし、その時に及んで大人しかった彼氏

が急に豹変し、彼女を連れて逃げ出したというんだ。

私にも捕まえるのを手伝えというんで中に入ろうとすると、彼氏の方から目の前に飛び出してきた。彼女を背負って額に汗。息急ぎ切らして、私をまっすぐ見る。

『帰らないのか』

真剣な眼差しを見ながら問いかけた。捕まえるような気は起こらなかつた。

『はい、今は少なくとも、二人とも帰りたくないんです』

彼氏はいつになくハッキリとした声で言った。背中には彼女が力一杯しがみついている。こう言っちゃなんだが、記憶の中じゃ一番はつらつとして見えたよ。あの面であつといられるなら、弁護してやつても、なんなら幻想郷での新生活を手伝ってやつてもいいとさえ思った。のちのち後悔するかもしれないが、確かにそう感じたんだ。

でも、その時。

後ろに、ゆらりと誰かの影が現れた。私が気づいた瞬間に、背負われていた彼女がズルツと背中から滑り落ちる。

急に重さがなくなり彼氏が振り返ると、その首すじに何かが刺さつた。すると瞬く間に、彼氏まで彼女と同じように地面に崩れ落ちた。

私は目を見張つた。そこにいたのは、手に注射器を持った永琳だったんだ。注射器の中には何かよく分からない液体が入っている。

その薬品が何なのか、私が聞こうとする前に永琳は表情一つ変えず、妖怪ウサギたちに二人を運ばせていた。運ぶウサギも怪訝な顔をしていたが、やはり永琳は動じてない。

『おい、何をやったんだ？』

『ああ、来てたの』

永琳はつまらなそうに振り向いた。私が後ずさるのも気にせず、手元の注射器を眺めて言う。

『眠らせたのよ。言う事を聞いてくれそうに無かったから』

『そう……か……』

毒薬とかじゃなくて良かった。そう思うと同時に、結局やつらは外の世界に戻るのかと釈然としない気分だった。せめてもう少し後味の良い別れはできなかったのかと、小さく尋ねてみる。

『でも……あいつら、大丈夫かな。帰りたくなかった、って、思ったりしないかな』

仕方のない事、そう返されると予想できても言わずにはおれなかった。最後の多少は男らしい姿を見ていただけに、永琳を止められなかったと悔やんでしまう。

でも、その時の永琳の返答は、予想していないものだった。

『気にする事ないわ。あの二人、もう記憶がないし』

『……え?』

『これ、強い薬だね。記憶を全部吹っ飛ばしちゃうのよ』

顔色をちつとも変えず、さらりと恐ろしい事を言う。私が思わず掴みかかると、奴は初めて驚いたようだった。

『なんでそんな勝手な真似を。他人の人生だぞ?!』

『その他人の人生が大変だったって、散々聞かされたじゃない。この際しがらみを忘れた方が良くなって?』

永琳は戸惑いながら手をわたわたと振った。奴から見ればおかしいのは私らしかつた。澁々離れると、永琳は襟を正して、長々とこう述べる。

『まず、幻想郷の事は忘れてもらった方が都合がいい。未練も邪魔になるでしょう。』

記憶喪失なんかに対するケアも、向こうの方が発達しているわ。それに、もし万が一記憶が戻れば、それこそ元の社会にいた方が対応しやすい。

……それにどのみち、幻想郷は好き好んで人間が暮らす場所じゃないわ。分かっているでしょう?』

そうつらつらと損得を語る様子は、ちょうど彼らを説得する様子にそっくりだった。その表情はやつぱり、正しい理屈を疑わないような……。

どこか冷たい顔に見えた。

今さら、永琳のやった事が間違っているとか言う気はない。いつでも冷静で、大抵の事は最適解を用意できると、今でもそれは疑わないさ。

でも、アイツがもし万が一、リスクも厭われないような行動に出るとしたら……。
きつと、さっきの内容が比じゃないような事をしでかす。だって、奴は昔……。

……いや、やめとこう。ただひとつ言えるのは、アイツに軽々しく近しい関係になろうとしない方がいいのかもしれない。お互い、そんな距離感が丁度いいだろう。

私の話は終わり。次でもう四人目か」

五周目・五話目―火焰猫燐

「あたいが次かい？ おっと、名乗るのを忘れてた。火焰猫燐だよ。気軽にお燐と呼んでおくれ。

まあ、そんなにしょっちゅうは出会う事ないだろうーけど……。あたいは大体地底にいるからね。つー事は、うーん、やっぱり地底の話が良いのかなあ。みんな多分あんまり縁がないよね。

しっかしなあ……。地底は風紀が悪いし、特にこの話は教育上よろしくないような……。

いやいや、エツチな話じゃないよ。あたいを何だと思ってるんだい。ああもう、分かったよ。話せばいいんだろう。そしたら分かってもらえるさ。ただし、ちゃんとお終いまで聞いてよね。

あたいの暮らす地霊殿って屋敷に、さとり様って主がいる。みんなも噂くらいは聞い

た事あるかな。心を読むさとり妖怪って種族で、今は怨霊の管理をしているんだ。

で、その妹にこいし様つてのがいる。地霊殿での立場は似たようなものなんだけど、こつちは色々と特殊だね。姉の方と違って心が読めない。だけど、代わりに”無意識を操る”力があるんだ。

みんな、何かに夢中になっている時、近くに誰かがいても気づかなかつたりした事はないかい？ 知恵の輪なんか集中していたら背後に誰かがずっといたとか、ぼんやり空を眺めて歩いていたら誰かにぶつかつただとか。

そういうのは、”意識”の”外”に 있는もの故に気づかないから起こる。その意識する範囲の内外に自由に入出力できるのが、こいし様の能力だ。

それだけなら忍者みたいでカッコいいんだけど、ちよつと困つた所もある。こいし様自身の行動が、無意識に行われている、つて所だ。

何かをしよう、しなきゃならない。そう思い立つて行動する事が滅多にない。頭をかいたり貧乏揺すりしたり、そんな時ならいちいち頭で考えたりしないだろうが、一事が万事その調子だから、まるで行動が読めない。意思や目的ありきで行動するあたいらとじゃ、どうしても予想の斜め上を行かれちゃうんだ。

見る人によつては、興味を引くらしいけどね。したい、しなければ、つて意識に縛られない人間つてのは、悟り……ほら、お坊さんのアレね。その域に近いものがあるん

だつてさ。よく分らないけど。

……で、長々と話しちゃったけど、ここまでが前置き。この先は地底のヤバイ事情も合わせて話さなきゃいけない。

地底の街でね、あるクスリが出回っているんだ。クスリと言っても病気の薬じゃない。ヤバイものさ。なんて言えばいいのか……使うとすごく気持ちいいんだけど、やりすぎると頭がおかしくなっちゃうんだ。それでも儲かるから、地底じゃこつそり、でもそこかしこで売られていた。

年端もいかない少年だつて例外じゃない。明日の見通しもない不安感につけこんで、元気が出るとか言つて売り付けるんだ。

ある時、何人ものカモにされた奴らがそうしたように、一人の少年が人気がない場所でクスリを使った事があつた。街の隅の路地裏に隠れて、水で溶かしたクスリを注射器に仕込み、腕に注入する。

あたいは使つた事がないから聞いた話になるけど、最初は本当に気持ちいいらしい。普段からは想像も出来ないほどの高揚感に包まれて、何もしくとも天国にいるような心地になる。体がとても良く動くようになって、疲労も一気に吹き飛ば……：：：ような気分させてくれるんだ。

ところが、そこである偶然が起きた。

クスリを使うとね、一時的に良い気分になると言ったけど、見方によっては、全ての悩みや苦しみから解放される。そう言えなくもないんだ。これを仏教の悟りと近いものだっていう人もいる。もつと言えば、さつき言った……こいし様の無意識の状態にも近づけるんだ。トリップとか言われるんだけどさ。

クスリが効いて、少年が何も考えずにフラフラしている時、彼は他の人に見えないものを、うつすらと目撃した。

それがこいし様だった。無意識を操り誰にも見えていないと安心して、気ままに街をうろついている。

単に妖怪が能力を使っているだけなんだが、知識のない少年には別のものに見えた。快感に染められて何の苦悩も感じない精神状態、現実感のないモノの見え方、この世の全て、物質から自由になったような感覚。

様々なものにフィルターを歪められた少年には、何事にも縛られずにそこにいるこいし様が、こんな風に見えた。

『この子は、天使に違いない』

少年は天使を見失いたくない一心で、その後を追った。だけど、元からクスリを使つた不完全な悟りの上に、第一人者がごった返す街の中だ。すぐに見えなくなっちゃった。

その時は、神聖なものに近づきたいと思つて追い求めるような心境だったんだろう

か。どこにいるかも、ハッキリ見えるかも分からないこいし様を探して、街をさまよい歩いたらしいよ。

でも、いつまでもそうしてはいられなかった。知っている人もいるだろうけど、この手のクスリは気持ちよくなるだけじゃない。必ず反動がくる。寒気がしたり、吐き気がしたり、手が震えたり。

反動から逃れる為にはどうするか……。更にクスリを射つしかないんだ。そうすればまた高揚感がやってきて、苦しみからは逃れられる。……一時的に、ね。これが儲かる理由だよ。軽い気持ちで始めても、必ずまたクスリを求めるようになって、苦痛と解放のループから逃げられなくなる。その中で数えきれない回数、額の売買があるんだ。

少年もご多分に漏れず、売人からクスリを買い漁った。苦しんで、逃れて、その中で何度も無意識を操ってるこいし様を目にした。死ぬような感覚から抜け出した瞬間に。天に昇るような心地と地獄に落ちるような絶望の狭間で、自分だけに見える女の子……。その特別感が、クスリの乱用に拍車をかけていた。

でも、それも長くは続かない。何度も使えば体は慣れてくる。最初はしつかり感じた効き目も段々と薄くなって、同じ量じゃ物足りなくなってくる。

対して、体のダメージは気づかぬうちに蓄積されていく一方だ。クスリが切れた時の苦しみは反比例するように増していく。皮膚の下に虫がいるような感覚がする。あり

もしない化け物が目について離れない。恐ろしい声が『殺してやる』とささやいてくる。端から見れば一人で転げ回っていても、本人には全て現実のものとして降りかかってくる。周りを認識する為の脳や神経がイカれちまってんだ。ここまでくると立派な禁断症状さ。やつと心の中でやめたいと思えるようになっても、今度は体が許さない。まるで餓えて水を欲しがるように、クスリの事しか考えられなくなる。

でもクスリを買うにはお金がいる。たくさん買わなきゃ効かなくなる。少年はお金尽其きると他から盗み、巻き上げた。それをためらう事も無かった。頭の中にあるのはクスリと……彼に限っては、名前を知らないこいし様だけだった。

あたいらが事を知ったのは本当に偶然だった。こいし様を追っかけてきたらしい少年が、地霊殿の屋敷に飛び込んできたんだ。

その時の彼は、酷いありさまだったよ。手足は震えて自由がきかず、体は痩せ細ってまともに歩けない。皮膚はカラカラに乾き、顔色は赤茶けて薄汚く、頬がこけてバサバサの髪の隙間から覗く目だけが、ギラギラ光っている。床を這いずって近づいてくると、開きっぱなしの口の中に歯が黄ばみ、抜け落ちている様子が見える。その奥からはあわあわと、呻き声のような意味を成さない言葉が漏れていた。

駆け寄ってみると、左右の腕から両足の先まで、いたる所に注射の痕があった。古いのから新しいのまで、隙間なく点が並んで生々しく、ミミズ腫れのようになっていた。

身元を調べようとさとり様が出向いた時、隣にはこいし様がいた。彼はそれを見るなり何も知らないこいし様が怯えるのも構わず、すがりつくように手を伸ばした。上手く動かなさそうな口を歪めてやっと会えた。やっと会えたって笑うんだ。能力が関係ない時ならいつでも会えたのに、少年はその時クスリを後悔していなかった。

身元を調べる最中、禁断症状で泣きわめいてもがく間も、こいし様を目で追っては助けを求めた。地獄鳥が腹をついばむ、蜘蛛が血をすすり取っていく、怨霊が脳味噌を食い散らかして離れない……。そんなありもしない幻影を口にしながら、こいし様の手を握り潰しそうなほどに掴んで離さない。

さとり様がトラウマを和らげようとしていたけど、まるで効いているように見えなかった。

それどころか時々あらぬ方向を向いては、『ああ、こいしさん、そこにいらつしやつたんですね！』と豹変した笑顔で口走る。すぐ隣にいるんだよ。無意識なものもないこいし様が。なのに。

次第にあちこちを忙しく見回して、『あ、こつちか。いや、ここにもいた。あはは、いっぱいいるぞ。こりやいいや』なんて、よだれを垂らしながらケタケタと笑い続けた。壊れた、そんな表現がピッタリだったよ。

その子は、少し落ち着いてから地上の永遠亭に送られた。今ではなんとかクスリを断っているらしい。もつとも、ふとした拍子にまた禁断症状が出るかもつて、医者は言つたけどね。恐らく……一生油断は出来ないつて。

クスリの流通網は、さとり様もどうにかして絶とうとしているけど、なかなか上手くいつてない。広い旧都、それも無法地帯の中で出来る事は限られてる。

それに、クスリといつても色んな材料を使った混ぜ物を使つていやがるから、封じ込めたと思つてもまた同じようなのが出回るんだ。粗悪なものでも、それでボロボロになる人がいても、ずっと同じ事が続いている。

……ああ、それとね。話しておいてなんだけど、他人に広める時には地名とか人名にフェイクを入れといてくれないか。

みんな今回、初めて聞いたと思うんだけど、本当は秘密にしろと言われてるんだ。なんでも、クスリの元締め連中にもし関わるうなんてヤツが出てきたら一大事だからね。まあ、ここにいる何人かなら返り討ちにも出来そうだけど……。

いやいや、冗談。首突つ込まない方がいいつて。……行くなら止めないけどさ。

これ以上は話す事はないよ。あたいはここまで。残りは一人かな？」

五周目・六話目ーメディスン・メランコリー

「ん、私が次？ 随分待たせてくれたわね、退屈だったのよ？」

……まあいいか。私はメディスン・メランコリー。鈴蘭の毒で動けるようになった人形よ。付喪神とは違うから、間違えないでよね。

今日はね、ちよつと私が今朝、体験した事を話そうと思うの。朝方に怖い体験なんて珍しい？ でも本当なのよ。今でも頭に残ってる。夢なんかでも断じてないわ。

……聞きたい？ ふふ、じゃあ話してあげる。今いる中でちよつと最後だから、時間も気にしないで済むしね。

あれは、まだ空が白んでいる時間帯だった。寝転んでいた鈴蘭畑の芝が湿って冷たくて、体を起こすとひんやりした風が遠慮なく吹いてくる。

おまけに霧が辺り一面にほんのりかかっていたね。白い鈴蘭は隠れて霞んで見えて、いつもは緑や土色が混じって見える景色も灰色の影の集まりになって、それらを照らす

太陽だけが薄ぼんやりと輝いている。

寒い上にまだ眠気は残っていて、朝早いし二度寝しちやおうかなあ、とも考えたんだけど、早いうちに目が覚めるってのも久しぶりでね。ちよつと迷ったけど、散歩する事にしたの。

前もろくに見えない鈴蘭畑を、適当に二歩、三歩と進んでいく。地を踏む度に足首を寒気が這い上って、芝の青臭い匂いが鼻をつく。地面を見ると芝に朝露がくつついてキラキラ光っていた。

それらがすごい新鮮でね。いつの間にかスキップを踏んでいた。何処に向かっているかも分からないけど、そんな事も気にならないくらい朝霧の雰囲気が入っていたの。

どのくらいそうしていたかしら。相変わらず霧は晴れないままだったんだけど。ふつと目の前に道が現れたの。多分魔法の森に繋がる小さな道。

ああ、鈴蘭畑が終わったんだな。そう思つて振り返つてみたら、今まで歩いてきた花畑は、ほとんど見えなかった。霧に隠れていたのよ。反対側にある、足元しか見えない景色と同じように。

もちろん見えないだけで、もとの道を戻ればいつも居る鈴蘭畑があるはずなんだけど、その時は霧が珍しかったからか、寝起きでぼうつとしていたせいかな、ふと変な考え

が浮かんだの。

今この時、霧の先の私が見えない場所は、ちゃんといつも通り存在するんだらうか、って。

例えば、幻想郷だと里があつて周りに寺があつて、竹林やら山やら湖やらがあるっていうけど、自分の周りと遠くの景色を同時に見れたりしないでしょ？ 私が永遠亭に行つてるとき、湖のそばの屋敷で吸血鬼がお茶を飲んでるとか言われても、じかには確かめられない。

私が歩いて近づいた場所だけ、いつもと変わらない景色が現れる。でもその向こうでは、私が聞いていたものとは全く違う、知らないもので溢れていやしくないか。違和感がないだけで認識できる場所だけ映画のセットみたいに組み上がっているんじゃないか。白い景色とほの暗い影を見つめてみると、そんな考えがどんどん膨らんでいった。

空想に耽つているうちに、いつの間にか道をどんどん進んでいた。周りはちよつとした林が取り囲んでいて、大きな背の高い影が並んでいる。鳥の鳴き声もせず木が風に揺られ、ざわざわとやけにハッキリ音を立てる。それがなんだか耳障りで、遠巻きに陰口を叩かれているような、そんな苛立ちが浮かんだ。

輪郭が分かりづらい巨大な影が、揃つてこつちをじつと見ているみたいで、それがなんだか段々と怖くなって、心細くなった。

もう帰ろうか。周りをキョロキョロしながら、ふっと空を見上げた。その時だった。空に、木なんかとは比べものにならない大きさの何かがあった。重たいねずみ色の分厚い雲が立ち込める中に、覆い被さってくるような、辺り一面に落ちてきそうな黒い何かがある。

それはよく見ると、幅の広い、手のような形だった。ただの見間違いかと思つたけど、重さのある実体なの。雲の向こうから巨人が腕を伸ばしているような、そんな圧迫感があつた。ずっと遠くからでも遙かな天から見下ろす、何者かの手。

誰かいる。とてつもない大きさの誰かがいる。それも森も無縁塚も越えた幻想郷の外側、果てとも言える場所に。

そう思つた瞬間、急に目の前の景色が白黒に点滅した。驚いてかぶりを振ると、頭がズキズキ痛んで鉛みたいに重くなり、その場に倒れそうになつた。慌てて踏ん張つてまた宙を睨むと、あの大きな手は相変わらずある。でも、私の視界は歪んで砂みたいな幻が瞬き、耳に錆びたベッドが軋むようなノイズがひっきりなしに響いてくる。

思わずへたりこみそうになつたけど、歯を食い縛つて空の手を見たまま歩いた。何故か分からないけど、その時引き返したら、二度とあれを見られないような気がしたの。

一歩一歩、地面を踏みしめて歩く。空にある手はずっと、近づけている気配もなしに雲の隙間から覗いている。まるで虹を追っかけてるみたいに。

それでも進んでいって、やがて濃霧に隠れていた木々の影がだんだんと増えてくる。いつの間にか魔法の森まで来てたみたいだった。

湿った空気のせいかな、キノコの胞子がいつもよりもっとしつこく鼻を刺激する。ちよつと前からの気持ち悪さと合わせて、吐き気までしてきた。ついにふらつ、と崩れ落ちそうになって、その時、確かに見えたの。

追いかけていた手が、さつきとは打つて変わつてくねくねと忙しく指を動かしている。それに釣られるように、みるみる霧が晴れていった。だけど尋常じやない晴れかた。さーつと波が引くみたいに白いのが無くなっていった、走つても追いつけないくらいに素早く、見慣れた景色が戻っていく。それは、なんだか舞台の幕が開かれていくような、非現実的な光景だった。

しばらくして霧なんて欠片もなくなっていた。緑が遠慮なく生い茂つて、日もしつかりと昇っている。

信じられなくてポカンと突っ立っていたら、体の疲労を遅れて思い出した。ネジが切れたみたいにつつ倒れて、何も考えられないうちに、意識を失っていた。

……しばらくして、誰かに肩を揺すられて目が覚めた。目を開けたら、あの魔法使いの魔理沙が上から私を覗きこんでいた。

「何してんだよ」

魔理沙は怪訝な顔で聞いてきた。日は既に高く昇っていた。相当長く寝ていたみたい。

「それは……」

答えようとしたけど、いざとなると言葉が出てこない。さつきまで謎の巨大な手を追っかけていたとか、霧がものすごい勢いで晴れたとか、言っても信じちやもらえないと思つて。

だから、霧で道に迷つて、疲れて寝た。そんな下手な言い訳をしたわ。さあ魔理沙のバカにした笑いが聞けるぞ。なんて思つてげんなりしてたら、予想に反して魔理沙は何も言わず、眉のシワを深めただけだった。

どうしたんだろうと思つて見返したら、魔理沙はこんな事を言つた。

『何言つてんだ？ 今朝は霧なんて出てないぜ』

『はっ』

思わず聞き返したけど、魔理沙は至つて真面目な顔。まさか一日中寝ていた訳はないでしょうし、私は不可解な思いでいい募つた。

『アンタが何言つてんのよ。この辺全体までまんべんなく白かつたじゃない』

『いやんな訳ねえよ。私はこの辺に住んでるんだぜ』

『朝早くの話よ。アンタ寝てたんじゃないの？』

『ないない、私昨日は徹夜で研究で、窓から夜明けを見てたんだぜ』

色々言っただけど、最後まで話は噛み合わないまま。果ては夢でも見たんじやないかと心配される始末だった。でもあの倒れる時のだるさは体にハッキリ残っていたし、第一夢なら森の入り口なんかで倒れているはずないじやない。

そのうち訳が分からなくなってきた、魔理沙のいる方角を見たまま、呆然としていた。その時、あの手は見えなかつたけど、ほんの一瞬、妙なものが見えたの。

魔理沙の後ろ側、背中辺りから空に向けて、キラキラした細いものが伸びている。魔理沙は何も気にしていないように見えたけど、目を凝らすとその糸のようなものは、ずつとずつと、あの手があつた辺りまで高くから繋がっていた。

……まるで、糸で操る人形みたいに。思い返してみたら、倒れる寸前のあの手動き、アリスなんか人形劇でやる時の動きにそっくりだった。

—

それから、何人かにその日の霧の事を聞いてみたけど、誰一人知らないらしいわ。今では本当に夢だったのか、ともうつすら疑ってる。

でも、もしあの出来事が本当にあつた事だとしたら……。

私は何か、見てはいけないものを見たような、そんな気がするのよね。
私の話も終わっちゃったわね。もうお開きかしら」

五周目・メディスン・メランコリーEND—『操り糸』

……メディスンの六話目が終わった。来るか分らないと言われた七人目が来ないので、その分の余韻が長く続く。

ただ、皆の表情を見るに怖いという感情とは違うように見えた。先程の話は何とか……現実離れと言おうか。自分の身に置き換えて恐怖を感じるというのが、難しいような気がするのだ。

「ねえお嬢ちゃん、そいつ、本当に夢じゃないのかい？」

隣が冗談めかして尋ねる。するとメディスンはムツと頬を膨らませる。

「本当よ！ この目で見たもん」

「見た、かあ……」

ママizzoウがくつくつと笑う。幼さゆえの勘違いに気づかぬ振りをする時のような、勿体ぶった笑い。

他の面々も文句は言わないまでも、さほど恐ろしさは感じていないように見えた。メディスンの言った内容は一人きりの体験が主で、対外的に見れば“いつの間にか見知らぬ場所で寝ていた”というだけなのだ。今朝に霧がかかっていたなど、私もついぞ覚え

がない。「操られているようだった」と称する魔理沙の言動も、メデイスの言を夢や幻ではないかと疑うのなら——特におかしいと思う部分もないのだ。

幻想郷の事だ。そういう妖怪に遭遇する可能性もあるだろうが……実害を被った訳でもない。何にせよ、反応がかんばしくくないのは無理からぬ事だった。

「周りの人間が操られる、ですか……」

「するつてえと、私らも誰かに動かされてる、つてか？」

「冗談じゃない。私は自分で考えて行動してるよ」

周りもそれほどインパクトもない、作り話として受け取っているようだ。ふて腐れているメデイスを見て、すかさず話しかける。

「な、なあメデイス。操り糸が見えたとか言ったが……今も、誰かに見えてるのか？」

メデイスはキツと眉を寄せ、私を真正面から見つめてくる。しかし直後に目を伏せ首を横に振り、ポツリと言った。

「ううん……今は見えない」

「じゃ、やつぱり気のせいだろう」

妹紅があぐらをかきながら呑気な声を出した。それに続いて他の連中も笑いながら冷やかしの声を入れる。

「おおかた、魔理沙の背中に蜘蛛の巣でも引っ掛かっておったんじやろう」

「しかしそうになると、手というのは何だったのでしょうか？」

「影がそう見えただろう。たまたま変な具合に浮かび上がったのさ」
「朝方だつてんで寝ぼけたんだなあ、多分」

メディスンの言い分はてんで信じられていないようだった。次第にメディスンの口がへの字に曲がり、頬が紅潮していく。宥めようとした瞬間、彼女は立ち上がった。

「……やつぱり、信じないのね。分かつてた。ダメ元で打ち明けてみたけど、やめときやよかつたわ」

腕組みをしてそつぽを向き、大きな声を張り上げるメディスン。皆が困った顔を見合わせる中、手をあげて割つて入る。

「まあまあ。私たちが悪かつたよ。また同じような事があれば、教えてくれないか？
そうなりや皆信じるさ」

今回だけでは流石に鵜呑みにできないが、二度となれば話は別だ。普通なら気にも留めない奇妙な事が大事に繋がる可能性もある。その懸念も合わせて、この場ではとりあえず機嫌を直して欲しかつたのだが……。

当のメディスンは私に振り向き、ふんと鼻を鳴らした。

「分かつてないわね先生。私の言ってるのはそういう事じゃないのよ」

「どういう事だ？」

「操られた魔理沙は気のせいだつて言った。ここの皆も同じ。これがどういう事か分かる？」

メデイスンは答えを促すように部屋中を見渡すが、あいにく私にはピンとこない。他の面々も同じなようで、眉をひそめたり首をかしげたり、曖昧なしぐさをするだけだった。

しばらくして、メデイスンが痺れを切らしたようにため息をつく。そして今までに輪をかけて大きな声を張り上げた。

「例の手はね、自分の存在を探って欲しくないのよ。その為に周りの住人を使ってどうか”気のせい”って事にしようとしているの」

あまりに荒唐無稽な想像だったが、メデイスンは真剣だった。今朝の奇妙な出来事を現実だと信じるなら、そういう考えに至るのだろうか。

しかし、やはりというか体験を共有していない他のメンバーには妄想としか受け取れないのだろう。私含め誰一人、メデイスンの言い分に納得する者はいない。

「あの手の謎は一人で突き止めるとするわ。悪いけど、もう帰る」

「は、え？　ちよつと待て！」

ぶつきらばうに言つて腰を上げるメデイスンを、すかさず止めようとする。メデイスンは鬱陶しそうに私を睨んだ。

「なによ、文句ある?」

「大有りだ。そんな得体の知れんものに、首を突っ込ませられるか」

メディスンは何か希少なものに好奇心をくすぐられるような感覚だろうが、危険な妖怪にだまからかされている可能性も考えられる。どうかその方が現実的、かつ危険だ。しかも様子からして、夜中の今時分から辺りをうろつく気かもしれない。

「あんたも邪魔する気なのね。みんなであの手の手を探らせまいと……」

「何言ってるんだ。そんなつもりはない」

即座に否定したが、当のメディスンはますますイライラを募らせるばかりだった。それが雰囲気にも表れ始めた頃、ようやく他の連中も苦笑いしながら集まってくる。

「ちよ、ちよいと落ち着こうよお嬢ちゃん。ね?」

「一人で冒険するなんて、そりや無謀だよ」

「冥界からなら、何か分かるかも知れませんが。だからほら、今日の所は」

「やーだー、はーなせーっ!」

皆でどうにか宥めようと、駄々をこねるメディスンを押さえる。しかしやはり子供に力づくには徹する事は出来ず、逆に目、鼻、みぞおち、あばらなどに手加減なしの拳を見舞われてしまう。

「きやつ!」

「いてえっ！」

「ふぎやつ！」

「お邪魔するわよ……あべしっ！」

それぞれの悲鳴に混じって、聞き慣れない声が出た。その違和感に気づいたのか、メデイスンを含め全員の視線がその声の場所に集中する。

「お前さん……紫（ゆかり）か？」

「いったたあ……何なのよ急に」

突然部屋の中に、次元を切り裂くようにして現れた異空間。そこから身を乗り出し、鼻を押さえて涙を浮かべているのは八雲 紫（やくも ゆかり）だった。

独特の導師服に帽子を被った金髪の少女。醸し出す胡散臭い雰囲気からは想像しづらいが、幻想郷の管理者を任される強力な妖怪であり、物質、空間、果ては概念まで……あらゆるものの“境界”を操る。今回のように物理法則を無視して現れるのも日常茶飯時だ。

「あ……」

メデイスンは涙目になった紫を見て流石にばつが悪くなったのか、しばらく目を反らしていたが、すぐに口を尖らせて言い放つ。

「ふ、ふんっ。急に出てきたのはそっちでしょう。いきなり何の用よ」

強い口調で言われて紫は少し面食らったようであったが、すぐに飄々とした顔になり、肩をすくめる。

「やあねえ。怖い話をしてって頼まれたから、わざわざ来てあげたんじゃない」

スキマから這い出ながらそう言うと、妹紅が隣で「ああ」と声をあげた。

「そうだった。七人目はお前さんだっけ」

「あんた、自分で誘っておいて忘れたの？」

「お前が来るの遅いんだよ」

紫の不満そうな声を妹紅はあっけなくはね除ける。

「だって、今日に限って藍の夕飯の準備が遅かったんだもん……」

そう呟きながら紫は慥然として息を漏らしたが、ふと、反対側のメディスンに視線をくれる。

「で……何かあった？ さっき揉めてたみたいだけど」

やはり先ほど騒いでいたのは見抜かれていたのだろう。メディスンは一瞬目をしばたかせた後、ハツと思立ったように紫に詰め寄った。

「そうだった！ 紫ならあの手の事も知ってるかもしれない！」

「は？ 手？」

「おいおい、もうその話はええじやる……」

マミゾウが億劫そうに声をあげるが、紫はそれを手で制する。メデイスンはそれを了解の合図と受け取り、早口に先ほどの内容を語りだした。

霧の濃い明朝に謎の巨大な手を見かけ、追いかけるとどうしてか距離は縮まらない。そうこうしているうちに意識を失い、気づいた頃には霧は晴れたどころか無かった事になり、それ以来手のヒントも全く掴めずにいる……。

ヨタ話、そう切って捨てられる可能性もあった。しかしどういう訳か、一部始終を聞いた紫は顎に手を当て、無言でじつと考え込み始めた。その時間はやがて一分、二分と長くなっていく。

「巨大な手、ねえ……」

紫が人前でこうも考え込むというのは珍しく、次第に周りも興味が湧いてヤジを飛ばし始める。

「まさか、何か知ってるんですか?」

「嘘でしたら、とかやめてくれよ」

「まさか本気にしとるんじゃないやなろうなあ」

しかし紫は一切それらに取り合わず、額を指でつつきグリグリと押さえると、ぽつんと、驚くべき事を言った。

「見せてあげましょうか。」この場の全員に」

「なに!？」

妹紅がすつとんきような声をあげる。私もつい身を乗り出してしまった。

「ちよつと待て、紫。そんな事が出来るのか?」

「ええ、出来るわ」

紫は振り返り、事もなげに言った。周囲もメディスンまで含めて半信半疑といった様子で眉をひそめていたが、紫は意に介さず縁側への障子を開け放ち夜空を露にすると、右手を掲げる。

「私はね、現代だけじゃなく、あらゆる世界の境目すらも見通せる……。メディスンにはたまたま見えたんでしょうけど……」

やつと聞き取れる程度の声でブツブツと呟きながら、掲げた右手で一つ。

パチン、と指を鳴らした。

その途端、その場にいたほぼ全員が驚愕の表情で目を見開く。

「うわっ!」

「なんだありや!？」

それぞれの悲鳴があがる。紫が睨む、縁側からの夜空の向こうには……。

メディスンが言ったような、人間の巨大な手。それも霧や雲に写った影だなどと言いつのきかない、肌色の見える手のひらが。今にも寺子屋ごと私たちを握りつぶしてきそ

うなほど間近にあつたのだ。

「ま、幻じゃ、ないんだよね……？」

「そう怖がる事ないわ。見えないだけで、ずっといるんだから」

紫は巨大な手をじっと見つめたまま、つまらなそうに言う。見た目に反して、案外危機的な状況でもないのだろうか。

「じゃ、じゃあ害はないんだよね？ そうだよな？」

「……………」

念を入れて確認してみる。が、紫は振り向きもせず、手を見つめたまま黙っていた。それに一瞬、嫌な予感を覚えた時。

直後、手がフツ、と何かを手放すようなしぐさをした。

「え——」

途端、場にいた何人が一斉に床に転がった。二人、三人、次々と糸の切れた人形のように倒れ、動かなくなる。そして私も、急に体の自由を失った。

「うっ……………」

全身をしたたかに床に打ちつける。手足が動かないどころか、口さえ利けない。だんだんと意識まで朦朧としてくる。その中で、あの手に向けて喋っているであろう、紫の声を聞いた。

「今度は私が七人目、か……。藍の準備が遅れたのも、貴方のせい？」

やけに冷静な、全てを諦めたような声。何故だ？ あの手について、何を知っている？

「まあいいや。結局ここで終わるのだもの」

終わる……？

まさか、私たちは死ぬのか？ どういう因果だ。何をされた？ 何が起こっているんだ？

頭の中で次々と質問が浮かぶ。しかしそれらを一つも口に出せないまま、私の意識は闇に落ちていった。ごとり、と最後の一人が倒れた音を最後に……。

—

「……やっぱり、こうなるのね」

別世界を覗いていたスキマを閉じ、私はため息をついた。

偶然見つけた、立て続けに現れた世界線。その中には例外なく夏ごろで、幻想郷の住人に限りなく似た者たちが怪談話をしていた。

集まるのは七人。話をするのは六人だ。その六人が話し終えると、決まって何かが起

ころ。

しかし奇妙なのは、その後だ。六人の話の後に珍事が起こった。そして……。それらの世界は何もない、”無”と化してしまう。これも例外はない。誰もいない、草木の一つもない……。片づけられて照明を落とした舞台のようになってしまふのだ。どの世界も、一つ残らず。

一体、何のために存在しているのだろう。幻想郷で生きているかのように振る舞うのに、あるタイミングで湧いて出て、跡形もなく消えてしまふ。

そういえば、私は呼ばれていないけど、里で今夜怖い話をするとか言ってたっけ。

「……誰か、どこかで見ていたりするのかしら。いやあねえ」

眩きには、諦めが混じっていた。自分にだけは見えるのだ。誰もが消え去る未来が。

「紫さま、ご飯ですよ」

藍の音がする。今度はいつも通りの時間だ。

……いつも通り？

「……バカみたい」

眩きは、風に吹かれて消えていった。

六周目

六周目・一話目―メディスン・メランコリー

「えー、私が最初？　いきなりねえ。いや別に嫌ではないけどさ。これって、順番は指名していくスタイルなの？　……ふーん。じゃ、まだネタ作りしてない、なんて人もいつ自分が当たるか分からないわね。……ね、妖夢。

おつとごめん、自己紹介からしなきゃいけないのね。メディスン・メランコリーよ。無名の丘って場所で気楽に暮らしてるわ。まあよろしくね。

で、まあ、私の事はこの際重要じゃなくて、怖い話よね。ええと、この日の為に収集した良さげな話があるわ。

皆、河童の事は知ってる？　妖怪の山に固まって住んでいる、泳ぐのが得意な妖怪。あと相撲も得意なんだっけ。そこまで外交的な種族じゃないから、あんまし顔は見ないかもしれないけどさ。

でも、内輪の結束が強いからこそそのロマンもあるわ。その一つが機械の数々よ。私は、永遠亭の永琳なんか薬の知識に限らず色々な分野で幻想郷随一だと思ってるけど、河童の技術も噂ではすごいものでね。工場の機械、工事現場の機械、実験場の機械

……。少なくとも幻想郷では群を抜いて文明的でしょうね。

でも、その中の一つ……最近病院でも機械を導入したんだけど、それが不調を起こしたんですって。特に産婦人科の、お腹の赤ちゃんを診る機械や、産むときに手助けする道具が、映像がおかしくなったり、肝心な時に故障したり。

最初は手入れが甘かったんじゃないかって言われて、何度も検査したんだけど、また同じような事が続くのよ。それも、決まって産婦人科でね。

ついにあわや赤ちゃんが死亡……なんて事もあったらしいわ。原因は今も分からないまま。河童たちも見当がつかず頭を抱えてる。

……でもね、噂では原因らしきものも囁かれているのよ。ちよつと不謹慎なんだけど、霊的な……ね。

もう私が生まれるよりずっと前。まだ幻想郷が結界に覆われるより昔って言ったかな。

その時も、河童は山の中でひっそりと暮らしていたんだって。

人間たちもまだ妖怪を怖れていて、個人で自己防衛したりするのが精一杯だった。そ

のせいで、妖怪側は人間を馬鹿にして、怖がらせる為の存在としか見ていなくて……。早い話が、深い溝があつたんだつて。それも今みたいな人間の里やスペルカードルーや、色々な建前も無いから、想像以上にギスギスしていたんでしよう。例えば今日みたいに集まるなんて、考えもつかなかつたでしょうね。

でも、いつの時代でも予想外の出来事つて起きるのよ。

ある日、河童のある一家にとんでもない事実が発覚した。その家の娘が結婚も交際すらしてない筈なのに、子供ができたつていうの。

特に持病もなかつたのに、食べ物匂いなんか嗅ぐと決まつて吐くようになった。つわりつてやつよ。それで分かつたの。

親は当然、相手は誰だつて問い詰めたわ。そしたら答えを聞いて仰天した。相手は「人間」だつて、娘が泣きながら言つたの。多分山によく立ち入る木こりかなんかだつたんじゃないかな。結局殺されたのか、父親の事はよく分からないけど。

とにかく当時、妖怪と人間なんて食うか食われるかの関係。仲良くなるなんて一族の恥、ましてや子供をつくるなんて厳格な家なら心中してもおかしくない時代だつた。

山には河童以外にも天狗や、当時は鬼までいたからね。よけい体面やらが重要だつたんでしよう。

それに、山の中には変なお化けを生むんじゃないか、なんて笑いやする奴等までい

たそうよ。人間の昔話にも、妖怪の子を身ごもってんやわんやする話があるけど、異種族やよそ者の血を気味悪がるのはどちらも変わらなかつたのでしよう。

噂になつてゐるのを薄々知りながらも、こつそり天狗の呪術師などにも相談した。そしてお腹が少し大きくなり始めた頃、やつと対処法を聞いたの。

三月三日に桃酒を、五月五日に菖蒲酒を、九月九日に菊酒を飲む事。そうすれば腹の中の子は下る、と。

どれも端午の節句にちなんだもの。娘の一家は藁にもすがる思いでその方法を、長い時間をかけて実行した。そんなまじないで子供が死ぬのか疑問に思うかもしれないけど、精神が第一の妖怪だからか、娘は助言の通り、小さな赤ん坊を産み落とした。

混血だからか、髪が青と黒のまだらで痩せ細り、河童にも人間にも似つかない子供だった。娘はその子に未練を見せたけど、周りは聞く耳も持たずに子供の首を絞めて殺し、川に投げ捨ててしまった。

酷い話よね。娘はうかつだったかもしれないけど、子供には何の罪もないじゃない。……でもね、話はここで終わりじゃないの。騒動もとりあえず収まって、娘が例の事件のショックから立ち直りつつあつた頃。

娘は夜中に、トイレに行きたくなつて目が覚めた。当時は多分、下水道とか整備されてなかつたんでしようね。川の真上に小屋をつくつて、小も大も全部川に流しちゃ

う、つていう原始的な作りだった。

家から少し離れたトイレまで、夜中の山の中を歩く。明かりは手に持った提灯のみ。木々に囲まれて、月の光さえ差し込んでこない。一步一步、ほんの僅かな距離でも茂みがザワザワと音を立てる。一瞬別の足音がついてきてきている気がして、一人で震え上がった。

やつとの事でトイレに踏み入り、足早に中に飛び込む。でもそこで、妙な事に気づいた。

川に通じる便器のあたりから、ぱちや、ぱちやぱちや、と小さな水音がする。最初は川が流れる音かな、と思っただけけど、どうも違う。水しぶきが床まで飛んでるのよ。水音がする度に。

川が真下にあるって言っても、結構距離あるわよ。手をめいっばい伸ばしてやつと届くぐらい。魚が暴れているにしても、ちよつと奇妙じゃない。

娘は不気味に思う反面、どうもそれが気になって、便器へと近づいていった。音と飛沫は止む事がなく、ついに寝巻きの裾に水がかかる。

真上から覗ける場所まで来て、娘はそうつと、川の中を提灯で照らしてみた。直後……。

「きやあああ——っ！」

娘は悲鳴をあげた。中には、大きな頭をした人間のようなものがあった。全身がずぶ濡れで、髪は不自然な二色のまだらに染まり、黄色く濁った瞳がかつと見開かれて青白い肌の上に浮き彫りになっている。

似ている。かすかに見ただけだったけれど、それは確かに娘が産んだ子供にそっくりだった。

棒立ちになって動けない娘に、その赤子には彼女を見たまま小さな手を伸ばして……。そこで後ろのトイレの扉が勢いよく開かれた。娘の悲鳴を聞きつけた両親が来てくれたの。

その拍子にへたりこんだ娘は、震える声で目にしたものを訴えた。でも両親がいくら探しても、赤子のようなものなんて見つからなかったんだって。

それから何年も経って、例の娘が住んでいた場所に病院は作られたの。だから産婦人科の機器の不調はその祟りらしいわよ。……あくまで、噂だけだよ。

え？ 全部つくり話じゃないかって？ さあ、私には何とも。でも確かに、昔の事がそんなに細かく語られるもんかい、てな気はするけど……。

でも、その病院でね。毎夜に赤ん坊の泣き声がするんだって。何度見ても、誰もいないのに……。

なんなら確かめてみたら？ その子がかわいそうだし……なーんて。

私の話は終わりよ。次は誰？」

六周目・二話目―魂魄妖夢

「あちや、ついに私の番が来ましたか……。といつても二番目ですけどね。魂魄妖夢といひます。上手くみなさんを楽しませられるか分かりませんが、ひとつよろしく。

さて、先程私が落ち着きのないように見えた方がいらつしやるかもしれません。確かに、怖いのは多少苦手で怯えていた面もありますが、それだけではないのです。

話のネタだつてちゃんと前もつてご用意してきましたよ。ただ……。それを披露するのにやや、躊躇しております。

というのも、これは一歩間違えばシャレにならない……。危ないものでしてね。現物を見ていただいた方が早いでしょうか」

妖夢はそう言うなり、ポケットから白い紙を取り出した。それはパサパサと広げると手の平二つ分くらいの大きさになる。床に置いて延ばされた紙には、五十音順のひらがなや数字が書かれている。

……。なんだっけこれ。どっかでこういうの見たような……。
「ごっくりさん、つて知っていますか？」

私が頭をひねっていると、妖夢が問うてきた。

「外の世界で流行っているらしい都市伝説なんですが……。こういう紙の上に十円玉を置いて、狐の神様を降ろすんです。そこで質問をすると十円玉が勝手に動いて文字を示し、何でも答えてくれる、というものです」

「神様を、ねえ。遊び半分でやっていいものなのか？」

赤蛮奇が口を挟むと、妖夢は不意に怪しげな笑みを浮かべ、輪の中心へ身を乗り出した。そして声をひそめる。

「良いところに気づきましたね」

「何が」

「その通り、実はとても危険なものです。儀式の手順を間違えたり、失礼な事をすれば祟られます」

「……そうだ、思い出した。寺子屋の皆が一時期熱中していたっけ。狐の低級霊が寄つて来て危ないからって、霊夢が止めさせたが。」

「おい、大丈夫なのかそりゃ」

「だからこそスリルがあるんじゃないですか。大丈夫、ルールは教えて差し上げます」

怪訝そうな妹紅に、妖夢は得意気な笑みを返す。妙だ。外の世界でも危険性のあった儀式なら、幻想郷では一層脅威を増してもおかしくはない。それをあの怖がりな妖夢がリスクを承知で儀式に乗り気だなんて、どういう心境の変化だろう。

「むっ？」

黙っていたマミゾウがふと眉をしかめ、紙のある一点を指さした。

「なんじゃこれ？ 儂の知る限りじゃ、ここは鳥居のマークじゃったが」

皆の視線がマミゾウの指先に集中する。紙の上部、『y e s』『n o』の間の真ん中。そこにはふにやふにやしたよく分からない、妖夢の半霊にそっくりなマークが描かれていた。

「こつくりさんのやり方は地域差もあったが……こんなマークは記憶にないぞ」

「ああ、まだ言ってますんでしたね」

妖夢は頷くと急に胸を張り、奇妙な名前を口にした。

「今回呼び出すのはこつくりさんに似ていますが、別物なんです。

その名も……」 シラタマ様「

「シラタマ様あ？」

メデイスンが眉をしかめる。妖夢は人さし指をピンと立て、相変わらず得意気に話し出した。

「やり方はこっくりさんと一緒ですが、この半霊のマークが目印です。狐より更に高貴な方なのですよ」

妖夢は見たことがあるかのように言い切ったが、私はシラタマ様なる名前に全く覚えがない。妖夢に限ってデタラメを言ったりはしないだろうが、周りは胡散臭そうな目で彼女を見ている。

「知らないのも当然です。本来は冥界におりますから」

「冥界じゃと?」

「はい。魂魄家の血筋である私だけが降ろせる、特別な神様なのですよ」

特別な、と口に出したあたりから頬を緩ませる妖夢。対して他の連中はふと思いついたように彼女を見つめて、何とも言わずに黙っていた。しかしその目は半信半疑、いやむしろ疑念の色が濃い。

「なあ、それは誰が教えてくれたんだ?」

「幽々子様と紫様です。相談したらこの日の為にと」

「実際に確かめたのか?」

「はい、お二人とその場でやりました。本当に答えてくれたんですよ!」

「……………」

幽々子、紫。その二人の名を聞いた瞬間、私は半ば実情を掴んだ。あの二人が妖夢に

ただ遊びを教える訳がない。大方嘘っぱちだろう。というか、シラタマ様だかなんだか知らないがそんな大層な存在を、それも唯一コンタクト出来る人間へ怪談大会にかこつけて教える事に、彼女は疑問を抱かないのだろうか。

……だが、それをこの場で言えば妖夢の面目が丸潰れになる……。

「さ、さ、時間があったくないですから始めましょう！ 十円玉は私が出しますから！」
私が悶々とするのにはまるで気づかず、妖夢は仕切りたがりの子供のようにはいしゃいでいる。他のみんなも無粋な口出しははばかれたのか、無言で面倒そうに紙へと距離を詰め、置かれた十円玉に手を伸ばす。

……

「……妹紅、お前タバコ吸ってきただろ」

「あー、うん。出かける前に一服」

「マミゾウ、お前も」

「ほっほ、分かるかの？ すまぬなあ」

両肩付近からヤニの匂いが漂う。というのも距離が近いのだ。近すぎる。せいぜい試験用紙程度の大きさのこの紙の上の、たった一枚の十円玉に七人が一緒に指先を置くのだ。必然的に前のめりになって肩を寄せ合う結果となり、両脇に顔があつて振り向くのもままならない。皆で後ろを向けばおしくら饅頭に早変わりだ。

「これ七人全員でやらなくても良かったんじゃないか？」

「うーん、かもしれませんが。でも離しちゃうダメですよ。その人崇られちゃうんで」

「はあ……」

耳元で妹紅のため息。普段ならあからさま過ぎると叱るところだが、今回ばかりは大目に見た。なんせやってみれば分かるのだが、机もなしに床の一点に指を置いて固定するというのが意外にきつい。しかも場所が紙の真ん中ではなく上部の半霊マーク、非対称な場所なのが不公平感を増す。

メデイスンなどは腕が届かないので寝そべって十円玉を押さえている。膝を折って足先を退屈そうにぶつけているのを見ると、うつすら申し訳なくなつた。

「そうだ、万が一イカサマでもしないか、私が見張つておいてやるよ」

赤蛮奇は調子の良い事を言つて、首だけ逃れて妖夢の背後にふよふよと留まる。半霊がもう一個増えたみたいだ。

「さて、まずはシラタマ様をお呼びしななければ始まりませんね。いきますよ……」

妖夢一人だけが興奮冷めやらぬといった表情で息を吸い込む。周りとは対照的だったが、幸か不幸か気づいてはいない。頬が触れるほど間近にあるのに……。

「シラタマ様、シラタマ様。いらっしやいましたらおいでください……」

ふんだばだった、ふんだばだった、ふんだばだった、かーっ！

何だそのかけ声。

口をついて出かけた言葉を押し留め、指先の十円玉に目を落とす。ものは試し、とでもいうように一同のあまり期待しない視線がしばし集中する。そして……。

……
……

動かない。何秒たつても、動かない。十円玉は相変わらず半霊マークの上でピクリともせず鎮座している。

「あれ、おかしいですね……。ふんだばだった、……。かーっ！」

二度目のかけ声。結果は同じである。お燐がほんの微かに指を浮かせて妖夢の顔を窺うのが、一瞬だけ見えた。口もとがニヤついている。

対して妖夢は十円玉を見つめたまま、うーん、うーん、と悩ましげに小さく唸っている。一同の視線はほぼ総じて白けていた。その状況はまるでうろたえる詐欺師のようだったが、この場においてシラタマ様なる高貴な神様を信じているのは、むしろ当の妖夢一人だけである。

ここにきて流石の私も確信した。妖夢の信じたシラタマ様の言葉は、実は幽々子と紫が十円玉を動かしていただけだったのだ。お互いの付き合いが長い彼女たちの事だ、妖夢の知っている事は他の二人も大抵知っているだろう。二人で示し合わせて十円玉を

介し質問に答え、妖夢が『すごい……！』など無邪気に驚く顔が目に見え、私は涙も出なかった。

やっぱり神様なんていなかったね。

「前は動いたんだよね？」

「ええ、引つ張られるみたいにするーつと滑っていったんです」

燐のからかうような口調に、弱つたように話す妖夢。「実際に引つ張られたんだよ」とは誰も言わなかった。言う気も起こらないのだろうか。

指を置いたままぼんやりしていると、急に妖夢がキツと私を見た。そして何やら手の平をズイと差し出す。

その手の意味が分からずしばし妖夢の顔と手を交互に見ていると、妖夢はこんな事を言いはなった。

「多分金額が足りないんですよ。慧音さん、五百円くれませんか」

「ええ？」

唐突な借金の申し込みだ。戸惑いながら目を見返したが、当人は至って真剣である。しかしまさか、こつくりさんまがいのお遊びで金を要求されるとは思わなかった。

「あいにく私手持ちがないんです。さあ、早く五百円出してください」

「ま、待ってくださいよ。今は出先じゃないから、財布は部屋だ」

容赦ない催促について仰け反ってしまった。というか、五百円つてそれはそれで安上がりすぎやしないか。

ぼやきそうになるのを堪えて腰を上げようとすると、横から妹紅が待ったをかけた。た。

「私が出すよ」

妹紅はもんぺのポケットから、継ぎ当ての入った財布を無造作に取り出した。その口を開けて中身を神妙な顔で見つめ、観念したように硬貨を突きつける。

「ここに来てもやはり妖夢である。「すみません」と頭を下げ、ポトリとそれを置いた。「ちゃんと後で返せよ」

「使った後は処分せにやならんかったと違うか？」

「あつ」

「え」

مامィゾウがぼそつと呟いた途端に妖夢がはたと顔を上げ、妹紅の眉が歪む。慌てて私と妖夢が止めに入ろうとしたが、それより早くمامィゾウ、隣、メディスン、赤蛮奇が次々と指を置き、「早く始めさせろ」と目で催促してくる。

なぜこんな時にばかり団結するんだらう。私は思わず顔を覆った。しかし妹紅が物わかりよく指を置くのを見て、私もそれに倣う。今度何かおごつてやらう。

「では……シラタマ様、おいでください……」

本日三度目の呼び出し。二度ある事は三度ある、というか無理なものは無理。そう誰もが諦めかけていた、その時……。

なんと！ はじめて硬貨が動いたのだ！ そして……。

”いいえ”に止まった。

「……………」

これはどうした事だろう。断られたのだろうか。

「シラタマ様、いらっしやいましたら教えてください……」

妖夢が質問を変えてみる。また”いいえ”。

「ねえ、これって誰が答えてんの？ シラタマ様来てないじゃん」

メデイスンが硬貨を眺めたまま尋ねる。妖夢はむう、と短く唸り、自信なさげに答えた。

「多分、仲介人のような方がいらっしやるのでしよう。ここで失礼があつてはいけません」

「ふーん……」

メデイスンの返事は棒読みだった。恐らくメデイスンが硬貨を動かしているのだと、その場の妖夢以外が察した。

「では今度こそ……。シラタマ様、いらっしやいましたら……」

四回目。いじらしい程の祈りだ。その念が通じたのか、硬貨が初めて別方向に移動する。

『う』『ん』。

「やった！ 来てくれましたよ！」

『ち』。

妖夢は指だけ離さず器用に膝で跳ねて喜んだ。硬貨が最後に『ち』を示したのも、メイスンがなんとなく残念そうな顔をしたのも、気づいていないようだった。周りは「良かったねえ」と形ばかりの賛辞を送っている。

「こうなればこつちのものです。仕事恋愛お悩み相談、とりあえず慧音さんどうですか」「私か？ ふーむ……」

とりあえず妖夢が騙されているのは都合が良いにしても、いざ質問となると急には出てこない。どんなのが無難だろうか。

「じゃあ……私が結婚できるかどうか、なんて分かるかな」

「結婚。まあいいですけど……。貴女ならそんな心配しなくても。むしろ他の方々のほうが……」

「いや、構わん。私について、だ」

「はい。では」

内容は適当に言った。とりあえず他人については触れない方が良さだろう。勝手な回答を出されて『五百円玉を動かしたのは誰だあ!』などと怒りだす者が出たりしかなない。私なら多少ふざけた答えでも我慢すればいいだけの話だ。

「シラタマ様……慧音さんは将来結婚できるでしょうか……。教えてください……」

ほんにやらまか、ほんにやらまか、ほんにやらまか、くわーっ!」

……もう突っ込まんぞ。

心の中で呆れて、どうせ誰かが動かすのだからと放心していた。しかし、いきなり腑抜けた私の体を引っ張る程の勢いで指先の硬貨が滑っていく。我にかえって視線を戻した時には、硬貨は既に移動を終えていた。

かくして、“いいえ”に。

……私は生涯独身でいる運命だというのか。いやそれはともかく、あんな強引に動かすだなんて、一体誰だろう。七人もいては感覚で犯人を掴むのはまず無理だ。そう思っ
てキョロキョロ視線を巡らせると、妹紅の横顔が目に入った。なにやら苦悩に満ちたす
ごい顔をしている。眉にシワを刻み、口はきつく結んでシラタマ様の紙を凝視してい
る。

……思うところでもあるのだろうか。私の結婚が妹紅に何故そんな表情をさせるの

か、首をかしげたがついぞ分からない。

「あれ……？　これは予想外の結果ですね」

「はは、可愛いげがないとかよく言われるよ」

ただ一人真に受けて目を丸くする妖夢を、笑つてごまかす。ハナから答えなど気にしていなかった。

しかしそこでマミゾウが横から口を挟んでくる。

「高望みでもしてるんじゃないか？　謙遜はプライドの裏返しとも聞けど」

結婚問題を引つ張るのが楽しそうだと思つたのか、マミゾウはいやらしく笑っている。妖夢はそこでハツとなつて姿勢を正し、私に向けてこう言つた。

「知らず知らずに、殿方に無茶なものを要求しているのかもしれない」

「いや、もういいよ。気にしてない」

「そう言わずに。こんな機会ですから。えーと、シラタマ様。慧音さんは殿方にどんな理想を……」

ニコニコしておせっかいを焼く妖夢。ちなみに自分ではそこまで高望みはしていないつもりだ。少し知的で家事を手伝ってくれたら言う事はない。なんなら生活の中で合わせていくのも一つの手法。

あまりこだわらない。最終的にそう言えば丸く収まるだろう。そう思っているうち

にまた誰かが硬貨を動かしていく。

『ふ』。

……不倫しない？

『と』、『い』、『ち』。

ふといち、布都と一輪のように仲良く？ ……いや、まだ動く。

『ん』、『ち』……。

『ん』。

「太いちん……ち」

妖夢が声に出そうとして言い淀み、うつむいて真っ赤になる。気づけば誰もが気まずそうにしながら好奇の目で私を見つめてくる。

「うわあ……先生、ひくわー」

「……ま、無意識な願望じやろうし、そう言うな」

「い、意外ですね……」

「待て、待て！ これは何かの間違いだ！」

口々に勝手な事を言われる。いくら答えは気にしないといても、これはあんまりだ。よりによつて各所から人を集めたこの場で風評被害も甚だしい。

「私は男性をそんな不純な目で見てはいない！」

「そうだそうだ、慧音はそんなスケベじゃねえぞ！」

「だってー、天下のシラタマ様が言つとるんじゃしー」

「神様が嘘をつく訳ないじゃーん。ねー」

妹紅が援護してくれるが、シラタマ様の威光を前に私の弁解はまるで通じない。所詮お前たちも信じちやいない癖に、こんな時だけ……。

仕方ないので誰彼かまわず恨みを込めた視線を送ると、笑いを押し殺す憐の姿が目に入った。犯人はお前か！

「ええつくそ馬鹿馬鹿しい！ 何がシラタマ様だよ！」

とうとう妹紅が怒りだし、シラタマ様の紙を払いのける。それを見て血相を変えたのは妖夢だった。

「ちよ、何やってんですか！ 儀式を勝手にやめたら崇られますよ！」

「んな訳ねーだろ。こんなもん皆信じちやいないよ」

頭に血が上ったせいとか、ついに妹紅がぶつちやけてしまった。青ざめていた妖夢の顔が虚をつかれたそれに変わり、皆がそろそろと顔を見合わせる。

妖夢が未だ事態を呑み込めずに私の方を見つめてくる。これは私が説明すべきだろうか。どいつもいざとなると口を閉じて事実を白状すまいとする。

「すまん、妖夢……。私たち、シラタマ様がいると見せかけていただけなんだよ……」

「そ、そんな。じゃあ始めから騙していたんですか？」

「お前があんまり純粹に信じているから……つい……」

手について詫びたが、妖夢はなかなか戸惑いが抜けきらず、自分が用意した紙を見つめていた。妹紅はさつきまでの怒りようと打って変わって大人しくなり、最後に笑って種明かしするつもりであっただろう連中もいざこうなるとかける言葉が見つからないようだ。

「……うそだ」

不意に妖夢がぼそりと呟く。肩を落とし意気消沈したかに見えたが、その声にはまだ意地が残っている。

「貴女たちには、ゼーったいバチが当たりますからね！ そろって私をバカにして！」

「ああいや、悪かったって……」

「きつとシラタマ様が出ますよ！ 生け贄にされても知りませんからねっ」

妖夢はやけになつてまくし立て、口を尖らせる。生け贄とはまた物騒な負け惜しみだ。表情と全く不釣り合いである。

やれやれ、こりや帰つたら幽々子も大笑いするだろう。いまやシラタマ様とやらの不気味さは一人も感じておらず、拗ねた妖夢をどう宥めるか、言わずともそんな思考が皆の頭に浮かんでいたのが分かった。

しかしその時。不意に。

ドスンッ！ と畳に全く遠慮しない、何かが落ちたような音がした。皆が朗らかに笑っていたその顔を一変させ、音のした場所に注目する。妖夢の隣、赤蛮奇が体を投げ出したように倒れている。

貧血か？ そんな考えが形になるよりも早く。

続けざまにごとんつ、とさつきより小さな音がした。今度は妖夢の真後ろで。

「きびやっー！」

妖夢が高い悲鳴をあげる。背後で浮かんでいた赤蛮奇の首が、突如落っこちて動かなくなつたのだ。支えるものの無い生首は無機物のようにゴロゴロと、生氣なく畳を転がる。

一体、どうしたというんだ？ 部屋の中には始めから今までこのメンバー以外いなかった。そして誰もが目を見開き、演技ではない困惑を見せている。

まさか、本当に祟りが？ 儀式を途中でやめたからか、神様を侮辱したからか……。まるで本気にしちやいなかつたが、この状況を見ると赤蛮奇は本当に生け贄になつたのかも知れない。

全員が息をひそめ、動かない赤蛮奇の体と頭を見つめている。悪ふざけの反動か、メデイスンなどは青くなつて隣にしがみついていた。

その重苦しい空気が一分、二分と続き……。

赤蛮奇の首が、ひとりでにグルンと視線を動かす。

「うわっ!」

妹紅がカエルのように飛び退いた。私は気を引き締め、赤蛮奇の首とにらみ合う。起きたからといって油断はならない。怪異がとりついていたりする可能性もあるのだ。

時計の針の音がやけに大きく聞こえる。首すじをつうつと汗が伝った。赤蛮奇はそんな私をどろりと暗い瞳で見つめ、口をがばりと大きく開けると……。

「ふああ」

そんな気の抜けた声を出し、こんな事を言った。

「ごめん、退屈でつい寝ちゃってたよ。」

「……もう次の話かい?」

六周目・三話目―赤蛮奇

「おや、次は私かい。ま、呼ばれたからには話すよ。私は赤蛮奇。よろしく。里で暮らしてはいるけど、寺子屋にくるのは初めてだな。

知り合いは一応いるんだけどねえ、お互い、普段ひっそり暮らしているからあちこち出向いたりはしないんだよ。用事でもない限りは。

特にあの神社なんてのは、ね。あのおつかかない巫女にはとてもじゃないが会いたくない。妖怪の私にはありがたみなんて全然分かんないんだ。

……でも、実は以前一度だけ行った事があつたんだ。それでちよつとゾツとするものを見てさ。

巫女に襲われたんだろって？ いや、これがまた、そうじゃないんだ。もつと別の

……多分聞いたら驚くだろうさ。

もう、しばらく会っていないあの子の話……。

―

皆、逆さ城の異変の事を覚えているかい？　もう何だかんだ昔の話だけど、私にとつちや印象的な日だった。なんとたつていつもは傍観を決め込んでいた異変騒ぎに、曲がりなりにも参加しちやつたんだからね。巫女や魔法使いに挑むなんて、後にも先にもアレだけだろうさ。

もつとも、私も自分の意思で参加した訳じゃない。あの異変の裏で動いていたのが、少なくとも二人いたんだ。

一人が少名　針妙丸（すくな　しんみょうまる）。一寸法師の子孫らしくてね、何のお節介か、打ち出の小槌とかいう秘宝を使って弱小妖怪を凶暴化させたんだ。

真意では弱い連中が下剋上でできるように、なんて考えていたらしいけど、知つての通り失敗に終わった。捕まってみると血筋のせいかちつこい姫様でさ、とても一人で異変を考えつくような子には見えなかった。

そう、吹き込んだ輩がいたんだ。そいつが天邪鬼の鬼人　正邪（きじん　せいじゃ）。こいつがまた大層な野望を持っていてさ、『幻想郷をひっくり返す』なんていうんだ。結果は散々なものだったが、本人は本気だったようで、例の小槌の力も入念に計画して使わせたんだ。

まずは少名に幻想郷を『弱者が虐げられる厳しい世界だ』と一方的に吹き込んで味方に引き込んだ。もちろん正義感からなんかじゃない。小槌の力は小人の一族しか使え

ないものだから、大袈裟に伝えたのさ。

しかも、小槌の力には代償がある。一度は幼児くらいになった少名の背丈が、今じゃすっかり小人に戻ってしまったているのもそのせいだ。正邪の奴、そのデメリツトの事を黙っていたんだよ。少名はいつそれを思い知ったか知らないが、結局何も得られずに小槌の反動を受けるはめになった。やっぱり素直すぎたんだろう。正邪も恐らくそれを見越して利用して……最後は一人で逃げ出しちゃった。二人とも今どこにいるんだか、私には分からない。

しかし、少名の方には一度会った事があるんだ。異変が済んですぐは、彼女は博麗神社に居候していたからね。私も小人つてのが気になって、巫女の留守を狙ってこつそり見に行つた。

最初は警戒していたよ。いくら噂でもう力は無いと聞いているとはいえ、会うのは初めてだったし。もし巫女のいない状況で凶悪な本性を見せられたらどうしよう、そんな事まで考えていたんだ。

こつそり裏手に回ると、縁側に小さな箱が見えた。虫かごを豪華にしたような……いやむしろ、お人形の家に似ているかな。そんなのがポツンと置いてあった。

恐る恐る近づいて、箱を叩いてみる。さあ鬼が出るか蛇が出るか、と身構えていたら、箱についていた小さな扉がキィ、と開いた。

現れたのは、まあ可愛らしい手の平サイズのお姫様。着物はハンカチから作れそうなくらい小ぢんまりしていて、オシャレか分からないが頭に被ったお椀が重そうなくらいに頭をスツポリ覆っていた。その下からまん丸い瞳をクリクリ動かしながら、初対面の私をじいつと見る。

『だあれ?』

キョトン、とした様子で、警戒心はほとんど感じさせなかった。件の異変で疑心暗鬼にでもなってるかと思つたが、思い過ぎだったようだ。

気を取り直して、天邪鬼にお世話になつた一人だよ、と自己紹介すると、少名は意外なほどすんなり打ち解けてくれた。その節はご迷惑をおかけしました、なんてチヨコンとお辞儀して、自然と最近はどうしているか、なんて世間話を振ってきたんだ。

革命の重荷が解けたからか、神社以外の自分が知らない場所はどんなのがあるのか、人懐こく聞いてきたよ。私も人里以外あまり知らないんで、おざなりな受け答えになつちやつたけど、それでも彼女は楽しそうに聞いてくれた。

『いいなあ、私も普通に歩けたらなあ』

少名は惜しそうに呟いた。巫女が出てくれないのか? と尋ねたら、『小槌の魔力が消えたから、大きくなれないの』と笑つた。以前は体を人間並みの大きさにして自分の足で歩いていたらしいけど、小槌と一緒に異変まで幻想郷規模で起こしちゃつたから

ね。しばらく小槌は使い物にならない上、少名は手の平サイズのままだ。

『後悔してない?』

ふと気になって聞いてみる。あの天邪鬼に関わらなきや、大事は起こさず平和に暮らせていたかもしれない。まだ幼いのに、嘘をついて裏で利用した正邪を恨んだりしていたら、気の毒だ。

ところが、彼女は事もなげに言った。『気にしていない』って。

きつと穏やかな子なんだろう。お人好しとも言えるかもしれないけど、それは私が立ち入るべき所じゃない。『そうか』とだけ返して、ちようど日も落ちて来たし帰ろうかと腰を上げた。

その時だ。

少名の住んでいた箱に、ガンと手がぶつかかった。存外勢いがあつてね、当たった拍子に箱が転げて、中の小さい家具とかがポロポロ飛び出した。

『あ、ごめん!』

慌てて謝り、拾い上げる。少名が使うサイズだからうっかり欠けていたりしないだろうかと思つて、一つ一つ慎重に全面を確かめた。少名は『いいよいいよ』なんて言つただけど、はいそうですか、つて訳にもいくまい。

そうして帰り際にいちいち豆粒みたいな家具をじっくり見ていた。すると、最後に一

個だけ、妙な物が転がっているのを見たんだ。

『なんだこれ?』

それは一見、何に使うのかよく分からなかった。壊れたにしては周りに破片もないけど、箱を半分に割ったような形をしている。よくよく見ると、未完成ではあったけど、最初に見た少名の家を小さく小さく……ちようど少名から見た虫かごくらの大きさの箱だったんだ。

一体何に使うんだろう、と再度首をかしげる。その大きさのカゴに入るなんて、ダメかシラミか……まさかそんなものを飼ったりはしないだろう。指で摘まんだカゴを目を凝らして、穴の空くほど見つめていると、少名が待ちぼうけしているような表情で見上げている。

我にかえって返してやろうとすると、少名は不意にニヤリと笑って、こんな事を口にした。

『ね、その中。誰を入れると思う?』

『は?』

誰、というからには人を入れるんだろうか。しかし私にはついぞ親指程度もない人物なぞ思い当たらない。『さあ』とだけ答えると、少名はたださえ小さいのに声をひそめるようにして言った。

『正邪だよ。あの天邪鬼』

『ええ？』

その言葉に私は面食らった。いくらなんでも、小人でもない妖怪がこんな中に入る訳ないだろう。そう思つて、『冗談？』と聞いたら、少名の奴、その反応を予想していたのか妙に楽しそうにこう言つたんだ。

『今は無理だけど、小槌を使えば小さくできるよ。何年かかるか分からないけど……』

空想してみた話だつたけど、妙に落ちついた少名の声色は、かえつて本気なような不気味さを感じさせた。確かに小槌で体を大きくは出来たんだ。逆も無理ではないかもしれない。けど本当にやる気かどうかは、とうとう聞けなくて、代わりにこう質問してみた。

『何故、そんな事を？』

朗らかでいるように見えて、実は虫かごに閉じ込めるほど恨んでいたのか。そんな予想がそぞろに浮かんで冷や汗をかいた。

だけど、少名の答えは、予想だにしないものだった。ふつと寂しそうに虫かごに目を落として、こんな事を言つたんだ。

『この中にずっと閉じ込めて、ずっと見てるの。そうしたら、もう隠れてひどい事できないでしょ？』

そうやって、少名はニツコリ笑った。私は何も言えずに、夕陽に照らされて陰のくつきりできたその顔をただただ眺めていた。

それからほどなくして、少名は神社からもいなくなつた。私はあれ以来何をしているか、特には知らない。

まあ、どこかで平和に暮らしているとは思うんだよ。今でも、恐ろしい事を実際にするような性格には思えないし。

ただ……今まさに、少しずつ魔力を回復しているあの小槌……。いつまでかかるか分からないけど、もしアレが完全に元に戻った時、彼女がどんな行動に出るか。

それがちよつと、私は気がかりさね。

私の話は終わりだよ。これで半分くらいかな」

六周目・四話目——二ツ岩マミゾウ

「お、四番目は儂か？ よしよし、ならば話させていただくとするか。

儂は二ツ岩マミゾウ。命蓮寺という寺で普段、居候しておる。弟子でも何でもないと
いう立場ゆえ、すこし浮いているというか、身内として見られたり見られなかったり
しとるんじやがな。

とはいえ、それほど疎外感を感じとる訳でもない。なんたつてあの寺、住職の人柄の
せいかわらんがやたらと変な奴が集まっていたのう。自称御仏の使いのネズミやら山
彦やら、外からは飛鳥時代の聖者たちとか抜かす輩が蘇り、ちよつかいをかけて来よる。
お陰で毎日やかましいが、退屈しない日々さ。狭い幻想郷じゃ熾烈な縄張り争いがあ
るわけでもなし、外の世界から来た身としてはノンビリしておるくらいさ。

暇な時は寺の外の者をからかったりしたものじや。中でもさつき話した飛鳥時代の
聖者たち、その一人に物部布都（もののべのふと）という奴がおつてな。今は豊郷耳神
子（とよさとみみのみこ）という仙人に付き従つておる。生前は道教を信奉し、当時権
勢を奮つた物部一族の中でもちよいとした曲者だったらしいが、まあ儂にはそんなのだ
うでもよくて。

そいつ、結構な怖がりだな。自分ももはや人間ではないというに、妖怪やその力、呪いや崇りに毎日飽きもせず震え上がるんじゃないや。海坊主の話で怖がり、トイレの花子さんで怖がり、赤い部屋、なんて話でも腰を抜かしていたのう。

ある方法で時を経て、仲間と共に幻想郷に生き返ったらしいが、噂では昔からそうだったんじゃないと。仲間もクスクス笑っておったよ。

で、つい先日もふと懐かしいオカルトを伝えた。

『ノストラダムスの大予言』を知っておるか？ 元々は外国の医師が中世に書いた予言なんじやが、それが時代の流れをピタリと言い当てているとして、ある日本人が訳してまとめてから全国を巻き込む勢いで広がっていった。

後の時代に騒がれる予言なんて、得てしてこじつけだらけのヨタ話だと思うんじゃないや、当時の昭和の社会背景のせいなのか、ちまたでまことしやかに語られた。中でも、知らぬ者がおらず、誰もが恐れた、衝撃的な一説があつたのじや。

” 1999年、七月。恐怖の大王が空から降ってくるだろう。アングルモアの大王を蘇らせるために。”

これが世界の滅亡を示しているとして、皆が突然の終末を想像した。恐怖の大王とは何なのか、と人々は恐れおののき、様々な憶測を巡らせた。彗星の激突、公害、核ミサイル……。時が経つても狂乱は消えず、それどころか20世紀末には世界人類が死ぬと

思い込んで、財産を使い果たす阿呆まで現れる始末じゃ。

……で、結論からして、世界は滅亡しなかった。1999年なんぞもう20年近く昔じゃ。未だに本当は〇〇年の事だ！　なんて騒ぐ輩もおるが、流石に大多数の人々はいつまでも覚えているほど暇ではない。結局カビの生えたオカルトって扱いに落ちついたよ。

とにかくこんな経緯を話して、最後に『現代人が忘れ去った恐怖の大王が、今度は幻想郷に降ってくるかもしれないぞ』なんて脅かしてやったのよ。

そうしたら、じゃ。いつものようにひええ、と青くなるかと思つた布都が、その時に限つてふと思ひ出したように深刻な顔になり、口を結んで目を伏せた。

なんじゃ？　と思つて首を傾げたが布都はいつまで経つても顔を上げようとしな。まさか真剣に恐れているのか？　と眉をひそめていると、布都は不意に儂をおずおずと見つめ、不安そうにこう言った。

『なあ、こんな話をしたら笑われるやも知れぬが……』

そう前置きし、ポツリと、こう聞いてきた。

『我の昔話を、聞いてくれぬか？』

……まだ、仏の教えが海の向こうから伝わり間もない頃。布都の一族を含めた権力者たちが日本の神々と大陸の仏をそれぞれ掲げて争いあっていた。そんな時代の話じゃ。

厩戸皇子、聖徳太子と呼ばれた天才がおった。十人の話を同時に聞き、鋭い洞察力で未来まで見通す。そのおとぎ話じみた人物が、他でもない豊郷耳神子じやつた。

表向きには仏教を広めた功労者で、反面その数々の伝説から実在そのものまで疑われておる神子じやつが、実態は少しダーティなものじやつた。

彼女……いや、彼か？ 神子の奴は生前から人並み外れた能力があつたが為に、誰もが平等に死ぬ事に不満を抱いたという。そこで大陸から訪れた邪仙に仙術を学び、死を免れ人外の力を得ようとした。

むやみに欲をかくなど教える仏教とは相容れない姿じゃ。所詮神子にとって、仏は人々を操る手段に過ぎなかつた。為政者として仏教で国を治めつつ、自分は大陸の道教の修行を着々と進めていった。

そしてついに、神子は不死になる方法を手にいれた。一度自ら命を絶ち、魂を別の器に移して復活する……戸解仙となる法じゃ。それも奴はただ復活するつもりではなかつた。神子は当時は国中に広まり穏やかに信じられた仏教も、そう遠くないうちに民の心からは離れていくだろう、と見込んでいた。

その時こそ、自分が救世主として復活し、不死のまま改めて世を治めよう。それまではいつまでになるか分らないが、長い眠りにつく……。以上が神子の計画じやった。

その計画に、他族の者もこつそりと乗った。それが件の物部布都じや。布都は対立していた物部の一族でありながら神子に心酔し、共に尸解仙として復活したいと持ち掛けた。神子もそれを受け入れ、政治や宗教の動乱の裏で、彼女らは次なる世界を夢見て眠りについた。

ただ、布都はやはりその当ても怖がりだったようじや。眠りの直前になって、神子に向けてこんな事を言った。

『太子様、我が次に目覚める時、世界はどうなっておるでしょう？』

期待が半分、恐れが半分。そんな気持ちで問うてみる。次に目にする世の中は、果たして自分達を暖かく迎えてくれるか、はたまた降って湧いた邪神のごとく拒絶するか。いつになるかも分からぬ復活ゆえ、布都の頭には理想とその正反対の事態まであらゆる予想がこつた返していた。

きつと私がなんとかします。そんな風に言えば安心もしたじやろう。ところが神子は表情をこわばらせ肩を小さくする布都が面白かったのか、よせばいいのにちよつとからかいおつたのじや。

『さあ。乱れた世なのは間違いないでしょうが……。ひよつとしたら、世の破滅の間際

だったりして……!』

『や、やめて下さいよお!』

『はっはっは、冗談ですよ』

子犬みたいに叫ぶ布都を見て笑いながら、神子は眠りの儀式の為にその場を去った。布都にはその背中が、最後に見た生前の太子の、最後の姿となる……。

それから目を覚ますのは、実に千年以上も先。幻想郷に流れ着いた時じや。

しかし、布都には依然として不可解な、奇妙な記憶があるのだと言う。

……眠りについてからどのくらい経ったか。布都は一人、ぼんやりと目を覚ました。起きぬけの意識の中、何度かまばたきしたが光は入ってこない。

背をつけていた体を起こすと、油を差していない機械のように重い。それでもこらえて踏ん張ると、ドロリ、と手に泥を掴むような感触がした。

『ひっ!?!』

慌てて地面を見ると、そこには草の一本も生えておらず、ただ黒々とした大地が広がっていた。目を擦って間近に睨んで見ても、石ころすらない。手で恐る恐る触れてみると、墨が腐ったような黒いドロドロしたものがまとわりついて、しかしいくら触れても手のひらや体のあちこちに、一片たりともその黒いものが付着した様子はなかった。

脚を震わせながら立ち上がると、辺りには同じように自然の気配がしない、ただ黒く

塗り潰したような異様な地面が。いやそれどころか、空も同じように闇に埋もれ、太陽も、雲もちらりとも顔を見せず、地平線、大地と空の境目すら見えない。光の差さない穴の中に落ち込んだかのような、底冷えする空間がそこにはあった。

『なんじゃ、これは……。そうじゃ、太子様は！』

混乱する頭の中で、自分が目覚めているなら神子もいるはずだと、布都は闇の中を走り出した。相変わらず足にはぬかるむ感触が伝わるものの、足音は少しもしない。ただ段差も高低差もない平坦な道が、代り映えせずに続いている。

景色もずっと黒いまま。人影も見えてこない。布都は泣きそうになりながら、どこに向かっているかも分からず脚を動かし続けた。

その時。急に。

『うっ……！』

頭をつんざくような頭痛がしたかと思うと、天地がひっくり返るかのように体の重心が失われていく感じがした。前触れもなく空高くに投げ投げられたかと思うほどに意識が空転し、全身を弄ぶ空気にあばらが二、三回軋んだ後、布都はドサリと背中から投げ出された。

『ぐはあっ!?!』

腹から濁った悲鳴が飛び出し、布都はひっくり返ったカエルのような格好でしばらく

目を回していた。いまだ意識はハッキリとせず、チカチカする視界がイヤでしばらくまぶたを力なく閉じていた。

そうしていると、耳の方に何やら久しい感覚が届いた。ヒユヒユと寂しげな音がして、耳たぶが冷たくなってくる。

風の音。そういえばさっきまでの空間には風一つなかった事を思い出し、意を決して再び目を開ける。するとその先には、分厚い雲に覆われてはいるが、確かに見覚えのある空があつた。

しかしどうした事か、砂がかき回されるようにネズミ色の雲が蠢く中には、太陽も月も顔を出さず、夜か昼かも分からぬほど暗い。

嵐でもあるのだろうか。そういぶかしみながら体を起こす。今度はちやんと土の手触りがした。とりあえず現実には違いないと辺りを見渡す。すると、手にコツンと固いものがぶつかつた。

布都は妙な感じがした。最初は石かと思つたが、どうも違う。視線を移さず手だけでペタペタとそれを確かめると、手のひらに収まらないほど大きく、あちこちに凸凹や穴がある。

ふつ、と嫌な予感がして背筋が強ばつた。薄気味悪いが、思い当たるものがある。

生唾を呑みこみ、ソロソロと触っているものを見ると、ぽつかりと開いた骸骨の眼孔

と目が合った。作りものではない。薄汚れて生々しいシャレコウベ。
『ひいっ！』

途端に悲鳴をあげてバタバタと駆け出す。駆ければ駆けるほど目の前にはいくつも骨が写った。全身やら顔や手足の一部やら。中には無惨に砕かれたものまで野ざらしになり、周囲には埋められた跡さえ見つかからない。

更には、それに群がる人間のような者達まで目につき始めた。引き裂いて野にさらしたボロのような布をまとい、その隙間からはだけける体は今にも倒れそうなほど痩せ細り、あばらが浮き出て、手足が枯れ枝のように弱々しく、誰も彼も髪が無造作に伸びて顔を隠している。

その髪に隠すようにして、人々はうつ向き土に汚れた骨をかじっていた。

『おい、お主！ 答えんか！』

布都が声の枯れるほど呼びかけても、人々は目もくれない。布都は焦燥感にまみれ、必死にその場から走っていった。

頭に浮かぶのは飢饉、天災、戦争……貴族の屋敷にしようが決して逃れる事の出来ない苦難、穢れの数々。

どこかに神子がいる筈だ。彼ならなんとかしてくれる。それだけを思つて足を進め、先々にうずくまる餓鬼のような人間を押し退け、蹴飛ばした。そうしてついに、布都は

目の前に見覚えのある姿を見つけた。

『太子様!』

そこには物憂げな目で自分を見つめる神子がいた。何故だか体つきは変わっていたけど、消えない面影と漂うカリスマはしっかりと本人だと教えてくれる。

『太子様!……無事ですか!』

叫びながら取りすがる。しかし神子は小さく頷くものの、何も言わない。あたりは相変わらず日の光も見えず死にかけて人間達が這いずり回っているのに、それについて憐れみの言葉一つかけなかった。布都も段々と不安になってくる。

『……太子様? どうかなされましたか?』

『……布都。どうやら、私たちの予想は甘かったようです』

やつと口を開いたかと思えば、要領を得ない言葉。布都が首を傾げると、神子はどんよりとした空を見上げ、独り言のように呟いた。

『いつか言いましたね。次に目覚める時は、世の破滅の間際かも、と……』

確かに、聞き覚えがあった。しかしそんなもの、お互いに冗談のつもりだったはず。だがどうにも、その時の神子の目は諦めきつたような、見たこともないものだった。

『……って、冗談を。元々世を変えるために、我々は目覚めようと……』

布都は笑顔をひきつらせながら、あの時のような冗談を期待していた。しかし神子は

首を横に振り、一言だけ、こう言った。

『もう、遅いのです』

その瞬間、地平線から闇を突き破るようなまばゆい光が差し込んだ。布都は目が眩むのをこらえ、どうにかその光を捉えようとする。しかしその目に映ったのは、信じられない光景じゃった。

さつきまでうずくまっていた人達が、次々と光に吞まれ、跡形もなく消えていく。骨すら残らずただただ白い眩しさが広がり、迫ってくる。

『た、太子様!?!』

慌てふためく布都をよそに、神子は清々しいほど微動だにせずに、まっすぐ光を見つめている。

どうしたらいい。そんな判断をする暇もなく、布都は光から逃れようと踵を返し、走り出していた。しかしその直後、布都は地に伏す人に躓いて、転んでしまった。

『あうっ!』

血が出たのか、膝に生暖かいものが伝う。その痛みをこらえて立ち上がろうとするのを瞬く間に光が包み、布都は思わず目をつむる……。

そのまま、意識が遠退いてしまった。

……それから、長い時が経ち……。

布都は幻想郷に目覚めて直後に、同じように復活した神子や邪仙、怨霊の仲間達に迎えられた。最初は、あの悪夢のような光景を夢だと思っていたらしい。あまりにも荒唐無稽すぎたからの。

しかしある時、布都は膝の部分に古傷を見かけた。あの時、光に吞まれる直前に転んで負った、小さな傷。

自然と当時の風景を思い出して、神子の側近だった仲間達にふとこう漏らした。

『あの復活は、一体なんだったのじやろう……』

するとその時、談笑していた仲間達が、一斉に目を丸くした。あれだけの凄惨な光景だ、無理もあるまい……。布都はそう思ってたため息をつく。しかし。

『復活って……いつの事ですか？』

『まだ寝ぼけているのか？』

『な、なぬ？』

意外にも返ってきたのは要領を得ないという返事。キョトンとする彼女らに、布都は記憶を元に聞いたです。

『いや、他に一度目を覚ましたはずじゃ。お主らも知つとるじやろ』

『……いえ、存じ上げませんわ。仏教は存外長続きしましたし』

『だから寝ぼけてんだって』

再度確かめても同じ。しかしその側近たちは怨霊や邪仙という、尸解仙とは別の存在たちで、眠っていた自分とは違い絶えず歴史を見続けていたはずじゃった。しかも自分達の復活を前もって知っていた仲間である以上、神子が目覚めるであろう情勢を見逃すなど、考えにくい事だった。

『しかし、我は確かに……』

尚も言い張ろうとしたその時。

視界の隅に神子が映った。彼女は人さし指を口に当て、微笑んでみせた。『あの時の事は秘密にしましょう』とでもいうように。

神子は確かにあの風景の中にいた。しかし他人には話しても無駄だというのだ。どこまでも、覚えがないという者達に……。

それから久しく、布都はその目覚めの記憶を口外しなかつたという。しかし心の中で、ある恐ろしい推理が生まれていた。

もし、目覚めた時代が、世の破滅の時期だというのが本当だったとしたら。

あのまばゆい光は、世界が終わって『作り直される』場面だったのでは、という事だっ

た。

無茶な想像ではあったが、自分達が一度復活したにも関わらず、その事実を自分と神子の二人だけが共有している。その限り布都は、破滅した方の世界が無かった事にされたのではないか、という疑惑が抜けないのだという。

……さて、この話を信じるか信じないかは任せる。まあヨタ話と思ってくれて構わないがの。

ただ……例のノストラダムスの予言な。あれを信じて予言の日を過ぎ、『おお、世界は滅びなかったぞ！』と安心した奴らがいたようじゃが……。

ほんの少しも、事実が入れ替わっていたり、無かった事にされてやしないじやろうか？ 同じ世界が変わらず続いているだなんて、一体誰が保障できるかのう？

恐怖の大王は、本当に世界を滅ぼしていたかもしれないぞ……？ ま、お主らには関係ないか。

儂の話はおしまいじゃ。少しは涼しくなったかの」

六周目・五話目―藤原妹紅

「……ん、次は私か？　これで、えー……五人目か。少し自信ないが、まあやってやるさ。」

私の名前は藤原妹紅。普段は迷いの竹林に住んで、道案内なんかして気ままに暮らしている。とはいえ、暇じゃないんだぜ。迷いの竹林ってのはその名の通り道に迷いやしくて、案内だけでもわりと仕事になるんだ。

ま、あの場所は一面的竹だらけで同じような景色ばかりだし、おまけに竹ってのはすぐ成長するからさ、道がいつのまにか竹に塞がれたりして、慣れた奴じゃなきゃ確実に出られなくなるんだ。あげくに妖怪に食われてあの世行き……。そんな危ない場所だよ。

で、そもそも。そんな竹林になんだって入りたい奴が何人もいるかというと、だ。

奥の方に腕の良い薬師がいるんだ。八意　永琳って女なんだけどさ。そいつが永遠亭って大きな屋敷を竹林に構えて、一種の病院みたいな仕事をしているんだ。

以前はあんまり他と関わらないようにしていたんだがな。今では人間とも少しは交流を持つとう、なんつって……里の医者には治せなかった病人や怪我人を、得意の医術で

あつさり治してみせた。それだけでなく、小間使いに薬の訪問販売までやらせて、おまけに低価格、支払い延期も可、ときた。

こうなれば評判は良くなるに決まっている。最初は怪しんでいた里人たちも段々と頼りにするようになって、私の仕事も増えているって訳よ。

ただ、数が増えると変な事も起きるもんでさ……。いや、実際にあつたんだよ。

有名な話じゃない、噂にもなつてないけどね。……その理由は聞いてもらえたら分かると思う。

お化けの一つも出ない話だが……。

あれはもう……四ヶ月くらい前か。その日は案内の依頼がない日で、のんびり竹林で筍でも採っていたと思う。

迷いやすい場所といつても私にとつちや隅々まで通つた庭みたいなもんで、人間が普段、滅多に立ち寄らない場所まで踏み込んで採りまくつた。実際そんなに好きじゃないんだけど、その辺に採り放題つてくらいにたくさん生えていたら、根こそぎ持つていきたくなくなるじゃない。案内がなくて時間も余っていたから、ここぞとばかりにあちこ

ち集めて回っていった。

で……昼の二時を回ったくらいかな。いいかげん籠もいっぱいになって帰ろうとした。

が、振り返ったら広がっているのはまるで道なき道。夢中になっていたから気づかなかつたけど、竹やぶは場所によつちや笹や丈の高い草に囲まれて、昼間でも薄暗いもんなんだ。日もそこからは落ちる一方となれば、慣れた場所でもなるべく踏み込みたくはなかつた。

だから、一旦広い道に戻ったんだ。人間を案内する時にも使う、本道へ。里からの通り道に繋がっていて足跡もまばらにあるくらいの場合に、藪を抜けて私が出た時だった。

「きゃっ!」

自分のではない、甲高い悲鳴がした。まさか誰かいるなんて思いもしなかつたから、私もビックリして目の前を見直す。

そこには、20そこそこの若い娘が、一人で立っていた。見たところ妖怪と戦えそうにもない、か弱そうな子だった。

「悪い……アンタ何してんだ?」

「ああすいません、妹紅さんですよね?」

質問とは関係ない言葉が返ってくる。とりあえず自分は妹紅だと名乗ると、娘はわざとらしく縮こまって、頭を下げてこう言った。

「永遠亭への道を教えてもらいたいですけど……」

その頼み自体はよくある内容だった。しかし、妙なのは、見るからに一般人であろう娘が、一人で竹林に在ることだ。里に住んでる人達って、例外もあるけど大抵は慧音を介して依頼を送ってくる。理由は言わずもがな、竹林の私の家を探して迷子になったら本末転倒だからさ。現にこの時も私が見つけなきや一人きりのままだったんだぜ。

念のため連れがないのを確認して、永遠亭に行きたい訳を聞いた。娘いわく、『貧乏で永遠亭しか頼れそうにないから、いざという時の為に道を覚えておきたい』とのこと。現時点では怪我も病気もしていないから、慧音の手を煩わせるのは遠慮したかった、という事だった。

呆れた事に、私に偶然会わなければ自分で竹林に入って道を覚える気だったというんだ。

私は怒りそうになった。一人で竹林をうろつくってというのが、どれだけ危険か分かっているのかって。そうしたらショボンとしよげて泣きそうな顔になる。まいったなあと思いつつ、『次は絶対に慧音と私を頼れ』と念を押して、とりあえずついて来いと云った。追いつく訳にもいかないからね。

筥の籠もそのままに、娘を連れて本道を歩き出す。モタモタしていると夜になる。そう思つて早足になるけども、さつきまで付き添いもないしにフラフラ入り込もうとしていた娘の事を考えると、ただ案内するだけじゃ気が収まらなかつた。もつとこう、しつこいくらいに里の外の危険性を教えておかないと、いざという時に大事になりそうな予感がしたんだ。

四分の一くらいまで来た頃に、脇の茂みを指さした。娘の視線がそつちに向いたところで、一番目の危険を説明する。

『なあ、あそこでちつこいのが手招きしてるの、分かるか?』

探せば周りにちらほらと、幼児みたいな背丈の羽根が生えた女の子がいる。それを見ると、娘は飼犬を見た時のように頬を緩ませた。

『わあ、妖精ですね! 可愛い〜』

『可愛いもんかい。アレにつられて道に迷つた奴もいるんだぞ。悪気がない分タチが悪いぜ』

やつぱコイツアホだ、と思ひながら妖精を指差して早口に言う。

『竹林で迷えば下手すりや死んじまう。女の子の姿をしてようが、パツパと追い払つた方がいいんだ』

言葉の勢いのままに火の玉を投げてやると、妖精は悲鳴をあげて逃げていった。それ

を見て娘はクスクスと笑う。

『そんなムキにならなくても……いざとなればコレがありますよ』

娘は懐から数枚の紙を取り出した。表面には何だか難しい漢字が書いてある。どうやら妖精よけの御札のようだった。

『まあ……油断しなけりや、文句はないけどさ』

『さあ、行きましよう！』

乱暴な事をしただけにバツの悪い私を尻目に、娘は意気揚々と駆け出した。その背中が曲がり角に隠れそうになって、私は慌てて止めた。

『待て！ 離れるんじゃない！』

『大丈夫ですって……いえ、ごめんなさい』

未だ気楽でいるみたいでため息が出る。先がどうなっているか分かんねえんだからと、強引に手を引いて歩いた。娘はそれが気に入らないのか少し眉をしかめたが、私からすれば何故軽い気持ちで走ったりできるのか、分からなかったんだ。

そうこうしている内に永遠亭にも近づいてきて、私は再び立ち止まる。キョトンとする隣の娘を一瞥して、地面を指さした。

よく見なければ分からないが、かすかに土が盛り上がり、その上に草が被せてある。皆はピンとくるかもしれない。あのトラップさ。

『これ、何か分かるか?』

『落とし穴ですよね?』

永遠亭の子兔が竹林のあちこちに作っているトラップ。悪戯好きなのは構わないんだが、いくら言ってもやめてくれないから、案内する時も必ず注意を促していた。

『よく知ってるな』

あつさり答えられた事に私が感心すると、娘は何故かハツとなって、わたわたと両手を振る。

『あ、その、里でも噂になっていたものでして』

『……? そうか』

別に気にはしていなかったけれど、何故か丁寧に説明する娘。ちよつとその態度に首を傾げたが、その時は案内の方を優先した。

『ちよつと分かりにくいけど、あの隠すのに使っている草があるだろ? よく見ると根が抜かれて乗っかっているから、それで見分けな』

私が喋る間、娘は熱心に頷いて聞いてくれていた。やつと素直になつたかな、と思つていると、娘はふと片手を上げて、質問をしてきた。

『でも、この程度の悪戯なら気にしなくても……』

無邪気に落とし穴を見つめる娘に、『そう思うよなあ』と相づちを打つ。実際、大抵なら

這い上がって笑い話で済むんだ。元々は永遠亭の仲間に向けたトラップだし。でも、相手は普通の人間。そこも念を入れて話した。

『けど、そももいかねえんだ。希にだけど、落っこちた拍子に怪我をする奴とかいるんだよ』

『軽い怪我でも不味いんですか？』

『おうともよ。例えば捻挫したとするだろ？ 決して分かりやすすくない道のりで歩くの

も大変だったら……』

『日が暮れちゃう……ですか？』

『あとは、妖怪が出るリスクだな』

竹林には迷いこんだ人間を狙う奴等がウヨウヨいる。逃げているつもりで気づいたら元の場所に戻っちまう、そんな状況に戸惑う人間は奴等にとつて格好の獲物だ。

『ああそうだ。ちなみに忘れちゃいけないのが出血だな。小さな怪我で油断していたら、血の匂いを嗅ぎつけた妖怪が……』

『……うわあ……そんな事まであるんですね』

ちよつと凄みをきかせてやると、娘は大袈裟に震えあがる。少しは危険を分かってくれたかな、と安心していたら、娘はなんだかキョロキョロと視線を泳がせて、俯いた。

『どうした？』

声をかけると、娘はおずおずと顔を上げる。何かを考え込んでいたのか、神妙な顔で眉を寄せていた。

『あの……』

『うん』

『もし連れの人が怪我をしたりしたら……置いていった方がいいんでしょうか？』

その問いに少し言葉に詰まってしまった。いくら危ない場所だからって、置いていくと口に出されると、どうにも答えづらい。娘は私の方をじっと見ている。しばし考え、言葉を濁した。

『いやあ……そういうの考えない方が……』

『でも、いざって時があるかも知れないじゃないですか！』

『む……』

『せめてどの位の時間で妖怪が寄ってくるか、とか……』

娘は意外なほど強い口調で詰め寄ってくる。しかし正直な所、妖怪に対抗できる力がないければ対策にも限界がある。人間の居場所じゃない竹林で半端な目安なんて、邪魔になると言っても過言じゃない。

『教えたってどうにもならないよ。気をつけるしかない』

『……わかりました』

ハッキリと答えて欲しかったのか、娘は落胆してそっぽを向いてしまった。頼りない所を見せちまったか、と思つてつい付け加える。

『方角を確かめられたら逃げるのも楽になるさ。例えば……』

『知っていますよ。これでしょ?』

娘はつつけんどんに言つて懐から、東西南北をすぐ確かめられる道具……コンパスを取り出した。方位磁石とも呼ぶあれだよ。

さつきの御札といい、最低限の備えはしているようだった。私はこれ以上センパイ面はすまいと思つて、余計に話さず永遠亭まで送つてから、流れで挨拶を済ませて、また出口まで案内した。

結局、その日は何も怪しいとは思わなかつたんだ。ただ……。

……それから、一週間くらい経つたある日の事。いつものように竹林でぶらぶらしていたら、永遠亭のメンバーの一人とばつたり会つた。

鈴仙・優曇華院・イナバって奴だね。永遠亭で小間使いみたいな事をしているんだが、里へ薬を売る仕事をしていて、里から永遠亭への道中で比較的顔を合わせやすい奴だつ

た。

『よう』

『ああ……妹紅』

軽く挨拶すると、ウドンゲは何故だか気の毒そうな顔をした。どうしたんだろう、と思つてみると、『バカな人間つているものね』なんて呆れた目付きで言った。

『なんの話？』

『あれ、アンタ知らないの？』

聞き返す私に、ウドンゲは意外そうな顔をした。そして、声をひそめて意外な事を口走ったんだ。

『……一週間くらい前に、女の人を案内したでしょ？ あの人の彼氏、死んだのよ』

『ええっ!?!』

あの道中の注意を逐一した娘は記憶に新しかった。それにしても、彼氏に何かあった時の為と言つていた矢先に、なんでまた。

『どういう事だよ!?!』

『なんでも、彼氏にアレルギーが出て……』

ウドンゲいわく、彼氏が苦しみだして焦つた娘は、一度私に道を教わつたからと、慧音に取り次ぐ時間も惜しんで、彼氏を連れて竹林に入つたらしい。

でも思うようにはいかず……という訳なんだが、話を聞くと少々妙な経緯だったんだ。

竹林を進んでいると、彼氏が妖精に惑わされたのに始まり、落とし穴にはまって、脚を折ってしまった。

悪い事にその拍子にコンパスが壊れ、一切迷わないのはほぼ不可能、彼氏を連れていくなら更に時間がかかるといふリスクを避けられない二択。しかも彼氏はその時血まで流していた。

やむを得ず彼女が一か八か永遠亭もしくはは里を目指したんだが、間に合うはずもなく……彼氏は妖怪に食い散らかされほとんど体が残っていないかった。

違和感の正体が分かるだろう。私が教えた危険の数々をなぞるように、悪い方ばかり状況が動いている。

ただの偶然かもしれない。けど、案内した時に妖怪が寄ってくるまでの時間を尋ねたりしてきたのが、どうしても頭に引っ掛かる。思えばコンパスを壊したからこそ到着は遅れ、その間に彼氏は血を嗅ぎ付けた妖怪に食われた……。

けど、いくら怪しんでも確証はない。本当に悪戯をした妖精がいたのか、一匹残らず確かめられる訳がないし、落とし穴にどんな風に落ちて、どのように怪我をしてコンパスが壊れたのか、見た奴は当の死んだ彼氏と娘しかいない。そして彼氏は妖怪の餌食で死

体すら残らなかつた。

真相を知るの、今やあの娘だけ……。

なあ、話の中で、娘が先に歩いて行こうとした、つて下りを覚えてるのか？ あれ、当時は気にしちやいなかったが、今思うとどうも歩き慣れていたような感じがあるんだよ。来るのが初めてじゃない、何度も歩いた事があるような……。本人は道を知らないと言っていたけど。

……これはただの勘繰りだけど……。彼女、本当は竹林に一人で何度も来ていたんじゃないだろうか？ コンパスや御札を用意して、誰にも見られずに彼氏を始末する方法を考えながら……。

んで私に見られて案内をして欲しいとごまかし、逆に殺害の筋書きに利用した……。失礼な想像だと思ふ？ しかし、ウドンゲが例の娘を里で何度か見かけているんだけどさ。

最近いかにも金持ちそうな美男子と、よく一緒に歩いているんだって。
私の話は終わりだ。残りは……お憐か」

六周目・六話目―火焰猫燐

「あたいが六話目？ ずいぶんと待たされたねえ。まあいいけどさ。

あたいの名は火焰猫燐だよ。地霊殿で怨霊の世話をしている、趣味は死体集め。気味悪いってよく言われるけど、まあ性分だね。こんな時くらいは、どうかよろしく頼むよ。

それで、地底であった話を……と皆は期待するかもしれない。しかしね、今回はちよつと別の話をしようかと思う。

『学校の七不思議』ってやつだ。

学校つてのは、外の世界でいう寺子屋みたいなもので、子供たちが勉強する場所なんだけど。向こうじゃ知つての通り妖怪や幽霊が嘘っぱちだと思われている。

子供らはそれが退屈なんだろう。自分達が日々過ごす学校に、オカルトチックなものがあればいいなって、色んな噂を広めるんだ。それも怖く噂をね。

しかもそういう性質は時代が移っても変わらないように、上の子から下の子へと噂はどんどん受け継がれていく。

トイレに花子さんが出るとか、夜中に楽器が勝手に鳴り出すとか……。実際に信じる奴なんかいないと思うけど、それでも一種の楽しみなんだろう。

寺子屋にも似たようなのありそうなものだけどなあ。夜になれば沢山いた子供たちが一人もいなくなつて、教室も廊下もみーんな静まり返つちゃう。先生だつて授業がなければ大体の部屋は施錠しちゃうでしょ？ ましてや生徒にとつては未知の世界。その気になれば想像はどんどん膨らんでいくと思うんだよ。

え？ 寺子屋に七不思議なんてない？ 本当に？ もつたいないなあ、身近な場所に恐怖がある”かも”つてのは、盛り上がる秘訣の一つなのに。

なんだつて、今でこそ寺子屋は子供が元気に遊んでいるけど、昔なんてどうだったか。改まつて言う事でもないだろうが、比べるべくもないほど過酷なものだった。それこそ、今までの幻想郷の発展を全部ひっくり返したみたいに、厳しくむごたらしい世界だったよ。

鬼や天狗は遠慮なく人をさらい、河童は尻子玉を抜き、狐は容赦なくとりついて狂い死にさせる。雪女は冬の度に人を骨の髄まで凍らせたし、天邪鬼だつてちんけな悪戯じゃなくて人殺しや盗みを平気で行っていったんだ。

そんな中にあつて、人間の生活も決して楽じゃなかった。妖怪にやられてばかりじゃ滅んでしまうからと、陰陽師やらが仕返しとばかりに妖怪を討つた。今みたいに安全の保障なんかないから、少しでも甘さを見せたら返り討ちだと思つて滅多うちにするんだ。お互い何度も何度も、血みどろの報復をしあつていた。

脅威は妖怪ばかりじゃないよ。作物が実らなきや飢えが襲ってくる。今みたいに頼りになる薬屋さんもないから、病にも気をつけなきやいけない。子供なんて七五三を迎えずに死んでいく子が大量いた。

しかも、その死ぬ時まで育てるのだから、貧しい家には一苦労。何人も子供がいればその分苦難は増えていく。

そんな時はどうするか……。想像はつくかい？ 口減らしだよ。幻想郷にも子捨てで有名だった場所があるが、捨てるだけならまだいい。場合によっちゃ生まれすぎて殺したり、災害を沈める人身御供にしたりした。洪水や地震だって、一度だけで沢山の命をあつけなく奪っていったんだ。

……ん、なんだい先生。それが寺子屋とどう関係あるかって？

にぶいなあ。寺子屋に今どんな子が集まっているか、考えてもみなよ。昔みたいに命の危険もなく、皆で集まったり勉強したりなんかできる。時には妖怪とも触れ合ったり、昔には考えられなかったくらいのおびのびと生活できるんだ。卒業してからも子供時代の思い出を残しながら、酒の味を知るまで生きていける。

死んでいった子供たちが見たら羨ましがらうねえ。勉強どころか文字すら書けない奴もいたんだよ。その程度すら生きていく為に犠牲にしたんだ。

分かるかい。羨む気持ちがいきすぎて、憎悪すら抱くかもしれないって事さ。先生や

生徒は何も知らずにのほほんとしてるけど。……いや、あたいが死んだ奴らの立場だったら、そんな気持ちになるって話。

……んでね。まだ話は続くんだ。幻想郷が仕組みを整えて、段々と人も妖怪も平和になりはじめた頃。それまでの恨みや憎しみの痕跡は残さずお祓いされていった。これからやつと皆が穏やかに生きていこうって時に、好きこのんで汚らわしいものを大事にする輩なんていない。

この寺子屋だつてそうさ。外の世界なら定番の怖い話が、ただの一個も出てこないだろ？ 背景の内容が内容だけに、そんなのが表に出るようじゃシャレにならないんだよ。

……ふふ、それでどうにか上手くいった、というのが今までの話。だが、どうも絶対安心とはいかないみたいなんだよ。何故かって？

……怨霊つてのは、たまにしつこい。あたかも地底で何人も死んだ奴を相手にしたけど、あいつら恨みさえ抜きにすれば意外と人懐こいんだよ。心を見透かすような相手ならともかく、普通に話をしてやれば自分の事をペラペラ喋り出す。

その裏にあるのは恐らく淋しさだ。いくら普通に生まれ変わらない魂だといっても、たった一人でいきがって悪さなんかしたら、虚しいのはあいつらだつて分かっている。

でも、仲間が出来れば話は別だ。互いに励まし合つて正当化し、どこまでも害を及ぼ

す可能性がある。地底でも上手くコントロールしてやらなきや、なまじ人間じやないだけに何をしでかすか分かりやしない。二人でも、三人でも。数が増える毎に。

こっちではお祓いをして消えたんじやないかって？ それだよ。もしお祓いを一緒に乗り越えたら、さぞかし強い結束が生まれただろうねえ。一、二人なんかじゃなく、もつと大人数でも。

例えば、七人集まれば七不思議に……。

まあ結局は七不思議自体がないから、こんな仮定の話しか出来ないんだけど」

……燐が一旦言葉を切り、たははと笑った。その時だった。

ガタンツ！ という大きな音が、部屋の外から響いた。燐が口を閉じ静まり返っていた部屋の中で、私が肩を跳ね上がらせた拍子に漏れた悲鳴だけが、やけに目立ってしま

う。

「な、なんだ？」

「さあねえ、何か落ちたんじやない？」

燐はやけに落ち着いて顔に笑みさえ浮かべている。周りをよく見れば慌てふためいていたのはほぼ私一人だった。妹紅は私の隣であるの音に眉をしかめているだけ。怯えた色を見せているのは妖夢くらいだ。

「いや、わりと大きな音じゃなかったか？」

「なんだい、怖いのか？」

「そういや、最初に誰か言うたかいのう。悪霊が寄ってくるかも、とか……」

赤蛮奇がつまらなそうに、マミゾウが愉快そうに茶々を入れてくる。確かに、音一つで大げさかもしれない。もしかしたら、さつきまでの怪談の雰囲気ので神経が過敏になっているのかも……。

しかし、なんだか胸騒ぎがする。見えない襖の奥から、底冷えするような怖気を感じる。さつきまではなんともなかったが、あの音がした瞬間から、首筋を冷たい針で無数に刺されているような寒気がする。

「……ちよつと見に行つてくるよ。不審者かもしれない」

「なんじゃなんじゃ？ 情けないぞ先生や」

「じゃあ皆で行つてあげようよ」

「あ、置いていかないでくださいよお！」

腰を上げた私の背後で、頼んでもいないのに他の五人がドヤドヤと畳を踏み鳴らしてついでくる。子供の引率なら慣れているが、まさか寺子屋の中でプチ百鬼夜行を率いる羽目になるとは思わなかった。生徒が走り回る度に注意していた廊下が、普段なら役目を終えた時刻にギシギシと盛大に鳴り出す。後ろでまた大きな音がしたら、と思うと違

う恐怖が芽生えてくる。

列をなして暗闇の廊下をそろそろと歩く。壁についていた手が、小さな木の格子に触れた。

「…………この辺からだったな」

最初にいた大部屋から最寄りの障子戸を開ける。そこは、普段使わない着物などを仕舞っていた部屋。飾りどころに困っていた置物や人形などもあつたが……

「……………」

戸を半分ほど開け、首だけ伸ばして覗き込むと、床に転がった人形と目が合った。大きめの、目を閉じた日本人形の女の子。近くのダンスの上には、他にも一松人形やコケシなどが所狭しと並んでいる。

「なんだ、この人形が落ちたのか？」

「それにしても大きな音がしましたね」

覗き込む私の後ろであれこれと不思議がる声が聞こえる。しかし、見た限り人形たちは数は多いにしろきちんと場所をとって整頓されている。現に今まで長い間落つこちらりはしなかった。

かといって、何かがぶつかったにしては落ちた一つ以外が整然としすぎている……。

しばらく半開きの戸の前で考え込んでいたが、とにかく落ちたままでは可哀想だと部

屋に踏み込む。そして人形へ手を伸ばした、その瞬間。

「うっ!？」

カツ、と人形の目が開いた。さつきまで閉じていたはずの目がひとりでに開き、私を睨んだのだ。作りもののそれらは、白くぼんやりと光っている。

思わず飛び退いてしまった。後ろの障子戸に派手な音を立ててぶつかった私を、誰かの腕が受け止める。

「落ち着け。どうしたんだよ」

「目、目が開いたんだ！ あの人形の目！」

いぶかしげな顔をする妹紅について大声でまくし立てる。妹紅は私の慌てふためく顔を一瞥し、私が必死で指さす先を見る。

「……なんともなつてないぞ」

「……あ、あれ？」

妹紅の静かな声に我にかえり、人形に向き直ると、確かに人形の目は元通りピツタリと閉じられていた。さつき確かに、無機質な目が見開かれてじつと私を睨んでいたのに……。

「なんだい、おどかして。ちつとも動きやしないじゃないか」

「たちの悪い冗談よしてくださいよ」

燐が人形を拾い上げて振り回してみせる。眠っているような人形と明るく笑う燐を見て妖夢は胸を撫で下ろしていた。

……見間違い、だったのだろうか。この暗さの中なら勘違いも……いや、暗い中で目だけ光って見えたのだから……。

一人で考え込んでいると、燐が人形をどざりと乱暴に置く。その音と共に周囲の白けた視線に気づく。どうやら本当に目が開いて見えたのは私だけのようにだ。

気を取り直し、振り返る。しかし。

今度はべえん、べん、という何かを弾くような音がしはじめた。おそらく楽器、琵琶のようなもの。それもただ鳴るだけじゃなく、荒々しいながらも曲を奏でている。

「おい……これは」

「確かに、音がする」

「行ってみよう！」

今度は皆も異様さに気づいてくれたようだ。廊下を走り出すとすぐに音は近くに迫った。大股で二、三步駆け出し、右手の扉を開け放つ。

「誰だ！」

開けるのほとんど同時に怒鳴っていた。誰だか知らないがさつきまで楽器を弾いていたのだ。すぐに隠れられるはずが……

「な……」

開け放たれた部屋を見て呆然とした。扉に触れる瞬間まで流れていた曲が嘘のように消え失せていたのだ。

そこは音楽の授業に使う教室だった。太鼓や琵琶、三味線などを生徒用に保管し、授業の時以外はきちんと数を確かめて片付けている。出しっぱなしにした事は記憶の限りないし、生徒が勝手に入ったりもしなかったはずだ。

なのに、どうしてだろう。目の前には琵琶が置かれ、座布団まである。まるでさつきまで誰かが弾いていたかのように。

しかし、出入り口は教室の両端に、見える範囲で二つだけ。誰かがいたなら、そいつは一瞬で消えた事になってしまう。

「出てこい！ 隠れても無駄だぞ！」

声を張り上げながら、棚の裏、押し入れの中、机の下などを探し回る。しかし生き物の気配一つ見つけられなかった。

「勝手に座布団と楽器がおあつらえ向きに転がり出る、なんて訳はないよな……」

妹紅が座布団をめくって肩をすくめる。他の皆もぎこちなく笑みを浮かべてはいるが、視線を泳がせたり腕をしきりにさすったりとやはり動揺は隠せていない。

姿を消せる妖怪はいない訳じゃない。そいつが忍び込んだのだろうか。それはそれ

で早急に見つけ出したいところだが……。

もし……いや、まさか……。

「むっ？」

部屋を見渡していると、赤蛮奇が不意に小さくうなり、何やらキョロキョロと視線を巡らす。よく見ると眉を寄せ、不審そうな表情だ。

「どうした。また何か見つけたか？」

「見つけたっていうか……漂ってこないか？ この胸が悪くなるような……」

赤蛮奇が話している途中で、突然鉄臭い臭いが鼻をついた。咄嗟に手で鼻を覆い、正体を思い出そうとする。嗅ぎ覚えはあった。しかし、ひどく忌避感のある身近な臭い

……！

「血の臭いじゃ、こいつは」

「ひ、ひいつ」

血、と聞いて妖夢が尻込みする。しかし私はなるべく臭いを吸い込まないようにしながら皆のそばをすり抜け、ゆっくり廊下を進んでいく。嫌な連想だが、心当たりがあった。

体が無意識に拒否しているのか、歩く毎に次の一步まで長く長く廊下の板がきしむ。それでも血の臭いは容赦なく濃くなっていき、頭の中だけが恐怖、焦り、悪寒、様々な

感覚に振り回され目まぐるしく回転する。

目当ての場所が見えてきた時、すでに鼻は慣れてしまっていた。家庭科室。主に生徒たちが料理もろもろを学ぶ場所だ。血、肉、そういう生々しいものを扱う場所はここぐらいだ。

木製の引き戸を乱暴に掴み、叩きつけるような勢いで開ける。途端に血の臭いがヌルリとまとわりつくように襲いかかり、こらえる間もなくえづきそうになる。鼻に続き口にまで臭いが充満する中で、せめて目に映るものを見逃すまいと前方を注視する。

すると見開いた目に飛び込んできたのは、どす黒い液体にまみれた、不格好な肉の塊だった。

「あれは……」

家庭科室に四つほど用意された大きな調理台。そのうち丁度扉を開けてすぐの場所にある台の上に、失敗した粘土細工のような何ともつかない赤子ほどの肉塊が無造作に置かれている。その肉塊の周りには調理台を一面染めるほどの血溜まりが広がり、台の端からポタポタと音を立てて滴っている。暗闇の中で辛うじて届く赤い色が一層不気味さを醸し出す。

「なんだい先生、血が怖いのか？」

燐が肉塊に怯む様子もなく近づくと、彼女はその手のものは見慣れているのだろうか。

自ら悪趣味だと自称する人間離れした感性が、今は清々しくさえ思えてくる。

「いや、そもそもそいつからあったのよ、その……変なの」

「あ、赤ちゃんじゃないですよね……？」

「……誰も、いないみたいじゃな」

怖くなってきたのか、私の後ろでメディスンと妖夢が声をひそめて疑問を口にする。一方、マミゾウは肝が太いのか肉塊を無視して家庭科室を見て回っている。しかし、相変わらず怪しい影は見つからない。

一体何が起きているのだろう。

……燐の言った七不思議の話が頭をよぎる。お祓いで怨霊を消しきれていなかったら。そしてもし複数で強い意思を持ち、しぶとく残っていたら。

これらは、怨霊のイタズラか？　だが、こんな風に我々を振り回して何の得があるのだろう。寺子屋の皆に怨みがあるのなら、わざわざ夏休みの、こんな妖怪が集まった日にコトを起す理由が分からない。

考えていると、燐が肉塊に鼻を近づけているのが見えた。よく臭いなんて嗅げるな、と困惑のせいか聞こえないように呟いた。するとまるでその声に気づいたかのように、燐が素早く私を見る。

その嫌悪感と戸惑いの入り交じった表情に私が身を固くした時、燐が言った。

「このハラワタ、人間の……」

「やめろ！」

思わず怒鳴ってしまった。燐はふて腐れたように肩をすくめる。怨霊が起こすイタズラにしても悪趣味だ。最初に七不思議がどうのと言われたが、まさかまだ四つもこんなおかしい事が起こるというのか。

頭痛がして、胃袋がグルグルと音を立ててうごめき出す。精神的に参りすぎたんだろうか。前屈みになりながら低く、小さな声を絞り出す。

「と、トイレに……」

「そ、そっか。掴まれ！」

妹紅が乱暴に私の肩をかつぐ。すでに胸のあたりまで生暖かいものがこみ上げてきている。その悪寒が全身に広がり、妹紅に寄りかかった部分がやけに熱い気がした。

「じゃ、儂らは一旦戻っているぞい」

مامィゾウが背中に声をかけ、六人ぶんの足音が遠のいていく。私もあんな凶太さがほしい。

「けほ、けほっ……」

「落ち着いたか？」

「ああ……すまない……」

個室の扉の裏から妹紅の声がする。廁の入り口で待つていてくれと言ったのだが、何が起きるか分からないからとずっと戸を隔てたすぐ隣に立っているのだ。

「悪かったな。流石に平静を保っていられなくて……」

「気にすんな。……しかし、どうも怪談どころじゃなくなつたな」

タバコをふかしているのか、大きな吐息が聞こえ、ヤニの臭いが漂ってくる。

それにしても本当に、どうしてこうなつてしまつたんだろう。今まで毎年怖い話をしたのに、何事も起きなかつたじゃないか。

この寺子屋は、どうなつてしまつたんだ？

「とにかく、他の連中は帰らせよう。慧音も一旦私の家に泊まつて、明日霊夢の家に行こうぜ」

「ああ……」

妹紅の理路整然とした提案に、私は気の抜けた返事しかできなかった。気持ちからくる吐き気なので出してしまうのは簡単だったが、肝心のだるさはほとんど改善されなかつた。よろよろ立ち上がり、個室の扉に寄りかかるようにして取っ手を握る。

「……むっ？」

しかし、押した扉はびくともしなかった。再度取っ手を確かめて押してみたが、ガタと軋む音がするのみ。

「慧音？ 大丈夫か？」

いつまでも出てこないのに気づき、妹紅が声をかけてくる。その声がさほど深刻ではないのが逆に私を焦らせた。

「妹紅！ 扉を引いてくれ、戸が開かない！」

「は？ カギが閉まってんじゃ……」

「それも確かめた！ でも違う！」

怒鳴るように言うと同く事も事態を理解してくれたのか、扉を掴んで力むような声が聞こえてくる。しかし扉は相変わらず動かなかった。とうとう外れても構わんと両手で思いつき扉を押すが、まるで石壁のごとく重い。

閉鎖空間に閉じ込められたせいかわ、息が荒くなり、額に汗がにじむ。なりふり構わず体全体を扉に押しつけて踏ん張っていると、完全に意識から抜けていた背後の空間から、不意にひやりとした空気が流れてきた。

冷たく、背筋に水を垂らされたような息を呑む不快感。ぞわりと体が震え、扉を汗ばんだ手のひらが滑る。

気のせいではない。真冬のすきま風のような冷気が、振り向けずにいる私の背中を舐めていく。首筋にピリピリと痺れが走った。

後ろは壁のはずだ。風が吹き込む訳がない。ならば、この冷気の正体は何だ？ 私以外誰もいない個室で、いや、誰もいなかったはずの背後で、何が起こっている？

「くそっ！」

やぶれかぶれに扉へ体当たりした。バキリ、と金具がねじ切れるような音がして扉が吹っ飛ぶ。さつきまで微動だにしなければならなかったものが急に呆気なく倒れ、扉もろとも床に体を打ちつけてしまった。

体の下で扉がへし折れ、古くなった木つ端ともうもうと立ち込めるホコリ、そして扉が無くなり一気になだれ込んできた便器からの臭いが混ざりあって辺りに充満する。

体の節々の痛みをこらえ、上半身を起こす。目の前には間髪を容れず退いていた妹紅が、目を丸くして私を見下ろしていた。

「すまん、どうにか出られた」

ホコリを払って微笑んでみせたが、相変わらず妹紅は表情を変えない。まるでとんでもないモノでも見たようだ。

「なんだよ、変な顔して」

痺れを切らして尋ねてみる。確かに多少荒っぽい真似はしたが、私なりに緊急事態

だったのだ。さつきまで不可解な出来事の連続だっただけに、取り乱すくらい許してほしいものだ。

しかし、妹紅は一言も発さずに目を逸らし、私がさつきまでいた個室の奥をジロジロと見つめている。

そして、私の顔を見ないまま、口だけがふと小さく動いた。

「慧音……さつきの、誰だ？」

「え？」

誰、といわれても私には何の事やら分からない。しかし妹紅はますます同じ場所を凝視し、とても冗談を言っている風ではない。

「……なんの話だ？ 別に誰も……」

「違うんだよ！ さつき、お前の後ろに、確かにいたんだ！ 青白い顔した、女の子が……」

妹紅が怒ったような表情で声を張り上げる。けれどもその声はかすれ、怯えが混じっていた。

「まさか……」

振り返って自分がいた場所を睨む。おかしなものではなく、便器と紙が備えつけられているだけ。だが、先程までの悪寒を思い出す。

私が扉から出ようと必死になっていた背後で襲ってきた異質な感覚。もしもう少し早く振り返っていたら……。

「待て」

呆然としかけた意識を、妹紅の声が引き戻す。自分から妙な事を言っておいて、こんどはトイレの突き当たりの、小さな窓を気にしていた。口を不自然なほどに固く閉じながら、チラチラと視線を窓と私へ交互に巡らせる。

「どうしたんだよ」

「聞こえないか？ あれ……」

雰囲気呑まれてか自然と声が小さくなる。妹紅はそれを訂正せずに、窓の向こうを顎でしゃくった。首をかしげながら耳を澄ませると、ほんの少し、一定のリズムで音が聞こえてくる。

パタパタと、地を蹴るような音。軽い、子供が走る時のような音だ。

「こんな夜中に……」

「妖怪が走ってるんじゃないか……ないか……？」

「外にあるの、運動場だろ？ なんだってそんな場所を通るんだよ」

妹紅の苛立った声に口をつぐむ。このトイレの窓に面しているのは、体育に使うのだっ広い運動場だった。わざわざそんな場所を夜中に走るなど、奇行としかいいようが

ない。

「それに……」

妹紅が窓を睨む。足音は相変わらず続いている。しかし、ある変化に私も気づいてハツとなる。

「近づいてきてる……？」

足音が一步一步、こちらに向けて大きくなってきている。もう壁を挟んだすぐそこ、という辺りまで来た時には、反射的に自らの口を塞いでいた。

時間にして数秒の静寂。息まで止めて、立ちすくんだまま足音に神経を尖らせる。パタ、パタ、と間延びしたように聞こえる音がついに窓の外を通り過ぎ。

そのままの方向に、またパタパタと遠くなっていった。

「はあ……」

溜めていた息を一気に吐き出す。しかし、安堵はできなかった。同じく窓を見ていた妹紅が、険しい顔で見つめてくる。

「慧音……」

「分かっている。……さっきの、”窓に何も映らなかった”な」

足音は確かに窓の間近を通った。にも関わらず、通り過ぎていく何者かの姿が、欠片も映らなかったのだ。子供たちも使う低い位置にある窓、頭から下の体の一部は必ず映

るはずなのに……。

「確かめてみる……か？」

「お、おいよせて……」

私が止める声も聞かず、妹紅は乱暴に窓を開け放った。ボタン、と木がぶつかる音がして夜闇があらわになり、ヌルリと湿った夏の空気が吹き込んでくる。妹紅は意に介さず窓から首を出し、忙しなく辺りを見渡す。

しばらくそうした後、あの足音が走り去っていた方向に向き直り、妹紅はピタリとそのまま固まる。

「何か見えたか？」

「……………」

背中にも声をかけてみたが、返事はない。自分も窓の外を見てみようとして一歩近づいた。そこで、妹紅が不意にぼそりと口を開く。

「慧音」

「な、なに」

「ちよつと、そのまま真正面向いてくれるか？」

自身は脇の方を見たままでそんな事を言う。意図が分からずにぼんやりと言われた方角を見ると、遠ざかったと思つた足音が、また大きくなってきた。

しかし近づいてきた、という訳ではない。大きく迂回しているような……ちようど運動場の外周をぐるっと回っている、というのがしつくりくる。

真夜中にランニングなどする訳はなし。ターンしてきた足音が窓から正面の向こうにやっと現れるという所で、運動場へと目を見張る。

するとそこには、人ではなく地面を跳ねて進む、二つの小さな何かがあった。

最初は小動物かとも思ったが、違う。妙に平べったく、その二つは必ず横に並び、左右互い違いに前に進んでいく。まるで人間の脚の動き。

目を凝らすと、草履があった。手足も、胴体も顔もないが、草履だけが生きているかのように、運動場を駆け回っている。

妹紅が急いで窓を閉めようとする。その時、窓の向こうの草履が、ピタリと止まった。

「う」

嫌な予感がして、小さく唸る。その直後、草履が勢いよくこちらを向き、飛ぶように跳ねて私たちの方に向かってきた。土を蹴る音があつという間に大きくなり、迫りくる姿が見えるかのごとくまっすぐにこちらへ駆けてくる。

「うわわわー！」

途端に背を向けて走りだし、便所を転がり出る。妹紅も出てきたのを確認してから、一目散に廊下を駆ける。

「どこ行くんだ!？」

「とりあえず、皆の所に戻る!」

連中を放つてはおけない。とりあえず寺子屋の外に出てもらい、カギをかけたら明日霊夢を呼ぼう。こんなたて続けに怪現象が起きるなんて、ただ事ではない。早く逃げる事だけ考えて……。

「……まだか、まだ着かないのか!？」

「……何故……」

寄り道はしていない。まっすぐ皆のいる大部屋を目指したはずだ。寺子屋の構造はもう充分知っている。

だのに、いつまでも目的の部屋に着かない。廊下がいつまでも続き、脇に関係のない部屋が見える。どこまで走っても、何度曲がっても、灯りのついたあの部屋がない。暗く出口もなく、見知った場所のはずなのに、その中で同じような光景を何度も、延々と見せられる。

「くそっ! どうなっているんだ!」

怒鳴り散らした瞬間、視界の隅にほんの少し、久しく見なかった灯りが映った気がした。そこからは深く考えず、その灯りへ一足飛びに飛び込む。

襖を押し退け、やかましい音を立てて畳に転がる。目の前には皆が座る座ぶとんが

映った。すぐにでも今起こっている事を知らせなくては。一步遅れたら、この中の一人がまた被害に遭いかねない。

しかし、口に出すのさえもどかしいと焦る私とは裏腹に。降ってきたのは何とも呑気な声だった。

「おやおや、ちよつとお遊びが過ぎたかなあ？」

その声は六人の中の誰でもなかった。妹紅の言った七人目だろうか。いや、しかしおかしいのだ。その声……。

聞き覚えはある。しかしあり得ない。

恐る恐る、その謎の声の主を見上げる。自分の勘違いだと自身に言い聞かせて。

しかし、その人物を目の当たりにした瞬間、勘違いではないのだと悟った。

何故なら、そこにいたのは……私”。上白沢 慧音が、私を見下ろし笑っていたのだ。

六周目・火焰猫燐END—『七不思議』

「な……え？」

目にした人物から目が離せず、倒れた体を起こすのさえ忘れていた。私を見下ろしている、自身と寸分違わぬ顔。鏡でしか見たことないようなそれが、罨にかかった獲物を見るように、残忍に口の端を吊り上げている。

何者だろう。単なる変化の術ならいつまでもそんな目で見ていないで、正体を見せてくれればいいものを。

「こら、挨拶くらいしな」

燐が何者かの頭をはたき、私もハツとなる。そいつはへへツといやらしく笑うと、私を見下ろしたまま妙に気取った口調で言った。

「やあ、どうも先生……。妹紅にお誘いをいただいた七人目だよ。私のイタズラは楽しんでもらえたかな？」

イタズラ、と聞いて今までの奇妙な現象の数々を思い出す。目を開けた人形、弾く者がいない琵琶、家庭科室の血にまみれた肉塊……。

全てはこいつのしわざだというのか？ 楽しむなんてもんじゃない。悪趣味すぎる。

いつもの意気があればそう言えただろう。だが、すんでの所で押し黙ってしまった。場の雰囲気、いや、もつとはつきりしたものが、私の体に重くのしかかり、自由意思を許さない。

「やり過ぎですって、あなたは」

妖夢の声が形だけの軽い口調で諫める。怖がりだった彼女が遠慮なしに言い放つのを聞いて、軋むように痛む首をゆっくりと妖夢に向ける。

その時、周囲を取り巻く重圧の正体に気づく。目の前の同じ顔をした人物だけではない。燐が、妖夢が、誰も彼もが同じように目を細め、口を歪ませ、いやらしく笑う仮面を被せたかのように私を見ている。ふざけ合う時のような生易しいものではない。子供たちがよつてたかつて蟻の巣を踏み潰す時の、ある意味純粹な、残忍な目つき。

「まあ、そんな警戒しないで。まずは座ってよ」

燐の一声と同時にマミ、ゾウ、メディスン、赤蛮奇が一齐に私を引き起こし、座ぶとんに無理やり正座させる。後ろでパタンと襖を閉める音がする。

妹紅だ。それが分かった瞬間、私の中でこの部屋の面々を見る目が変わる。あの、五話までを語っていた今までの表情は偽りだ。この雰囲気の中で、誰もが戸惑いの色一つ見せないのは目に見えて普通じゃない。

そんな私の思考を知ってか知らずか、燐は何者かを脇にどけ、私の真正面に座る。そ

して上半身だけをくつと倒し、妙に私に顔を近づけてこう切り出した。

「なあ先生、あたいの話を覚えてるかい？」

言われてぐるぐると頭を回転させる。幻想郷や里を創る過程で怨霊などが祓われたこと、しかしまた力をつけ出す可能性もあること、そして幼くして死んだ魂が寺子屋の皆を妬んでいるかも知れないこと……。

「つまりはまあ怨霊の話だけど、まだ続きがあるんだ」

私の答えが待ちきれなかったのか単に聞く気がないのか、燐は人さし指をピンと立てて話し始める。

「仮にだよ、寺子屋に怨霊が残っていて、力をつけ出したとする。原因はどう考える？」
「……何を言い出すかと思えば。子供たちが学ぶこの場で、そんな事があつてたまるか」
仮に、という前置きは到底信じられない。目の前の奴等が普通ではない以上、わざわざ嘘は口にすまい。

それだけに答えに反発がこもる。それでも、生徒が妖怪から身を守れるようにと日頃教鞭をとっている身だ。その現に教えている場でみすみす危険を大きくするなど、ある訳がない。心当たりは欠片もなかった。

しかし、燐は私の答えに失望するかのように天を仰ぎ、ため息をついた。

「やれやれ……やっぱり石頭だねえ、先生は」

バカにするかのような言い方にムツとしていると、燐は身を乗りだし「じゃあヒントをあげよう」と言っただけでこう続ける。

「怨霊もとい妖怪なんてのは、人間の負の感情……恐怖心なんか大好きだ。微かなものでも嗅ぎつけて、何度も見つけなければいいエサになる。

……どうだい？ そろそろ心当りは？」

燐が声をひそめる。

恐怖心……何度も……。言われた言葉を頭の中で反芻する。直後、背筋に寒気が走った。

思い当たるものがある。しかしそれは、私が取り返しのつかない事をしたというのと同義であった。今まで、毎年夏に繰り返してきた……。

「……怪談大会？」

「(づ)明察！」

震えた声で答えた私に、燐はパチンと手を打った。部屋中に響いた手の音が、心なしかやけに寒々しく聞こえる。

「最初は大したことなかったよ。でも夏になる度に子供たちが怖がって……」

「……それをエサにして、怨霊たちは力を取り戻したというのか？」

「流石に何年もかかったけどね。先生がもっとマシな話をしていたら、ちよつとは早く

済んだんだけど」

燐はケタケタと楽しそうに笑う。まるで我がことのように。おそらく、まさに燐たちが、彼女の語る怨霊たち本人なのだろう。

私は眉をしかめる事しか出来なかった。何年も知らず知らず、寺子屋の危険を見逃していたという事実。それが胸に重苦しくしこりを残し、周囲でニタニタ笑う連中との温度差を大きくする。

スカートの裾を握る手に力がこもる。もしこの場に誰もいなくなれば、私は歯噛みして大いに悔しがただらう。内心では、自らの不甲斐なさに打ちひしがれていた。

しかし後悔などはしていられない。今この場に、知人たちの姿を騙る何かがいる。それも毎年起こっていた怪談大会を控えて、だ。毎年が力をつけるのに利用していたそれらを前にわざわざ私の前に姿を現したのが、偶然とは思えない。

「私に、何をさせたい?」

「ひょ?」

「とぼけるな、今年に限って何かを企んだんだろう。じゃなきゃこんな真似はすまい」

燐はわざとらしく首をかしげるが、構わず問い詰めた。油断ならない、いや、絶体絶命なこの状況で、せめて真相だけは知りたいと私は早口になる。

燐はそれを見て皮肉っぽく笑った。

「意外と鋭い所もあるんだね」

「いいから答えろ」

むきになつて詰め寄ると、燐はささやくように言った。

「なあに、難しい事じゃない。今年の怪談で、七不思議を話してくれたらいい」

「七不思議？」

「ああ、六つまでにしないと死んじゃうんだっけ？ まあ、盛り上げればいいんだ」

まるで単なる話の種のように言う燐。真意が掴めずにいると、燐はペラペラと続けて述べた。

「どうせ嘘っぱちの七不思議だからね。それよか、子供たちが噂にする方が大事なんだ」
噂、その言葉を聞いて燐の話してきた内容が思い起こされる。外の世界でも七不思議というのは全国に広がり、怖がられていると……。

「その噂の恐怖で、更に力を増す気か？ いや、まだ怪しいな……」

七不思議には必ずといっていいほどジンクス、まじないが付け加えられている。いわく、”七つ目を知れば死ぬ”。

先ほど確かに、七という数字には特別な力があると言っていた。その発言にもおそらく意味はあるはずだ。

「んー、……まできたら、全部ばらしちゃおうかな」

少し飽きてきたのか、コキコキと肩を鳴らす燐。とうとう私も覚悟を決める時が近づいてきたのだろうか。

「七不思議といえばさ、七つ目を知ったら死ぬってジnkクスがあるじゃん」

「……ああ」

「私たちはまだ弱った怨霊。大それた事をするにも限度がある。しかし……」

そこまで言って、目の前の燐の口が三日月のようにパツクリと裂ける。

「七不思議のジnkクスの力を借りれば、殺していけそうなんだ。」

……寺子屋の子たちを」

最後の言葉で全身に怖気が走る。七不思議に込めた怨霊の狙いは、生徒たちだった。その昔、幻想郷には報われずに死んでいったたくさんの子供たちがいたという。その恨みを今こそ晴らそうというのか。

「七不思議を広めてくれたら、先生だけは見逃してあげるよ。さあどうする……」

「お断りだっ!!」

燐の言葉を怒鳴って遮る。いくらなんでも、みすみす怨霊の殺戮の片棒なんぞ担げるか。そう怒鳴ってやりたいが、気持ちばかりはやって荒い息が漏れただけだった。

燐はそれを見て、やれやれと肩をすくめ、言った。

「仕方ないねえ……。じゃ、代わりに任せるとしようか」

今まで黙っていた周囲の怨霊の一人、私と同じ顔をした奴を指さす。その瞬間、部屋の七人が一齐に音を立て、青白い炎のような塊に姿を変えた。ついに本性を現した怨霊たちは、脚がすくむ私を有無を言わさず取り囲んだ。

「姿を真似れば人殺しも呆気なくできるものだね」

「どのみち、真相を聞いた先生は生かしてはおけないよ」

口々に恐ろしい事を言う怨霊たち。その声は低いうなり声のような響きが絶えず混じっていた。ハチの大群に囲まれたような耳障りな声と威圧感が、肌をフツフツと焼くように、汗が否応なく滑り落ちる。

「二つ目は、着物部屋の人形が勝手に動く」

ふと一人が言う。そしてもう一人、また他の一人が。

「二つ目は、音楽室の琵琶が勝手に鳴り出す」

「三つ目は、家庭科室に血まみれの肉が置いてある」

「四つ目は、夜中に三番目の個室に入ると閉じ込められる」

「五つ目は、運動場を草履だけがひたすら走っている」

「六つ目は、終わることのない廊下を永遠にさまよう事になる」

七不思議のジンクスの力。それを借りれば、こいつらは人を殺せると言った。今こゝで七つ目を知ったら、私も死ぬ事になるのだろうか。

私と同じ顔をしていたやつが、心なしかやけにゆっくりと口を開く。

「七つ目は……」

両目をぎゅうつとつむる。視界が真つ暗になる。

その時、後ろでバタン、と襖が開く音がした。

「なあっ!?!」

思わずすつとんきような声をあげて振り返る。目をしばたかせると次第にぼやけていた視界がハッキリし、襖を開けて入ってきた誰かが見えてきた。

「……妹紅?」

「……慧音? 何やってんだ?」

そこには長年の友人、藤原妹紅がポカンとした表情で立っていた。私の驚きのようなせいか口調も困惑気味だが、私にとっては随分と久々に聞くような、暖かく懐かしい声だった。

「いや、さつきまで例の怪談大会の練習を……あれ?」

言いかけてふとおかしな事に気づく。目の前にいるのは明らかに本物の、見知った妹紅だ。しかしさつきまで、怨霊たちが集まって長いこと怖い話をしてきていた。呼び出した時間からは随分経っている。

以前『怖い話を知っている連中を集めてやる』と言ってくれた妹紅は、確におかし

な所もなかったと思うが……。だとしたら、何故今さら本人が現れたのだろう。

一人で混乱していると、妹紅が訝しげに立ちんぼうしているのに気づいて、ハツと顔を上げる。その時、決定的なものを目にした。

襖の上に掛けた時計が、八時過ぎを示している。怨霊たちの話を聞くあいだ、体感的には数時間は経っていたはずだが、せいぜい二、三分しか経っていないかった。もはや物理的にあり得ない。

「なにボヤツとしてんだよ。呼んでも出てこないで」

痺れを切らした妹紅が呆れた口調で問う。「いや……」と生返事をして、ごまかすように質問を返す。

「……すまない、今日はなんだったっけ」

「いや、お前が怖い話を聞くなっていうから、わざわざメンバー連れてきたんだよ。忘れたのか？」

苛立たしげに説明する妹紅。それを聞いて私は天を仰いだ。ああ、妹紅はちゃんと時間通りに来ただけだ。私が見たのは夢か幻か。さつきまで殺される瀬戸際にいたなど、どだい話しても信じてはもらえまい。私自身さえ先ほどの記憶が曖昧になっていくようだ。

「それよりさ、お前……」

ボーツとしている私をよそに、妹紅はまた不審そうな声を出す。見ると、上半身を前のめりにし、首を伸ばして私の背後を何やらチラチラと窺っている。後ろにはまだあの怨霊たちがいたのだろうか。それにしても妹紅も呑気だし、私だつて不気味な気配からは一挙に解放されているのだが……。

「……座布団に骸骨なんか置いて、何やってんだ？」

「……え？」

その台詞にあわてて振り返つた。さつきまで怨霊たちが座つていた七人ぶんの座布団。その上には。

うつすらと茶色くなった生々しい骸骨が、いつのまにかそれぞれ鎮座していた。目玉のあつた場所の暗く大きな眼孔は、残らず私の方を向いていた。

—

……その年、怪談大会は中止になり、代わりに老朽化した寺子屋の改修工事が行われた。

もつとも、改修というのは建前で、本当は残留している怨霊たちのお祓いが目的である。

大部屋の床板を剥がし、土を掘り返すと、なんと大量の人骨が出てきた。その中には確かに七人ぶん、頭蓋骨の取れたものがあつたという。

「一体なんちゆう寺子屋よ、ここは……」

そう呆れる霊夢に念入りにお払いをしてもらい、ついでにお寺の和尚まで呼んで供養をしてもらった。

その上で寺子屋は場所を移すことになり、急を要するため古い校舎の取り壊しも待たず、別の場所に大急ぎで新校舎をつくり、生徒たちはそこで二学期を迎えたのだった。

もうあの場所に子供が集まる事はない。改修工事のすぐ後に取り壊しの話が持ち上がるのを怪しむ子も何人かいたが、いずれそれも風化していくだろう。

人々が忘れ去つてしまえば、あの怨霊たちも目を覚まさない。

しかし、最近……。

「旧校舎が取り壊しになる記念に、学級新聞で七不思議の特集を組もうぜ」
そんな話がどこからともなく、生徒たちの間で盛り上がりはじめたのだ……。